『戦極』とは何か? 歴史的初陣の大特集でござる!!

enterbrain MOOK

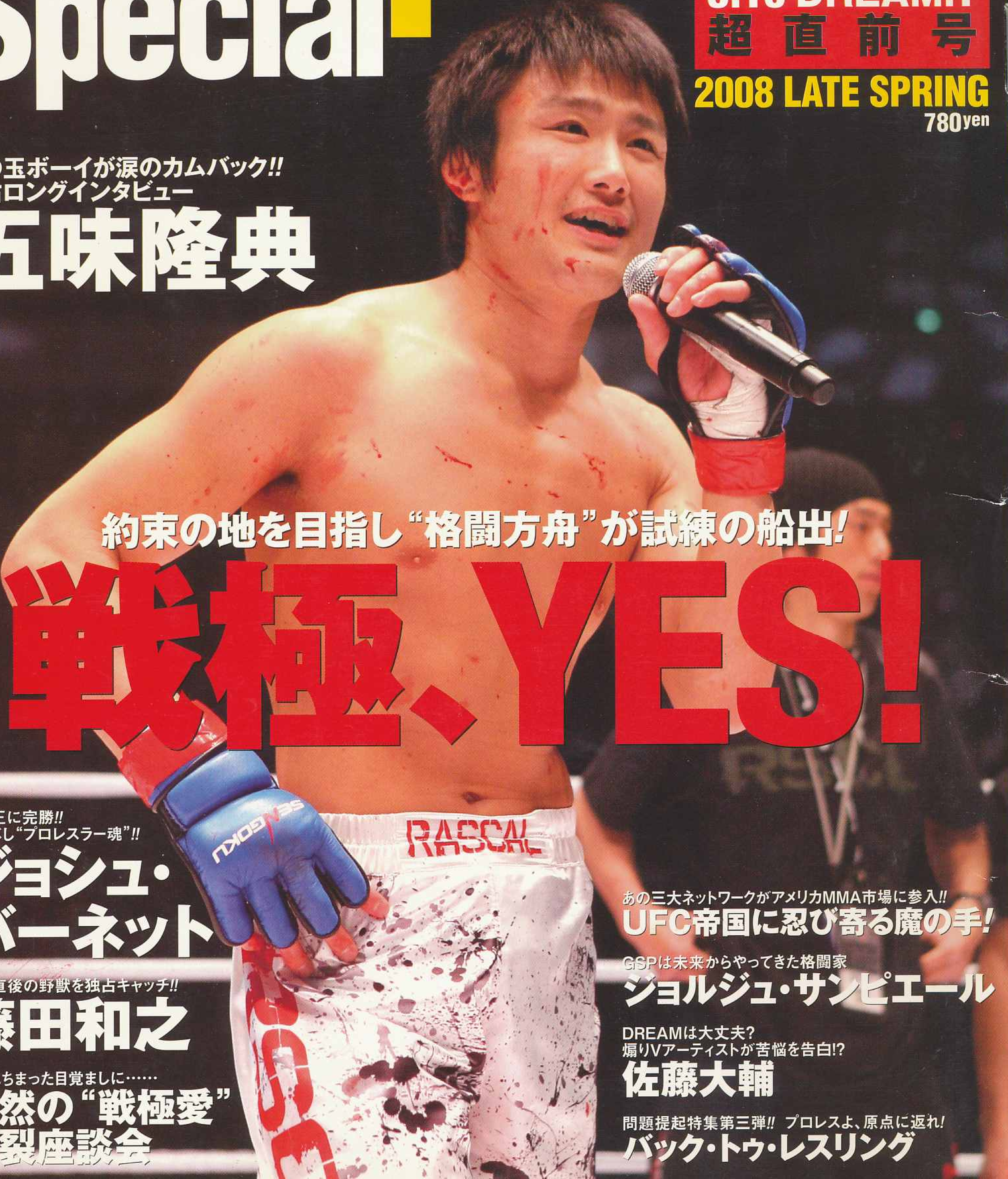
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

3.5 戦　極
3.1 UFC82
徹底詳報

3.15 DREAM.1
超直前号

2008 LATE SPRING
780yen



火の玉ボーイが涙のカムバック!!
独占ロングインタビュー
五味隆典

約束の地を目指し"格闘方舟"が試練の船出!
戦極、YES!

柔道王に完勝!!
恐るべし"プロレスラー魂"!!
ジョシュ・バーネット

激闘直後の野獣を独占キャッチ!!
藤田和之

壊されちまった目覚ましに……
突然の"戦極愛"炸裂座談会

あの三大ネットワークがアメリカMMA市場に参入!!
UFC帝国に忍び寄る魔の手!

GSPは未来からやってきた格闘家
ジョルジュ・サンピエール

DREAMは大丈夫?
煽りVアーティストが苦悩を告白!?
佐藤大輔

問題提起特集第三弾!! プロレスよ、原点に返れ!
バック・トゥ・レスリング

kamipro Special 2008 LATE SPRING 五味が勝ってよかったねえ

印刷・製本　大日本印刷株式会社

CONTENTS

合い言葉は～

イチ、10、100、戦極、戦極ッ!!



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

表紙写真／乾 晋也

2008 LATE SPRING

の呪いは解けるのか



底が見えない、得体の知れない旗揚げだった。

新たな大本営の誕生か、あるいは片翼飛行のPRIDEか――。

我々の抱いた期待と不安は、ともに的中したと言えるかもしれない。さる3月5日をもって動き出した『戦極』という舞台は、言うなれば〝PRIDEの鬼っ子〟とでも形容されるべきものであった。

まずは旧PRIDE制作チームの協力を得られなかったことからくる不安だが、これはほぼそのままのかたちで具現した。

オープニング映像ののち選手入場、そして煽りVから試合につなげるという流れは、完全にPRIDEのフォーマットそのもの。さらにはグローブの色や外国人女性による選手名シャウトなど、細部においても徹底してPRIDEの世界観を再現しにかかる方向性を『戦極』は披露した。しかし、ここまで本家にすり寄ったことにより、逆に〝PRIDEの焼き直し〟的イメージが生じてしまった感は否めないのである。

PRIDEのフォーマットをそのまま使い、あえてPRIDEと比較される道を『戦極』が選んだことにより、そこにはPRIDEのようでPRIDEではない、なんともいえない雰囲気が漂う結果になってしまった。言うなれば『戦極』は〝PRIDEの呪い〟をかけられたのだ。

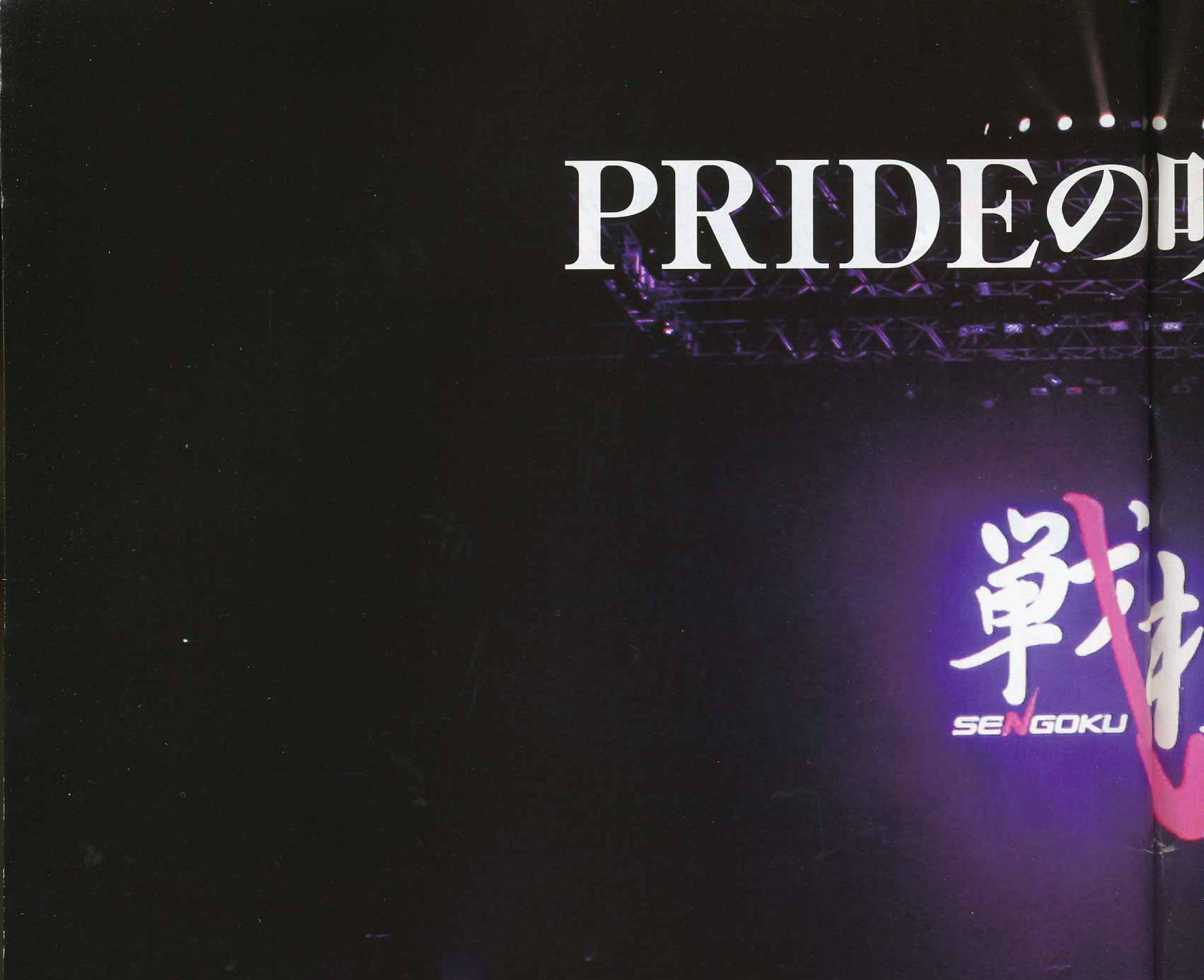
そもそもMMA興行において演出を重要視し、独自の世界観を創りあげるという手法は、あくまでPRIDE独自のものだったはずである。しかしPRIDEの世界観が絶大な支持を得たことにより、その影響力は、あとに続くMMAプロモーションに対して〝呪い〟となって降りかかった。

それはPRIDEの後継団体という位置づけを目指す『戦極』といえども例外ではなかった、ということになるのだろう。

このように、世界観の構築においては〝PRIDEの呪い〟に飲みこまれてしまった感のある『戦極』だが、リング上ではその呪縛を完全に吹っ切ってみせてくれたのだからおもしろい。この日、行なわれた試合はすべて、PRIDE流のドラマチックなエンターテインメントとは違うベクトルを示す内容であったのだ。

およそ1年ぶりとなる五味隆典の勝利の涙や、ジョシュ・バーネットが披露した〝一人UWF劇場〟など、ディープでウェットなサイドストーリーはいくつも転がっていた。しかし『戦極』のリングはそのようなドラマを必要とせず、あえて格闘技興行の原点ともいえ

PRIDEの呪



る〝爽快感〟の部分に立ち返っていったように見えた。ファンの脳裏に記憶が刻まれているトップファイターたちが次々と〝スカ勝ち〟を決めてゆくさまは、一言で言うなら「わかりやすい」。そしてこの〝わかりやすさ〟というテーマは、おそらく巡り巡って『戦極』流世界観の確立につながってゆくだろう。そこにはいままでのMMA興行にない〝先の見えないおもしろさ〟と、それをも上回る〝怖さ〟が期待できるのだ。

その根拠は今回の試合結果というよりも、むしろカード編成のほうに見てとれる。この日のマッチメイクは、豪華な料理を順番に供した、いわば〝貴族の食卓〟とでも言うべきものであった。その贅沢さもやはり「わかりやすい」のだが、同時にそれは〝予定調和の否定〟をも意味している。

団体のエースと目された吉田秀彦の物語は、ジョシュに完敗したことにより、一発目からいきなり頓挫してしまった。もう一人の主役である五味は快勝をものにしたが、次の闘いにつながるテーマは見えなかった。今回、『戦極』が彼らに提供したドラマはいわば一話完結形式のものであり、そこに「次回へ続く――」という明確な文字はなかった。

この日の『戦極』をマンガ雑誌にたとえるなら〝創刊号にして有名作家陣たちのオール読み切り〟ということになるだろう。「次回へ続く――」が存在しないゆえ、次は何が起こるかわからない。いったい誰がやってきて、どんな闘いをするのか？　何しろあの小川直也がリングサイドに居座り、何もせずに帰っていく舞台だ。まったく予測がつかないこのドライブ感は、間違いなく『戦極』独自のものである。

このようなセンスが『戦極』のカラーとして確立するようであれば、PRIDEの呪縛を吹っ切って一気にブレイクすることもできるだろう。なぜなら、日本のMMAシーンが盛り返すための重要なポイントは、「脱PRIDE」にあるかもしれないからだ。あのPRIDEを築いたマーケットは、焼け野原だ。物質的にも精神的にもイチからの出直しが求められる。

ファンも団体もいまだ〝PRIDEの呪い〟から解放されていない現在のMMAシーンにおいて、真っ先にPRIDE色を払拭できる可能性を秘めているのは、ひょっとしたらこの『戦極』なのかもしれない……。

初陣を特集でござる
戦極、読むぞ!!

さまよえる男が1年1ヵ月ぶりにリングに復帰!
3.5『戦極』でドゥエイン・ラドウィックをTKO!!

泣いて笑ってケンカして
どっこい生きてる火の玉ボーイ!!



焼肉祝勝会
独占潜入インタビュー!

五味隆典がついにリングに帰ってきた!
昨年2月のPRIDEラスベガス大会以降、UFC、『HERO`S』、『Dynamite!!』など、さまざまな舞台への登場が噂されながら、なかなか次の戦場が決まらなかった五味が、3.1『戦極』に出場。ドゥエイン・ラドウィックをTKOで下し、見事1年1ヶ月ぶりの復帰戦に勝利した。本誌は大会直後、東京・吉祥寺の焼肉店でジム生たちと祝勝会中の火の玉ボーイを直撃。この1年の苦悩と勝利の喜びを語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

隆 典



この1年1ヶ月で再確認できました。
やっぱり俺は格闘技が好きだ！

五味

元ちゃん（須藤元気）が前日に電話をくれて「明日は二人で闘おう」って言ってくれた

——先ほど大会が終わったばかりですけど、五味選手、見事なＴＫＯでの復活、おめでとうございます！

五味　ありがとうございます！

——では、まずは今日の試合を振り返っていただきたいんですけど。

五味　格闘技の話？　もういいでしょう。試合が終わった直後ぐらいは。遠慮しないで焼肉食べてくださいよ。いまの俺は、格闘技のこと、頭から飛んじゃってるから（笑）。

——「僕ー格闘技＝ゼロ」じゃなかったんですか（笑）。

五味　試合前はそうだけど、試合後は格闘技残ってないね（笑）。全部、リングで吐き出しちゃってるから。昨日、ジムの子に車を運転してもらって計量するホテルに行ったんですけど、そのときから「祝勝会どこにしようか？」って言ってたからね。

——すでに前日から祝勝会準備してましたか（笑）。

五味　「みんなで吉祥寺にしようか。やっぱり俺たちのホームタウンは吉祥寺だよな」って。で、計量に行く前に、ここで焼肉食いながら乾杯する場面が目に浮かんでね。ホントいま夢みたいですよ！

——1年1ヵ月、試合の間隔も空いてしまいましたから、勝利の味も格別なんじゃないですか？

五味　そうですね。久我山ラスカルジムとして最高の時間ですね。上京して久我山にジムを出して1年目はね、恐らく東京の厳しさに打ちのめされたんですよ。ジムの子もね、最初は試合なくてね、それを感じたでしょうし。それが僕も少しずつ教えていって、彼らも自信がついたと思いますよ。僕たちと練習して試合で勝てるから。

——自分のところのジムの会長があああう姿を見せて、そして一緒にこうやって喜べると団結力も出るでしょうね。

五味　そう。なんでかっていうと僕もね、木口（宣昭）先生のところのコンバット・レスリングとかアマチュア修斗から、全部そういうところから始めてましたし。全部つながってますからね。



いつものフード付きガウンではなくラスカルジムのＴシャツ姿で、新テーマ曲に乗って登場した五味。すべてを一新する心意気が、その入場からも感じられた。

——今回の試合で、ああいう勝利を挙げたことは、ファイターとしてだけじゃなくてジムの会長としてもいい仕事ができたという感じですか？

五味　そうですね、どんどん久我山の子たちと練習をやっていって。頑張ってもうひと花咲かせないと。

——でも、去年はなかなか試合が決まらなくて、大変だったんじゃないですか？

五味　去年はね……、どうしようもないね。

——ガハハハハ！　どうしようもないですか（笑）。

五味　どうしようもないっていうか、どうにもならないっていうのがあったね。ゴチャゴチャしたノイズだらけの世界で、今年になってようやくクリアになった感じですけどね。

——正直、さすがの五味隆典も、これからどうなるのか、ちょっと不安になったりもしました？

五味　う～ん……いやいや、そんなことないですよ。いちファイターとしてね、毎日トレーニングをしたり、そういうことは誰にもジャマできないことですから。

——でも、五味さんの場合、志が定まって、気持ちと身体がピッタリと合わさったときに、もの凄い力を発揮するじゃないですか。なかなかその志が定まらないというのは、メンタル的に大変だったんじゃないか、と。

五味　いや、発想の転換ですよ。試合もないし、浮わついた誘いもないから、練習しかやることがない。そうやってジム生と一緒に時間をすごしたことで、やっぱり自分はレスリングが好きで、格闘技が好きで、仲間といるのが好きだっていうのを再確認できたから、よかったんじゃないですかね。それがいまの僕には凄い財産ですね。（格闘家の中にも）いろんな子がいるでしょ？　テレビに出たいとか、有名になりたいとか。僕はそれを一通りくぐり抜けたって感じがしますよね。

——試合ができないことで、俗っぽい欲がなくなってきた、と。

五味　もちろん、プロとしてそういう欲も凄く大事ですけど、そうじゃなくて同じ志があって、厳しい練習して、その仲間と練習が終わったあとにご飯を食べに行ったり、励まし合ったりね、「頑張ろうよ」って言ったり、それってあらためて素晴



[3.5 戦極-SENGOKU]
東京・代々木第一体育館
○五味隆典 vs ドゥエイン・ラドウィック×

昨年２月のPRIDEラスベガス大会以来の試合となる五味は、K-1 MAXで活躍し、UFCで須藤元気を倒したこともあるラドウィックと対戦。序盤、カウンターのパンチでグラつきヒヤリとさせた五味だが、そこから持ち直し、逆に打ち合いに持ち込んで左フックでダウンを奪い、ドクターストップでTKO勝ち。見事に復帰戦を勝利で飾った。

五味隆典

らしいことだなって感じてますよ。凄く元の姿に戻ったというかね。俺は何を踊ってたんだろうっていう、そういう世界ですよ。

――ＰＲＩＤＥがなくなって、生活が変わったことで、格闘家としてのシンプルな部分が残った感じですか。

五味 そう。なんの混じり気もない世界。一番根本的なものですよね。

――今回、凄く動きがよかったですけど、それはやっぱり闘うことだけに集中できたからだと思いますか？

五味 そうですね。そして、それを評価してくれるイベントがあって、純粋な闘いを期待してくれるファンがいたからですね。今日は平日なのに満ぱんに入ってくれて。ありがたいことですよね。

――そして今日は吉田選手や藤田選手、それから三崎選手など、大物選手が揃ってましたけど、やっぱり五味さんへの歓声が一番大きかったですよ。

五味 嬉しかったですね。入場式のときに、お客さんを見たときにね、ホントに「帰ってきたな」っていう気持ちになって。嬉しかったですよ、なんとか復帰できて。年末にＵＦＣに行ったときは、これから俺、どうなるのかなって正直思いましたけど（笑）。

――今回、入場テーマ曲を変えたのは、どんな考えがあったんですか？

五味 曲を変えるのはブログで予告してたんですけど。もう全部変えたかったんだよね。

――すべてをリセットしたかった。

五味 まあ、そうですね。

――でも、あの曲は五味隆典のテーマになったことで流行り廃りじゃなくてスタンダードな曲になった感じもしましたけどね。

五味 まあ、いいじゃないですか。新しい舞台で、新しい曲でね。

――コスチュームも違いましたよね。フード付きガウンじゃなくて、シンプルなラスカルＴシャツで。

五味 うん。ホントにシンプルに闘いたかったんだよね。

――試合も１年以上のブランクがあるとは思えない動きでしたね。

五味 やっぱね、作り込むと元に戻るんですよ（笑）。

――さすがですねえ。

五味 今回は４週間ぐらいお酒もやめてたからね。

――それは五味隆典的には、かなりの禁酒期間ですね（笑）。

五味 もうトレーニングばっかりの生活だから。久我山のジムと、町田の練習場の二重生活でね。週末は練習場所、３カ所回ってたから。

――それはボクシングジムとかですか？

五味 そうですね。

――その成果か、あの打撃の強さでは定評があるラドウィック相手に、全然グラウンドに行く素振りすら見せずに、真正面から殴り合いにいってたんで驚きましたよ。

五味 まあ、落ち着いてやればいいかなって思って。

――でも、ラドウィックのハンドスピードが速いじゃないですか、凄く。

五味 さすがＫ―１出身の選手だなって

思いましたね。左フックをもらったときは、パンチが見えなかったから。一瞬、ダウンするときはこういう感じなんだなと思いましたね。伸びる左フックなんて、なかなか練習で食らうことはないから。

——逆にいえば、あれを食らっても倒れないんだから、五味さんはホントに打たれ強いですよね。

五味 やっぱり効きましたよ。ラドウィックは武田（幸三）さんも倒してますからね。

——あのパンチは、けっこうカウンターで入ってましたよね？

五味 そう、ラドウィックは下がりながらのカウンター。それで僕はね、我慢して、逆に前に出なかったんですよ。そしたらね、向こうもやりにくくて前に出てきたからね。こっちはひさしぶりだから、じっくり我慢してやろうと思って。

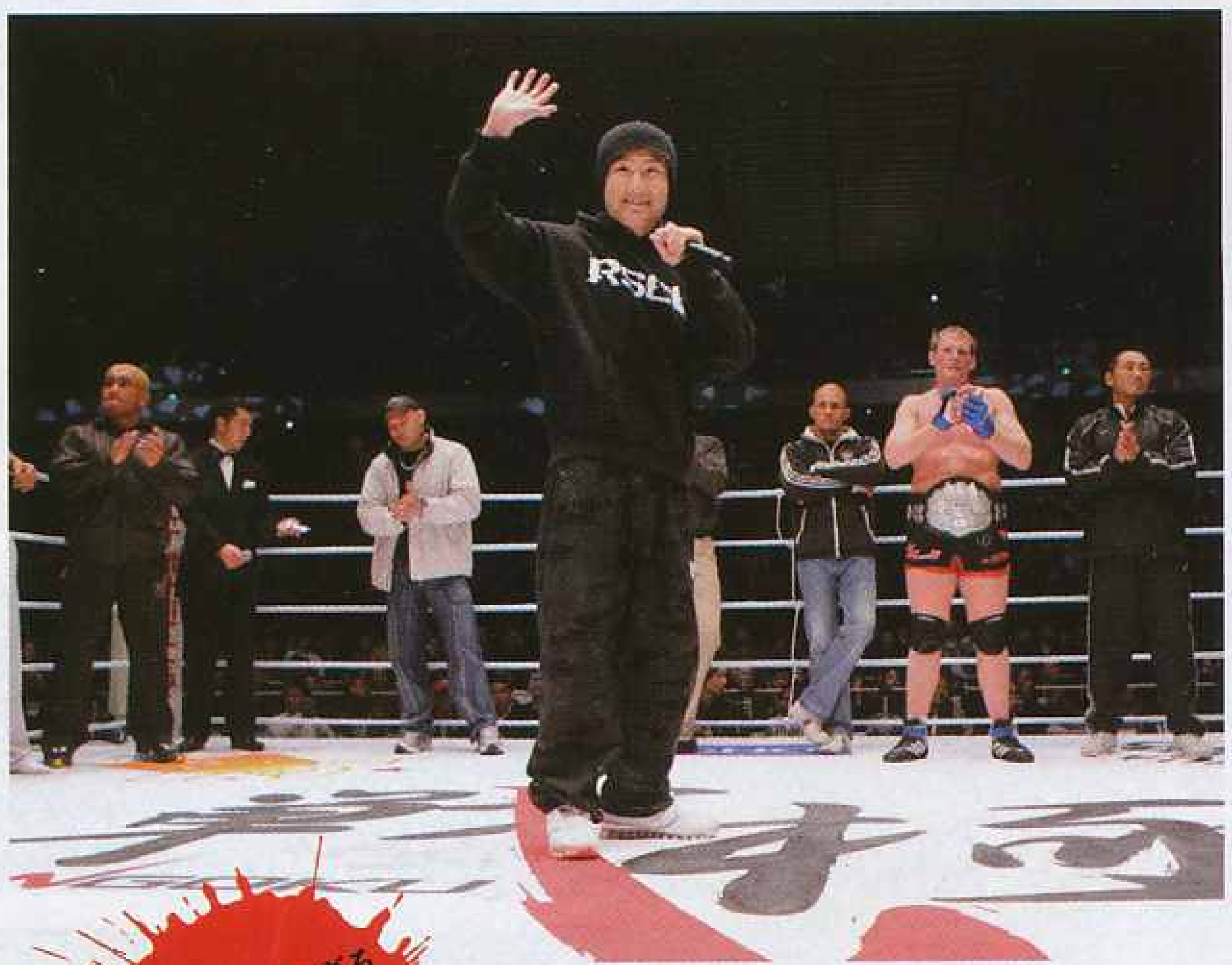
——それでもずっとプレッシャーはかけてましたよね。そして、左フックでダウンを奪って、そのままドクターストップのTKO勝ちということでしたけど。今回はコーナーに上がって、勝利のアピールはしませんでしたね？

五味 やっぱりちゃんとしたKOじゃないからね。はしゃいでられないでしょう（笑）。あと、今回のラドウィック選手は自分と同い年なんですよ。

——あ、そうだったんですか。

五味 その同い年のラドウィック選手が、試合を続けられないのに、はしゃいでちゃいかんと思ってね。彼もK—1で闘い続けて、そこそこの成績も残して、また新たにアメリカで大きなイベントと契約しようかなっていうとこだったんだよね。でも、自分と闘うんならっていうことで『戦極』に来てくれたんですよ。それを聞いて僕も迷わずラドウィック選手と闘おうと決めて。あと、（須藤）元気もね、前日に血が騒いで電話してきてくれたんですよ。

——須藤元気選手、会場にも来てましたよね。





ラドウィックにTKO勝利した五味は、マイクを握ると「1年ぶりのリングなんですけど……。叱咤激励してくれる方が周りにいて。今日、集まってくれた人たちは大切な人たちです」と涙声で語った。

五味隆典

DREAM・GP優勝者との対戦？今日の試合を観て俺と闘おうと思うのかな

五味 元気が電話してくるときはですね、必ず大会の前ですよ。（06年の）大晦日にもかけてきてくれてね。昨日は「ラドウィックは強いけど、二人でかかりゃなんとかなるよ。大丈夫、二人で闘おう」って言ってくれたんですよね。

——それは心強いですね。

五味 木口先生も応援に来てくれて。ホントに自分の兄弟、押田のおじき、家族、みんなの中で安心して闘ったんですよ。だから控室でも「元ちゃん、倒れても起こして飲みに連れてってね」って言ってね（笑）。「いいよ、勝って飲みに行こうよ」なんて言ったりして。同じ釜の飯を食った仲だし、それぐらいの安心感がありましたよ。

——そういう関係って、凄くいいですね。そして試合後のマイクでは、ちょっと涙声になってましたけど。

五味 そうねえ。俺はあんまり、涙出ないんだけどね（テレ笑）。

——でも、今日ばかりは涙が出てしまった、と（笑）。

五味 でも、練習に行くときは、けっこう涙ぐむときがあったんですよ。追い込みの練習しててキツかったとき、車を運転しながら「いまもうキツいなあ。でも、また町田に向かってるよ」みたいな感じで。でね、自分に感動してんの（笑）。

——苦しみに立ち向かう自分に感動しましたか（笑）。

五味 格闘技だけだよ、どんだけ上がりたくてたまらない舞台でも、試合前にはイヤで逃げ出したくなるの。やっぱり、自分がどうなるかわからないわけだからね。

——今日みたいに試合後、焼肉を食べてるときもあれば、病院にいるかもしれないわけですからね。

五味 ね、アゴ折れたりさ、目をケガしたりね、一生に関わることだから。

——で、試合後に涙したのは、なぜだったんですか？（笑）。

五味 あ、そこに戻る？（笑）。

——やっぱり勝ったあと、いろんなことを思い出して、こみあげるものがあったんですか？

五味 とにかくね、リングに戻ってきたことによって、去年と180度変わったんですよ。去年の大晦日まではね、格闘技やっててあんなに苦しかったときはないですよね。誰にも近づけないし、みんなも腫れものに触るような感じで。PRIDEどうなっちゃうんだろう、あいつどうするんだろうって、そういう状況。それが年が明けて状況が変わって、本当に新生ですよ。

——苦難をようやく乗り越えたわけですね。

五味 だからね、格闘技で調子に乗ってちゃいけない、自分を見失っちゃいけないって思いましたよ。純粋に汗をかけることが幸せ、仲間といるのが幸せ。それ以外に目が行かなくなりましたね。これだけは絶対に揺るぎない。だから、また僕にいい話をしてくる人もいるでしょうね、

おいしい話をする人もいるしょう。でも、そういうのはもうぶん殴っちゃうね（笑）。

—ガハハハハ！ ぶん殴りますか（笑）。

五味 そんな感じ。

—では今回、『戦極』という舞台に上がってみて、イベントはどうでしたか？

五味 良かったと思いますよ。みなさん、いい試合をされてましたし、平日なのにお客さんもいっぱい入ってくれてね。ただね、（オープニング映像で）DREAMについてなんか言ったりするの、あれはやめたほうがいい。

—「いつまで夢を見てるんだ！」っていう、挑発的なメッセージですよね（笑）。

五味 あんなことやっても、なんの得もないよ。ああいうのはいらない。ファンもイヤだろうし、一生懸命やってる選手が傷つくだけだよ。

—『戦極』もDREAMも観に来てるのは、同じPRIDEファン、格闘技ファンでしょうからね。

五味 ああいうことしちゃダメ。だからね、俺はまずトップバッターで試合を終わらせたから、DREAMも観に行きたいですよ。だって元は同じリングで闘ってたわけだから。ビールでも飲みながら観てえなと思って（笑）。

—それとまた、いつかリング上で再会できればいいですよね。

五味 うん。

—DREAMはライト級のトーナメントが始まりますけど、将来的にそのチャンピオンと闘いたい気持ちはありますか？

五味 でも、今日の試合を観て、俺とやりたいと思うかねえ？



ごみ・たかのり■1978年９月22日、神奈川県出身。98年、修斗でプロでプロデビュー。01年12月には佐藤ルミナを破り修斗世界ウェルター級王座を奪取。04年２月からPRIDEに参戦。怒濤の10連勝でPRIDEライト級王座に輝く。173cm、70kg。

—ガハハハハ！ いいですねぇ（笑）。

五味 まあ、そういうのは、ときが来たら自然とそういうこともあるでしょう。自分からどうのこうのじゃなくてね。

—では、今年一発目、いいスタートを切れましたけど、今年はどんな年にしたいですか？

五味 そうですね。いいスタートを切れたんで、また爆裂勝ちですね。その結果、『戦極』がゴールデン（タイムでのテレビ放送に）いったりするといいんじゃないですかね、うん。

—おお、目指せゴールデン、と。では、五味選手も『戦極』自体に愛着も出てきましたか？

五味 まだ一発目だからね、一発で終わってほしくはないよね（笑）。

—ガハハハハ！ ちゃんと続いてほしい（笑）。

五味 でも、やっぱり一発目に立ち合えるってことはなかなかないことですからね。僕、PRIDE武士道も其の弐からですから。

—では、PRIDE武士道を引っ張ってきた人間として、『戦極』も五味さんの爆裂勝利で引っ張っていってくださいよ。

五味 そうですね。また、そういう試合ができたんで、今回は自信になりましたね。頑張りますよ。じゃあ、インタビューはこれぐらいでいいですか？ まだまだ焼肉食い足りないんで。

—どうぞ今夜は心ゆくまで食べてください（笑）。

五味 じゃあ、たっぷり注文しちゃおうかな～。（ジム生に対して）おい、メニュー持ってこい！

【08年3月5日／吉祥寺・『李朝園』にて収録】



初陣を特集でござる
戦極、読むぞ!!

3.1『戦極』吉田秀彦との“異種格闘技戦”
魅せて、沸かせて、一本勝ち!

『戦極』旗揚げ戦のメインで
プロレスラー魂
爆発!!

バーネット



『戦極』を背負うのはこの男か!? 06年大晦日以来、
総合の舞台から離れていたジョシュ・バーネットが、あたたたた〜! っと
3.5『戦極』旗揚げ戦に飛来!! 吉田を相手にジャーマン、
バックドロップと大技攻勢を見せ、最後は粘る柔道王から見事に一本勝ち!
メインイベンターとしてしっかりと大会を締めてみせた。本誌は大会翌日、
ジョシュをキャッチ! 流浪の男は、新天地で何を考えているのか!?

聞き手／上杉スイート　撮影／乾晋也



メインイベンターは
ただ勝つだけじゃダメなんだ

ジョシュ・



――ジョシュさん！　昨夜は見事な一本勝ち、おめでとうございます！

ジョシュ　（日本語で）アリガトウゴザイマス！　昨日は最高の一日だったよ。だって、あのヨシダさんから一本取れたんだからね！（興奮気味に）。

――これまで、吉田選手は一本負けしたことがなかったんですよね。

ジョシュ　そう！　だから、絶対一本取ってやろうと思ってた。自分でもよくやったと思うよ（笑）。それにKOやTKOじゃなくて、サブミッションで勝つことは、ボクの強さを証明するうえで大事なことだった。だって、もしKOで勝っても、「吉田はグラップラーだから」って周りから言われるからね。だから、彼が得意な分野でこそ勝ちたかったんだ。

――自分でハードルを上げて試合に臨んだわけですね。一本奪ったのと同じぐらい衝撃だったのが、最初のバックドロップですけど。

ジョシュ　ヨシダさんの得意なヘッドロックにきたら投げようと狙っていたんだ。

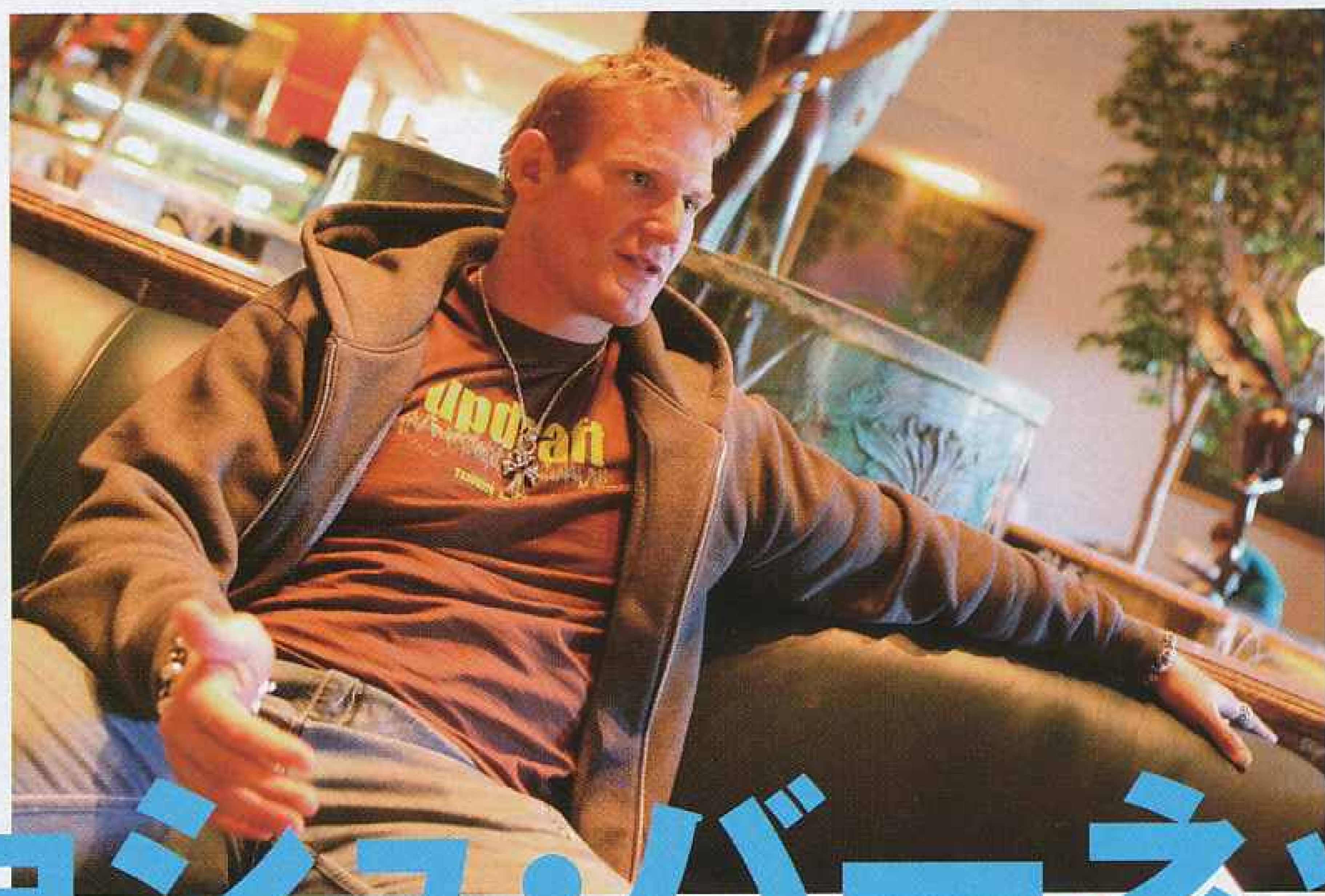
――見事にヘソで投げきってましたね。ノアの森嶋猛のバックドロップ並みに急角度でインパクトがありましたけど。

ジョシュ　それを言うなら、ツルタ（ジャンボ鶴田）みたいだったと言ってほしいな（笑）。

――あ、試合後、コーナーに駆け上がったのはジャンボの「オー！」でしたか（笑）。

ジョシュ　一発目のあとも、何度かバックドロップを狙ったんだけど、投げられ

バイオレンスな試合にならなかったから
将来、テレビ局が『戦極』につきやすいかな



ジョシュ・バーネット

なかった。あと、もうちょっとだったのになあ。今度、タツトシ・ゴトウから学ばないと。

――"ミスター・バックドロップ"の後藤達俊ですね。っていうか交流があるんですか？（笑）。

ジョシュ　（無視して）ジャーマン・スープレックスも狙ったんだけどね。

――まるで、Uインターの常連、ゲーリー・オブライトを彷彿させるような攻防でしたけどね。

ジョシュ　さすがにフルネルソン・スープレックスにはいけなかったけどね（笑）。ジャーマンはヨシダさんが足をフックしたから投げられなかったけど、でも、本当にあと少しだったんだ。あと、何センチか地面から持ち上げられていれば、完全に投げられたと思うんだけど（悔しそうに）。

――でも冷静に考えると、ムリに投げを狙わず、バック・マウントを取ってコツコツと殴る展開もありだったかと思うんですけど。

ジョシュ　そうだね。でもそれは、ボクが見せたい試合じゃない。オリンピック柔道ゴールドメダリストのヨシダさんを投げることには意味があるし、ボクの強さを証明することになるからね。

――試合全体を通じても、たとえば、パウンドにいける態勢で、足関節を取りにいったりとか、通常の試合よりも関節技の攻防が盛り込まれていて、UWF的な感じがしたんですけど。

ジョシュ　そうだね。UWFのような技の展開こそがボクの望んでいた試合だったんだ。

――つまり、昨日の試合は、ただシンプルに勝つための試合ではなくて、勝ち方にもこだわりがあった、と。

ジョシュ　キャッチ・レスリングvs柔道というテーマもあったからね。それに、この試合はメインイベントだった。だから、ただ勝つだけじゃ、メインイベンターとしての役目をはたしたことにならないと思う。セミのゴミ（五味隆典）と（ドウエイン・）ラドウィックの試合は派手なパンチの打ち合いだったし、試合時間の短い試合だった。その前のミサキ（三崎和雄）とシアー・バハドゥルザダの試合も打撃の打ち合いだった。だから、イベント全体のことを考えて、ああいう試合展開を選んだんだ。

――自分の試合だけでなく、興行全体のことまで考えて、リングに上がっていたんですか！　プロレスラーの鑑ですね。

ジョシュ　そういう気持ちは常に持っているよ。だから自分の試合の番になるとき、「これがメインイベントだ。みんな観とけよ！」って気持ちでリングに向かったんだ。

――メインの試合は興行の印象を決定づけますからね。

ジョシュ　でも、試合はボク一人でするものじゃない。昨日の試合が素晴らしいものになったとしていたら、それはヨシダさんがいいファイターだからだし、ボクとヨシダさんだからこそ噛み合った試合ができたんだと思う。

――吉田選手はジョシュさんの猛攻を不屈の精神で耐えていたようにも見えましたね。

ジョシュ　身体のダメージは大きいはず。上のポジションからボディにずいぶんとパンチを打ったし、ヒザも入れた。それにフィニッシュのヒールホールドは2回仕掛けたんだけど、1回目の時点で、足首とヒザが壊れる音が聞こえたからね。









――そんな音がしていましたか。

ジョシュ　それでも、なかなかタップしなかったからね。ヨシダさんはタフな男だよ。本当に心が強い。彼はやっぱりメインイベントにふさわしいファイターだよ。それから、結果的に殴り合う展開にはならなくて、バイオレンスな試合にならなかったから、将来、テレビ局がつきやすいのかなっても思うしね（笑）。

――そこまで考えていましたか（笑）。あと試合後の報道陣からの質問にもありましたが、試合中に吉田選手を極められそうなシーンが何回かあったように見えたのですが。

ジョシュ　もしかすると、ボクのミスでチャンスを逃したのかもしれない。でもアームバーやレッグロックも未遂に終わったように、チャンスをモノにするのは簡単なことじゃないんだ。もしかしたら、極められるチャンスもあったかもしれないけど。繰り返すけど、ヨシダさんはホント強いからね。フィジカル面とグラップリングの技術の部分でね。ヨシダさんはアームロックだけじゃなくて、ダブルリストロックも、ヒザ十字もできるからね。それは一緒に練習していたボクがよくわかってるよ。

――完勝とはいえ、試合を通じて、その強さを感じたわけですね。

ジョシュ　ヨシダさんはホントにいい友だちだから、（負傷した）足を治して、しっかりと休養を取って、完全に復活してほしいね。また一緒にトレーニングして、サポートできればばって思うよ。

[3.5 戦極-SENGOKU]
東京・代々木第一体育館

○ジョシュ・バーネット vs 吉田秀彦×

(3R 3分23秒 ヒールホールド)

1ラウンド開始早々からバックドロップを見舞ったジョシュが終始試合をリード。再三、バックを奪ってジャーマンを狙う。グラウンドでは、自分の体重を乗せて、相手の足首を捻りあげるキャッチの技も披露。最後はヒールホールドでフィニッシュ!



試合後、ジャンボ鶴田ばりに「オー!」を繰り返すジョシュ。ちなみに腰に巻かれているのはパンクラス無差別級のベルト。今回の参戦は、パンクラスを経由してオファーを受けたという。

ジョシュ・バーネット

アメリカにUFC以外の団体が必要なように日本にも『戦極』があることが大事なんだ。

——その仲良しの吉田さんとは逆に、IGFで敵対している小川さんも試合に観に来てましたね。

ジョシュ　ああ、試合中、オガワを見たよ。でも、あっというまに帰っていった。いったい何をしに来たのか。意味がわからないよ！

——何かアピールでもするかと思ってたんですけどね。

ジョシュ　（皮肉っぽく）せっかく来たなら何かやってほしかったけどね！　もし『戦極』のリングに上がってくるなら、いつでも受けて立つよ。

——IGFでは小川選手に負けてしまいましたが、『戦極』での再戦もある、と。

ジョシュ　負けたって言っても、ボクはオガワから先に一本を取っているんだ。オガワの足がロープの外に出ていたとか、訳のわからない言い訳で再試合になってしまったけど。でも、あの日、会場にいたお客さんは、ボクが腕十字で勝っていたことを知っているはずだよ。

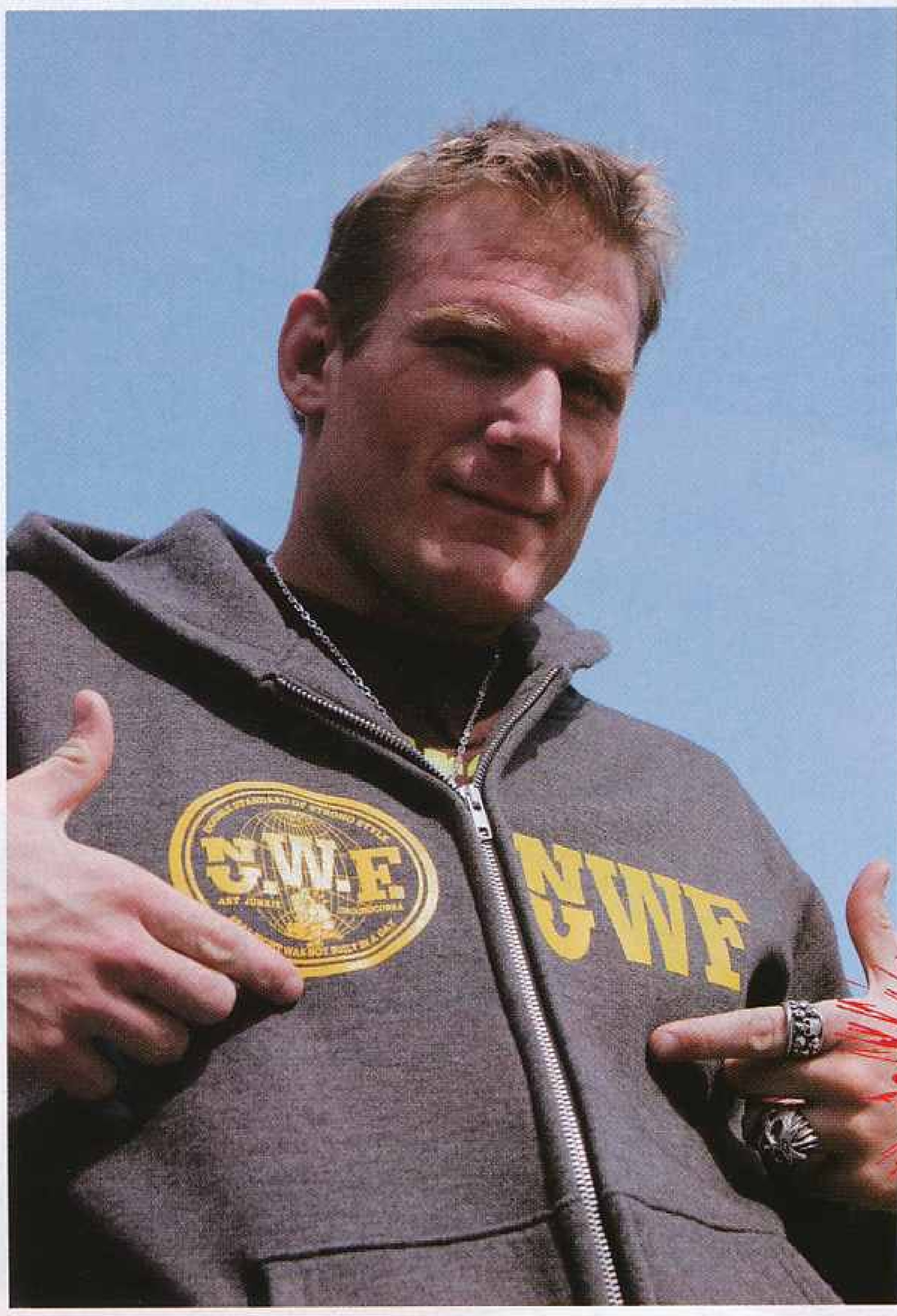
——では、決して負けてない、と。

ジョシュ　ただ、ピンフォールを取られたことについては、自分のミスを認めるけどね。オガワはオリンピック柔道銀メダリストだし、イージーな相手じゃまったくない。ただ彼がIGFでトップのポジションにいるのは好きじゃないな。いまはエースとして、IGFでの活動に集中しているようだけど、その座をボクが奪って、そろそろほかのことをやらせてあげたいね。

——ジョシュさんがIGFのエースになると。『戦極』には今後も継続的に参戦されるようですけど、この二つの団体以外にもジョシュさんが活動を考えている団体はあります？

ジョシュ　いや、いまのところ何も決まってないよ。

——アメリカでは、エリートXCが地上波テレビ局CBSとの放送契約を獲得して注目を集めていますが、参戦する意思はないんですか？



JOSH BARNETT■1977年11月10日、米国ワシントン州出身。『北斗の拳』をはじめとする日本文化をこよなく愛する世界最強のオタク。 第7代UFCヘビー級王者、『PRIDE無差別級GP』準優勝者、現パンクラス無差別級王者。191cm、116.5kg。

ジョシュ　いまのところはないね。というより、エリートXCはボクが参戦するだけの基盤を整えていないと思う。まだ選手のレベルは高くないし。実際に、ボクと闘う相手がいないよ。

——あ、そうですか。

ジョシュ　ボクにキンボ（・スライス）と闘えっていうのかい？　彼はおもしろい素材だし、キャラクターも好きだよ。それに、まだMMAの経験も浅いから、これから伸びると思う。でも、まだまだなんだ。たとえばヨシダさんがキンボと闘ったら、あっという間に一本取ることになるよ。まったく別の次元なんだ。

——パートナーになったメディアの大きさに比べて、選手の確保が追いついていない、と。

ジョシュ　ただ、ファイティングはボクの人生だから、一度も参戦することがないのかと言うと、それはわからないけどね。いいチャンスがくれば考えるよ。つまり、ファンのみんなが「これこそトップファイター同士の対決だ」と思えるような試合を組んでくれるのならね。

——地上波で試合が放映されることで、アメリカのMMAシーンが急激に成長すると思いますか？

ジョシュ　う〜ん、それはまだかな。〝チャンス〟と〝成功〟はべつだからね。いまは大きな可能性が出てきたところ。結果はもう少し待つ必要があるね。でも、このことで、さらに多くの人間がこの業界に入ってくるだろうから、いいことだよ。もちろん、ここから結果を出すことが大事だけど。

——なるほど。

ジョシュ　ただ、これまでUFCが独占していたアメリカ市場の構造は大きく変化するかもね。複数の強い会社があることは、マーケットを健全にするために大事なことなんだ。そして、それは日本でも同じさ。一つの大きな組織があるだけじゃよくない。だから『戦極』のような団体が必要なんだ。

——DREAMの競合になる団体が必要だ、と。ジョシュさんは、いまのところアメリカでの活動はせずに、MMAでは『戦極』に集中していくわけですね。

ジョシュ　そういうこと！　次の試合がいつになるかわからないけど、誰とでも闘うよ。フジタ（藤田和之）と闘ってもいいし、ヨシダ、（パウエル・）ナッラ、ナカムラ（中村和裕）を倒したから、柔道家もいいかもね。イノウエ・コウセイ（井上康生）とかね。

——あの〜、井上康生選手はまだオリンピックを目指してますけど……。『戦極』の看板選手、吉田に勝ったことで、団体を背負うことになりますが、エースとしての自覚はありますか？

ジョシュ　それは観客が決めることだね。『戦極』はまだ始まったばかりで、これからのイベント。その中で、ファンからエースだと思わせるようなベストの闘いを見せていくよ。

【08年3月6日／都内・某ホテルにて収録】

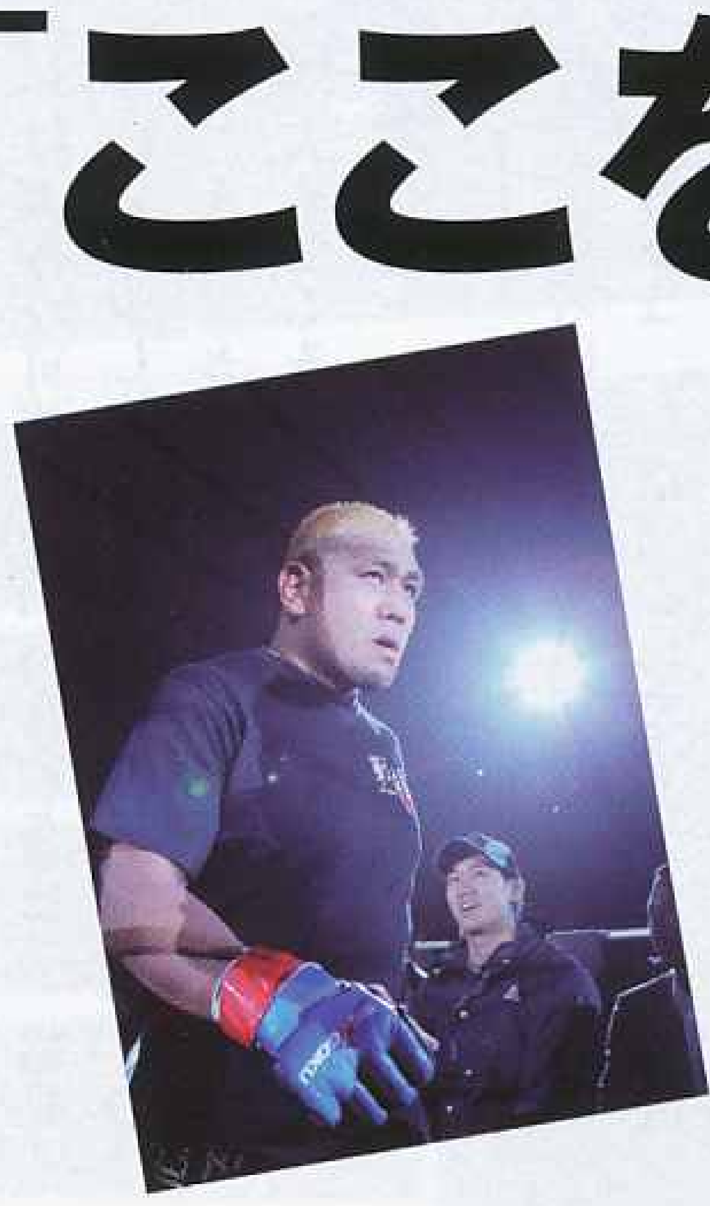


“野獣” 藤田和之

初陣を特集でござる 戦極、読むぞ!!

3.5戦極で激勝直後の肉声をキャッチ!!

「ここを選んで正解だった」



金沢“GK”克彦独占レポート

“野獣”藤田和之が選んだリングは3.5『戦極』だった。昨年4月の『PRIDE.34』のメインイベントを務めた藤田は、それ以降ずっと沈黙を守っていた。その去就に注目がじわじわと集まりつつある中で、電撃的に『戦極』参戦を発表! 元『週刊ゴング』編集長・金沢GK克彦氏は新日本プロレス在籍時から藤田と親交が深く、藤田がずっと表舞台に姿を現わさなかった時期もコンタクトを取り続けていた。試合の結果は藤田の圧勝だったが、今回の試合の中に金沢氏は“変化”を感じていた。試合後に金沢氏がキャッチした野獣の肉声をお届けしよう!

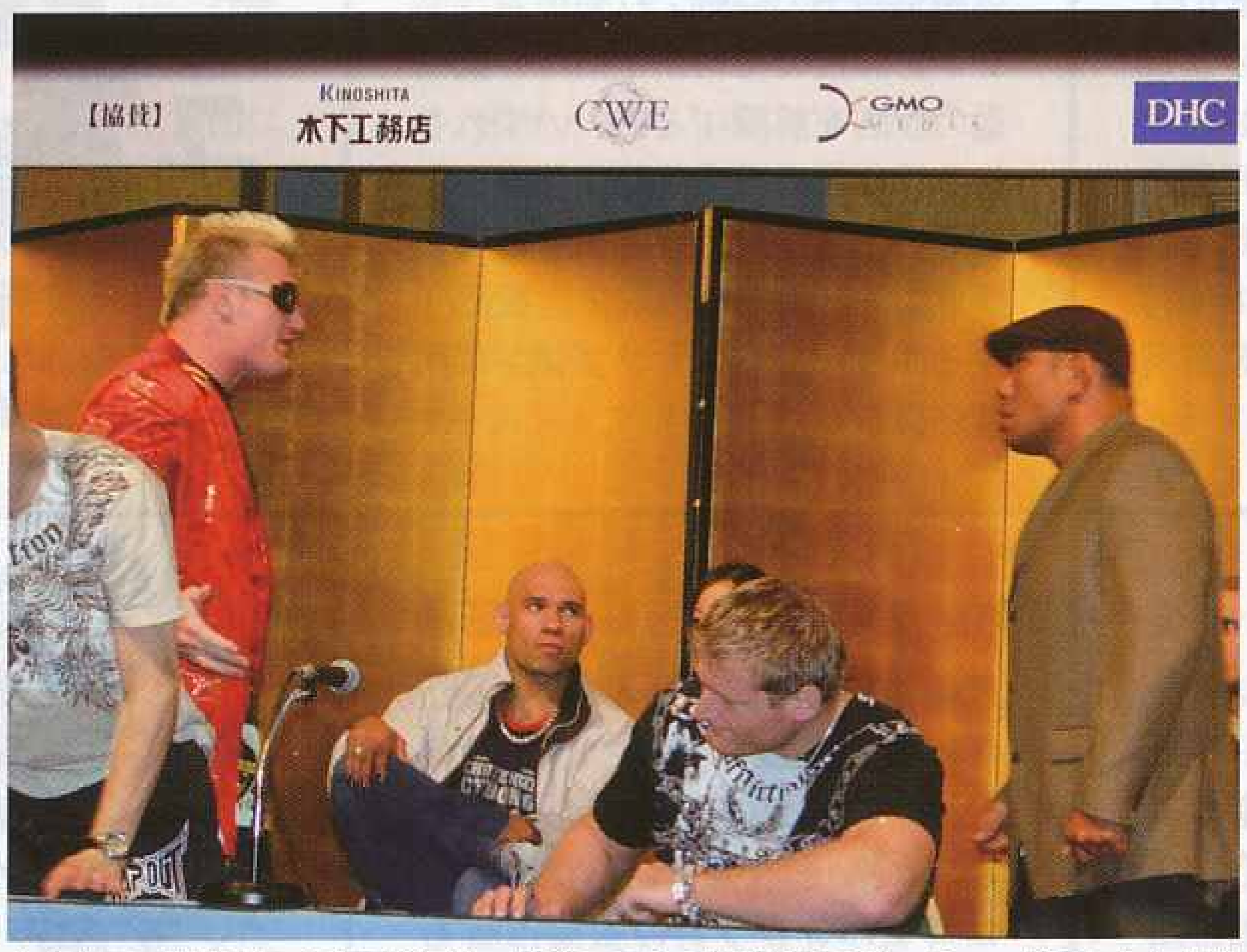
撮影／乾晋也

日本とロスを往復しながら、藤田が練習で重点を置いたのは原点回帰だった

会場入りした藤田和之は、大会パンフレットを眺めながら思わず苦笑いした。戦績＝14勝6敗。00年に新日本プロレスを退団し、同年1月に総合デビュー。以来、8年余で20戦。途中、プロレスとのかけ持ちや、プロレスに専念していた時期があるとはいえ、「なんて試合数が少ないんだろう」と含み笑いしてしまった。

不思議な男だ。ヴァンダレイ・シウバに完敗を喫し、昨年4月の『PRIDE.34』でUFC代表のジェフ・モンソンに大チョンボの逆転負けを許しても、ファンはまた藤田に期待を寄せる。忘れた頃に突然舞い戻ってくる野獣の姿を目にした瞬間、他を圧倒する異臭のオーラを感じてしまうのかもしれない。だからオープニングの全選手入場式の際、最も観客の歓声を集めたのは五味隆典と藤田であった。

昨年、モンソンに敗れた直後、藤田は海を渡った。もちろん、行き先はカリフォルニアのマルコ・ファス道場。それ以降、PRIDEの身売りに伴なう契約事項のクリアが最優先課題となったものの、内外から複数のオファーが届いた。そこで一つ理解したのが、仮に米国マットを主戦場にした場合、どこのリングでもシューズ着用は認められない、ということ。それを仮定して、すでに裸足でのマット練習をスタートさせていたのだ。



大会前日、記者会見の席で藤田は、挑発してきた対戦相手のピーター・グラハムと大乱闘を繰り広げた。これから作っていくリングだからこそ、藤田の存在は大きい。

リングに上がる前にゆっくりと赤のシューズを脱いだ藤田。裸足での実戦はケンシャムロック戦以来だから7年半ぶりとなる。そういえば、入場テーマも『炎のファイター』オーケストラバージョン。体も一回りごつくなって、ウェートは115・9キロ。すべてが、原点に返ったかのようだった。実際、この一年近く日本とロスを往復しながら、藤田が練習面で重点を置いたのは原点回帰だった。つまり、ここ数年、打撃（パンチ）の技術が進歩するに従い、どうしても立ち技主体、パンチに頼ってしまう傾向があったからだ。

「スタンドに頼るんじゃなくて、倒してからグラウンドで確実に極める。もちろん、倒れないことも必要だし、下になったときの対処もやってきました。だから、レスリングの基本の部分で原点に返ったのかもしれないです。いままでは、上になった、叩くの？　叩かないの？　疲れたの？　どうするの？　また立っちゃうの？　取られちゃったよ!?ってね（笑）。あくまでこっちがベースである、と。それをしっかり練習して、打撃もやったほうがいいんじゃないかなと。だから、俺も原点で勝負をするし向こう（グラハム）も空手という原点で来るわけだから。前日会見でも乱闘みたいになったけど、彼は気持ちで来るし、実際に試合でも気持ちをぶつけてきたから、魂のぶつかり合いができたと思います。入場なんか見ても、いい意味でプロレスラーだなぁって。彼はプロレスをやっても成功するんじゃないですか？　いい感性をしてますよね」

さて、闘いは1ラウンド・1分23秒、スピニングチョークで藤田の圧勝に終わった。無論、その結果だけ、見た目だけで語れる試合ではなかった。

「拳に気持ちが込もっているから、一発食っただけで左の額にタンコブができて、時間が経つにつれ、凄く腫れてきてねえ。最初、スタンドで打ち合ったときですよ。ダンダンダンってストレートというより、正拳突きが来たんで、とっさに頭で受けるしかなかった。打ち合ったら足元をすくわれますから。ローリングサンダーっていうのも警戒していたから、とにかく距離を詰めて、がっちりガードして正面から前へ行くと。タックルは2回切られたけど、あれは少し距離があったんでね」

しかし、3度目のタックルでテイクダウンに成功した藤田は、まずサイドポジションへ。そこからマウント→サイド→上四方→サイド→上四方とポジションを転位させ、最終的に上四方の体勢から肩固めの要領（スピニングチョーク）で絞め上げてタップを奪った。

「あれは最近よく使われる技ですね。上四方なら、あれが一番オーソドックス。ポジションを変えたのは、相手の重心移動に合わせて動いた結果です。ずっと練習してきたことなんでね。あれが一撃で仕留める技かって？　違います、それはまだ秘密です。いつ解禁するかもわからない（笑）」

では、藤田にとって新天地『戦極』のリング自体はどう映ったのか？

「全部で7試合だったけど、濃かった。今回、ここを選んで正解だったと思います。これから、みんなで作っていくリングだなという熱を感じたし。いままでの僕からしたらおもしろくないフレーズかもしれないけど、『一度きりの人生だから、悔いのないよう闘うだけです』という言葉を今後も言い続けます」

そう、藤田にしては至極真っ当というか、ヒネリがない。だが、そこに本当の意味で覚悟を感じてしまうのだ。

「年齢も考えると、1戦1戦が大事なんです。その1戦をしっかり極める。だから『戦極』ってとこじゃないですか、アッハッハッ！」

最後はやっぱり藤田らしく……おあとがよろしいようで！

（金沢克彦）





3.5戦極 クロスレビュー

選手、ライターによる〝公正明大〟な

構成／真下義之　撮影／乾晋也
イラスト／北出裕貴（THE PEHLWANS）

第1試合

○ニック・トンプソン
[3R判定 3-0]
ファブリシオ・"ピットブル"・モンテイロ×



『戦極』旗揚げ戦の"闘い始め"は外国勢同士の一戦。打撃のトンプソンと寝技のモンテイロは一進一退の攻防を展開するも、いずれも決定的な決め手に欠け、観客もやや置いてけぼり状態。試合はフルラウンド判定決着の末に、"bodogウェルター王者"トンプソンに凱歌があがった。

第2試合

○川村亮
[3R判定 3-0]
アントニオ・ブラガ・ネト×



煽りVではやたらと「笑顔」が強調されていた"パンクラス次代のエース候補"川村が日本勢トップバッターとして期待の出陣。試合は第1試合同様、川村の鋭い打撃とネトの執拗な寝技地獄が交錯する。3R終盤、果敢にパウンドや打撃ラッシュに出た川村が判定勝利で『戦極』デビュー。

第3試合

○エヴァンゲリスタ・サイボーグ
[1R 4分51秒 アキレス腱固め]
瀧本誠×



昨年末の『やれんのか!』ではブスタマンチに判定勝利など絶好調の瀧本だったが、今回はサイボーグの打撃に翻弄され、強烈なローがズバリ命中！　これをイヤがった瀧本が最後はアキレス腱固めで捕獲され、1R残り9秒でまさかのタップ負け。試合後は「負けた気がしない」と悔しさをにじませた。

郷野聡寛



ごうの・あきひろ■ご存知、GRABAKAの実力派ファイター。修斗、パンクラス、PRIDEを経てUFCに参戦。恒例の入場パフォーマンスでオクタゴンにある意味、戦慄を走らせた。現在は右手負傷で欠場中。

第1試合の意味って

最初から申し訳ないんですけど、この試合について語ることはないですね……。というか「なんでこれが第1試合なんだろう？」と。かつてパンクラスの旗揚げ戦で鈴木みのるさんが第1試合を務めたように、今後の大会の"顔"になるであろう選手、結果論だけど川村(亮)のほうがよかったと思うし、興行的にもちょっともったいなかったですね。

ファールカップのヒモ

この試合、川村のトランクスのケツの部分がまくれて、ファールカップのヒモが見えてて英語のアナウンスのネェちゃんがそれを見て喜んでました(笑)。川村は顔面にいいパンチを入れたら、もう一回顔を殴りにいって、それで何回もタックル入られてた。上が当たったら、腹を叩くとか散らす工夫は課題だけど、とにかく勝ててよかったです。

心が折れそうな試合

瀧本選手は昨年の二試合で評価も上がったし、本人もかなり手応えをつかんだと思うけど、今回はそれをくじかれるような闘い方でしたね。最後は「これで極まっちゃうの」的な空気で試合が終わっちゃったし、 俺が彼の立場なら、今後の課題の多さに心が折れそうになるかも。でもお客さんの期待感は高かったんで、めげずに頑張ってほしいです。

高崎計三



たかさき・けいぞう■本誌ではbodog海外特派員として、また『kamipro Hand』の『kamipro事件簿』の調査員としても活動する格闘技ライター。ベースボール・マガジン社を経て、有限会社ソリタリオ代表。

選手二人が気の毒

観客にとってはどうにも感情移入できない外国人二人に、記念すべき旗揚げ戦のオープニングマッチを任せてしまうって……。しかも盛り上がる場面もあまりないままに終わっちゃって。なかなか拮抗してて、これが修斗後楽園大会だったらもっと評価されただろうが結局は「まあ、どっちが勝ってもねえ」に終わってしまって、選手二人が気の毒だった。

倒さなきゃダメだった

大舞台が初めてのパンクラス期待の星・川村は確かに試合には勝ったし、いい場面も見せたものの、やっぱりここは倒さなきゃダメだった。最後に倒せていれば、序盤の劣勢も逆に生きてきたはずだが。旗揚げ戦らしい"新星が突き抜ける瞬間"を見せられる可能性があったのは今回、川村のみだっただけに、惜しい。惜しすぎる！　ネトはまだ経験が必要か。

アップセットなのか?

アップセット、と言っていいんだろうか。にしても、誰も望まないアップセットであり、誰も望まない意外な結末。PRIDEで西島洋介と闘ったときもそうだったが、サイボーグはこんなところで器用＆堅実なところをアピールしてる場合じゃないだろ！　瀧本のほうも、煽りVも含めてやっぱりなんとなく肩入れできない雰囲気で終わってしまった。なんでだ！

橋本宗洋



はしもと・のりひろ■日本最重量級フリーライターにして、DEEPメガトンGP実行委員会の一員。『SRS-DX』編集部を経て、フリーとして活躍中。K-1や総合から映画まで幅広くカバー。

中身は濃かったが……

実力者同士が持ち味を出し合った中身の濃い一戦だったが、この手の試合はやはり後楽園ホールで観るほうがのめり込めるんじゃないか。新大会の第1試合がファンになじみのない外国人対決というのも"つかみ"や"起爆剤"としてちょっと……。同じ内容でもシチュエーションによって試合の印象は変わる。そのサンプルのような試合だった。

合格だけど満点じゃない

強豪柔術家・ネトの寝技に苦しめられながら、しぶとく食らいついて打撃で逆転。穴だらけだが無限の可能性を持つ川村の試合ぶりは、まるでパンクラスの先輩である近藤有己（のいいとき）を見るようだった。ただ、それを観客により印象づけるためには、やっぱりKOがほしかったよなぁ。合格だけど満点ではない、そんな微妙な感じが残ってしまった。

ここで負けちゃいかんよ

昨年4月のガレシック戦、大晦日のブスタマンチ戦と評価を上げてきた瀧本が、ここで負けちゃいかんだろう。実力を考えればサイボーグ勝利は波乱ではないのだが、あまりにもタイミングが悪かった。この負けは単なる一敗とは意味が違う。なのに試合後のコメントでは「負けた気がしない」って……。瀧本らしいっちゃあらしいんだけども。

第7試合

○ジョシュ・バーネット
［3R 3分23秒 ヒールホールド］
吉田秀彦×



『戦極』のメインは“キャッチレスリング vs 柔道”対決。1R、打撃で攻める吉田にジョシュが完璧なバックドロップを炸裂！　吉田はバックを取られつつ腕絡みなどで応戦するも、2Rにはジャーマン狙いも見せた余裕のジョシュが、最後はグラウンドの攻防からヒールホールドで見事な完勝劇。

“進化する”吉田さん

地味なんですけど、序盤に吉田さんがジョシュのジャブをブロックして、ジョシュがプレッシャーをかけたのをまっすぐ下がらず、横に動いてプレッシャーを逃がしたのを観て「あ、練習してるな！」って。吉田さんくらいの立場と年齢で、さらに進化しようとしているのを観て、えらそうで恐縮なんですけど「俺も頑張んなきゃな」って思いましたね。

日本総合しかできない試合

二人に素晴らしいプロ魂を観た！　純粋な総合の試合でありながらしっかり“プロレスvs柔道”の展開になっていて、しかも見せ場タップリ。ジョシュのジャーマンをめぐる攻防なんて、まんまクラシックプロレスの世界ですよ。これこそアメリカにはない、日本総合にしかできない試合では？　ただ、今回敗れた吉田の次の扱い方が気になるとこではある。

千両役者の見事なメイン

試合前にジョシュが提示した“キャッチレスリングvs柔道”というテーマは正直どうかと思ったが、バックドロップで投げ、ジャーマンを狙い、最後はヒールホールドという“U系”な技で極めたプロレスラーっぷりはお見事。演出＆運営面ではバタバタしてた感のある今大会だが、こんな千両役者を観たら、観客の多くはきっとリピーターになるはずだ。

第6試合

○五味隆典
［1R 2分28秒 TKO レフェリーストップ］
ドゥエイン・ラドウィック×



1年3ヵ月ぶりの復帰戦となる五味の相手は、K-1 MAXにも参戦など打撃に定評のあるラドウィック。新テーマで入場した“新生”五味は、パンチを食らう場面もあったが慌てず騒がず、間合いを詰めて怒濤の左フックを炸裂！　大量の鼻血を出したラドウィックにドクターストップ勝利。

“五味くんらしさ”爆発

五味くんは「打撃の交換をしたらヤバいんじゃないか」と思ってて押された印象もあったけど、「一発当たれば倒れる」って自信ある選手は劣勢でも心が折れない。実際、早い段階で逆転してあいかわらずの強さだった。最後に「喜ぼうかな、でも相手にも挨拶しなきゃ」って喜びが若干不完全燃焼気味だったのも五味くんらしかった（笑）。

五味に疑問アリ！

実質、試合を決めたパンチは素晴らしかったとはいえ、直後のアピールで仕留めるタイミングを失なってしまった五味にはかなり疑問！　そこを突っ込んでいってエゲツないまでにぶっ倒してこそ、火の玉ボーイでしょ！　余裕のある“大先生”の五味なんて、誰も見たくないはず。それに「アクシデントだからもう一回」ってのも謎だ。次はバチッと頼むよ！

五味への待望感が大爆発！

実際に客席からも声が飛んだが、五味への“待ってました感”は本当に凄まじかった。どのリングでもこういう熱を生み出せるところがスターたるゆえんなんだろう。本人はアクシデントと言っていたが、打撃が本職のラドウィックをパンチでTKOに追い込む勝負強さも五味ならでは。試合後の涙は、彼にとってのこの1年の“重さ”を感じさせた。

第5試合

○三崎和雄
［2R 2分02秒 フロントチョーク］
シアー・バハドゥルザダ×



昨年末の『やれんのか！』における“魔王討伐”で、時の人となった三崎は今日も両手グルグル＆反復横跳びスタイルで元気に入場。対する修斗ライトヘビー級王者・バハドゥルザダは序盤から打撃ラッシュで三崎の顔面を急襲！　だが三崎は払い腰の体勢から得意のチョークを爆発させ、ガッチリ一本。

ブサイクな試合（笑）

ブサイクな試合でしたねぇ（笑）。でもこの短い試合スパンで和雄はよくやったなって。じつは試合前にケガしてスパーリングもほぼできない状態で、パンチに目が追いついてなかった。試合はバタバタしてたけど、最後に得意のギロチンで極めたのはさすが。最後のマイクも今回は一番マトモで、そこも失敗を重ねて成長してきたかなって（笑）。

過酷な三崎の立場

三崎和雄の腕回しはシウバの手首ウネウネと同じようなものになりつつありますな。本人にとってはアップの動きにすぎないんだろうとこも含めて。シアーは圧力が強くて、もうちょっと観てみたい。入場時、意外に爆発しなかったところから見るに、三崎は勝ち続けないと認めてもらえない過酷な立場で今後が大変そう。とくに『戦極』の客層からは。

逆転勝ちに見た神通力

スタンドでパンチをもらい、パウンドも直撃され、ヤバそうなムードが高まったところで逆転の一本勝ち。もともと実力のある選手だが、それ以上にいまの三崎には勢いに乗っている選手特有の底力というか神通力みたいなものを感じる。もしかすると三崎は今後、とてつもない存在になるかもしれない。試合後のマイクだけ、なんとかすれば。

第4試合

○藤田和之
［1R 1分23秒 スピニングチョーク］
ピーター・グラハム×



「このトサカ頭野郎！」と前日会見でプロレスチックな乱闘騒動が勃発した両者。藤田は入場テーマを『炎のファイター』オーケストラバージョンに戻して堂々入場。試合はタックルから次々と体勢を入れ替えた藤田がスピニングチョークであっさり一本！　スキのない横綱相撲で“野獣”が完全復活。

“プロの匂い”に感心

藤田さんの“プロの匂い”を感じました。技術レベルでは相手に問題はあると思うけど、お客さんがこの日初めてスカッとした試合でしたね。あと煽りVで藤田さんが俺が「ほしいなぁ」と思ってたブルガリのペンダントをしていたんですよ（笑）。やっぱりプロたるもの公の場では身だしなみも相応のものを着けたいなって、そこも感心しましたね。

グラハムを名物に！

ピーター・グラハムにぞっこんラブ！　花道に現われるなり会場を明るくするムードメーカーぶりは、こういうイベントには絶対必要。結果が出なかったとしても前半戦の名物として起用し続けてほしい。強いヤツはたくさんいるだろうけど、こういうタイプは得難いですよ。藤田は、ここであっさり勝てて（勝って）しまうあたりが彼らしい感じ。

藤田、さすがの存在感

同じ“大きな決断”後の試合だったPRIDE無差別級GP1回戦のような野獣の咆哮は見せず、この日の藤田は闘志を内に秘めた雰囲気。打撃戦を避けて即タックル、最短距離で一本勝ちしたのは白星への渇望ゆえか。それでも、前日会見での乱闘騒ぎも含めインパクトを残す存在感はさすが。実際、この試合から会場の空気がグッとあったまったのだ。



戦極愛とは何か?座談会

初陣を特集でござる
戦極、読むぞ!!

『戦極』、ついに旗揚げ!! 吉田秀彦や五味隆典ら大物の元PRIDE日本人ファイターたちが名を連ねたそのリングは、低迷する日本マット界復活の狼煙を上げることができたのか? 大会終了直後、まだまだ底が見えぬ新イベントの謎を語りまくったのでござるのよ!!

PRIDEのお家芸であった対立概念に対する挑発を継承したのかなと（井上）

――『戦極』、語るぞ!!（『戦極』のナレーション調）。……というわけで、『戦極』の旗揚げ戦がたったいま終わったばかりですけど、今日はいつも司会を務めるタコ兄さん（原タコヤキ君）が不在です。

井上 会場にはいたよ。「腹へった！」ってボヤキまくっていたけど。

ガンツ 会場で「腹へった」とか「売店が混んでる」とかそういう文句しか言わないなんて、もうターザン山本！……、いや、その弟子だった○○イズムの正統後継者ですよ!!

井上 タコヤキ、Uはおまえだ！

――ちょっと、○○さんはもう一般人なんだからよしましょうよ。

井上 もともと一般人じゃん（笑）。

ガンツ まあ、ヨカタと言ったほうがいいでしょうね。

――そんなことより『戦極』です。

ガンツ いやあ、及第点だと思いますよ。期待していたより、おもしろかったんじゃない？

井上 オレもそう思いました。及第点じゃないですか、ホントに。

ガンツ 対戦カードからして、そんなにヒリヒリするような勝負論がある試合はなかったですけど、ファンからすると勝ってほしい選手がだいたい勝ったから、ファンも満足してるんじゃないですかね。

井上 オレはジョシュ・バーネットがよかったねぇ。なんか凄く〝ピュア・ホワイト〟だし、『戦極』のイメージカラーにピッタリでしょ。

ガンツ それって肌が〝ピュア・ホワイト〟ってことですか？（笑）。

井上 うん。見た目の話だけど（笑）。でも、ジョシュにはいままでない雰囲気があったから。

ガンツ 確かに今回の吉田戦は総合の試合というより、〝異種格闘技戦〟の雰囲気が漂っていたというか。

井上 そうそうそう。恥ずかしながらちょっと〝変態〟の血が騒いだよね、あの試合内容には。

ガンツ 非常に〝プロ・レスリング〟ですよね。

井上 あのUWFインターを彷彿とさせるジョシュの試合運び。プロレス最強!!

――あの～、それ、企画が違いますから。

ガンツ（無視して）ジャーマンを狙って吉田の身体を浮かせる様は、完全にUインターの〝ゲーリー・オブライト状態〟でしたもんねっ!!

井上 ジョシュ、Uはおまえだ！

ガンツ 「もっと早く極められたのに遊んでいた」という批判もありますけど、ジョシュからすれば、メインイベンターとしての意識が強かったんでしょうね。

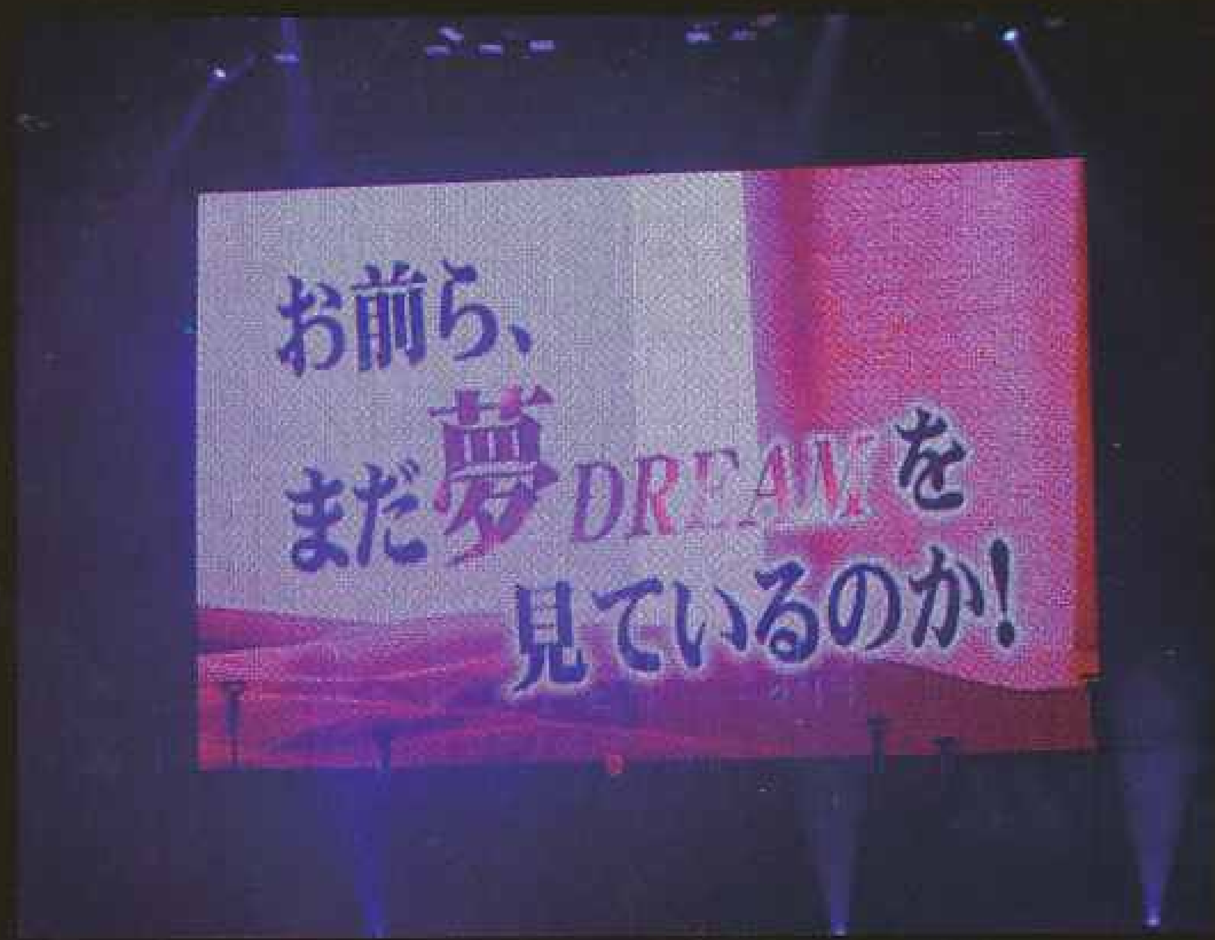
井上 全体的なことを言えば、今回の旗揚げイベントは、やっぱりどうしても3・15のDREAMとセットで観なきゃ語れないという特殊な部分があるじゃないですか。

ガンツ PRIDEの主力どころを揃えたし、当初は『やれんのか！』チームの協力も構想にあったわけですからね。

井上 で、そもそも『戦極』を管理する組織、日本総合格闘技協会は総合格闘技をオリンピック種目にする目標があったわけじゃない？

ガンツ そういえば、そんな夢もありましたねぇ。いまは夢から覚めたんでしょうね（笑）。

井上 そんな〝ピュア・ホワイト〟な面が『戦極』の特色だったと思うんだけど、いきなりオープニングで、ビジョンに「夢」っていう文字を出して「夢を見るのもいいが戦いを極めよ」ってやったでしょ。あと前日会見で藤田とピーター・グラハムが乱闘したり。そこでわかったことは、『戦極』って競技よりも〝興行〟が主軸にあるんだなあっていう。



佐藤大輔的世界観を目指していた『戦極』の煽りV。ナレーターは『機動戦士ガンダム』のシャア役の声優さん。選手登場の際に「吉田秀彦選手、出る!!」と独特の言い回しで観客のドヨメキを誘う!!「○○には負けられない理由がある」節に続いて、クセになりそう!!

ガンツ 日本総合格闘技協会的には、あの記者会見は大問題ですよ！。ただ、あんなに乱闘が目の前で起こってるのに顔色一つ変えない木下社長だけは断固、認めます！（笑）。

井上 そういう意味では〝PRIDEの継承〟というのも、これはPRIDEの一つのお家芸であった対立概念に対する挑発的な部分を継承したのかなっていう（笑）。

ガンツ でも、その煽りが不発に終わったところもあるじゃないですか。リング上はよかっただけに、煽り映像のすべりっぷりが唯一残念でしたよね。

井上 ぶっちゃけ、オレはあの挑発はちょっと残念な感じがしましたね。やっぱり昨年PRIDEが買収されて、結局潰されて解散となった。そんなこんなでファンって一連のリング外のゴタゴタで疲れきってると思うんだよね。

ガンツ ファンはかなり疲労してるでしょうね。

井上 疲労困憊なわけですよ。その中で今日の一発目のイベントのド頭で戦争を仕掛けてるわけじゃないけど、「おいおい、ちょっと待てくれ。『戦極』は〝ピュア・ホワイト〟じゃないのかよ？」と。なんかすっかりファン不在というか、DREAMへの対抗意識だけが見えて少し嫌な感じがしたんだよね。

ガンツ 要はPRIDEがK―1を揶揄したりとか攻撃したりしてたのは、ファンにとってもPRIDEにとってもK―1は共通の〝敵〟だったわけじゃないですか。だから（佐藤）大輔さんの煽りVに気持ちよく乗ったわけでしょ。でも、今日『戦極』の場合はもともとPRIDEファンが多いわけですから、もちろんDREAMも大好きな人間だっているわけで。どっちも好きで『戦極』も観に来たのに「夢を見るのもいいが……」とか言われたら、それこそ冷めちゃいますよねぇ。

井上 あの～、一つ言いたいのは、まだ誰一人として夢を見ていないってことなんですね（笑）。

ガンツ ちょっとくらいは見せてくれ、と（笑）。

井上 で、選手入場式のあとにもう一発そんなこと言ったでしょ。目覚まし時計が鳴って「いつまで夢見てんだ」だっけ？ だから、まだ見てないんだって!! 頼む、見させてくれ（笑）。

――ダハハハハ！ 驚いたのは〝夢＝目覚まし時計〟という暗喩ですけどね（笑）。

井上 でもね、別の見方をすると、あの目覚まし時計で「いつまで夢見

座談会出席者

井上崇広
有限会社ペールワンズ総帥。本誌好評企画・変態座談会の一員にして、〝座談会の鬼〟の異名を誇り、鈴木みのるばりにあちこちの席に出没する。

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から熱狂的プロレスファンでならし、『週プロ』の『プレッシャー』会員という恥ずかしい過去を持つ。変態座談会主宰者。

[司会]ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。永久電機などアントニオ猪木の怪しげな事業の調査をライフワークとする。

てんだ」っていう映像の作り方は、佐藤大輔的な世界の呪縛からかなり自由に解き放たれてて、あれはあれで逆に微笑ましかったというか(笑)。やっぱり佐藤大輔的なものを意識して、よしんば成功したとしてもそれはどうしても亜流になっちゃう。それはどうしようもないことなんです。

ガンツ 音楽のつけ方とか大輔さんふうになんとかかっていうのが……やればやるほど遥か彼方の距離を感じるというか。

――それでも『HERO'S』の"家族愛的な煽り映像"よりは数段、上じゃないですか。

井上 そうだね。もはや自由なのか不自由なのかすらもわからない領域ですね(笑)。

――そう考えると凄いですよね、『HERO'S』って。

ガンツ はたしてDREAMはどうなるんだろうね……。

井上 話を戻すと、いきなりの"vs DREAM"表明があって、そんなつもりで来たんじゃないんだけどっていう気持ちになって。それと我らが三崎が試合後のマイクで「『戦極』ファンの皆さん」と言いましたね。

ガンツ 「いやあ、そうくくられましても」っていう(笑)。

井上 旗揚げ戦のしかもまだ途中の段階で『戦極』ファンってのは、いったい誰を指しているのか、と(笑)。

ガンツ 大連立会見に来ちゃった人たちに向けて「PRIDEファンの皆さま」はわかるんですよ。PRIDEファンしかいないに決まってるんですから。

――『HERO'S』ファンは?

ガンツ ノーコメントッ!!(ドン)。

――なぜそんなに力強い(笑)。

ガンツ でも『戦極』はまだブランド自体が確立されてないんだから、メチャクチャ熱いファンはそんなにいるわけないんですよ。今回の内容を続けていけば、リピーターは確実に増えていくと思いますけど。

――『戦極』の煽りに関して言えば、なんか演出チームが先走っている印象がありますよね。あとPRIDEの興行をもの凄く学習していて。

井上 だから危なげなかったというか、キッチリ及第点を取ったね。

――煽り映像がイマイチでも、リング上の闘いがしっかりしてましたし、よけいな説明はいらなかったですよね。オーちゃん(小川直也)の来場はちょっと意味がわからなかったですけど。

井上 あ、メインの前だっけ、リングサイドの小川がビジョンにバーンと映って。あれはなんで来たの?



ガンツ わかんないですね。

井上 たとえばジョシュが勝ったからなんにもなしで、吉田が勝ったらなんかやる予定だったとか? まさか「一緒にハッスルポーズやってくれよ」っていうのは……。

――ダハハハハ! 夢を見るのはいいが、戦いを極めろ(笑)。

ガンツ 逆に足を負傷した吉田があのときの小川のように「おぶってくれよ」ってリクエストしたら凄かったですけどね。「小川先輩、ごめん! 足やっちゃった」って(笑)。

井上 もしかしたら、チョロが発明したから絶対に浸透しない「一、十、百、戦極、戦極!!」ポーズをみんなでやる予定だったのかもしれない。きっとそうだ! 戦極、戦極ッ!!

――(無視して)興行面で言えば、『戦極』は前日に迷いが見えましたよね。要は藤田とグラハムの乱闘とか、オーちゃんの投入の仕方とか。

ガンツ 要はさ、話題を作るためになんでも注ぎ込もう! っていうことだよね。

井上 だから直前になって"ピュア・ホワイト"に"黒魔術"的なものが見えちゃったよね。でも、やっぱり旗揚げ戦っていうのはいろんな要素を盛り入れて、保険をかけとくもんだから。でも、小川だけはホント謎だよなあ。

――もうすでに『大みそかハッスル祭り』の高田将軍ばりに"なかった"ことになってますよ(笑)。だって、オーちゃんがビジョンに映ったときの歓声のなさったらなかったですよ! あれは寂しかった……。



"マイクの鬼"!!
三崎のマイクを暗記しろ!!

「戦極ファンの皆さん、こんにちは!! 去年の大晦日、試合はどうでもいいんだけど、マイクで叩かれたんで、しゃべるのはやめようと思ったんだけど、マイクを渡されて……何もしゃべることを考えてなかった(苦笑)。一つだけ! 俺はいま、このリング"で生き残っています!この試合を迎えるにあたって、神様はいろいろな試練を与えてくださり、本当につらく苦しい道のりでした。しかし! 俺は生きているっ!! これが"生きる"ということだと思います。これからもこのリング"で、"生きる"ということと"命の大切さ"を伝えていきたいと思います。また『戦極』のクソ高いチケットを買って観に来てください。我々はそれ以上のファイトで皆さんに返していきたいと思います!!」

ガンツ あとIGFの小川vsジョシュ戦より今日の吉田vsジョシュ戦のほうがよっぽどいいプロレスだったっていう寂しさもあるし(笑)。オーちゃん、今日はなんだったんだろうね……いままでもなんだったんだろう? って。

――IGFへの参戦の仕方といい、最近は大義名分の打ち出し方がイマイチですよねぇ。いままでのオーちゃんって、その大義名分があったから、内容がズンドコで周りから嫌われようがファンの熱を生み出してきたじゃないですか。

ガンツ ホントにそう。石井館長に8000万円を積まれても『猪木祭り』出場に首を縦に振らない男がどうして今回来たんだろう? って。その理由が見えづらかったよね。

井上 でも、『戦極』からすれば、5月、6月の小川参戦を実現させたいのかな? 日程が立て込んでるから、何か隠し球があるのかなって。

ガンツ たぶん会場が取れちゃったんでしょうね(アッサリ)。

井上 ウソ!? そんなIGF的な理由なの? (笑)。

ガンツ 入場者数は、代々木第一の定員をはるかに超えているから"IGFが誇る実数発表"じゃかったんですけど(笑)。ホントは4月中旬にやりたかったはずですよ、きっと。でもホジャー・グレイシーが4月だと間に合わないんですね。ホジャーは今月末に試合があるから。

井上 え? 次はホジャー立て?

ガンツ そうでしょ。だから今日「こ

今回の内容を続けていけば、『戦極』のリピーターは確実に増えていく（堀江）

の男の参戦が決定しました！」って大々的に煽って、ビジョンいっぱいに写真が映って。まあ、会場は「誰？」って感じだったけど（笑）、ひさしぶりに〝まだ見ぬ強豪〟の登場ですよ。

井上　事前にビッグサプライズを用意してるって言ってたのは、ホジャーの参戦ってこと？

――あれはですね、会見の現場では「サプライズありますか？」「期待してください（笑）」というとくに含みもない会話だったらしくて。

井上　あ、それが見出しになっちゃっただけなんだ。

――まあ、イベント側からすれば「サプライズ？　そんなもんありませんよっ!!」とは言えないですから（笑）。

井上　しかし、今日の『戦極』にはいったいどういうファンが来てたんだろうね？

ガンツ　格闘技ファンは来てるんでしょう。ただ『戦極』ファンっていうのはまだいないっていうだけで。DREAMのほうはよくも悪くもPRIDE信者がそのまんまガッツリいて、『戦極』はそのガッツリじゃない人たち、PRIDE好きだったけど信者的じゃない人たちが多かったでしょうかね。三崎なんか、もっと人気あると思ったんですけど。五味への歓声はズバ抜けてたけど。

井上　でも三崎も凄かったよ!!　あのマイクが！

ガンツ　ガハハハハ！　大晦日に続いて（笑）。

――三崎は勝ったら郷野が代わりにしゃべる、染之助・染太郎状態にすべきですよ。「アンタは肉体労働、オレは頭脳労働」で（笑）。

井上　でもさ、三崎の試合まで選手に一切マイクを持たせない流れがあって。そういう部分は『戦極』の特色かなと思ったんだけど、三崎が勝った瞬間、オレの心の中で、かつてのラッシャー木村の……。

ガンツ　（さえぎって）「マイク!!」コールが起こりましたよね！

井上　起こした！　心の中で。これは〝マイクの鬼〟三崎和雄の誕生ですよ！

――ダハハハハ！

井上　三崎への「マイク！」コールは、『戦極』の恒例にすべきですよ！　三崎のマイクは価値あるわ！　ホントに。

ガンツ　年末の特番なんかで〝三崎マイク総集編〟を流してほしい（笑）。

井上　ねえ。なんであそこまで「クソ高いチケット」を声高に連呼する意味がわからないし（笑）。そこが三崎の〝笑いのツボ〟っていうのがホントにいいよね。「高いチケット」を皮肉れば鉄板だろうっていう。

――ええ〜？　そこが三崎の〝笑いのツボ〟なんですか（笑）。

井上　だって最後の締めでもまた言ってたじゃんね。こらっ、まだ言うかっていう（笑）。

ガンツ　あそこでは普通「一言だけ言わせてください。日本人は強いんです!!」って言ったら「あ、秋山戦での発言も恒例の決めゼリフだったんだな」ですむんだけど、今回から急に言わなくなっちゃったから、やっぱり前回の「日本人は強いんです！」には、なんかへんな意味があったんじゃないかって思っちゃいますよね（笑）。



わからぬ! 大会前日、突如として発表された小川直也の『戦極』来場!! ジョシュや吉田秀彦の因縁を鑑みればありえる話だが、それにしたって物語の線は見えづらい。ファンのリアクションの薄さはがそれを物語っていた。小川直也の“プロレス”はどこへ――!?

井上　三崎は煽りVでは毎回いいこと言ってんだよね。でも、ライブで引っくり返すじゃん、全部。あれ、なんでなの？

ガンツ　きっと自分を解放してるんですよ。入場のとき、あのうしろ向きから前に向いた瞬間に。ボクはあの入場もかなり好きになってきちゃいましたけどね。

――ボクも試したんですけど、三崎みたいにあそこまで腕をブンブン回せないですよ。

ガンツ　でも、三崎の腕は今回あまり回ってなかった。

――回ってなかった。

井上　あ、そうなの？

ジャン・ガンツ　回ってなかった！

井上　声を揃えるくらい回ってなかった!!（笑）。

ガンツ　回し足りない。気合いの入りようがあの回転数でだいたいわかるんですよ。

井上　今日はなんで回転数が少なかったの？

ガンツ　燃えない相手だったんじゃないですかね〜。

――あといつものシャドーボクシングで相手にプレッシャーをかける姿もなかったですよね。

ガンツ　あと〝しっとるけジャンプ〟もないし。だから試合は三崎なりの安定感が欠けてたというか。

井上　あ〜、〝しっとるけジャンプ〟はやらないとダメだよね。あれとマイクは恒例セットにしないと。ファンは〝クソ高いチケット代〟払ってんだから、やってくれ三崎！（笑）。

――でも、シアーがリングを降りたらすぐ三崎が追っかけて健闘をたたえ合いましたけど、また説教するのかと思ってドキドキしてましたよ。

ガンツ　「おまえは絶対に許さない!!」って（笑）。

井上　そういう意味では、やっぱり三崎は安定感があるじゃん（笑）。三崎は『戦極』の宝だよね。至宝だよ！

――MVPは三崎かあ。どんなモノサシで計ってるんだって話だけど。

井上　そういえば、いろんな旗揚げ戦を思い出してたの。『HERO'S』の旗揚げはよく覚えてないんだけど、『PRIDE・1』もそうだし、『ロマネックス』とかいろいろ思い出して、『戦極』は何に似てるのかなと思ったら、『コロシアム2000』に似てるんだよね。

ガンツ　ヒクソンvs船木戦が実現させた一回きりのイベントですね。

井上　っていうのは、なんか新しい中立なイベントに見えて、その実パンクラスワールドじゃんっていう関係性が凄く似てない？　『戦極』も吉田のホームっていうか、世界観は吉田道場みたいな。吉田道場と『戦極』、パンクラスと『コロシアム2000』の関係性は凄く似てる気がする。

ガンツ　まあ、そうですね。主力は吉田道場であり、『戦極』広報の國保さんは吉田道場を経営するJ－ROCKの社長ですから。でも、不思議なのは、吉田道場以外はみんな一匹狼的な人が戦場を求めてきたってことになってるのに、みんな「『戦極』を応援よろしくお願いします！」ってなるんですよね。

井上　そこそこ!!（笑）。最後に藤田、三崎、五味が声を揃えて『戦極』をPRして締めるっていう。だから三崎の「『戦極』ファンの皆さん」っていうマイクにしても、なんでいきなりファイターたちにそんなに〝戦極愛〟があるんだ？　っていう（笑）。そんな急なアクセルの踏み方をされたら、こっちは『戦極』難民になっちゃうよ！

DREAMもそうですけど、PRIDEという幻影をいかに振り切るかが勝負（ジャン）

ガンツ 早くも難民!!（笑）。我々が『戦極』に乗り遅れてるだけなんじゃないですか？

井上 今日が旗揚げだっつーの！ キッチリ始発に乗ったよ！

ガンツ そうか（笑）。

井上 選手が今日まで水面下でどう『戦極』への愛を育んできたのかは知らないけどさ。遅刻して3時間目から学校行ったら朝すげえおもしろいことがあって、その日の話題についていけなかったみたいな（笑）。いったいここまでに選手たちに何があったんだろう？

——みんな心細いのかもしれないですね。

井上 そんなこと？

——PRIDEというリングがあれだけ求心力を生んだことを目の当たりにしてるじゃないですか。桜庭なんて、ひさしぶりに帰ってきて歓声を浴びたら涙を流すくらいに熱があったわけですよね。あの場力的なものを求めつつも、手元にないことを恐れてるところがあると思うんですよね。それにしたって、普通だったら「『戦極』は俺が引っぱります！」とか誰かしら言うもんですけどね。

井上 うんうん。でも、みんなして〝戦極愛〟のPRに努めていたよね。

ガンツ 五味の『戦極』にまだなじめないんだけどなじんでるふりしてるところが凄くいいんですよね。望んでたどり着いたわけじゃないんだけども。「住めば都！ 住めば都！」って言い聞かせてる感じが。それで歓声が聞こえてホッとしちゃった感じてる五味がいいなと思って。

井上 〝住めば都〟かあ。

ガンツ そういう感じが凄くする。さまよいつくして「う～ん……ここか……でもこれでよかったんだよ！」っていう。そういう五味は、凄く色気があって好きだな。

井上 だからその、タイミングの問題で『やれんのか！』に出なかったとか、大連立とは折り合いがつかなかったとか……まあ、吉田道場は別としてね。ビジネス的にもいろいろあるんだろうけど、たとえばファイターにしてみれば『戦極』っていう舞台は、オファーされれば参戦しますよっていう感覚だと思ってたんだよね。それが「『戦極』をよろしく、『戦極』をよろしく」っていうさ。

ガンツ 昔のプロレスラーみたいに腕一本で呼ばれて、そこで自分の仕事して報酬をもらうって人たちだと思ったんですよね。

井上 そうそう。それが中立な舞台である『戦極』の特色だったはず。

ガンツ コンサートとかで「仙台、最高！」とか言ってるのと一緒なんじゃないですか？

井上 「会いたかったぜ、岡山！」なの？（笑）。

ガンツ そう、それと一緒なんじゃないですかね。

——仮にそうだったとしても、そんな答えはまったく聞きたくない（笑）。



『戦極』のエース吉田秀彦は、旗揚げ戦でジョシュ・バーネットに完敗!! ジョシュとの実力差が大きく見えてしまったが、PRIDEの高田延彦がそうだったように、奈落から這い上がるドラマが『戦極』という舞台をより磨き上げるのかもしれない。

井上 だからきっと選手もイベントも〝vsDREAM〟にしか意識が向いてないんだよね。だから「『戦極』をよろしく！」を連呼する。それって一方にDREAMっていう舞台があるのを大前提で言ってるじゃん。

ガンツ 「DREAM？ 俺たちだってみんな愛してるんだぜ!!」っていうアピール。

井上 やっぱり、あと出しジャンケンができないっていうか直後にDREAMもスタートするわけだから、不安っていうか怖いものはあるんだろうね。で、ことさらに〝戦極愛〟をアピールしちゃうっていう。

ガンツ しかし、凄いですよね。そういうふうに群れない人たちが、個としてちゃんと独立した人間たちを一本釣りで集めたはずなのが、集まったら「住めば都」っていう。

井上 それが〝ピュア・ホワイト〟なのか。でも、その〝戦極愛〟をアピールすることによってDREAMの存在感が増しちゃってるんだよね。そんなにDREAMって脅威に思われてるんだっていう。

——うーん、よっぽど精神的に追い詰められてたんでしょうね。

井上 うん。追い詰められてたんだろうね。

ガンツ そういえば、藤田の『戦極』Tシャツでの入場も不思議だったんですけど。

井上 ああ、そこもやっぱ〝戦極愛〟だ（笑）。

ガンツ 最後の『PRIDE』のジェフ・モンソン戦も、PRIDE Tシャツを着てましたけど。

——そうかぁ……。今回と『PRIDE・34』は、藤田からすると同じテンションだったんだ。それは、いろいろと考えさせられるなあ。

井上 いやあ、あの〝戦極愛〟は外側からはわからないよね。

——結局、〝PRIDEの呪い〟だと思いますよ、ホントに。

井上 〝PRIDE〟の呪いだよね。

——完全に。煽り映像も、興行のフォーマットも、世界観も、求心力の求め方も、全部PRIDEの影響下にありますよ。DREAMもそうですけど、PRIDEという幻影をいかに振り切るかが勝負ですね。

ガンツ そこを含めて今日は楽しかった！ 次はどうなるんだろう？って思わせるもんね。

——いまもどんどん楽しくなってますよね。とくにジワジワきますね、三崎のマイクは（笑）。

ガンツ 今日もボクの取材メモには、煽りVの脱力ぶりと三崎のマイクしか書いてないですから。

井上 あ～、早くマイクを持たせたい。……あ！ これってすっかり『戦極』ファンになってるということ!?

——そんなファンはいらないですよ！ 次の『戦極』も観るぞ!!（『戦極』ナレーション調）。

【08年3月5日／kamipro編集部にて収録】



“夢の始まり”は波乱含み! どうなるDREAM!!

“格闘大連立”それぞれの思惑







ついに3.15『DREAM.1』としてかたちになった“大連立”。日本格闘技人気復活の起爆剤としておおいに期待されているが、これまで“敵同士”だったものが、団結してやっていくには、いろんな調整しなくてはならない事象があることも確か。この“大連立”の要人たちは、はたしていま何を考えるのか? ここではそれぞれの主張をお届けしよう。



これが
“大連立”産みの苦しみか!?
どうなる!?
DREAMの
テレビ放映!

苦悩する “格闘技界のカルロス・ゴーン” 佐藤大輔

『やれんのか!』散開後、『戦極』の映像制作の噂が流れたり、その動向がおおいに注目されていた“煽りVアーティスト”は、旧PRIDEスタッフが制作するDREAMに参加することとなった。そして、TBSでのテレビ中継でも総合演出をすることとなったが、これまである種、水と油だったTBS格闘技担当スタッフとの“大連立”は、かなりの“産みの苦しみ”も伴なっているという。新たな極上のライブショー実現のために、苦悩する大輔氏を直撃した!

聞き手／堀江ガンツ

会見の5日前に『やれんのか！』実行委員から「TBSとやる」って言われたんです

佐藤 いや～、大変ですよ（しみじみと）。

――どうしましたか、いきなり（笑）。

佐藤 〝大連立〟って聞こえはいいですけどねぇ、もう挫けそうですよ。やっぱり、これまで水と油の関係だったのが一緒にやるのは難しいわ。

――ちょっと、そんな弱音を吐かないでくださいよ。大輔さんは一部で〝DREAMの真のエース〟と呼ばれてるんですから（笑）。

佐藤 もう、そういうのがTBSの皆さんを硬くさせるんです！

――ガハハハ！　そうでしたか、失礼しました。でも、あのDREAM発表記者会見での映像は、さすがだと思いましたよ。あの映像を観たら、会場に行きたくなりますね。

佐藤 あの映像自体は選手にも喜んでもらえたみたいなんですけどね。とくにFEG側が「いいねえ」みたいに言ってたって聞きましたし。でも、あれを作ってくれって言われたの、会見二日前ですよ。記者会見だって、僕がどういう立ち位置で壇上に上がるのかも、よくわかってなかったんですから。

――そうなんですか⁉

佐藤 「映像作って」「はい」「会見来て」「はい」「なんかしゃべって」「はい」って感じですよ！

――そんな言われるがままに（笑）。そもそも今回、大輔さんはどういった経緯でDREAMに関わることになったんですか？

佐藤 もともとをさかのぼると、去年の8月ですよね。

――8月⁉　そんなに前からなんですか？

佐藤 だって最初に谷川（貞治）さんに「やってよ」って言われたのが去年の8月ですからね。

――ああ、そのときは『HERO'S』の映像と演出をやってくれっていう話ですよね。

佐藤 そう。「『HERO'S』と『K-1MAX』全部やってもらいたい」みたいに言われたんですよ。ただ、そのときはやりたいとも思わなかったし、まだPRIDE FCWORLD WIDEが主催する新生PRIDE開催を待っていた時期ですからね。やれるわけがない。でも、谷川さんは「あれはもう日本でやらないから、こっちで一緒にやろうよ～」みたいに言ってくるわけです。

――いつもの手口ですね（笑）。

佐藤 結果的には谷川さんが言ったとおりだったんですけどね。でも、僕が『HERO'S』の中継をやるというのは、いろんな面からありえないと思ってたんですよ。僕はテレビ業界のルールっていうのを知ってますから、僕が一人で乗り込んで総合演出をやるなんてことは、ありえない。



――テレビ番組作りのシステムとして、ありえない、と。

佐藤 地上波ゴールデンタイムの番組というのは、番組宣伝も含めて、ホントに多くのスタッフと一緒にやるわけじゃないですか。となると、僕がやる番組というのは、〝チーム佐藤〟で行かないとできない。そして、そのチーム佐藤というのは、旧PRIDEのチームということですよ。だから僕が谷川さんに言ったのは「イベントも放送も旧PRIDEのチームでやるならいいですよ」って。そして「やるなら『HERO'S』っていう名前も変えないと、みんな納得しないと思いますよ」って言ったんです。

――大連立の芽はそこから始まってたんですね。

佐藤 そうか、俺から始まってるのか（笑）。まあ、単なるアイデアの始まりなんだろうけど。それが旧PRIDEスタッフが全員解雇されて、『やれんのか！』を開催することになって、ホントに実現することになったんですけど、TBSさんと一緒に中継を行なうっていうのは、やっぱり難しいこともいろいろあったんですよね。

――二元中継では、三崎vs秋山でのカメラのスイッチング一つで揉めてたんですよね（笑）。

佐藤 それでもなんとか大会が終わって、谷川さんからはあらためて「僕が環境を整備するから、やってよ」って言われたんです。

――つまり「チーム佐藤でやれるようにするから、春からのイベントで映像と演出をやってくれ」と。

佐藤 そうです。ただ、DREAMというものはまだできてませんでしたし、僕はいずれにせよ格闘技の仕事をするなら『やれんのか！』実行委員としかやるつもりはなかったんで、保留してたんですね。そして1月は『やれんのか！』のドキュメンタリー番組を作って、本当に「散開」「完結」した気分になってて。終わってから遅い正月休みを取って家族で1週間旅行に行って。帰国後、溜まりに溜まってたほかの仕事をし始めたら、会見の5日前に『やれんのか！』実行委員のほうから「FEG、TBSと一緒にやるから」みたいなことを言われたんです。

――そんなにギリギリの話だったんですか（笑）。

佐藤 そうですよ。それでほかの仕事を整理しないまま話し合いの場に行って、TBSの方ともお会いしたんですけど、その時点では「まだ（DREAMの番組チーフディレクターを）あなたがやるとは決まってません」みたいな。

――ダハハハ！　まだ決まってない。全然、状況が整理されてないじゃないですか！

佐藤 されてないんですよ。僕も『やれんのか！』のチームと一緒ならやりたい気持ちはもちろんありますけど、やれるかどうかは別じゃないですか。最初に言ったように、僕が演出をやるとしたら、僕のチームで行って、初めて地上波の番組なんてできるわけなんですけど、TBSからの条件は「あなたにやってもらってもいいけど、一人で来ること。ほかのディレクターは入れないこと」っておっしゃるんです。

――じゃあ、大輔さん以外は全部、これまで『HERO'S』をやっていたドリマックス（番組制作会社）の人たちってことですか？

佐藤 そうなんです。すなわち「スタッフになりなさい」っていうことですよね。しかも、僕に対する条件としてはもう一つ「TBSに常駐すること」って。

――常駐？

佐藤 常にDREAMの番組スタッフとして、TBSにいてくださいってことですよ。まあ、それは論理としては正しいんです。ゴールデンタイムで年間6回やる中継の演出責任者は、常に会社にいろよっていうのは。ただ、僕自身は小さいながら会社の代表だし、今年はほかの仕事をガンガンやろうとしていたから、ハッ

立木さんとやらない格闘技番組って なんなんだろうって思いますからね

キリ言ってイベントの一週間前からしか、身体が空かないんです。

――それは、ずいぶんな環境ですね。

佐藤　だから、いろんな面でこれから詰めなきゃいけないんですけど、一応、やる方向ということで、スタッフへの面通しも含めて、『格闘王』の会議に出てみたんですよ。

――ほう！　あの『格闘王』の会議ですか。

佐藤　そこでまず驚いたのは、スタッフの数の多さですね。フジテレビの制作チームの3倍ですから。

――かつてのPRIDEチームの3倍もいるんですか！

佐藤　そうです。フジテレビの3倍。『やれんのか！』の20倍。

――ガハハハ！　『やれんのか！』はどこまで少ないんだって話ですけど（笑）。

佐藤　まあ、『格闘王』の場合、週イチの番組を持ってたらそうなるっていうのもあるんだけど。人の多さが、ソフトの性質をかたち作っていると思いましたね。

――どういうことですか？

佐藤　PRIDEの場合、僕も含めて2〜3人のディレクターでファジーに仕事を振り分けて作っていたんですよ。でも、TBSは人が多いから、一人の選手に一人担当ディレクターをつけて、その人が取材をして、VTRも作るんです。

――〝番記者〟みたいな感じですか？

佐藤　そうそう。そして各試合、別の人間が作った映像を集約していくうちにどういうことが起こるかというと、全部同じようなものになっていくんです。

――へ？　全部別の人が作ったのに、同じになるんですか⁉

佐藤　だって、そうなると思いませんか？　一人の人間が全部作ると、全体でバランスをとって、ここで笑わせて、ここで泣かせてとか、パッケージ感が出るように作りますよね。でも、それぞれ別の人がやると、みんなが特ダネを狙いにいく。番組が『ゴレンジャー』だとしたら、赤、青、黄色、緑、ピンクが揃わなきゃいけないのに、全員アカレンジャーになろうとするんですよ。

――なるほど！　コース料理のはずが、メインディッシュばっかり出てきちゃうみたいな（笑）。

佐藤　そうそう。120分の中継の中に、思い入れたっぷりに作る試合もあれば、サラリと流す試合があってもいいはずなんですよ。スポーツなんだから、フィーチャーすべきポイントがないと思ったら、最低限の紹介でいいんです。でも、一人一選手担当制だと、そういう試合でも頑張ってアカレンジャーを作ろうとするんです。

――無理矢理、背負ってる不幸を探したりするわけですね（笑）。

佐藤　ひどいこと言いますねぇ。僕はもうスタッフの一員だから、口が裂けてもそんなこと言いませんよ（笑）。

――言ってます（笑）。

佐藤　もちろん所英男のコンビニ弁当とか、安田忠夫の借金とか、小比類巻の根性焼きとかヒット作はあるわけです。ただ、樋口潮さんが抜けてから、そういうのもなくなりましたねぇ……。

――TBSの格闘技番組を立ち上げた人ですね。

佐藤　だからディレクターは、ほかのゴールデンタイムでバンバン活躍する精鋭3人ぐらいでいいと思うんですけどね。あと、もう一つ感じたのは、PRIDEとかフジテレビ的なことはやっちゃいけない、という考えでやってきたんだろうなってことですね。PRIDEのアンチテーゼで番組作ってるなって。まあ、後追いって絶対に先のものを超えられないから、それは正しいと思うけど、「PRIDE的なものはダメだって言ってたのに、なんで佐藤を入れるんだ？」と思いますよ。

――そこにPRIDE中継の権化が来ちゃうわけですからね（笑）。

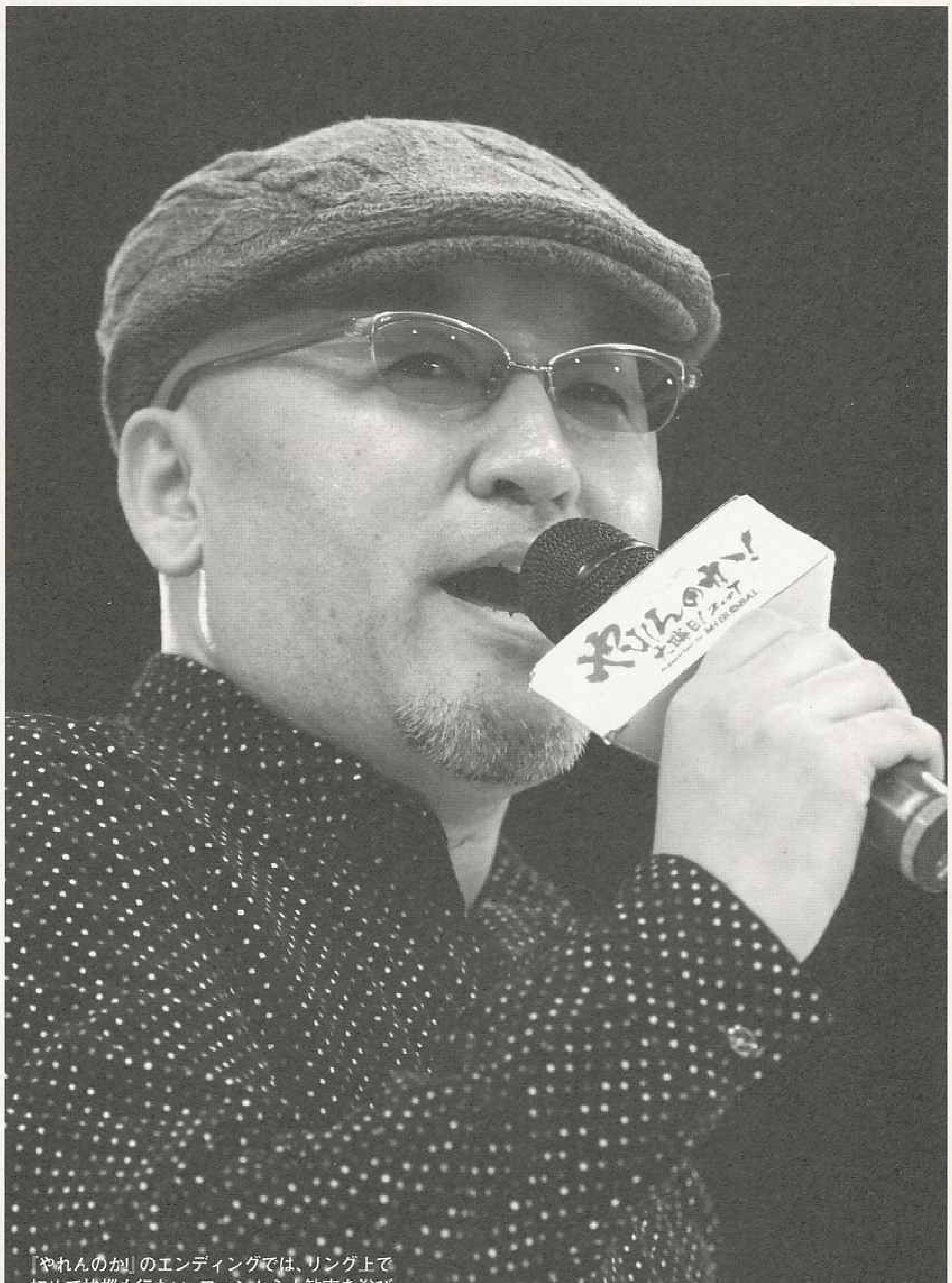
佐藤　だから、僕は谷川さんからカルロス・ゴーン的な振る舞いを期待されて引っぱられたんでしょうけど、そういう空気の中に一人で入っていかなきゃいけないっていうね。やりにくそうでしょ？（笑）。

――バリバリ、アウェー感があるわけですね（笑）。

佐藤　で、そこにきて追い打ちをかけるように、フジテレビから「立木文彦をDREAMで使うことは許さん」という通達が谷川さんと僕に来まして……。

――えぇ〜！　そんな圧力が……。

佐藤　来たんですよ。その理由は「立


『やれんのか！』のエンディングでは、リング上で初めて挨拶も行ない、ファンから大歓声を浴びた立木文彦さん。佐藤大輔との黄金コンビは、ファンの絶大なる支持もあり、DREAMにも最も欠かせない要素であると思うが……。

木文彦はフジテレビ格闘技番組の顔、すなわちK－1ワールドGPの顔だから」だってさ。そんな扱いしてきたかっつーの！

――ダハハハハ！

佐藤　確かにテレビ業界の慣例でいうと、似たような番組がかぶるのは許さないみたいなことは、なくはないんですよ。ただ、経緯が経緯じゃないですか。フジテレビが切ったソフトを頑張って続けようとしてきたのは俺たちじゃん。そして立木さんのチームも、「佐藤大輔とやるならやる」と言ってくれて、今回も当然やろうとしてくれてたんですよ。でも「それはダメだ」って。

――スカパー！はいいけど、DREAMの地上波はダメだ、と。

佐藤　どの口が言うんだって思うけどね。それで、やってることは『にてんのか！』でしょ？

――『SRS』でやってましたね（笑）。

佐藤　あの『やれんのか！』っていうのは、いろんな制約の中で、みんなでひねり出した思い入れのあるタイトルですよ。それを血しぶきのイメージとともに使ってるんだから、何を考えてるんだって。わけがわからない。どっちがパクリだってーの。

――じゃあ、現時点では立木さんは……。

佐藤　DREAMのナレーションはできないんですよ。

――うわ～、それは残念すぎますね。

佐藤　ただ、地上波だけじゃなくて、PPVをやる話が進んでるから、そっちだけでもお願いしたいと思ってるんですけどね。PPVと会場用VTRだけなんて、立木さんに申し訳ないんだけど。

――ファンとしては、PPVだけでも、ぜひお願いしたいですけどね。

佐藤　僕もそうですよ。自分のスタッフもいない。立木さんもいないという、手足がもがれた状態でやらなきゃいけないんだから。立木さんとやらない格闘技ってなんなんだろうか、みたいにも思いますしね。だって、フジテレビがPRIDEを切ったときだって、俺が決断するのを待っててくれたんですよ。

――大輔さんが復活するまで、PRIDEのナレーションはやりませんでしたもんね。

佐藤　そう。やれない状況じゃないのに、お願いされてもやらなかったんですよ。だから立木さんとやらない格闘技ってなんなんだろうなって思うし、やれちゃいけない気もする。立木さんもすべて含めてチームだって、そこをわかってほしいんですよ。

――中途半端なものにしたくないからこそ、チームにこだわりたい、と。

佐藤　うん。僕に「総合演出」って名前がつくなら、なおさらですよね。格闘技は〝お仕事〟じゃできないからさ。お金のためだったら、ほかの仕事をしますからね。

――格闘技は妥協して「この程度でいいかな」ってやるようなもんじゃない、と。

佐藤　そういうもんじゃないですよね。そうじゃなくて、みんなが妥協しなかったからPRIDEは地上波でもあれだけ盛り上がったわけで。アナウンサーから何から、みんな妙な熱があってさ。そういう番組ってなかなかないと思うんですよ。だからね、僕もDREAMをやるからには、出向して奮闘する島耕作ばりに「うるせえのが来たぞ」と思われながらも、妥協せずにやんなきゃいけないんだけど、状況はまったく良くない。



“ミスターやれんのか!”として、旧『HERO'S』勢に対抗意識を燃やす青木真也。PRIDEのフジテレビ打ち切り以降にブレイクしたこの男が、DREAMでついに“大化け”なるか?

――素朴な疑問なんですけど、総合演出っていうのは、映画監督みたいな立場なんじゃないんですか？

佐藤　僕はそう思ってます。でも、映画監督って黒澤組とか市川組を動かせるから映画監督じゃないですか。それからカルロス・ゴーンがカルロス・ゴーンたりえたのは人事権があるからでしょ。でも、僕には佐藤組も人事権もないんですよ。でも、TBSのプロデューサーさんは、環境を作ってくれるとも言ってくれてるので、譲れないところや難しい調整はたくさんあるでしょうけど、さてどうしようか、と。

――いやぁ、大変そうですねぇ（笑）。

佐藤　笑えないんですよ！（笑）。

――じゃあ、3・15『DREAM・1』の映像なんかは、まったくこれからですか？

佐藤　これからですよ。第一、カードも全然決まってないし（笑）。

――確かに（笑）。

佐藤　まあ、作るとしたらラスト1週間ですね。それまでに、どういう打ち出しをするのか、いろいろ提案しなきゃいけないと思ってますけど。まず、青木vsカルバンとか、個々のカードの魅力を説明する前に、やっぱりこのイベントの〝ただごとじゃなさ〟というか、ちょっと先を行ってる感じというか、未来のスポーツみたいな空気を作ることがまず大事ですよね。

――イメージ戦略は確かに大事ですね。というか、最重要課題でしょう。

佐藤　最重要です。ライト級GPで火をつけるっていうのは、まさにその〝未来のスポーツ〟が始まる第一弾というだけですよね。だって、GPにしても魔裟斗選手みたいな〝軸〟がいるわけじゃないし。

――そうですね。これまで『HERO'S』はK－1 MAXが「魔裟斗物語」だったように、「KID物語」「元気物語」、もしくは「所物語」みたいなものでしたけど、今回はそういう主役がいるわけじゃなくて、この新しい世界自体が主役ですよね。

佐藤　そこをどうパッケージングするかっていうことに頭を使わなきゃいけないんですよ。TBSというステーションイメージ自体が、フジテレビに比べて地味なわけだから、『HERO'S』と同じナレーターで、同じ構成じゃ絶対にダメなんです。それじゃ、せっかくのDREAMライト級GPが、「KIDのいない『HERO'S』トーナメント」みたいな見え方になっちゃう。そうさせないために、映像や編集が占める役割って凄く大きいんですよ。

――〝一歩先に行ってる感〟を感じさせないと、視聴者もついてこないでしょうね。

佐藤　きませんね。それは個々の選手の紹介VTRでも同じ。『格闘王』の会議に出たとき、青木真也の切り取り方を話してたんですけど、そこでまず出たのが「早稲田大学卒業」「警察を辞めた」「お父さんとの関係」なんですけど、今回はそこから入ったらダメだろうって。

――それは絶対にダメですねぇ（笑）。

佐藤　なんで青木vsカルバンがメインなのかってことをまず伝えない

と。そこには、早稲田も警察もお父さんも関係ない。大切なのは、とにかく新しい世界観を提供することですよね。未来格闘技のトーナメントに、団体も国籍も関係なくトップファイターが16人集まって、架空の場所でナンバーワンを決める、みたいなさ。まあ、ちょっと古い感じで言うと『AKIRA』みたいな世界観というか。

――新しい星を作るために、選ばれし16人が集められたって感じですよね。

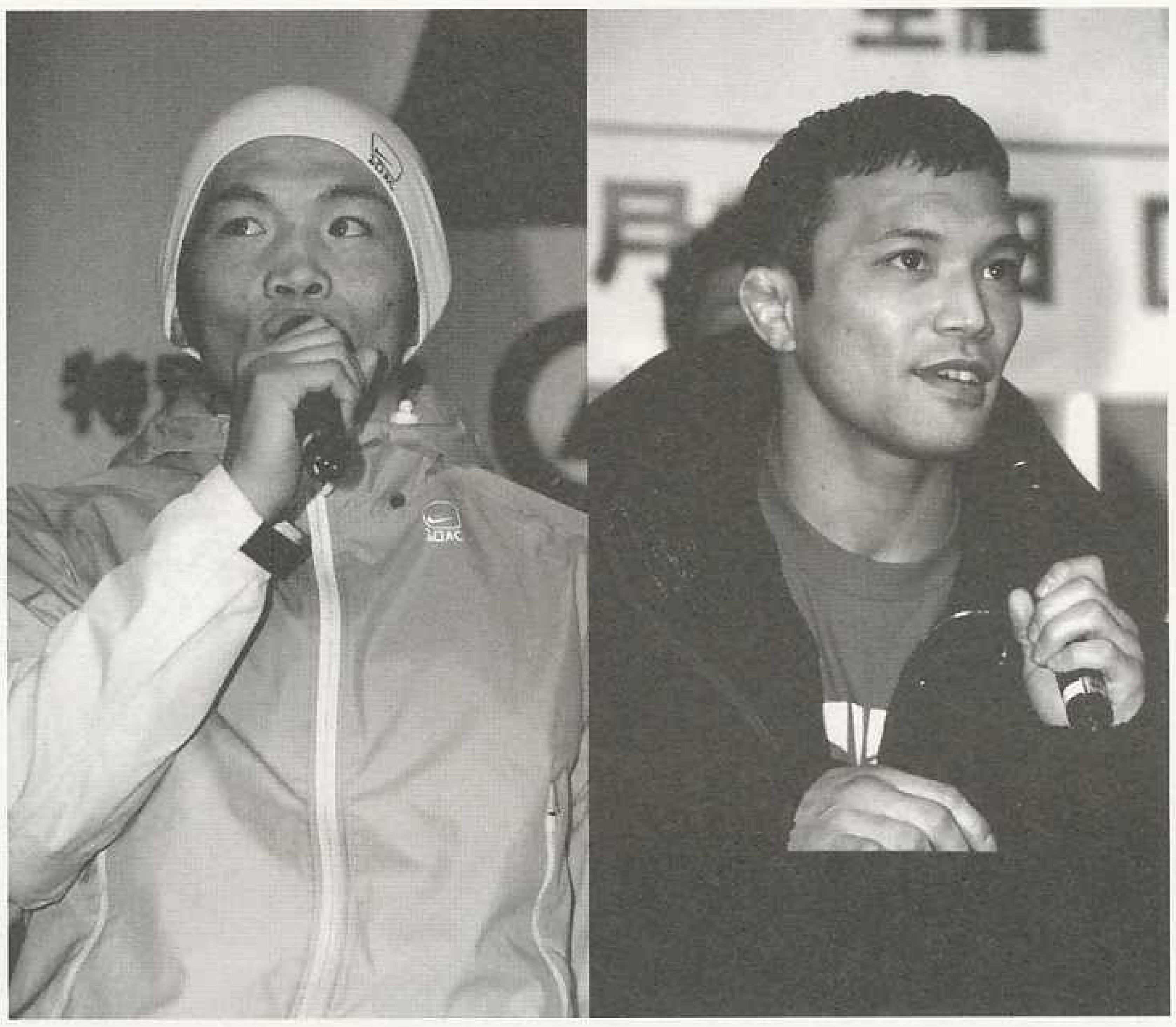
佐藤　いいねえ！　新しい星を作るために選ばれた16人。そして、青木vsカルバンは、その第一話からのクライマックスですよ。この勝敗によって、どんな世界になるかが、大きく変わってくる。新しい世界の方向性を決定づける一戦なんですよね。

――でも、ほっとくと『格闘王』で、いつの間にか青木vsカルバンの〝家族愛対決〟にされる危険性はありますよね（笑）。

佐藤　それは避けないと（笑）。だからカルバンのイメージも、〝ちょっとストリートなヒクソン・グレイシー〟にしなきゃダメですね。

――山ごもりのイメージとは真逆のヒクソン（笑）。

佐藤　そして青木真也は、気持ち悪い技を繰り出す現代っ子っていうね。そういう見せ方をしたほうがいい。でもそれは細かいロケと編集の積み重ねなんだよなあ。あと、もう一つの軸として重要なのは、宇野薫選手だと思うんですよ。宇野薫がどんな顔をして、どんなふうにPRIDE側の選手と相対するのか。



山本KIDや宇野薫を佐藤大輔がどう料理するのか？ それもDREAMの大きな見どころ。『HERO'S』で見慣れた二人の新たな魅力がDREAMで見られるか？

――〝本格派の日本人〟で売ってきた宇野選手にとったら、〝本格派の日本人〟ばっかりの『やれんのか！』勢が来るのは、あまり快く思ってない可能性もあるでしょうしね。

佐藤　そうかもしれない。あと実力的にも、じつはそこが一番おもしろい。宇野と川尻がいまやったら、どっちが勝つんだろうとかさ。宇野と石田、宇野と青木……全部観たいよね！

――観たい！　宇野vs『やれんのか！』勢は、ライト級GPでも一番の黄金カードですよ。

佐藤　女の子にも通じる世界観の主人公として、宇野薫が新しい星に行くっていうのはいいんじゃない？　カッコよくやりたいですよね、宇野選手は。NIKEのCMみたいな、宇野商店的なね。まあ、いままでの感じだと無理だなあ（笑）。

――また、そういうことを言う（笑）。

佐藤　あと川尻選手は、ここで一発〝アカレンジャー〟に格上げしたほうがいいと思いませんか？　『やれんのか！』やPRIDE後期において、やや等身大の無骨な男になってたじゃん。でも、彼が一番輝いてたのはギラギラした目で五味選手と相対したときでしょ？

――そうですね。危険なクラッシャーだった頃ですよね。

佐藤　ちょっと不遜な感じで、身体もカッコよくて。ファイトスタイルも日本人離れしていて、みたいな。そういうイメージを取り戻したほうがいいと思うんだよな。いまは、へタしたら〝茨城の片割れ〟みたいな感じにもなってきちゃってるじゃないですか。

地上波で伝わりにくいことを切るんじゃなくデフォルメしてあげる作業をしないと

――〝片割れ〟は絶対にダメですよ。

佐藤　絶対にダメ。川尻選手には素朴な田舎臭って必要なくて、それは石田選手が担当すればいいことだから。純朴で東京が嫌いなかわいい男の子。対乳酸能力世界一、キツいことに耐えられる能力世界一、みたいな。石田選手だって、お母さんがいいキャラしてるから、この16人に選ばれたわけじゃないですからね。

――でも、ほっとくと、また茨城のお母さんが『格闘王』に出てきちゃうでしょうね（笑）。

佐藤　本人は超イヤがってますけどね（笑）。ああいう家族だとか、そういうサイドストーリーは絶対に必要で、どこかのタイミングで背負えばいいと思うんですよ。

――隠されたエピソードとして、ここぞというときに出せばいいことですよね。

佐藤　そうそう。そのほうが効くんだよ。だから所英男選手なんかも、フリーターのエピソードを逆手に取って脱却させて、まったく別の視点でこの16人枠に入ってきてほしいんですよ。そう思いませんか？

――階級を落とす案もあるみたいですけど、新しいイメージで、このGPに出てくるのは、凄くいいと思いますよ。

佐藤　体重差とか厳しいかもしれないけど、所英男vsヨアキム・ハンセンとか、実現したらいいですよね。あと、もう一つ考えなきゃいけないのは、ミルコの扱いですよ。

――これはちょっと難しいですよね。

佐藤　ミルコにとったらリハビリみたいな意味合いなのかもしれないけど、一般視聴者はUFCなんて知らないから、リハビリって意味すらわからない。だから、シンプルに「ヒョードルを追ってやってきた」でいいと思うんですよ。

――それはそれで事実ですからね。そしてライト級が群像劇なのに対し、ヘビー級はミルコ一人の物語でいいでしょう。

佐藤　そのほうがいいですよね。ヒョードルまでたどり着けるのかどうか。そのミルコの前にK―1系の選手が立ちはだかるっていいと思うんですけどね。オリックスの一塁手調に「どのツラ下げて戻って来とんじゃ、ボケ！」みたいな感じでジェロム・レ・バンナが出てきたり。

――それはテレビ映えしますねぇ！

佐藤　メジャー感ありますよね。セルゲイ・ハリトーノフとかより、そっちのほうがいいと思うんだけどな。ミルコvsマイティ・モー、ミルコvsレイ・セフォー、ミルコvsチェ・ホンマンとかね。

――いいですねぇ。MMAルールでも「ミルコが楽勝」っていう感じが

まったくしないのがいいですね。

佐藤　あとはミルコvsセーム・シュルトだったり。これなんか、ホントにどうなるかわからんでしょう。

——ミルコvsK-1ファイターは夢のカード目白押しですね。あと4月から始まるミドル級GPはどうですか？

佐藤　桜庭さんですよね。これは本人は嫌がるでしょうけど、ストーリーとしては、秋山選手を絡めないわけにいかないでしょう。

——絶対に絡めちゃいけないからこそ、絶対に絡ませなきゃいけない組み合わせですよね。

佐藤　うん。実際にやる、やらないは別にしてね。

——禁断の度合いは桜庭vs田村を超えてますからね。

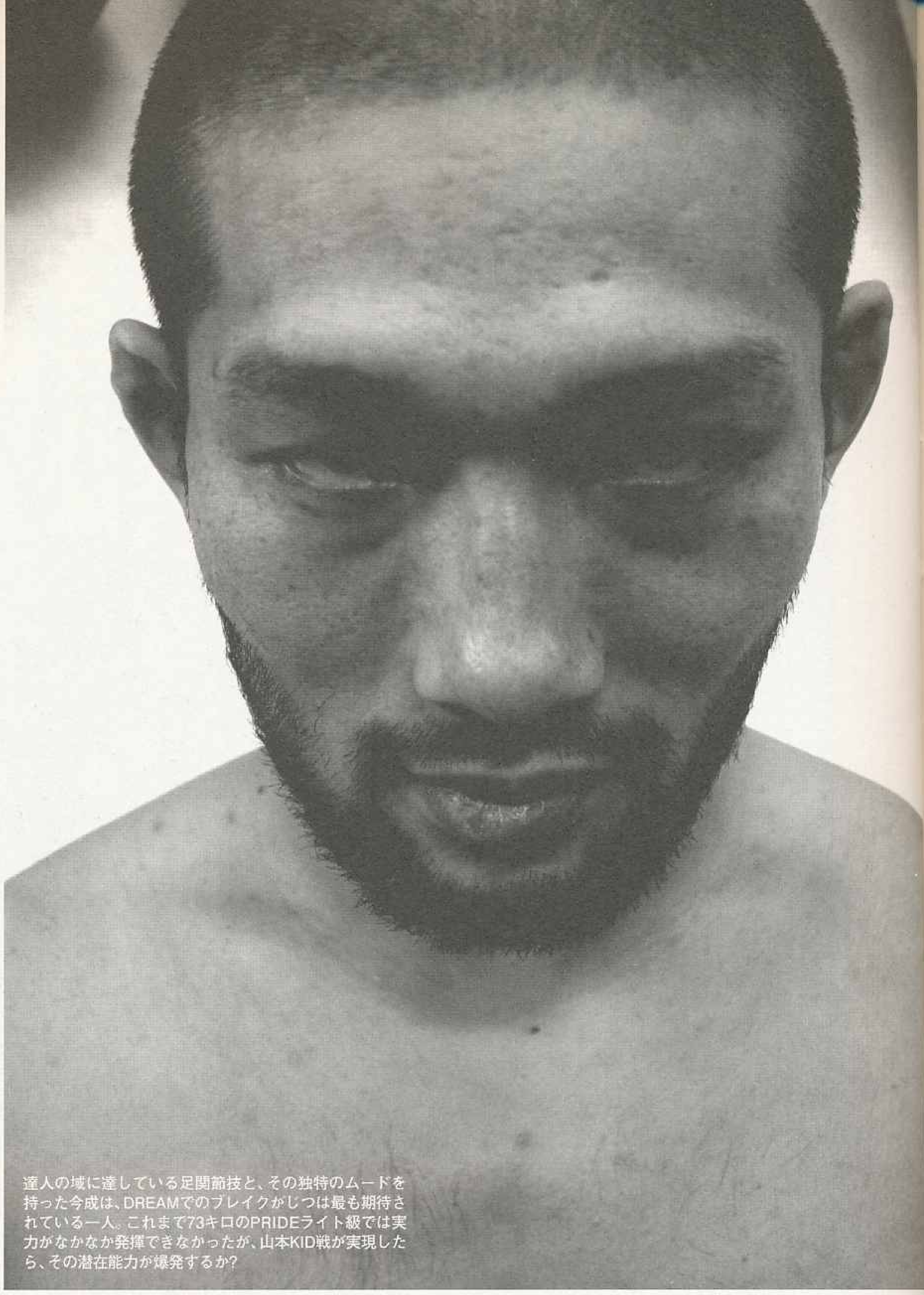
佐藤　完全に超えてる。〝新しい星〟で桜庭vs田村って言っても、わからないでしょうからね。

——ただ、桜庭vs秋山のストーリーに田村が絡むと、これはまた深みが増すと思うんですよ。まずは田村vs秋山を実現させることで、ファンはその先に桜庭和志を見るという。

佐藤　なるほどね。じゃあ、1回戦から田村vs秋山をやってほしいな。ただ、ミドル級は〝レジェンド祭り〟にならないようにしないとね。あと残るはKIDか。これはね、KID vs今成正和をどうゴールデンカードにするかにかかってますよ。「そんなのゴールデンカードにならねえよ」って、普通は考えるかもしれないけど。

——いや、今成は化けますよ、絶対。

佐藤　同感。今成は絶対に化ける！　あとはイメージ作りだけなんだよね。あのちょっとマニアックな感じ、あるいはちょっとキモいなと思っちゃう部分を、どんな音楽をつけて、どんなふうに撮ってっていうだけで全然違うと思うんですよ。



達人の域に達している足関節技と、その独特のムードを持った今成は、DREAMでのブレイクがじつは最も期待されている一人。これまで73キロのPRIDEライト級では実力がなかなか発揮できなかったが、山本KID戦が実現したら、その潜在能力が爆発するか？

——今成はテレビ映えだってすると思いますからね。あんな特異なキャラクターはいないんだから。

佐藤　だから、普通に紹介したらダメですよね。「DEEPのチャンピオン、関節技が得意」とかさ。

——それはまったくダメですね。

佐藤　やっぱり耳なし芳一みたいなビジュアルを作ってさ、インタビューなんかでもまったくしゃべらず、ニヤッと笑って一言だけ「オ◯コ！」って言ったりさ（笑）。そういう男でしょ？

——まさにそういう感じです（笑）。イメージとしては、座頭市みたいな感じですよね？

佐藤　そう、座頭市だよね。あんな達人がいるのかっていうような。いやぁ、こういうこと考えるの楽しいなぁ。やっぱりさ、地上波で伝わりにくいことをバッサバッサと切っていくんじゃなくて、それを一般視聴者にもわかるように、デフォルメしてあげる作業をすべきですよね。

——そうですよね。みんなホントはいいキャラクター持ってるわけですからね。

佐藤　いくらでもできますよ。朴光哲とかだって、凄くおもしろい！

——「ぼくです」でおなじみの、朴光哲も地上波OKですか！（笑）。

佐藤　全然OKですよ。やっぱり彼の場合、KIDとの関係を切り離せないじゃないですか。だったらそれを逆手に取って、ちょっとギャング感を出すっていうかさ、「クレイジービーってマジカッコいいんだけど。超ヤバくね？」みたいに思わせるという。ゆるくて、ダルくて、怖くて、ワルい感じ。

——それはヤバいですね（笑）。KIDのギャングのリーダーさ加減がまたいいんですよね。悪そうなヤツらの誰もが頭が上がらないのが、一番ちっちゃいKIDっていうところが、凄くいい！

佐藤　そうそう、ちょっと古いけど『池袋ウエストゲートパーク』の窪塚洋介みたいなさ。そういう香りを出してあげるとクレイジービーの選手は全部引き立つね。そこなんだよな。いやあ、こういうこと考えるのはホントに楽しいわ。やっとやる気になってきましたよ（笑）。

——やる気になってくれましたか。それは良かった（笑）。

佐藤　最初から、こういう話にすればよかったな。まあ、これだけおもしろくなる可能性を秘めたイベントに携わるんだから、やることはやらないとね。

——では、3・15『DREAM・1』の煽りV、期待してます！

【08年2月23日／都内・某所にて収録】



さとう・だいすけ■1974年、東京都出身。97年にフジテレビ入社。スポーツ局でPRIDEシリーズ、『SRS』、『ジャンクスポーツ』、『F1GP』などの番組を手がける。一昨年10月31日付でフジテレビを退社し、独立。現在は（株）佐藤映像代表。

GCM COMMUNICATION,INC

DREAM vs『戦極』？ まあ、みんなで業界を盛り上げて成功させればいいんじゃないの？

GCM代表 久保豊喜



くぼ・とよき■拓殖大学柔道部出身にして、現在はGCMコミュニケーション社長。オクタゴンで闘うCAGE FORCEをはじめ、DEMOLITION、組み技イベントCONTENDERS、女子総合イベントCROSS SECTIONなど、さまざまなイベントを手がける。GCMオフィシャルブック『ヴィクトリアス』では、コラム「力の話」を連載中。

FEGと旧PRIDEスタッフとの連立、そして『戦極』の旗揚げにより、二大イベントが台頭する日本MMAシーン。今回インタビューしたGCMの久保代表は、UFC、『HERO'S』ほか、あらゆるイベントに選手を派遣しているだけに、この状況をどう見ているのかは非常に気になるところ。ということで、ズバリ、今後の展望を直撃した!!

聞き手／阿修羅チョロ　写真／梅木麗子、乾晋也

久保　今日はなんの話？　おたくの読者に届くようなネタを私は持っていないよ（ニヤリ）。

――いやいや、『戦極』、DREAM含めて、マット界の生き残りをかけた新たな闘いを前に、『kamipro』もなんとか生き残ろうと思いまして。それで、おもしろいことを言ってくれそうな久保社長にお話をうかがおうと駆けつけました！

久保　フフフフフ。私ら、デブっちょトーナメントとかできないけど、ま、話せることがあればね（笑）。

――DEEPのメガトン・トーナメントのことですね。あの企画は佐伯（繁・DEEP代表）さんにしかできないでしょうし、やろうとも思わないでしょうけど（笑）。ま、その話はいいとして、今回はまずDREAMについてですが、久保社長としてはこの新しい連立の流れをどう受け止めてますか？

久保　歓迎すべきことじゃないですか？　だって、一昨年から去年にかけてPRIDE周辺でいろいろあって、やっぱり業界的にも悪い影響が出たみたいな雰囲気だったじゃない。

――ファンも観たい大会が観られないという状況が続きましたし、実際に契約している選手でも試合ができない状態でしたからね。

久保　ただね、私らの道場に入会してくる子は普通にいて、格闘技をやりたいという人が減ってるわけでもないんですよね。ましてや、ウチ（GCM）の大会に来ているお客さんの数は、おかげさまで上がっているしね。

――へえ～、それは素晴らしい。でも、テレビで格闘技を観る機会が減ったということも含めて……。

久保　（さえぎって）それはテレビの世界でしょう。だから、修斗さんやパンクラスさんもあまり影響はないと思うよ。影響があるとしたら、もしかしたら髙田道場だったり、吉田道場、あるいは五味（隆典）くんのラスカルジムだったりね。ウチはもとから関係ないし実感がないから。

――それこそPRIDE中期ぐらいから、GCM系の選手は、ほとんどPRIDEのほうには出てませんでしたけども。

久保　あのさ、PRIDEがブームとして捉えられてる傾向があるけど、はたしてそれがブームだったのかということにまず「？」がつきますよ。そして、PRIDEがなくなったいま、本当に格闘技ブームは去ったのかということですよね。テレビが生まれた時代から格闘技、もしくは格闘技っぽいものがブームじゃなかった時期ってないでしょう？

――力道山時代に始まり、なんだかんだ言って、ずっとプロレス、格闘技のなんとかブームってありますからね。無理やりな部分もありますけど（笑）。

久保　常に若い子たちには「闘い」というのは支持されてきたんじゃないの。男の子として生まれて「強いといいな」と思う。女の子も強い男がいいと思うことも多いわけでしょ？　ただね、日本の狭い国土の中でこんなに団体が細かく分かれていがみ合っているうちに、UFCを筆頭にアメリカはとんでもないことになっちゃってるからね。皆さんはご存知ないかもしれないけど、中国や韓国がいま凄いことになってるでしょ？

――そうみたいですね。UFCもK―1もマーケットとしては凄く力を入れてる国ではありますよね。

久保　私らがまったく知りえないところ

で凄い大会が開催されていたりするわけだから。だから、せめて日本国内でドンドンまとまっていかないと勝てなくなっちゃうよ。

——それは谷川さんも年末の大連立を発表する際に言われてましたね。昔のプロレスやキックが分裂してきた歴史を繰り返したくない、と。しかし、DREAMに関しては谷川さんは表からは一歩引いた感じで、実際の運営はイベントプロデューサーの笹原さん含め旧PRIDEスタッフが行なうことになってますが、久保社長としては今後そのスタッフと協力してやっていくことになるわけですよね？

久保　そうなんじゃない？（ニヤリ）。

——え～、そのへんで不安を感じたりはしませんか？

久保　フフフフフ。たとえばね、「清濁併わせ飲む」という言葉があるでしょう。私らとしては「清」と「濁」で「濁」の割合が多ければ飲み込めないし「清」の割合が多ければ飲み込めばいいだけの話なんですよ。ただ、さっき言ったようにこれは歓迎すべきことなんだから、多少の問題があっても私らは飲み込まなきゃいけないし、旧PRIDEスタッフもまともなかたちで運営しようと思うんだったら過去と同じ轍を踏まないように付き合っていけばいいだけのこと。現段階ではお互いに大人として飲み込んでいるんだから。

——実際、宇野薫選手とかライト級グランプリへの参戦選手がすでに発表されてますしね。

久保　所属でいうのかホームリングでいうのか、何をもっての関係性なのかはわからないけど、私らは宇野にしてもCAGE FORCEに上がってくれた朴（光哲）くんや（アルトゥール・）ウマハノフにしても「頑張れよ！」という気持ちでいますよ。

——その話でいうと、佐伯さんが2・22『DEEP』について、サムライTVで「今度の大会に井上（誠午）選手が出ますが、慧舟會系の選手が出るのは、じつは約3年ぶりなんです」って発言してたんですけど、やっぱりちょっと距離があったんですよね。



DREAM旗揚げ会見には、GCMから宇野薫が出席し、3.15『DREAM.1』で行なわれるライト級トーナメントの参戦選手として名前が連ねられた。PRIDE健在時でのGCMとの関係性を考えると、非常に新しい展開である。

久保　そんなこともないけどね（笑）。まあでも、ウチの選手を出すんだったら、もうちょっと実力に見合った選手と組めばいいのにねえ。Barbaro44って選手はけっこう強いんでしょ？

——そうですね。

久保　まあ、べつにそこに意図を感じているわけじゃないけど。ただ、わかっていただきたいのは、どこの大会だろうとウチは道場生に「あのイベントには出ちゃいけない」と言ったことはないからね。

旧PRIDEスタッフとの関係？ 現段階ではお互い大人として飲み込んでいますから

たとえばPRIDEチャレンジにしてもウチの選手はいっぱい出ていたよね。

——そうでしたね。そういったところにはこだわりはない、と。

久保　確かに、ウチとPRIDEはこのあいだまで仲が悪かったけれども、選手には「PRIDEには出るな」とは言っていないですよ。DEEPにしても同じ。ただ、DEEPといっても5年前とは別ものじゃない。5年前のDEEPってPRIDEの次のポジションを狙っていたでしょう？

——まあ、それぐらいの勢いで始めたんでしょうし、初めはヒクソン・グレイシーとかも呼んだりしてましたからね。

久保　勢いじゃないよ。はっきりそう言っていたし。ただ、だんだん修斗、パンクラス、あるいはウチと同じレベルのプロモーションになったから、一口にDEEPといっても違うからねえ。ま、1、2年前でもウチは選手が出たいと言ったら「行ってらっしゃい」って出してましたよ。私は凄く感情的な人間に思われているかもしれないけどまったくそんなことないし、逆にウチが頼んでも出してくれないからって「あの野郎！」って恨んだこともないし。

——よく考えたら門馬（秀貴）さんをUWAI STATIONでのプロレスの試合に快く送り出してるわけですからね（笑）。

久保　話をいただけば、私は出すだけ。まあ、例外はあるかもしれないけど。

——かつて所属していた選手で、いろいろ問題がある人も……。

久保　べつに高瀬（大樹）とか使ってもいいよ（ニヤリ）。

——そうですか（笑）。高瀬さん、今度3月4日に賞金マッチをやりますけどもね。高瀬さんが賞金首になって、高瀬さんに勝てば100万円をもらえるという。

久保　へえ～、賞金マッチねえ。まあ、いずれにせよ性格的にウチは選手を育てるところから発生している集団だから、どちらかというと外に出すことについてあまり障害はない。

——反対に選手を上げる側からすると、DREAMというイベントができることによって、PRIDE、『HERO'S』に出ていた選手の全員が全員DREAMに上がれるわけじゃないじゃないですか。いままで以上に選手があぶれちゃう可能性も高いと思うんですけど、そのあたりはどうでしょう？

久保　だけど選手は一度上がったら、また夢が見たいと思うからねえ。

——対戦相手であったりファイトマネーであったりも含めて、ですよね。

久保　それに、PRIDEとDEEPの蜜月の時代がありました。だからってPRIDEの選手でDEEPに誰が上がった？　もともとDEEPで闘っていた長南亮、いいところで桜井“マッハ”速人、外人選手では（ムリーロ・）ブスタマンチだよね。でも、ヴァンダレイ（・シウバ）は上がらないでしょ。だから、あぶれた選手を使えるだけの状態になっても、あまり魅力的な大会にはならないよね。やはり自分のところでオリジナルの選手を見つけて、お金をかけて選手を育ててあげるというのが健康的じゃない。下がった選手に栄養剤をあげて、「花が咲いたので、またどうぞ」ってなったら枯れたのばかりになっちゃうよ。

——一方、『戦極』は吉田道場、パンクラス、GRABAKAがほぼ中心になって進めている感じですけど、『戦極』にもタ

イミングが合えば協力していこうという気持ちはあるんですか？

久保　気持ちはぜんぜんありますけど、向こうから正式なアプローチがあるわけじゃないからねえ。

——立ち上げからいままで『戦極』サイドから具体的なアプローチはない、と？

久保　はい。だから、協力するもしないもないでしょう。「協力させてください」って、こちらから電話するのもへんな話だし（苦笑）。それに、この日にちのない中で私らが選手を出すのは不可能だし、内部的にもいろいろなことを決めている時期でしょうからね。まあ、やるからにはうまくいってもらいたいなと思います。

——イメージ的には慧舟會は中立的な感じがするんですけど、たとえば『戦極』を手伝っているパンクラスの選手は明らかにDREAMには上がれないんじゃないかというイメージってやっぱりありますよね。

久保　でも、私は『戦極』さんとDREAMはダナ・ホワイトが言っていたようなスーパーボウルみたいな感じで、将来的にぶつかるのも素晴らしいと思うんだけどね。『戦極』さんが育ってくれれば、FEGという会社の歴史を尊重して、FEGの主催のもと対抗戦をやるとかね。まあでも、いまは選手たちが一番混乱しているんじゃないの？

——ああ、関係者もそうですけど、試合をする選手はなおのことそうでしょうね。

久保　ただ、いまあなたが言ったように「DREAMに出たら『戦極』には出られないんですよね？」というような、よくわからない政治的な浅い知識を持って、勝手にそう思い込んじゃう選手もいますよ。

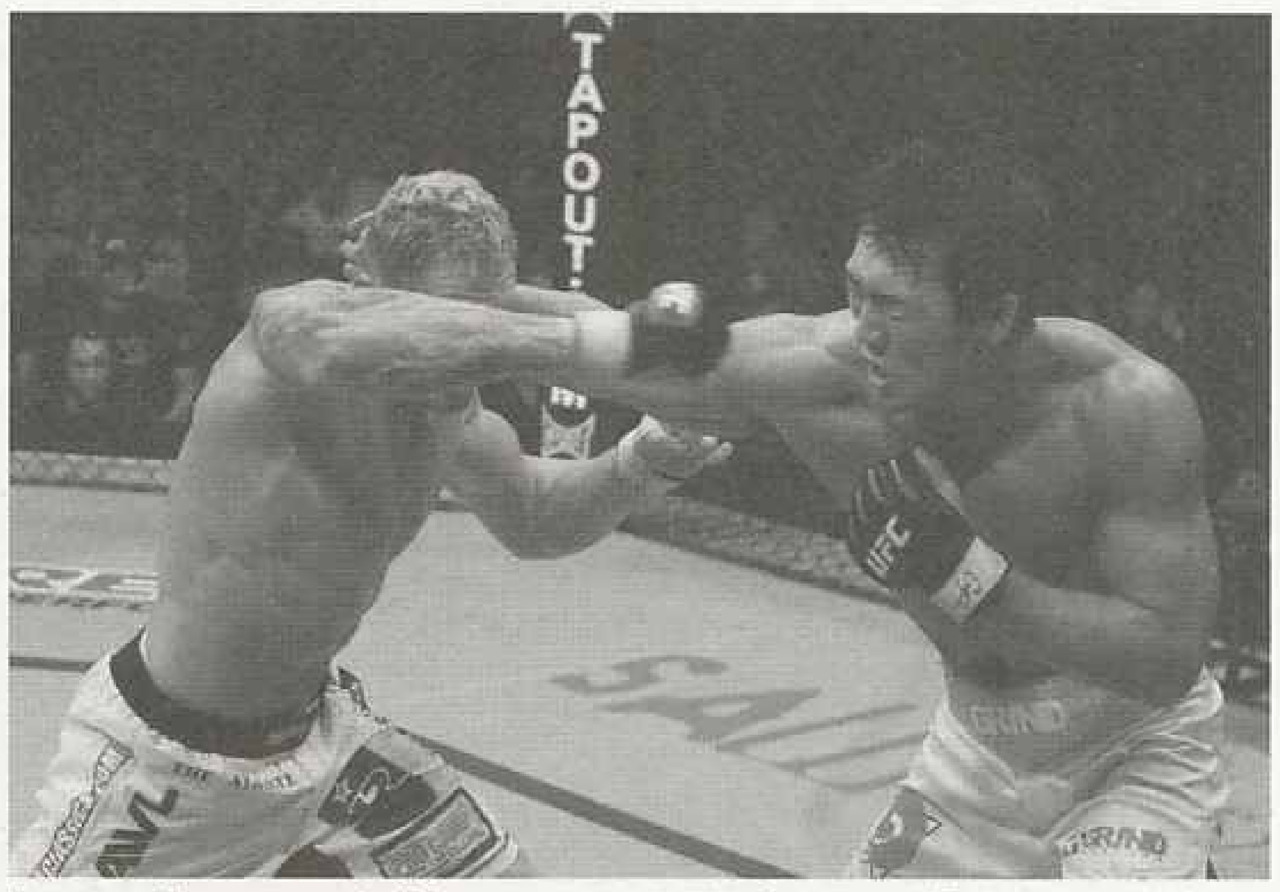
——そ、そうですね（苦笑）。また、『戦極』に限らず、UFCが日本やアジアに進出するということを匂わせたりしてますけど、都心で定期的に金網のイベントCAGE FORCEを開催している慧舟會としては、やはりUFCの窓口として期待されてる部分は大きいんじゃないかなって思うんですが。

久保　ふ〜ん、そうなの？

——いやいや、岡見選手や高谷選手がアメリカを舞台に闘ってることを含めて、パイプが一番強いとは思いますし。やっぱりCAGE FORCEに出てる選手の中でUFCに上がりたいという選手も多いんじゃないですか？

久保　そんなことないでしょ。だって金網だっていったって、去年ライト級トーナメントに出た朴くんだってウマハノフだってDREAMに上がるわけだから。それはそれぞれ考え方があるからね。

——ああ、なるほど。それにしても、その朴選手やウマハノフが出場したライト級、



“MMAメジャーリーガー”としてUFCで大活躍中の岡見勇信をはじめ、海外とのパイプも太いGCM。オクタゴンで闘うCAGE FORCEが軌道に乗り始める中、第2、第3のメジャーリーガーを誕生させる可能性も充分に考えられる。

CAGE FORCEのベルトを作ったのは日本人選手の意識の中にもUFCが台頭しているから

それにウェルター級のトーナメントは本当に凄く盛り上がりましたよね。

久保　おかげさんでね。たとえば選手それぞれの判定基準がどこにあるのかはわからないけど、ギャランティ、それに自分の価値が上がるのか下がるのかを判断したときに、CAGE FORCEを選んでくれる選手もいることはいるよね。それに、前にもいったけど、ウチは最初に大きな花火を打ち上げて、花火のスケールに合わせてヒーヒー言うのはあまり好きじゃない。地道に積み重ねていって、気がついたらこんな感じになっていたというのが理想的というか。去年のいま頃はCAGE FORCEがこんなふうになるなんて誰も想像もしていなかったでしょう。

——地道に続けてきた結果、中身もおもしろくなってきたし、方向性も定まってきたという感じですよね。

久保　本当はトーナメントを開催して、CAGE FORCEからチャンピオンを決めるというのはどうかなっていう気持ちがあったんだよね。パンクラスさんにも修斗さんにもベルトがあるし、ウチはいろいろなところに選手を上げてもらって、それで名前が売れた選手もいっぱいいるにも関わらず、そのときの恩義を忘れて「オレらもできるぜ」ってベルトを作って勝手に乱立させていいのかなって。だから、長いことチャンピオンベルトを作らなかったんだけど、UFCが日本人選手の意識の中でも台頭していてUFCを目指す選手も増えてきた。だから、ウチが金網でやっているのだったら、そこのチャンピオンにUFCへの挑戦として名乗りを挙げさせるのは非常にわかりやすいのかなって。

——今年はフェザー級とバンタム級の二階級でトーナメントが行なわれますけど、日本でも軽い階級のトーナメントって少ないですし、今年も盛り上がりそうですよね。

久保　今回もWWCNの各プロモーションから強豪選手が出てくるし、（アントニオ・）カルバーリョも出るしね。カルバーリョはわかる？

——〝アントニオ〟に関してはウチの編集部は得意なんで大丈夫です（笑）。

久保　次の大会のカルバーリョと星野（勇二）の試合はおもしろいと思うけどね。ウチは同じ道場だとか、そういうことは関係なく、おもしろかったら一回戦から組むというところで組み立ててるから、順当に一回戦はスカ勝ちできますっていうのもあんまりしないですね。うん、今回はおもしろそうだなあ。

——楽しみにしてます。あと、慧舟會といえば、2月のCAGE FORCEにも門馬さんのセコンドとして来場してましたけど、秋山（成勲）選手の練習をサポートしてたりかなり親密じゃないですか。

久保　年末に、またいろいろあったみた

©Susumu Nagao



約1年にわたりCAGE FORCEで行なわれたライト級、ウェルター級トーナメントは07年の同会場をおおいに盛り上げ、CAGE FORCEを定着させる大きな転機に。また、ライト級の決勝を闘ったウマハノフ、朴光哲が『DREAM.1』参戦選手と発表されていることもあり、今後の“新エース”も期待される。

秋山くん？ 現代に2万人を相手にケンカを売れるなんて男冥利につきるよ

いだけどねえ。

──ああ、ルール問題ですよね。そういう意味では、今後DREAMAのルールは『HERO'S』ルールディレクターだった磯野元、それから『やれんのか！』から島田裕二、野口大輔、そこが一緒にやっていくことになるみたいですが。

久保 ただ、総合格闘技のルールとして世界的に見れば、サッカーボールと踏みつけはないほうが主流だからね。日本でも、その二つを許してるのはいまではパンクラスさんだけじゃない。でも、パンクラスさんもやめるんじゃないかな。

──まあ、テレビで中継できなかったり、いろいろ問題はあるみたいですからね。

久保 その代わり、アメリカはヒジ打ちを許すイベントが多いよね。それはなぜかというと、ボクシングとの棲み分けをするためなんだけどね。だから、CAGE FORCEがヒジ打ちを許してるのはアメリカに行って活躍するためで、向こうで勝とうと思うんだったら同じルールと環境で試合をしたほうがいいから。だから、ルールはどこに着地するのかはレフェリー陣の仕事であって、私の仕事じゃないですから。

──まあ、そこでちょっとトラブルになった『やれんのか！』の三崎和雄 vs 秋山成勲戦ですけど、久保社長から見てあの問題はどうでした？

久保 まあ、あれは三崎選手の反則だよねえ。ただ、言っておきたいのは、秋山くんは本当に素晴らしい選手ですよ。

──秋山選手の近くにいる人は、皆さんそう言われてますね。

久保 凄く努力家だし、ウチのきったない東京本部にもちゃんと練習に来てるし。

──あの年季の入ったジムに（笑）。

久保 あそこに来て、プロの練習だけじゃなく、アマチュアの選手たちと一緒に練習していますよ。普通だったらできないよ。プロの選手がアマチュアの選手と練習するなんて。そこは凄くマジメ。格好が派手だからよく誤解されるみたいだけど。

──格好もそうだし、乗ってる車も見るからに〝スター〟ですし。

久保 ま、キミらのところはなんか凄く彼を攻撃しているよね（ニヤリ）。

──ええ⁉ ウチほど応援している雑誌はないですよ‼ 攻撃ではなくて、逆にとんでもない〝ヒール〟として取り上げることで、ボクらなりに応援してるつもりなんですけどね。客を呼べるプロ選手という意味では、あそこまでの選手はいないですし。

久保 ふ〜ん。まあ、そうね。私が秋山くんに対して思うのは、現代に2万人を相手にケンカを売りに行けるなんて男冥利につきるよってことだしね。その中に入って堂々と自分を軸にスケジュールを考えてリングの上で試合ができたという点で、彼は本当に立派だと思うよ。それができるヤツがほかにいるかと言ったら、たぶんいないと思う。2万人を敵に回すこともできなければ、全員にブーイングを浴びるほど注目されることもできないよ。

──そういう〝ヒール〟は作ろうと思って作れるわけではないですからね。プロレスともまた違いますし。

久保 試合の内容だって、三崎くんのパンチで一回バランスを崩したけど、正直言ってあれはダメージはないでしょう。一発目は三崎くんが倒れて、そのあとに秋山くんが倒れたけど、倒れてバランスを崩した瞬間に手をついているのは、秋山くんの意識がちゃんとハッキリしていた証拠だよ。三崎くんには申し訳ないけれど、もう一回やれば秋山くんが勝てると思ってるから。

──あの試合を観て、負けたから秋山選手は弱いんだと思ってる人なんていないですよね。

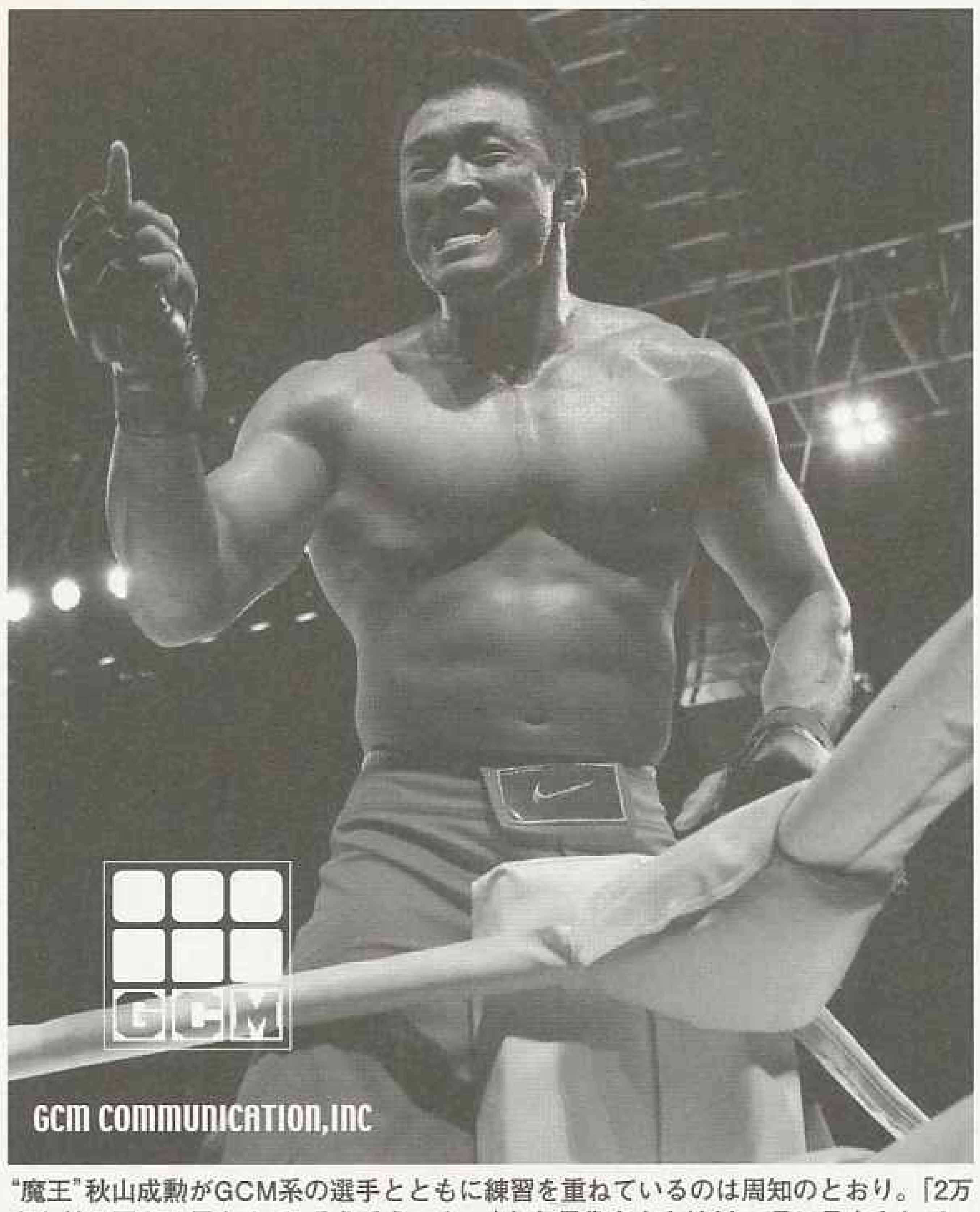
久保 ただねえ、三崎くんは『戦極』に行っちゃったもんねえ。そのへんが難しいところだよなあ。

──そこは久保社長が言われるとおり、一年に一度のペースなのかわかりませんけど、『戦極』vs DREAMのスーパーボウル的なイベントを開催するしかないですかね。

久保 どうだろうねえ。ま、そうやって業界を盛り上げて、みんなの力で成功させて、それをまたみんなで分け合えればいいんじゃないのって、私はそう思うけどな（ニヤリ）。

──手を取り合っておもしろいものを作っていければ最高の大連立ということですね。今日はどうもありがとうございました！

【08年2月21日／都内・GCM事務所にて収録】



“魔王”秋山成勲がGCM系の選手とともに練習を重ねているのは周知のとおり。「2万人を敵に回せる男なんて、そうそういない」と久保代表も太鼓判。4月に予定されている『DREAM』ミドル級GPで、“魔王”はどう輝くのか要注目である！

DEEP INTERNATIONAL 2008

今年のマット界について？俺にはよくわからんよ!! それと〝夢広報〟ってなんなの!?

DEEP代表 佐伯繁



さえき・しげる■カメラマンから編集&制作、広告代理店から飲食業まで幅広く手がけ、青年実業家として一時はかなりの資産家に。その後、趣味が高じてプロレス&格闘技に関わるようになり、01年1月にDEEPを旗揚げ。05年3月からPRIDE広報に就任、06年にはDEEPジムをオープン。そして07年3月に旗揚げするDREAMの"夢広報"に就任をはたした。

このたびめでたくDREAMの"夢広報"に就任した佐伯繁DEEP代表!! 今回は、混迷を極めたDREAM旗揚げまでの裏側、そして再編真っただ中の日本総合格闘技界について、無糖コーヒーとチョコレートを飲食しながら語ってくれました! 佐伯さん、マット界と糖尿病はどうなるの〜!?

聞き手／ジャン斉藤

――佐伯さん、お忙しいみたいですね。

佐伯 忙しいよ!! 昨日も大会（2・22 DEEP後楽園ホール大会）が終わったばっかりだし。

――でも、もっと忙しくなるんじゃないですか。DREAM旗揚げイベントも迫ってきてるわけですし。

佐伯 （いきなり）いや、まだ俺はな〜んにも聞いてないのよ!

――ダハハハハ! 何をおっしゃいますやら。佐伯さんは〝夢広報〟というステキな肩書きがある立場じゃないですか。

佐伯 その〝夢広報〟っていったいなんなのか、逆にコッチが聞きたいよ! 〝夢広報〟って何!?

――ボクに聞かれましても（笑）。じゃあ、いまだにどういう役割なのかわからない状態なんですか?

佐伯 そんなことはない。まぁ、やることはPRIDEのときと一緒だとは思いますよ、基本的には。

――安心しました。佐伯さんの仕事はこれまでどおり、選手やマスコミのあいだの潤滑油的な役割なんですね。

佐伯 そうだねぇ。まあ、『やれんのか!』やDEEP系の日本人選手に関しては、いままでの付き合いも長いから楽な面もあるけどね。だからこのあいだの『DREAM』の旗揚げ会見にしてもさ、時間どおりにピチッと来たのはウチの選手ばっかりだったから! （自慢げに）。

――へぇ〜。よっ、〝夢広報〟!!

佐伯 だってマッハも時間どおりにきたし。

――マッハさんもですか（笑）。

佐伯 あとは、コッチには気を使わなきゃいけないような大御所もいないしさ（苦笑）。

――若い選手が多いですしね。佐伯さんはPRIDE時代から、『やれんのか!』スタッフたちとの信頼関係で協力してきたとおっしゃってましたよね。

佐伯 うんうん。

――今回のDREAMでもそういうかたちになるんですか?

佐伯 確かにまだ契約とかは交わしてないねぇ。

――でも、DREAMではFEGさんやTBSさんとの絡みも出てくると思うんですけど。

佐伯 いや、俺は実際にFEGやTBSと直接、仕事をするわけじゃないから。DREAMの制作を請け負う『やれんのか!』チームのお手伝いをするってことで。だから体制的にはPRIDEや『やれんのか!』のときとなんも変わらないと思うんだけどね。

――なるほど。今回のDREAMって、昨年大晦日の前から新しいイベントをやるんじゃないか? っていう話はアチコチでされてましたよね。佐伯さんには今回の旗揚げに関して、どのようなかたちでお話があったんですか?

佐伯 ぶっちゃけた話、昨年末くらいにはこういうイベントがやりたいなっていうのは関係者が言ってた気がする。ただ、それは大晦日の『やれんのか!』が成功した場合の話であって。具体的にはハッキリとはしてなかったけどね。

――あくまでボンヤリとした未来の話だったわけですね。

佐伯 うん。そんなもん。で、『やれんのか!』が終わってから、いろいろと調整してきたと思うんだよね。『やれんのか!』チームが『戦極』を手伝うのかどうかとか、そういうことも含めて。

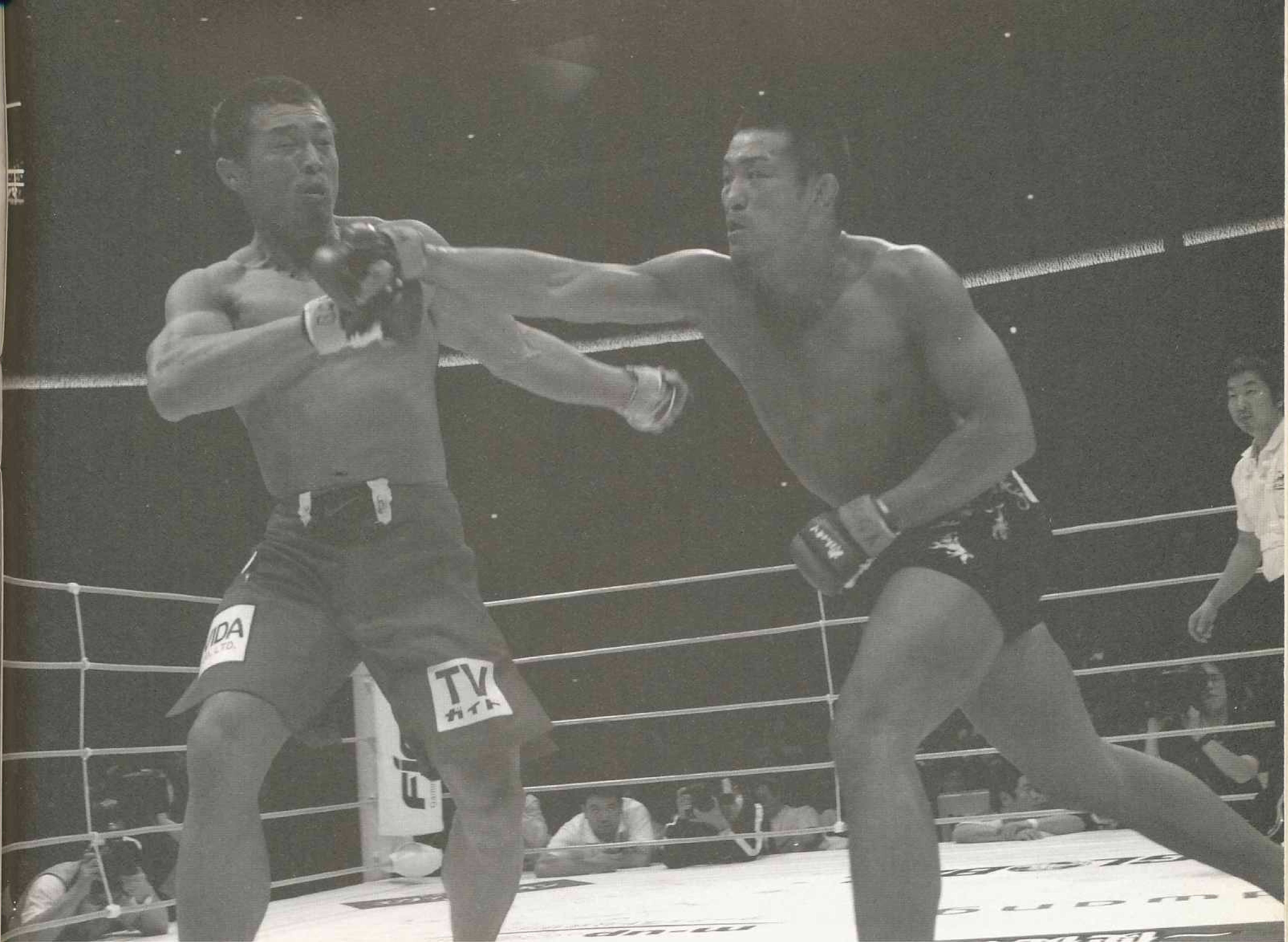
――そういえば、『やれんのか！』が『戦極』に協力するっていう話もありましたね。
佐伯　で、ヘタしたら俺が正式なことを聞いたのは、こないだの会見の一週間前くらいかも。だから大晦日が終わった時点では、この先がどうなるかなんて本当にわからんかった。
――けっこうギリギリでやられていたんですねえ。DREAM発足の話と、『戦極』サポートのお話というのは同時並行で進んでいたんですかね？
佐伯　う〜ん、俺は実際にそこらへんはタッチしてないからわからんな〜。
――すると、佐伯さんはどうなろうと『やれんのか！』チームと一緒にやっていこうという気持ちはあったわけですか？
佐伯　そうだね。俺はあったね。ただ、大晦日が終わった時点で『やれんのか！』チームが関わる次のイベントが具体的に決まっていたわけでもないし。だから具体的にはまったく先は見えてなかったね。「俺、どうなるのよ？」みたいな（苦笑）。
――いやいや、佐伯さんにはDEEPがあるじゃないですか（笑）。
佐伯　まぁ、そうなんだけどさ。だから、大連立での自分の立ち位置はどうなるんだろう？　っていう気持ちは正直あったよ。そこはいまでも不安なんだけどね〜。
――もしもの話ですけど、『やれんのか！』チームがDREAMの運営に関わらず、『戦極』に協力していたら佐伯さんはどうされてたんですかね？
佐伯　……どうなんだろうな？　まったくわからんね、う〜ん……（熟考）。まぁ『戦極』側からすればさ、〝やれんのか！〟＝佐伯繁〟っていうのが実際あったとは思うよね。ただ、『戦極』の広報をやってるJ−ROCKの國保社長とウチ（DEEP）は深い関係があるんだわ。
――吉田道場からDEEPに出ている選手はけっこういますよね。
佐伯　そうそう。J−ROCKさんの所属選手がウチに上がっているし、昨日の大会には吉田（秀彦）選手とかも来場しているわけだしね。そういう意味で、DEEPとしてはいいお付き合いをさせてもらってるんだよね。
――そうすると、問題はDREAMと『戦極』はどういう関係にあるのか？　っていうことですよね。
佐伯　そこらへんもね、俺はよくわからんよ!!
――なんか微妙な言い回しですね（笑）。
佐伯　いや、本当にわかんないんだって！　直接、俺が交渉してるわけじゃないし。でも、聞くかぎりは友好的にやっているって話だから大丈夫なんじゃないの。
――確かにそうですよねぇ。昨日は険悪でも今日は良好ってことはしょっちゅうですし。そうすると佐伯さんの立場も複雑ですよね。いまのお話を聞くかぎりは全方位外交なわけですから。
佐伯　まあ、DEEPとしてはいろんなお付き合いがあるからさ。
――たとえばDREAMに協力することによって、いままで接点がなかった和術慧舟會やZSTとの交流も生まれてくるわけですよね？
佐伯　う〜ん。和術慧舟會もZSTも、いままでだって交流ありますよ。ただタイミングが合わなかっただけ。昨日の大会で何年ぶりかに和術慧舟會の選手が出たし、逆に『CAGE FORCE』にはウチの選手も出てるし。自然な感じで団体間の交流は始まってるよね。だいたいいままではPRIDEとK−1の仲が悪かったから、それがほかのイベントにも影響してたってことでしょ。
――じゃあ大晦日の大連立をきっかけに、そういった佐伯さんと交流が途絶えてたほかのイベントとも……。
佐伯　（さえぎるように）だから、雰囲気的にはもう友好的な感じだよね、実際。一年前に俺らはK−1側を敵対視していたわけじゃない？　PRIDEをやっている人間としては『HERO'S』は認めたくなかったし。でもあっちにも優秀な選手はいて「チキショー！」とか思ったりもしたしさ。で、気づいたらいまはこうして仲間になったわけでしょ。こんなこと想像もつかなかったし、もう今後もドコとドコがくっついたとか離れたとかわからん！　ホント、いろいろと身に染みるよなあ……（しみじみと）。
――雑誌としても、おもしろいから取り上げているのに「おまえらはアッチ側だ！」とか言われるのはたまらないですよね（苦笑）。
佐伯　だから早くどうなるか教えてくれよ！　って感じだわ（笑）。
――じゃあ、ちょっとまだ先のことは見えづらいという感じなんですね。

『やれんのか！』が終わった時点じゃ この先どうなるか本当わからんかった


DSE広報時代の佐伯代表はそのお茶目なキャラクターで、会見中の緊迫した雰囲気を和ませるのに一役も二役も買い、選手や関係者から多くの信頼を集めていた。DREAMでも佐伯さんは縁の下の力持ちとして、ドッシリと屋台骨を支えてくれるはず？



PRIDEの登竜門的な位置づけにあったDEEPだけに、DREAMにも継続して選手が派遣されるのは確実。しかしDEEPにはいわゆる『戦極』側とされるJ-ROCKやパンクラスからも選手が参戦中。今後の状況次第ではDEEPから『戦極』に選手が参戦するなんてことも？ そういう面からもDEEPからは目が離せない！



サムライTVで放送された『やれんのか!』の裏側に迫る『やれたのか! 大晦日さいたまドキュメント』では、佐伯代表が試合後の三崎とバックステージで泣き合いながら熱い抱擁を交わす感動的なシーンも。GRABAKAと佐伯代表の深い関係を象徴する、大晦日屈指の隠れた名場面であった。

秋山vs三崎のノーコンテストに関して GRABAKAとわだかまりはないよ

佐伯　逆に、その3月の二つのイベントの旗揚げが終わったあとにどんな動きがあるか楽しみだけどね（ニヤリ）。

――なるほど、なるほど（笑）。大会後に何かが起こる、変わる、動き出すというのは、これまでの歴史が証明してますね。

佐伯　まぁまぁ、日本のMMAが活性化していけばいいんじゃないですか。選手が選べる道も増えるわけだし。現時点の話って、微妙なことばかりだね（苦笑）。

――どうなっていくか本当にわかんないですよね。

佐伯　わかんないよなー。北岡（悟）選手はDREAMじゃなくて『戦極』に出るんでしょ。

――パンクラスは『戦極』側ですし。三崎選手の『戦極』参戦を佐伯さんはどのようにとらえているんでしょうか？

佐伯　どうも何もないよ。GRABAKAとは付き合いはあるしね。なんも変わってない。

――でも、秋山戦のノーコンテスト裁定をめぐってゴタゴタしてたじゃないですか。

佐伯　ノーコンテストの件に関しては『やれんのか！』とGRABAKAが会って話をしたんで、いまはわだかまりはないよ。昨日も会場で仲良くしゃべってるしね。だからそれは解決した。

――そういった行き違いがないように、佐伯さんもいろいろと調整していかないといけないわけですね。

佐伯　具体的な仕事内容は笹原（圭一DREAMイベントプロデューサー）さんに聞かないとね。笹原さんもいま、スタッフが少ないからいろいろと自分でやらなきゃいけないから大変だよ。

――大変みたいですね。先日は（佐藤）大輔さんのカメラを回していたそうですし（笑）。

佐伯　凄いよ。自分で会見資料とかもホッチキスで止めて（笑）。俺と一緒だよ。

――どんなイベントプロデューサーですか!!（笑）。それはさておき、佐伯さんとしては敵を作らず全方位外交でやっていきたいんですよね？

佐伯　もちろんそうだね。平和主義者なんで。ただ道義でないことを仕掛けられたら、どこが相手でも意地でも闘いますよ。まぁ、結局は自分とこのイベントをしっかりやってくことが一番必要だと思うよ。だってDREAMと同じ時期にウチもミドル級トーナメントをやってんだよ。それも複雑な話じゃない？　本来はウチの優勝者をDREAMのトーナメントに出したいとこなんだよ。でも、日程的にウチからは誰も出れないんだよなー。

――それはDEEPと『PRIDE武士道』のような関係がまだ成立してないってことですよね。

佐伯　DREAMで言えば、ライト級トーナメントもあるけど、ウチの横田一則（DEEPライト級王者）はケガしてるから出れないしなー。どっちにしろ横田は

佐伯繁

俺は平和主義者だから全方位外交だけど 道義でないことを仕掛けられたら闘うよ

5月にタイトルマッチが控えてるから難しかったけど。だからDREAMの今年のトーナメントにはウチから選手を出すのが厳しいんだよね。今成正和も4月は『ケージ・レージ』に出て、5月は防衛戦だからDREAMは出られないし。てことはイコール、DREAMの開催が急に決まったってわかるでしょ？　じゃなきゃこんなバッティングする状況になんないもん！

――もっとうまく日程調整するし、トーナメントもかぶるわけがないですよね（笑）。

佐伯　だからDREAM側には冗談込みで相談されたもん。「そちらのミドル級の決勝って3月にできないですかね？」って。

――ダハハハハ！

佐伯　「いやいや、それはムリですよ！」って言ったけど（笑）。そんなこんなで急に決まったことばかりなので、一寸先は何が起こるかわからないよ。慎重に仕事しないとね。

――じゃあ、この本の発売日には佐伯さんが『戦極』の〃極広報〃になってるかもしれない、と（笑）。

佐伯　（必死に）いやいやいや、なんでそんな質問するの？

――ククク。そんな中で、今年は誰がキーマンになると思います？

佐伯　こんだけドタバタしてるからなぁ……。谷川さんじゃない？



この肉感、カラーでお伝えすることはできない!? メガトンGPは100kg以上を誇るリッチボディのファイターたちが、DEEPメガトン級(無差別)初代王者をかけて激突。かつてのルチャVT軍団と日本選抜の5vs5マッチや、和田良覚レフェリーの選手デビューに代表される"格闘技のおもちゃ箱"路線を継承する企画だ。能書きはいらない、見ればわかる――大相撲顔負けの"ウラ3月場所"に驚愕せよ！

――あ～、それはなんとなくわかりますね。谷川さんは本当に調整役として天賦の才を持っているというか（笑）。

佐伯　てかさ、DREAMの話ばっかなん？　ウチのメガトンGPのことは聞かんの？

――あ、たいへん失礼しました！　DREAMにも『戦極』にも浸食されそうにないメガトンGP。一部で話題を呼んでいる200キロの出場ファイターって誰なんですか？

佐伯　200キロの選手は無理だったわ！

――それは残念！

佐伯　名古屋で発見したんだけど、ちょっと今回は間に合わなかった。代わりに165キロの選手が出るんだけど、この選手は有名力士の運転手をやってたっていう噂だよ。あと、ほかの出場選手で和歌嵐っていうのがいるんだけど、彼も有名力士の弟子だったらしいよ。

――とんでもない代理戦争がメガトンで実現するわけですね（笑）。

佐伯　昨日のトーナメントは判定試合が続いたけど、メガトンはそれと真逆で短時間KOの試合が続出するんじゃない？　これは観ておもしろいと思うよ！　入場式だけで笑えるよ！

――そもそもリングは重量に耐えられるんですかね？

佐伯　トランポリンみたいにジャンプしたら危ないかもな（笑）。

（ここで笹原DREAMイベントプロデューサーが通りかかる）

佐伯　あ、笹原さん！　俺の〃夢広報〃って肩書きだけどさぁ、もうちょっと何かないの？

笹原　……単純に〃広報〃じゃないですか（淡々と）。

――冷たいなぁ（笑）。

佐伯　いやいや、もっとほかにないかね？　広報ってなんかへんに小難しい感じがしない？

笹原　ならアレでいいじゃないですか、スーパーバイザーで。

――ダハハハハハハハハ！　意味深だなあ。

佐伯　ちょっとそれはなぁ（困惑）。こういう肩書きがついていると、マスコミとかも細かく聞いてくるから、ちゃんと決めんといかんよなぁ。

――では、『kamipro』で肩書きを募集しましょう！

笹原　いいですよ、スーパーバイザーで（最後まで冷たく）。

【08年2月23日／都内・DEEPジムにて収録】

ファイティングロード presents
『DEEPメガトンGP2008』
in新宿FACE
3月29日（土）18:30開始（18:00開場）

出場選手

マッスルヒラヌマ（JUNGLE MUSCLE GYM）、馬場口陽一（Team Paon）、川口雄介（BLUE DOG GYM）、折橋謙（CORE）、鶴亀金太郎（フリー）、高原信好（正道会館）、小阪俊二（ファイテングマスター）、保坂忠広（フリー）、保坂正成（CORE）、和歌嵐（手塚道場）、有山いいとも!!（サンジャボファミリー）、小島良祐（武門会）、鈴木宗之（U-FILE CAMP）、ほか3名

チケット料金


VIP席（最前列）7,000円／S席（カウンター席）7,000円
RS席5,000円／自由席（満席の場合は立見）4,000円
※当日券は一律500円増し
※ドリンク代別途500円が必要
<大きい人優遇特典>
会場入り口に体重計を設置し、
100kg以上の方はドリンク代を主催者が支払う

開催日程

3月29日（土）新宿FACE 一回戦／5月24日（土）新宿FACE 二回戦／8月2日（日）新宿FACE 準・決勝

問い合わせ

メガトンGP実行委員会（DEEP事務局）
TEL.052-339-0303



空前の大激戦区、ついに本格開戦!!

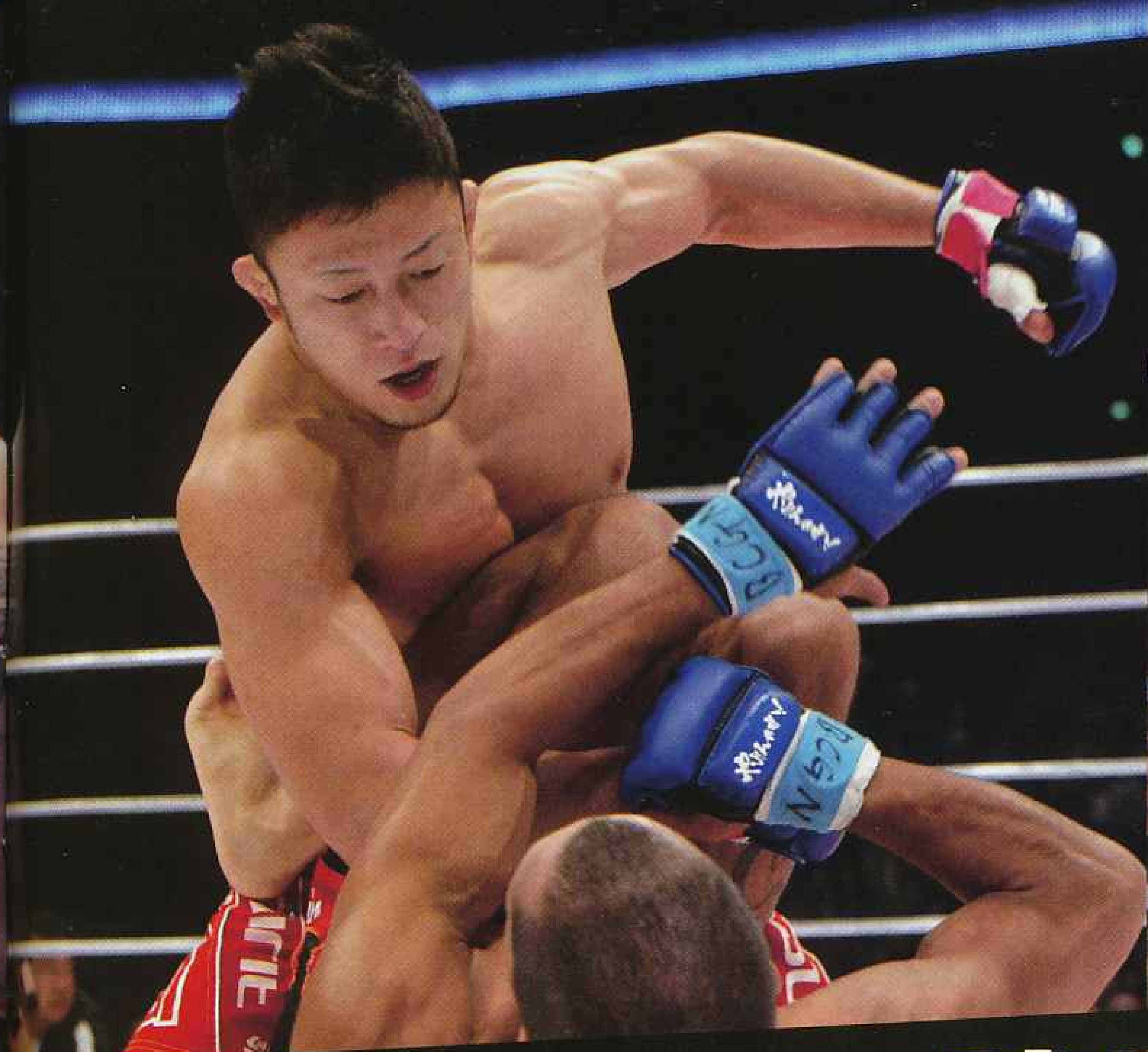
DREAM.1

LIGHT WEIGHT GRANDPRIX 2008 1st ROUND

ライト級GP徹底大解析!!

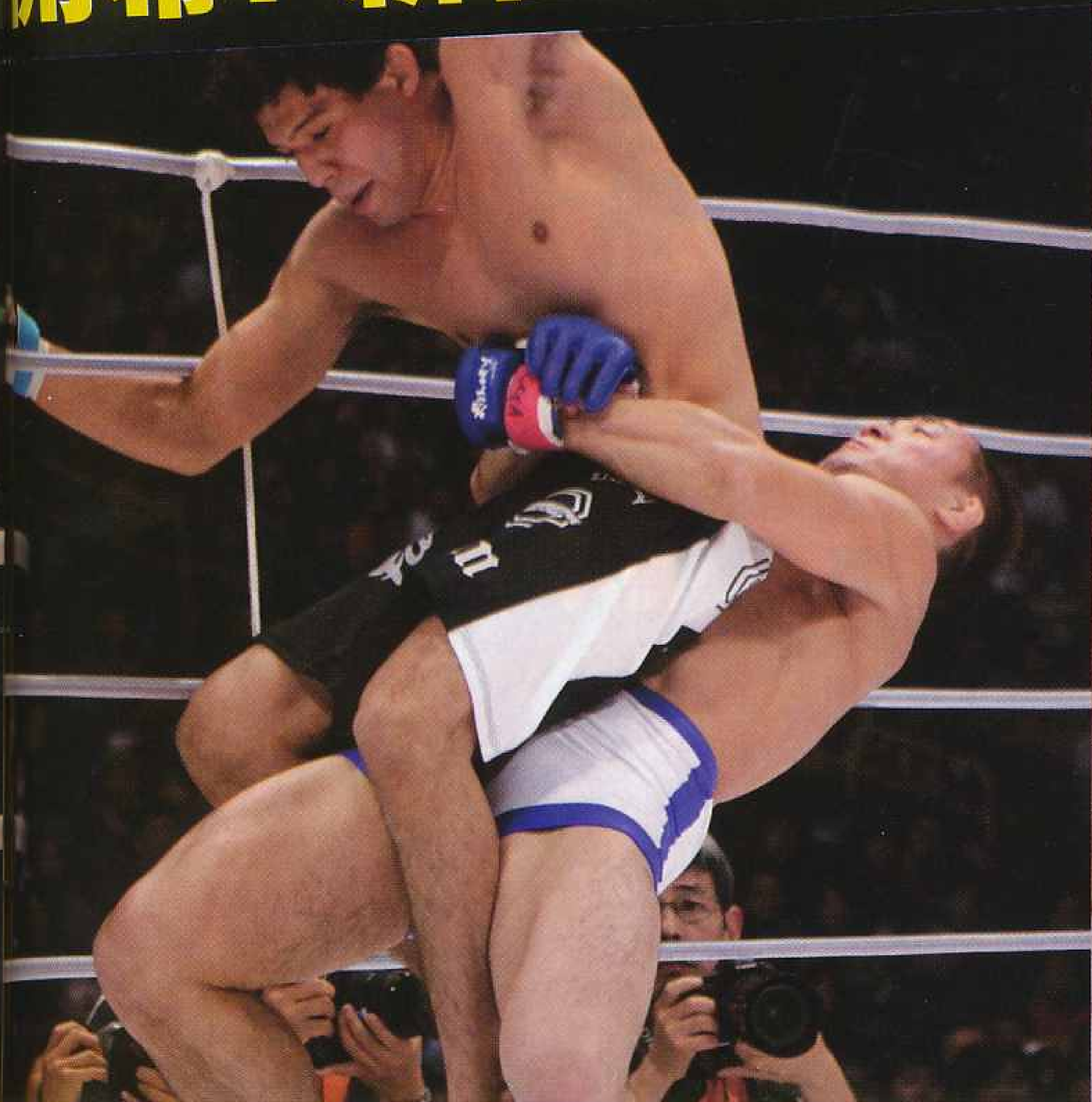
“桜の咲く”季節、到来! ついに旗揚げされる3.15『DREAM.1』の超目玉として、空前の大激戦区であるライト級GPが開幕。『HERO'S』vs旧PRIDEという構図だけではない、新世界の幕開けの予感に満ちているこのトーナメント。特集を読み込んで、“超イケてるイベント”に備えよう!

構成/編集部　試合写真/乾晋也、平工幸雄、山口比佐夫　イラスト/中川画伯





P開幕！新世界に踏み出すのは誰だ？





〝主役なきトーナメント〟。

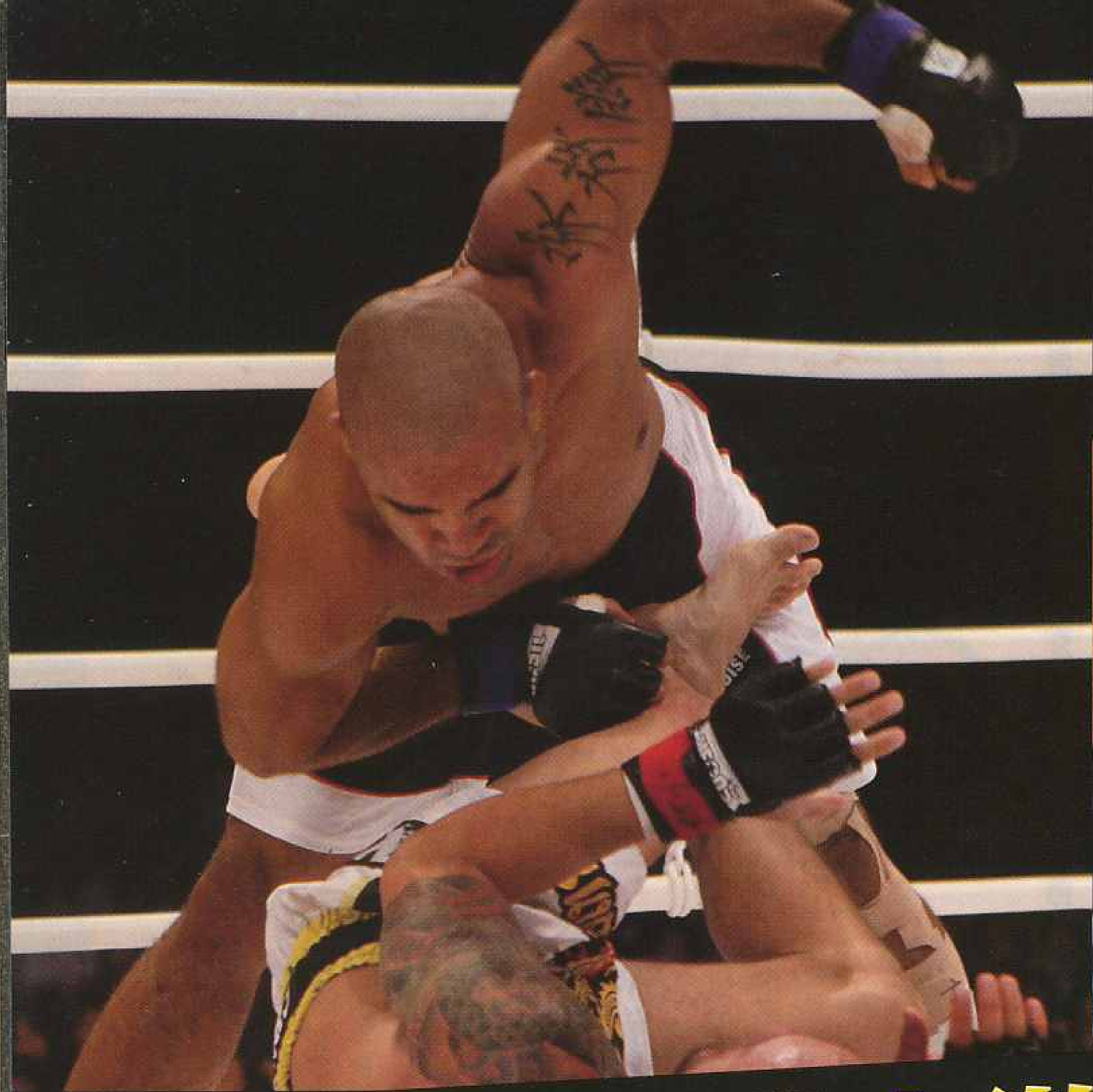
3月15日、さいたまスーパーアリーナで開幕する、〝空前の大激戦区〟ライト級GPを端的に言い表わすとこうなるだろう。いや、DREAMにおける主役を決定するトーナメントと言ったほうがいいかもしれない。

というのも、現時点ではまだDREAMという新しい世界が創造されるスタートラインが準備されただけであり、イベントの〝絶対的主役〟が設定されていたり、約束されているものではないからだ。

DREAMの世界観を創出するために集められた、選ばれし16人。この男たちが、どんな闘い模様を見せるのか。そして、どんな世界を構築していくのか、それを熱をもって凝視していく。それがDREAMライト級GPなのだ。

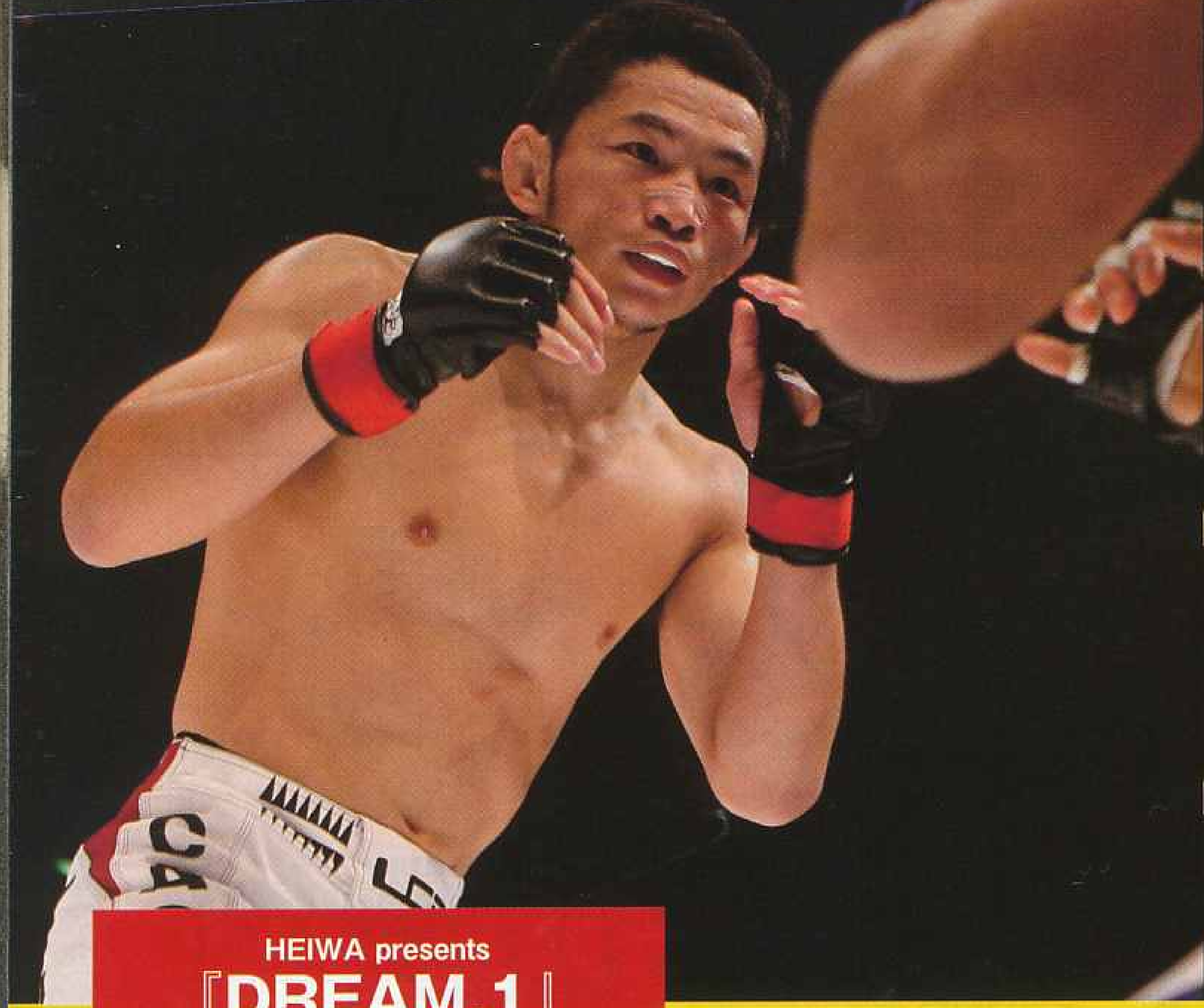
そんな中、一つの中心軸が存在するとすれば、やはりHERO'S2006&2006ミドル級王者であるJZカルバンを「誰が倒すのか？」という大命題だろう。そして、ここに果敢に挑んで行くのが、新世界の主役に自ら立候補した男。ご存知〝ミスターやれんのか！〟青木真也である。だが、主役に〝当選〟するか否かは、このカルバン戦での闘いぶりに懸かっているのは言うまでもない。

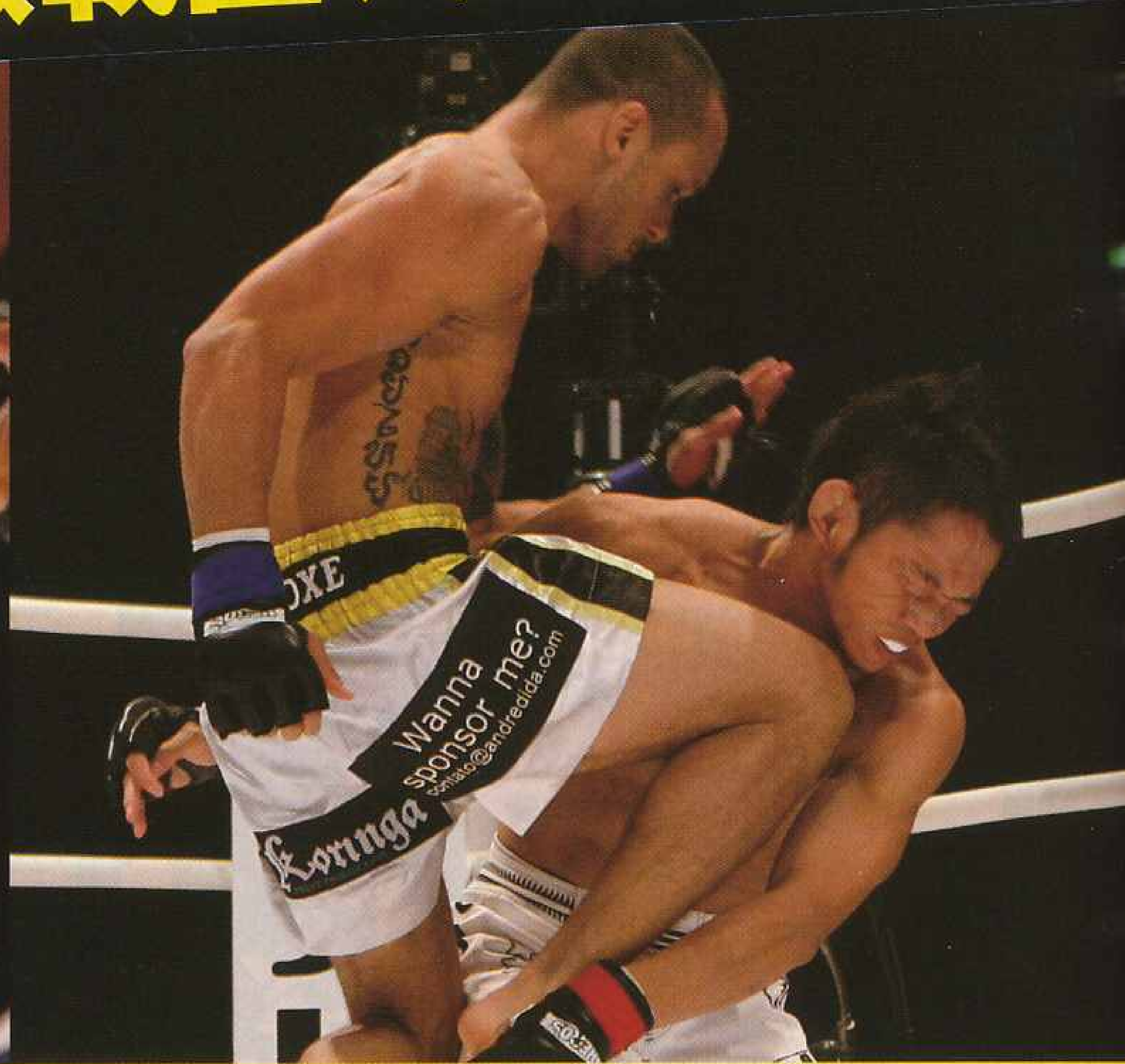
もちろん旧『HERO'S』vs旧PRIDEといった団体を背負った選手同士の激突は大きな話題を呼ぶだろう。だが両団体とも実質的に消失してしまったいま、どの選手も故郷がなくなってしまった状態。最初こそ、こうした〝出身地別〟の闘い模様はヒートを呼ぶだろうが、さらに興味深いのは、近未来における目に見えないランキングの再構築だろう。





“主役なき”大激戦区、ライト級GP開





いままで、『HERO'S』やPRIDEでは、順列や格付けが自然と成立していたわけだが、今回の大連立でシャッフルされ、巨大なリセットボタンが押されたことで、現在は完全にフラットな状態。

トーナメントの上位が全員、旧PRIDE勢で占められる可能性と同じように、上位が全部『HERO'S』勢で占められる可能性もおおいにあるし、たとえば『HERO'S』では勝利を上げられなかった選手が旧PRIDE勢と相対して、隠された才能を爆発させ、プロレスの"対抗戦男"的な選手が続出する可能性もあるから、再編成の行方にも注意が必要だ。

いったい『HERO'S』もPRIDEもない新世界で、"主役なきトーナメント"は何を提示するのか？　ファンとしては、どこに主役がいるのかわからない手探りな状態だけに、一つ一つの試合、選手に丹念に目を凝らしていく必要がある。

選手はそれぞれの立場で、それぞれのドラマを秘め、それぞれが爆発の火種を抱えている状態。と、いうことで今回はトーナメントの選手紹介を企画！　新世界に踏み出す16人の猛者たちを予習&復習し、きたるべき"極上のライブショー"に備えよう！

（堀江ガンツ）

HEIWA presents

『DREAM.1』

ライト級グランプリ2008開幕戦
さいたまスーパーアリーナ
3月15日（土）開場14:00 開始15:00

対戦カード

青木真也 vs J.Z.カルバン
川尻達也 vs ブラックマンバ
宮田和幸 vs ルイス・ブスカペ
ヨアキム・ハンセン vs 朴光哲

出場予定選手（3月4日時点）

石田光洋、アンドレ・ジダ、宇野薫、チョン・ブギョン、アルトゥール・ウマハノフ

入場料金（全席指定・消費税込）

VIP席 100,000円（特典：専用入場ゲート・グッズ付）／RRS席 30,000円／スタンドS席 17,000円／スタンドA席 7,000円／

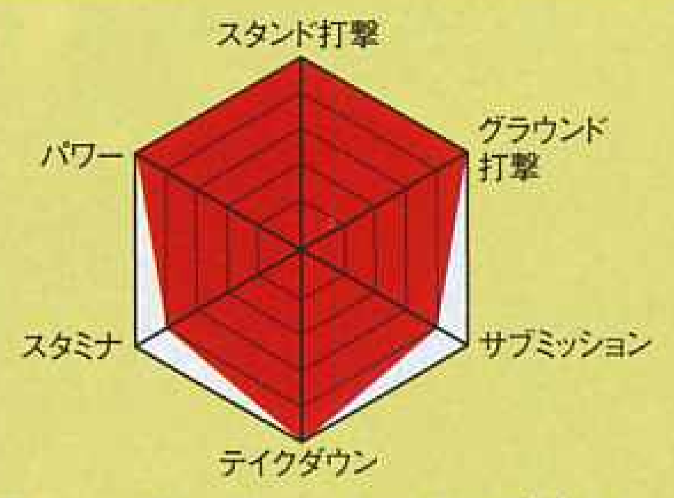
お問い合わせ

3月15日（土）19:00～20:54 TBS系28局全国ネット

お問い合わせ

DREAM事務局 TEL.03-5775-5065

J.Z.カルバン
J.Z.CALVAN





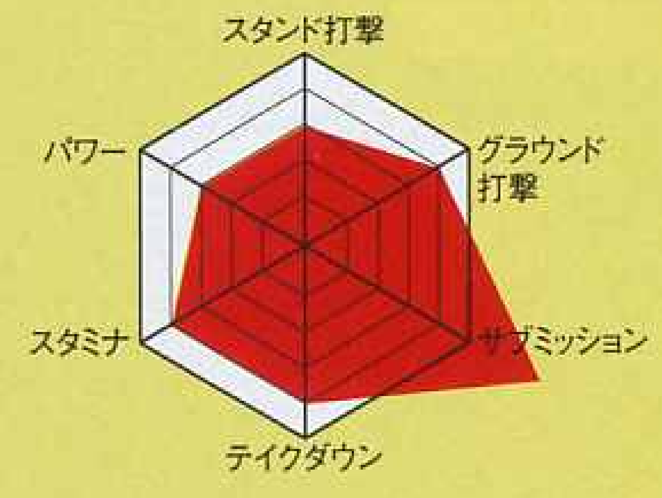
所属	アメリカン・トップチーム
生年月日	1983年7月6日(24歳)
出身地	ブラジル
身長	173cm
バックボーン	ルタリブレ、柔術、ムエタイ、レスリング
MMA戦績	15戦13勝1敗1分
ニックネーム	リオの破壊王

タイトル歴
HERO'S 2006ミドル級世界最強王者決定トーナメント優勝
HERO'S 2007ミドル級世界最強王者決定トーナメント優勝

VS

青木真也
SHINYA AOKI





所属	パラエストラ東京
生年月日	1983年5月9日(24歳)
出身地	静岡県
身長	180cm
バックボーン	柔道、柔術、修斗
MMA戦績	13戦11勝2敗
ニックネーム	バカサバイバー

タイトル歴
2003年柔道全国体育系学生体重別選手権 81kg級優勝
現・修斗世界ミドル級王者

優勝大本命はこの男!! 誰がJZを止めるのか?

〝絶対王者〟、ついに再始動。06年、07年のHERO'Sミドル級トーナメントを連覇した、まぎれもない優勝候補の大本命。アメリカン・トップチーム所属となってからは打撃&レスリングを強化し、穴のない選手に進化。

デビューした04年にヨアキム・ハンセンに不覚をとったものの、その後は破竹の12連勝中。KO&一本勝利率はなんと驚異の85パーセント。計量終了後、試合時には体重が80キロまで戻るという最先端の体重調整法で、体格面でも圧倒。

昨年の『やれんのか!』では、左ヒザ靭帯断裂の重傷を負い出場をキャンセルも、満を持して青木との頂上決戦が実現。はたしてストップ・ザ・JZを成し遂げるのは青木か? それとも……?

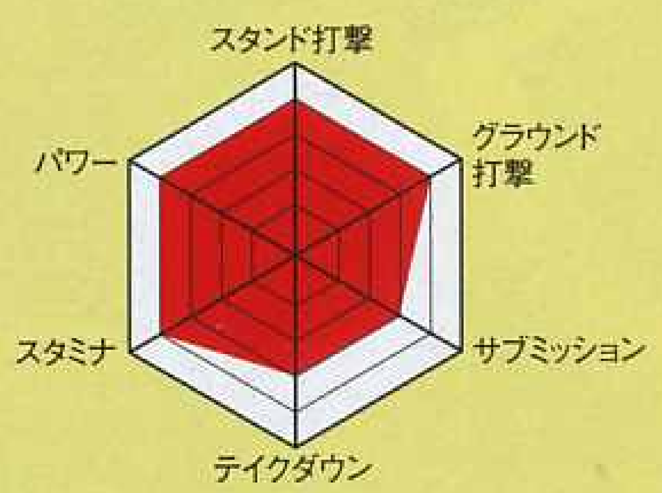
ダントツの〝主役候補〟すべては初戦で決まる!!

〝ミスターやれんのか!〟がいきなりクライマックスに突入!『やれんのか!』で幻の一戦となったJZカルバン戦が一回戦から実現してしまう青木真也。

ご存知、世界が恐れる奇才グラップラーとして、柔術、柔道をバックボーンに、オリジナリティ溢れる関節技バリエーションの豊富さは追随を許さない。

現・修斗ミドル級チャンピオンであり、PRIDEでは4連続一本勝ちの偉業をはたす。昨年末の『やれんのか!』ではカルバンの代役となったチョン・ブギョンの腕十字であわやのシーンもあったが、今回のトーナメントでは初戦次第ですべてが決まる。はたして青木はDREAMの〝主役〟を奪えんのか?

ブラックマンバ
BLACK MANBA





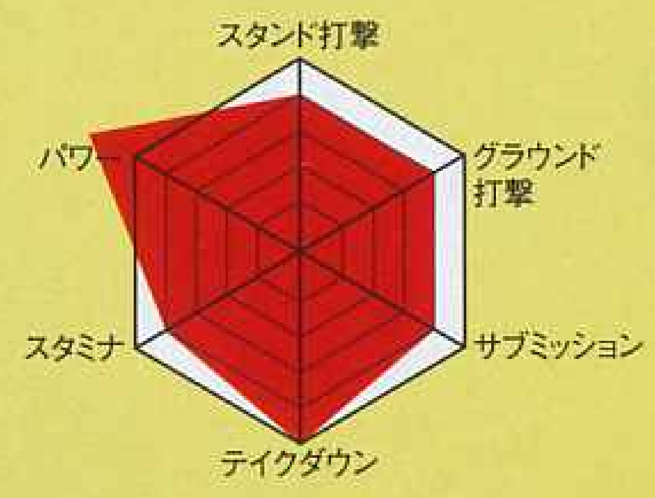
所属	フリー
生年月日	1979年3月24日(28歳)
出身地	インド
身長	185cm
バックボーン	キックボクシング
MMA戦績	15戦9勝6敗
ニックネーム	リオの破壊王

タイトル歴
太平洋北西パンクレイション王者
北米ムエタイ王者

VS

川尻達也
TATSUYA KAWAJIRI





所属	T-BLOOD
生年月日	1978年5月8日(29歳)
出身地	茨城県
身長	170cm
バックボーン	修斗
MMA戦績	26戦20勝4敗2分
ニックネーム	クラッシャー

タイトル歴
第8代修斗ウェルター級王者

〝インドの毒蛇〟は実力派 今大会の超伏兵的存在!!

ハタリハタマタ! タイガー・ジェット・シンばりにサーベルを持っての入場など、当初は色物と思われがちだったインド系ファイター、ブラックマンバ。

だが、『HERO'S』では2度にわたって所英男をKOするなど、その実力のほどは保証つき。異様に長いリーチを活かした様々な打撃バリエーションに加え、宇野薫をKO寸前に追い込んだ十八番のヒザ、カウンター攻撃も脅威の的。柔術にも本格的に取り組んでおり、寝技対応も入念に行なっているから、まったく油断は禁物。

一回戦で激突する川尻は「カレーを持って入場しようかな」と対抗宣言していたが、〝インドの毒蛇〟に足をすくわれる可能性も充分。GPの超伏兵的存在だ。

PRIDEの〝誇り〟を胸にクラッシャーがGP獲りへ

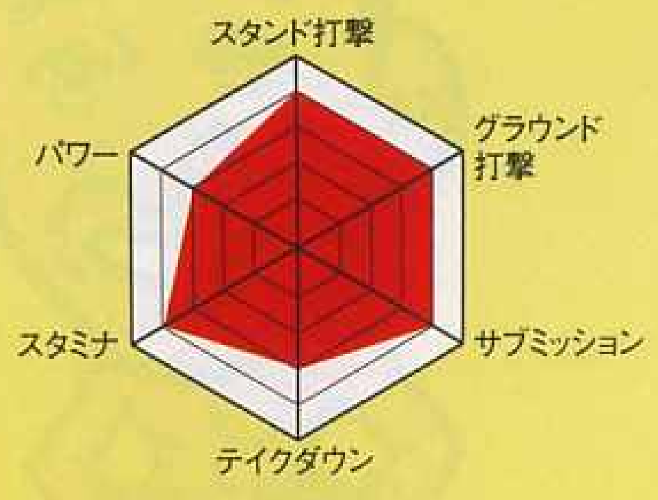
作家の夢枕獏さんも「川尻はいいねぇ〜」と大絶賛する〝クラッシャー〟川尻達也ももちろんGP優勝候補。

デビュー以来、テイクダウンと強烈なパウンド攻撃のアンサンブルでKOの山を築く。腰の強さを活かした打撃スタイルは完成度が高く、その破壊力は無類の練習量のたまもの。

04年には第7代修斗ウェルター級王者に、05年のPRIDEライト級トーナメントでは五味隆典と格闘技史上に残る名勝負を展開した超実力派。

昨年の『やれんのか!』のルイス・アゼレード戦では勝利は奪ったが固い展開に終始したことで反省しきり。だが今回のGPに懸ける気持ち、ファン&関係者の期待値はとてつもなく高い。

ルイス・ブスカペ
LUIS BUSCAPE





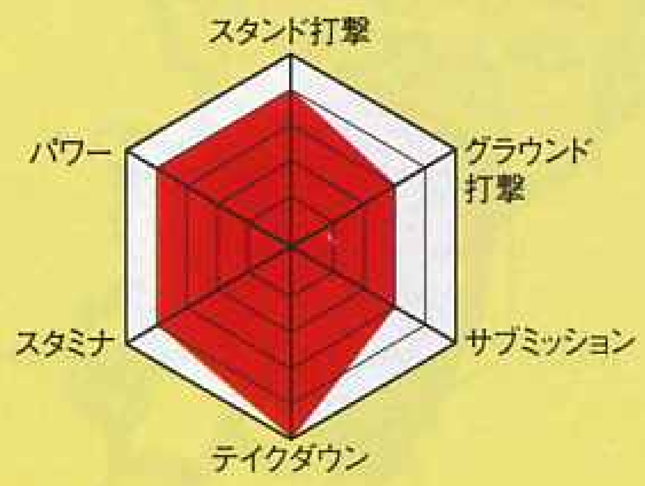
所属	ブラジリアン・トップチーム
生年月日	1982年3月19日（25歳）
出身地	ブラジル
身長	172cm
バックボーン	ブラジリアン柔術
MMA戦績	14戦11勝3敗
ニックネーム	小さなノゲイラ

タイトル歴
MFCミドル級王者

VS

宮田和幸
KAZUYUKI MIYATA





タイトル歴
シドニーオリンピック レスリング
フリースタイル63kg級日本代表
HERO'S 2005ミドル級世界最強
王者決定トーナメントベスト8

所属	フリー
生年月日	1976年1月29日（321歳）
出身地	茨城県
身長	172cm
バックボーン	レスリング
MMA戦績	11戦5勝6敗
ニックネーム	リアル・刀牙

〝小さなノゲイラ〟が寝技でGP完封へ邁進!!

〝小さなノゲイラ〟と称される変幻自在なグラウンドテクニックが信条のブスカペ（ポルトガル語で〝ねずみ花火〟の意味）は、すばやくしつこいファイトスタイルで相手を翻弄する。

ブラジリアン柔術をベースに、スタンドにも対応など、バランスのよさでは群を抜いており、世界各国での試合経験も豊富。PRIDEでは阿部裕幸、今成正和らを寝技で封殺。05年にはルイス・アゼレード、川尻達也とも対戦し、判定で敗れたものの、スピーディかつハイレベルな試合を展開。

過去に30分の試合も経験済みの無尽蔵のスタミナを発揮すれば、すべての選手にとって厄介な存在となる。まずは、宮田戦でのグラウンド勝負に注目だ。

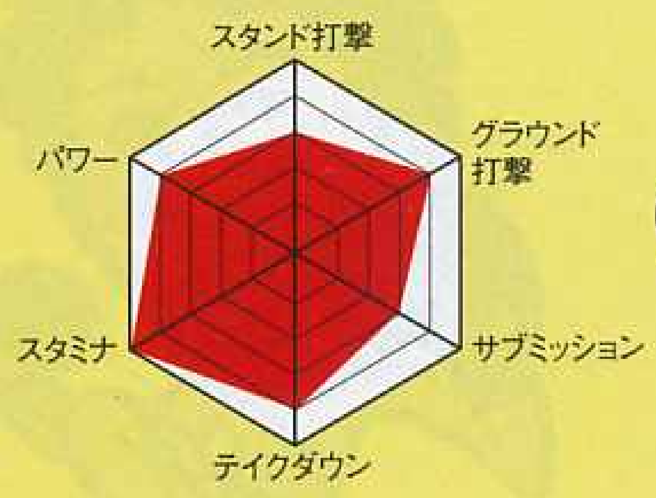
潜在能力ピカ一の本格派GPは内容より結果優先

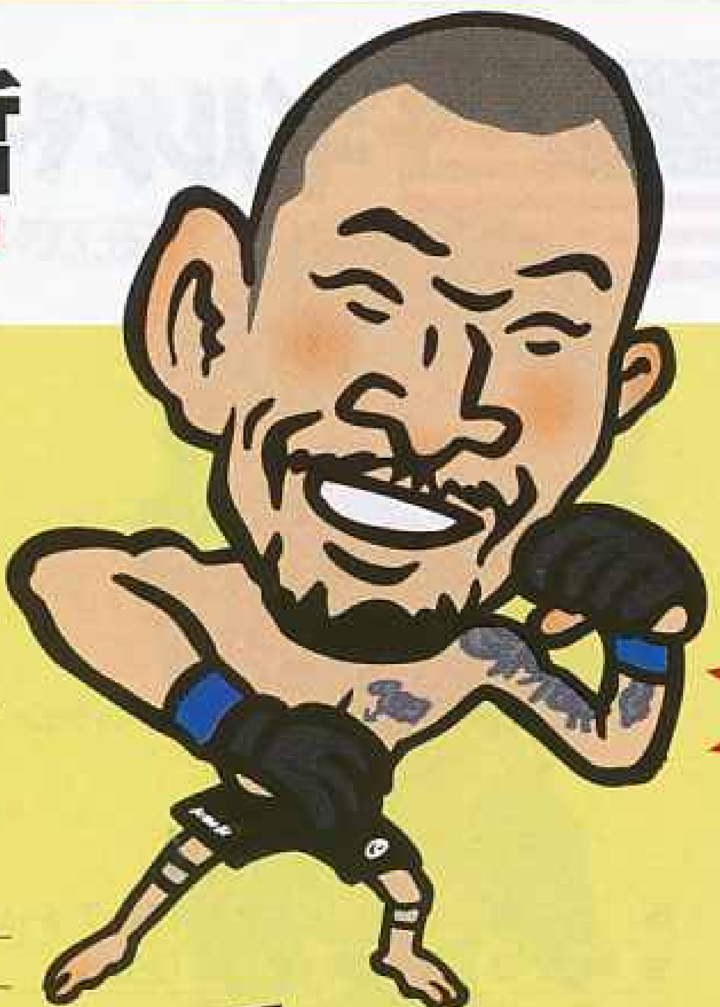
『HERO'S』地上波放送ではその肉体が過剰にズームアップされるほど、筋骨隆々のボディを誇る宮田和幸。

アマレスのシドニー五輪代表という金看板を引っさげ、プロ転向後は抜群の身体能力で、打撃やサブミッションに適応。その格闘センスや潜在能力を高く評価する声は多く、トップクラスと互角に渡り合うが、決定力という課題の部分で伸び悩みも指摘されている。

現在までのプロ戦績は11戦して判定での決着が一試合、一本かKOで決着をつけるプロとしては申し分ないが、今回は一にも二にもとにかく結果が求められる状況。一回戦のルイス・ブスカペ戦に勝利して、トーナメントを勝ち進めば、〝明るい未来〟が見えるハズ。

朴光哲
KOTETSU BOKU



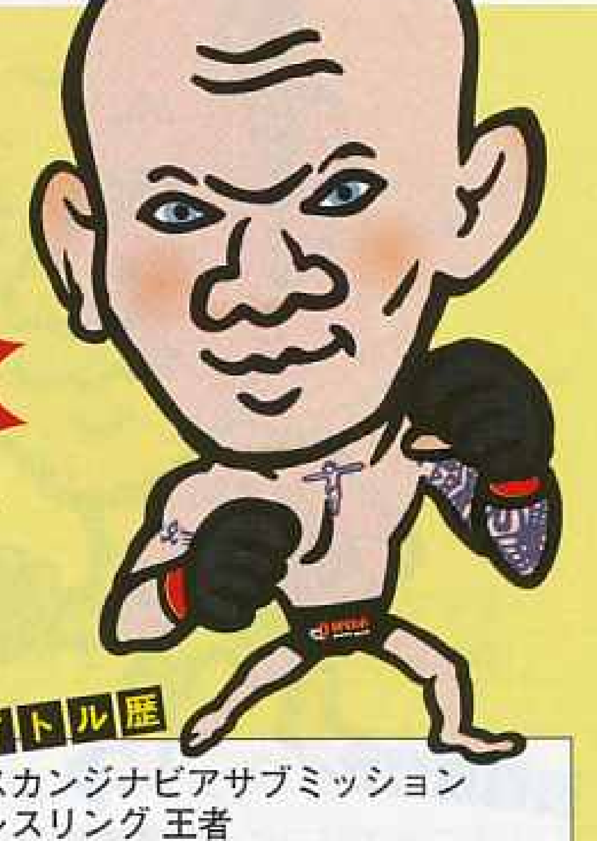


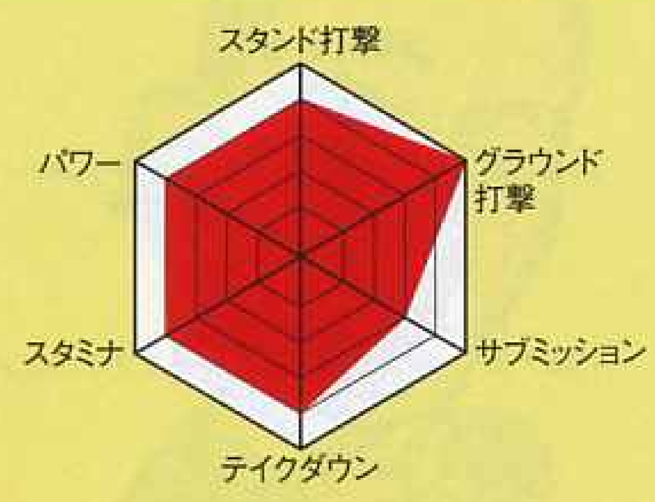
所属	KRAZY BEE
生年月日	1977年5月27日（30歳）
出身地	静岡県
身長	175cm
バックボーン	修斗、ボクシング
MMA戦績	18戦13勝4敗1分
ニックネーム	KRAZY BEEの特攻隊長

タイトル歴
2001年全日本アマチュア
修斗ウェルター級優勝
初代修斗環太平洋ウェルター級王者

VS

ヨアキム・ハンセン
JOACHIM HANSEN





タイトル歴
スカンジナビアサブミッション
レスリング 王者
第6代修斗世界ウェルター級王者

所属	チーム・スカンジナビア
生年月日	1979年5月26日（28歳）
出身地	ノルウェー
身長	178cm
バックボーン	修斗
MMA戦績	23戦16勝6敗1分
ニックネーム	北欧の処刑人

山本KIDの遺伝子が、大物食いへと虎視眈々!!

強面の風貌と会見での「どうも。朴（ボク）です」と朴訥なトークのギャップも魅力なKRAZY BEEの特攻隊長。

KIDゆずりの切れ味あるレスリング、ボクシング仕込みの打撃を併せ持ち、アマチュア修斗で優勝後、修斗初代環太平洋ウェルター級王座も獲得し、『HERO'S』に参戦。その実力はアレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ、エルメス・フランカを撃破して、証明済み。

ここ11試合で9勝1敗1分と上昇気流に乗るが、そのうち9試合が判定決着。無類のスタミナの半面、決定力への課題もあるが強豪に一本勝ちすれば、一気にブレイクの可能性も。まずは一回戦のハンセン撃破が至上命令となる。KIDの遺伝子が〝夢〟のリングで爆発か？

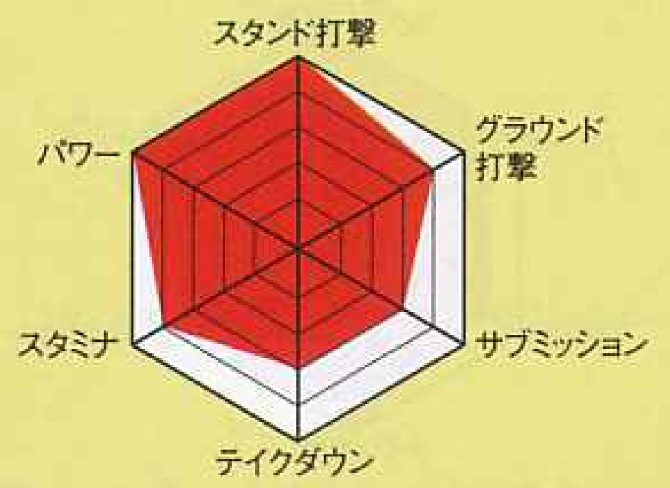
脅威の打撃炸裂なるか？〝処刑人〟は陰の優勝候補

〝北欧の処刑人〟ことハンセンは、陰の優勝候補と言っていい危険な存在。

第6代修斗ウェルター級王者となった修斗時代には、ライト級の頂点として君臨しているJZカルバン、五味隆典も判定で下すなど、その実力は折り紙つき。グラウンドでの的確なパウンドと、スタンドでの強烈無比なヒザ攻撃など、その〝当て勘のよさ〟は、対戦相手にとってはまさに脅威の一言。

最近ではサブミッションでの一本勝ちも増えており、昨年の『Dynamite!!』では、宮田和幸からチョークスリーパーで見事に一本勝利など、さらに完成度を増しているハンセン。一回戦では朴光哲と激突するが、その存在には充分なマークが必要だ。

アンドレ・ジダ
ANDRE DIDA





所属	フリー
生年月日	1983年10月9日(24歳)
出身地	ブラジル
身長	172cm
バックボーン	ムエタイ
MMA戦績	9戦6勝2敗1分
ニックネーム	殴り屋

タイトル歴
HERO'S 2007ミドル級世界王者決定トーナメント準優勝

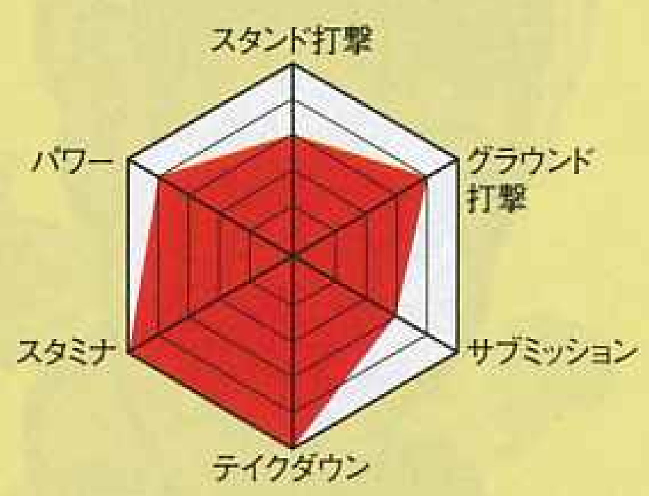
超攻撃型の〝殴り屋〟がGP戦線を正面突破!!

桜庭からプレゼントされたサクマシンマスク姿でのノリノリの入場でおなじみとなったジダ。昨年の『HERO'S』ミドル級トーナメントの準優勝で一気にその名を知らしめた〝殴り屋〟だ。

シュートボクセで尊敬するシウバ、ショーグンらと汗を流した超攻撃型のストライカーであり、跳びヒザ、アッパーなど多彩な打撃技に加え、寝技もしっかりマスター。『HERO'S』では強烈な打撃で高谷裕之の鼻骨を破壊、跳びヒザ蹴りで宇野薫のアゴを粉砕し、長期欠場に追いやった〝壊し屋〟でもある。

昨年11月にはシュートボクセを脱退、DREAMという新天地でもそのハードパンチは炸裂必至、トーナメントに参戦すれば猛威を振るうことは確実だ。

石田光洋
MITSUHIRO ISHIDA





所属	T-BLOOD
生年月日	1978年12月29日(30歳)
出身地	茨城県
身長	168cm
バックボーン	修斗、レスリング
MMA戦績	18戦14勝3敗1分
ニックネーム	ウチのエスペランサ

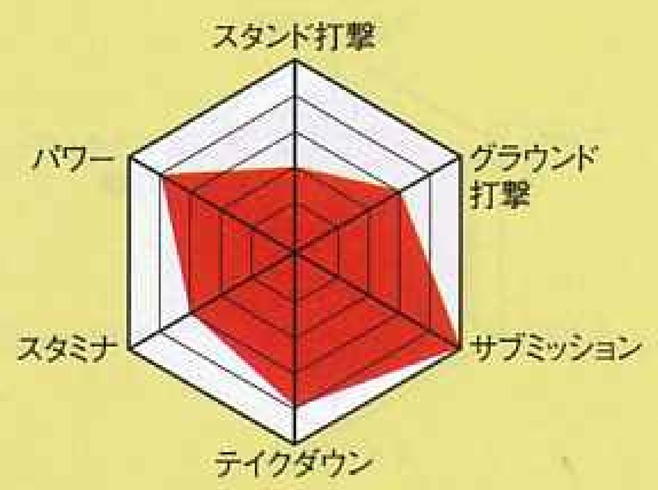
タイトル歴
2003年ADCC日本予選優勝
第2代修斗環太平洋ウェルター級王者

「ウチのエスペランサ」が本領発揮でGP快進撃!?

「ただいま!」のあとは「こんにちは!」(?)。昨年の『やれんのか!』では煽りVでの「ウチのエスペランサ」発言で、石田くんのお母さんにも注目が集まる中、ギルバート・メレンデスと驚愕のハイスパート・バトルを展開。06年『PRIDE男祭り』での五味隆典戦での敗戦ショックとPRIDE消滅により一年間溜めたうっぷんを吹き飛ばした。

レスリングをベースに絶対の自信を持つタックルで果敢に攻めまくり、相手をガス欠に追い込む無尽蔵のスタミナが信条。第2代修斗環太平洋ウェルター級のベルトを引っさげてPRIDEで連勝街道を歩んだ実力を発揮すれば、今回も大活躍は必至、その才能を満天下に知らしめる絶好の機会が到来だ。

チョン・ブギョン
JUNG BUKYUNG





所属	チーム尹
生年月日	1978年5月26日(29歳)
出身地	大韓民国
身長	171cm
バックボーン	柔道
MMA戦績	1戦1敗
ニックネーム	韓流腕十字職人

タイトル歴
シドニーオリンピック 柔道男子60kg級銀メダリスト

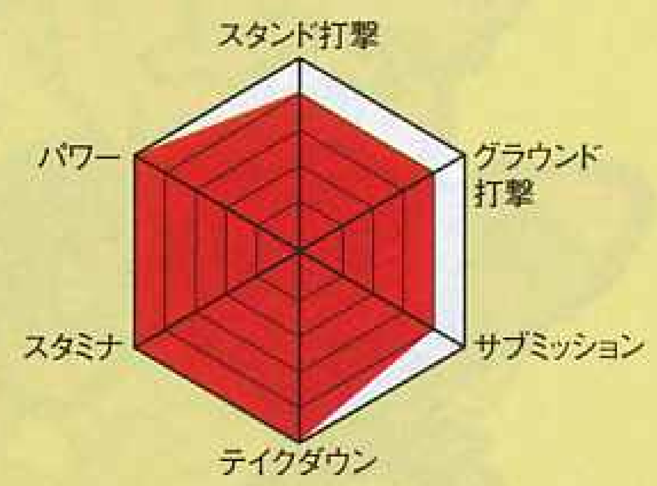
脅威の腕十字地獄炸裂でGPの〝台風の目〟に!?

寝ても覚めても腕十字三昧! 昨年、『やれんのか!』のJZカルバンの代役として青木真也戦で急遽プロデビューしたチョン・ブギョン。

シドニーオリンピックの柔道銀メダリストという超A級の実績の持ち主とはいえ、MMAの練習を始めて2ヵ月にも関わらず、グラップリングのスペシャリスト・青木に二度も腕十字を極めかけ、関係者やファンの度肝を抜いた。練習でも先輩のユン・ドンシクを極めまくる脅威のグラップリング能力を誇る。

課題の打撃にもひるまない強靭な精神力も備えており、デビュー戦で見せた適応力の高さを勘案すると、GPの〝台風の目〟となる可能性は充分。〝ブギョン式腕十字〟はまたもや火を噴くか?

ギルバート・メレンデス
GILBERT MELENDEZ





所属	ジェイク・シールズ・ファイティング・チーム
生年月日	1982年4月12日(25歳)
出身地	アメリカ合衆国
身長	175cm
バックボーン	ムエタイ、柔術、修斗
MMA戦績	14戦13勝1敗
ニックネーム	リトルビースト

タイトル歴
第2代ストライク・フォースライト級王者
WECライト級王者

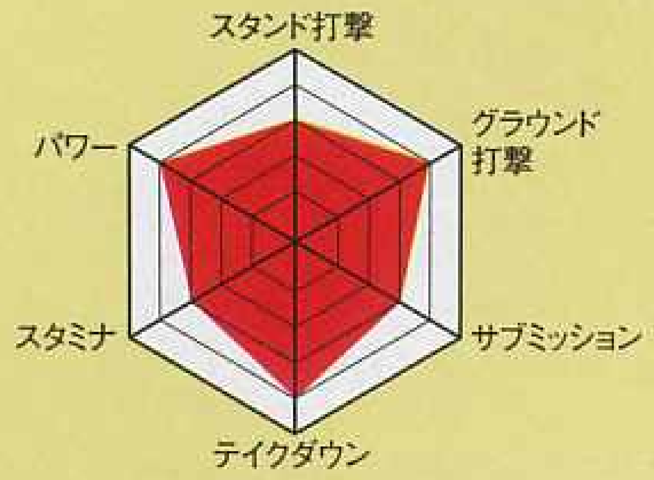
夢舞台に旧PRIDEの〝ガイジンエース〟が上陸か

昨年の『やれんのか!』ではデスバレーボムばりに石田を突き刺すなど超デンジャラスな攻防を展開、高山vsフライ戦を彷彿させるドツキ合いまで披露した旧PRIDEライト級の〝ガイジンエース〟ギルバート・メレンデス。

その石田戦ではMMAで初敗戦となり、試合後は「ファック!」を連発していたが、磨き上げられたボディから放たれるパンチ、ヒザ蹴りといった強烈無比な打撃テクニックはいまだ健在。

修斗で高谷裕之、佐藤ルミナを圧倒、PRIDEで帯谷信弘、川尻達也を撃破した〝日本人キラー〟であり、現ストライク・フォースライト級王者の威信をかけて、屈指のパンチャーがGP獲りに本腰を入れ、再上陸を狙っている。

アルトゥール・ウマハノフ
ARTUR UMAKHANOV





所属	SKアブソリュート・ロシア
生年月日	1979年2月27日(29歳)
出身地	ロシア
身長	170cm
バックボーン	コマンドサンボ
MMA戦績	9戦7勝2敗
ニックネーム	狂気のロシア軍人

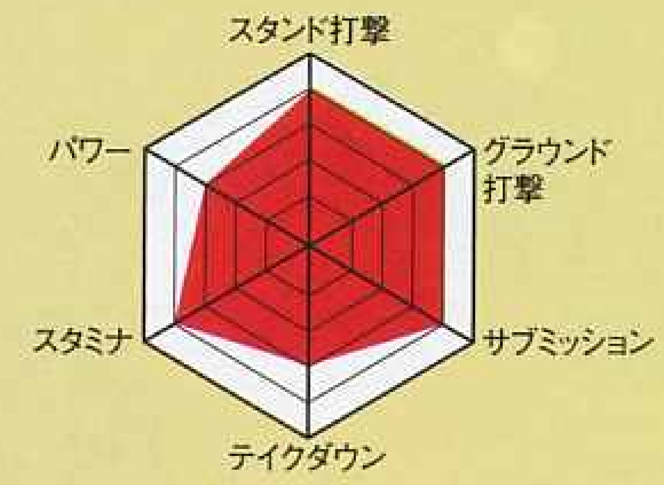
タイトル歴
2004年世界パンクラチオン大会65kg級準優勝
初代CAGE FORCEライト級王者

"クレイジー・ロシアン"が夢舞台を悪夢に染める!?

元ロシア軍の特殊任務部隊『スペツナズ』に所属していた軍人、という超異色な経歴を持つ"クレイジー・ロシアン"ウマハノフは、06年9月の『DOGVILL』で、相手をパウンドKOして眼下低骨折の重傷に追い込み、二戦目はジャーマンでKO。強烈無比なパンチと、無表情で腕を前に垂らしたノーガード殺法で、殺気と幻想をまき散らしている。

初代CAGE FORCEライト級王者となり、パンクラスでもタイトルマッチを経験。07年7月に急遽『HERO'S』に参戦しアンドレ・ジダにKO負けも、これは4日前のオファーであったことから、ジダとのリベンジ戦も熱望中。秘密主義な姿勢でDREAMのリングを"悪夢色"に染めるのか?

宇野薫
CAOL UNO





所属	和術慧舟會 東京本部
生年月日	1975年5月8日(32歳)
出身地	神奈川県
身長	171cm
バックボーン	レスリング
MMA戦績	36戦23勝9敗4分
ニックネーム	総合格闘技のパイオニア

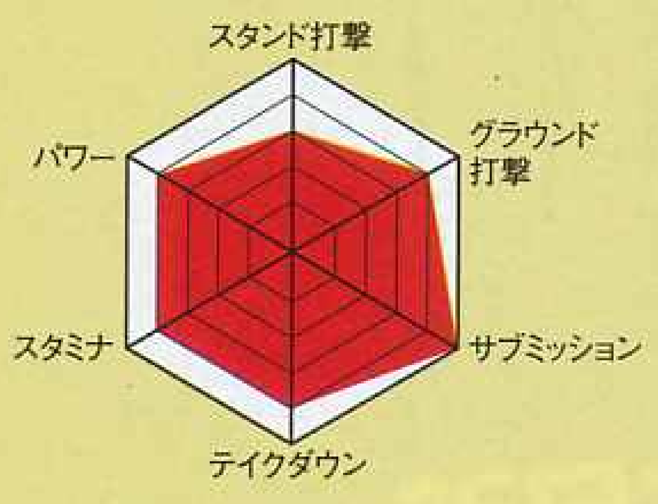
タイトル歴
第4代修斗ウェルター級王者
HERO'S 2006ミドル級世界最強王者決定トーナメント準優勝

『HERO'S』の本格派大ベテランがGP初制覇へ

『HERO'S』きっての本格派であり、キャリア12年を誇る宇野薫は、最年長選手として参戦に期待がかかる。

バランスのとれたスタイルと圧倒的なスタミナを誇るオールラウンドファイターとして、安定感は抜群。修斗では、佐藤ルミナを破って第4代修斗ウェルター級王者となって一時代を築き、UFCでは3度のタイトルマッチも経験した"総合格闘技界のパイオニア"。『HERO'S』では3年連続でミドル級世界王者決定トーナメントに参加。06年は準優勝、05年、07年はベスト4に進出。修斗時代に川尻との対戦経験(引き分け)はあるものの、交わることのなかった旧PRIDE勢との遭遇となれば刺激的なものになることは間違いない。

ビトー・"シャオリン"・ヒベイロ
VITOR "SHAOLIN" RIBEIRO





所属	ノバウニオン
生年月日	1979年2月24日(29歳)
出身地	ブラジル
身長	173cm
バックボーン	ブラジリアン柔術
MMA戦績	21戦19勝2敗
ニックネーム	柔術皇帝

タイトル歴
第7代修斗世界ライト級王者
第3代CAGE RAGE世界ライト級王者

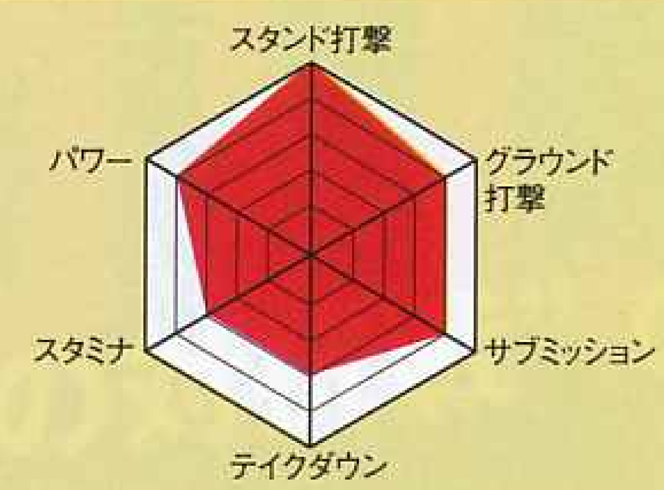
柔術界の"レジェンド"が夢舞台で猛威を奮うか!?

昨年の『HERO'S』ミドル級トーナメントでは準決勝でカルバンの打撃ラッシュの前に秒殺負け! 一時は失明危機もささやかれたものの今GPで復活が期待されるシャオリンは、いまも「ブラジリアン柔術界の最高の選手」と評される"レジェンド"な柔術家。

MMAでもCAGE RAGE、修斗で王者となった超本格派。勝利のほとんどは一本勝ちであり、そのスタイルは打撃が重要視されるMMAにおいて、異質なほど柔術的な色を強く残している。

カルバン、川尻、石田、ハンセン、宮田とは対戦経験あり、その内4人から勝利(川尻とは1勝1敗、カルバンには敗北)。持ち前の極めの強さを発揮すれば、確実に上位に食い込む実力の持ち主だ。

エディ・アルバレス
EDDIE ALVAREZ





所属	ファイト・ファクトリー
生年月日	1984年1月11日(24歳)
出身地	アメリカ
身長	177cm
バックボーン	レスリング
MMA戦績	13戦12勝1敗
ニックネーム	MARS育ちの突貫小僧

タイトル歴
リアリティ・ファイティングウェルター級王者
MFCウェルター級王者

新世代の突貫小僧、一気に大化けの可能性も

MARS、bodogを経由して活躍する24歳のニューカマー。マシンガンラッシュを武器にアメリカでも絶賛進撃中。

03年にプロデビューをはたして以来、07年にニック・トンプソンに敗れるまで、デビュー10戦10勝10KOと怒濤の勢いで勝ちまくり、MFCではウェルター級王者に輝いている。KO&一本勝ち率はなんと90パーセント超え。06年にはMARSに来日、相手を秒殺して実力を証明、現在はbodogからエリートXCに移籍し、中規模のMMA大会ではメインイベンターとしても登場。

本来階級が上の77キロから徐々に減量して闘っており、満を持してのメジャー舞台登場となるか。"夢の舞台"でも突貫小僧の大暴れが観てみたい!!

※編集部の予想する有力出場選手は、全カード発表前の3月4日時点のものです。あらかじめご了承ください。

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ! kamipro booksインタビューの死闘目撃者になれ!!



吉田豪セメント
インタビュー11連発!!
プロレスインタビュー本の
最濃傑作!

★ストロング小林★田代まさし★猪木快守★イーデス・ハンソン★阿修羅原★鶴見五郎★サムソン・クツワダ★康芳夫★倉持隆夫★田中健一★小川宏

プロインタビュアーの吉田豪が『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビュー——数十本に及ぶその一部を完全徹底再録!! これは"下調べの鬼"が挑む、時間無制限オールセメントマッチだ!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円(本体1,800+税)



夕焼けがよく似合う
人生のガチンコ勝負!!
プロレス狂がシビれる
凄玉たちの
壮絶インタビュー集!

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武志★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

プロレス狂の胸躍る詩が聞こえてくる——!! プロレスラーや格闘家はもちろん文化人、著名人まで、『kamipro』誌上にて掲載されてきた、濃厚インタビューから特別厳選収録!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円(本体1,800+税)



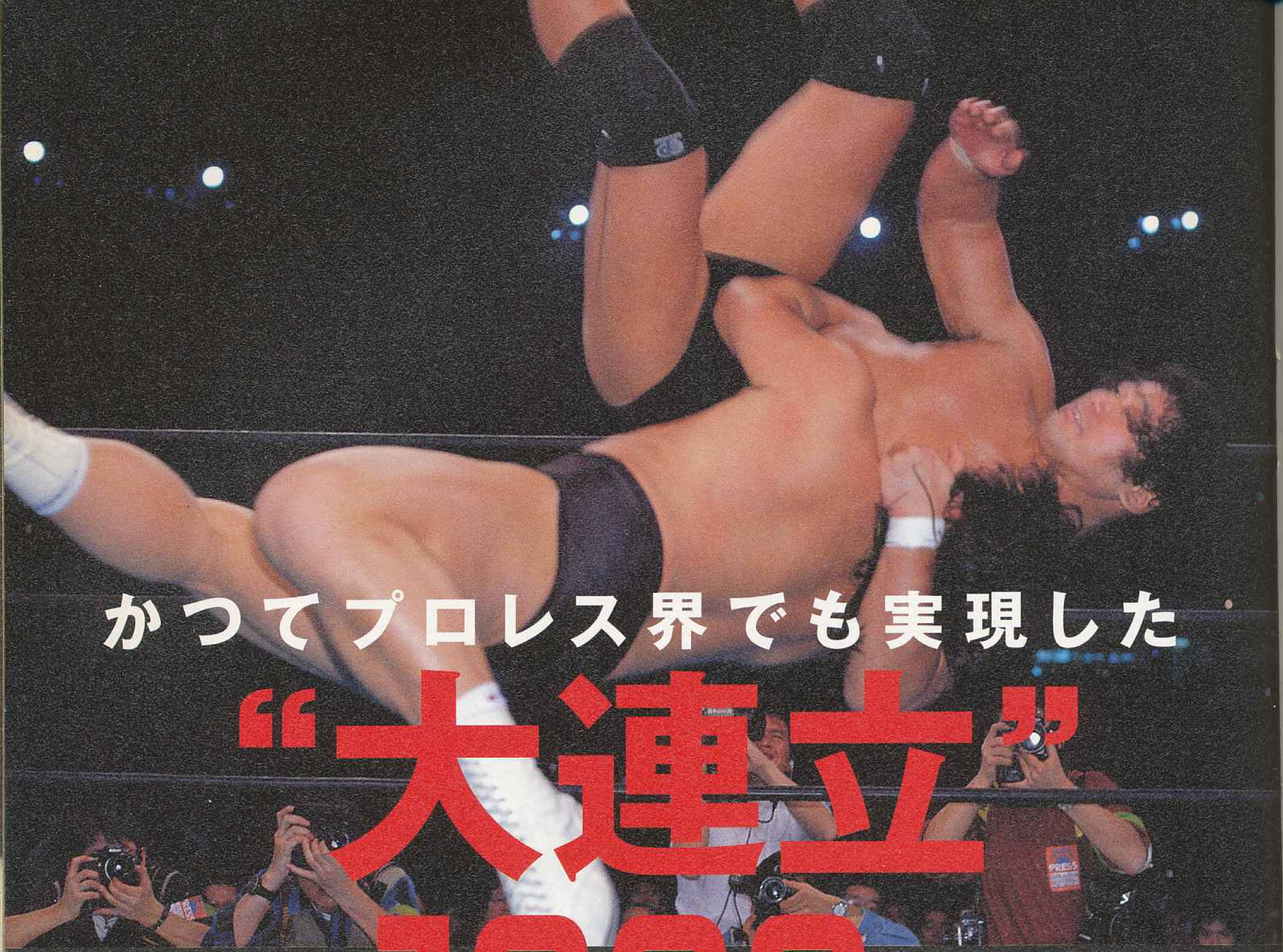
泣けて笑える
トンパチエピソード満載!
またまた時は来た!
橋本真也三回忌追善本

★橋本大地★藤波辰爾★天山広吉★西村修★馳浩★スティーブ・コリノ★田中秀和★田山正雄★ライガー夫人★折鶴兄弟★AYAMI★紅蘭のマスター★佐藤正行★金沢克彦　ほか

破壊王本第二弾!!"愛すべき馬鹿"橋本真也を多くの"証言者"が語り尽くす! 破壊王の原点とも言うべき新日本プロレスの選手・関係者や破壊王ファミリーらが、いまだ知られざる破壊王のバカネタを大放出した珠玉の一冊!!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)[通信販売のお問い合わせ先] http://www.enterbrain.co.jp/



かつてプロレス界でも実現した

“大連立”

1990.2.10 東京ドーム

新日本 VS 全日本 “夢の対抗戦”の真実

発掘検証特集

2月14日（水）
PM7:30〜PM9:00
水曜スーパーテレビ
TV朝日にて放映

が最も幸せだった日
ームとは
たのか？

1990.2.10 新日本プロレス 東京ドーム

【スーパーファイトIN闘強導夢】
観衆63,900人（主催者発表）

1.30分1本勝負
○飯塚孝之 vs 松田納×
（10分49秒、ブリザード固め）

2.タッグマッチ30分1本勝負
○佐野直喜&ペガサス・キッド vs 獣神サンダー・ライガー&野上彰×
（16分57秒、タイガースープレックスホールド）

3.6人タッグマッチ30分1本勝負
○後藤達俊&ヒロ斎藤&保永昇男 vs 馳浩&小林邦昭&星野勘太郎×
（13分20秒、片エビ固め）

4. 45分1本勝負
○ブラッド・レイガンス vs ビクトル・ザンギエフ×
（6分13秒、回転首固め）

5. 45分1本勝負
○スティーブ・ウィリアムス vs サルマン・ハシミコフ×
（9分0秒、片エビ固め）

6. AWA世界ヘビー級選手権試合・60分1本勝負
○マサ斎藤 vs ラリー・ズビスコ×
（14分29秒、首固め）
※マサ斎藤が第40代AWA世界ヘビー級王者となる

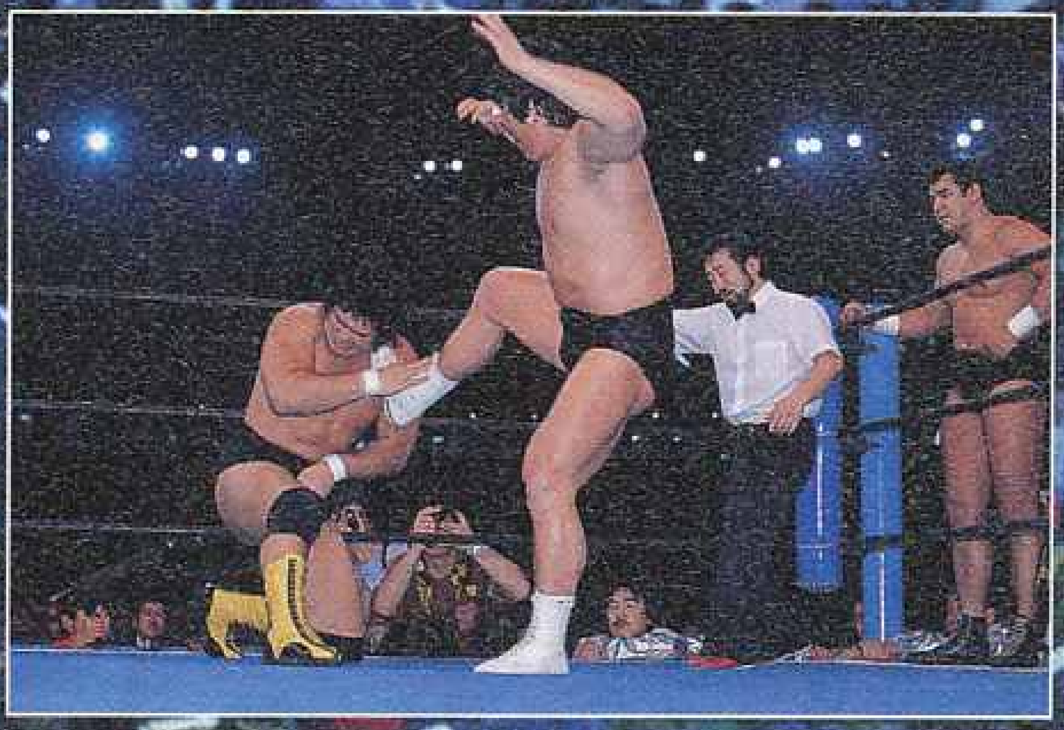
7. 新日本プロレス対全日本プロレス・タッグマッチ60分1本勝負
○ジャンボ鶴田&谷津嘉章 vs 木村健吾&木戸修×
（15分6秒、体固め）

8. 新日本プロレス対全日本プロレス・タッグマッチ60分1本勝負
○タイガーマスク&天龍源一郎 vs 長州力&ジョージ高野×
（18分59秒、リングアウト）

9. IWGPヘビー級選手権試合・60分1本勝負
△ビッグバン・ベイダー vs スタン・ハンセン△
（15分47秒、両者リングアウト）
※ベイダーが3度目の防衛に成功

10. 60分1本勝負
○北尾光司 vs クラッシャー・バンバン・ビガロ×
（9分58秒、体固め）

11. タッグマッチ60分1本勝負
○アントニオ猪木&坂口征二 vs 橋本真也&蝶野正洋×
（15分43秒、体固め）





旧PRIDEとK－1（FEG）が歴史的な〝合体〟をはたして実現した、俗にいう〝格闘大連立〟。これは昨年の大晦日、『やれんのか！』を共催することでスタートし、今年に入り新イベント、DREAM誕生ということで実を結んだ。

これまで決して交わることがなかった〝二大メジャー〟が融合することで、日本格闘技界の再興が期待されているが、これとちょうど同じような図式の歴史的合体が、かつてプロレス界でも実現した。

それが90年2月10日、新日本プロレスの東京ドーム大会に全日本プロレスのトップレスラーが多数参戦した『スーパーファイトIN闘強導夢』だ。

この前年、89年4月24日に新日本プロレスはプロレス界で初めて東京ドームに進出。当時は1万人収容の両国国技館を埋めるのもやっとだった時代、その5倍のキャパを誇るドーム進出はあまりに無謀と言われたが、予想を上回る5万3800人（主催者発表）の大観衆を動員し、見事に大会を成功させた。

その成功を受けて、新日本は翌年もドーム第2弾の開催を決定。しかし、この時期はまだ「プロレス冬の時代」と言われていた頃。ドーム第1弾こそ、〝初物〟として客が集まったが、2回目の観客動員は苦戦必至と見られていた。しかも、当初はアメリカのメジャー団体でグレート・ムタに変身して大ブレイクしていた武藤敬司を凱旋帰国させ、リック・フレアーに挑戦させるNWA世界ヘビー級選手権を目玉としていたが、NWA側のスケジュールの都合で、白紙となってしまったのだ。

大会を目前に控えて目玉カードが消滅するという大ピンチに、新日本の社長に就任したばかりの坂口征二は、全日本プ

“大連立” 1990.2.10 東京ドーム

発掘検証特集

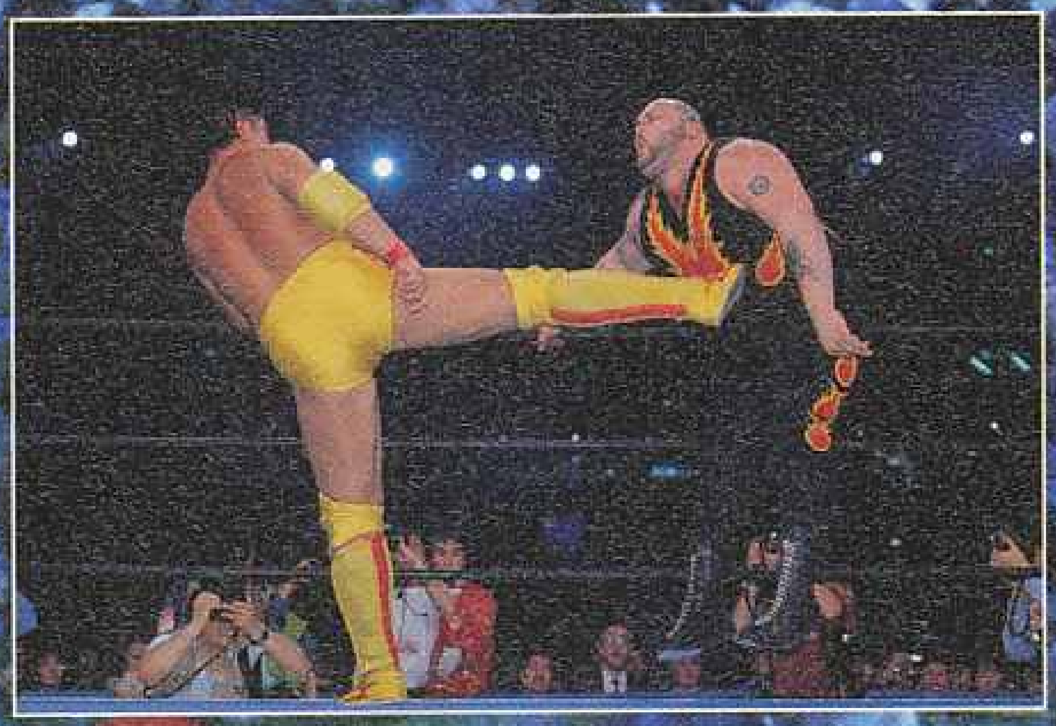
プロレスファンが最

2.10ドー

何だった

90年代のプロレス人気爆発はここから始まった！

文／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄





ロレスの御大、ジャイアント馬場に協力を要請。馬場はこの要請を快諾し、全日本プロレスのトップレスラーであるジャンボ鶴田、天龍源一郎、スタン・ハンセンらの出場が電撃決定した。


この当時のプロレス界といえば、長らく馬場—猪木の対立から全日本と新日本は過剰なほどのライバル関係にあった。ファンも馬場派、猪木派に二分。この二つが交わることはプロレスファン長年の夢ではあったが、それは実現せぬものとして半ばあきらめていたことでもあった。このあきらめかけた夢が急に実現したことに、プロレスファンは狂喜。

2・10ドームのチケットは飛ぶように売れ始め、最終的には6万3900人（超満員札止め＝主催者発表）の大観衆でドームが埋めつくされたのだ。

大会も天龍&タイガーマスクvs長州&ジョージ高野、鶴田&谷津vs木村&木戸、ハンセンvsベイダーの3大対抗戦を軸に、元横綱・北尾光司のデビュー戦、マサ斎藤のAWA世界王座奪取、猪木&坂口vs蝶野&橋本など、歴史に残るような闘いが続出しておおいに盛り上がり大成功（余談だが、アントンの「1、2、3、ダーッ!」はこの日に生まれた）。

しかし、その一方で新日本vs全日本の対抗戦はギクシャクした内容となり、対抗戦の難しさも露呈することとなったのだ。ただ、この夢の対抗戦が起爆剤となって、90年代のプロレス人気爆発につながったのは間違いないこと。

大連立の難しさと劇的な効果の両方を見せてくれた、2・10ドーム夢の対抗戦。このとき何が起こっていたのか？　それを知ることは、いまの〝格闘大連立〟を考える上でも大きなヒントとなるはずである。



新日本2・10ドーム出陣、天龍同盟解散
全日本プロレス離脱、SWS移籍……
この男の決断がプロレス界を揺るがせた！

“大連立”
1990.2.10 東京ドーム
発掘検証特集

風雲児が駆け抜けた激動の時代

1990年の天龍源一郎

プロレスの一大転換期となった1990年。その1年はこの男にとっても激動の年だった。新日本の2.10東京ドームに全日本代表として出場。そして天龍同盟を解散して、SWSへ移籍。“大連立”から企業も巻き込んだ他団体時代へ。この男の決断と行動が、プロレス界を揺り動かし、新たな時代の扉が強引にこじ開けたのだ。その凄まじい1年をいまこそ振り返ってみよう。

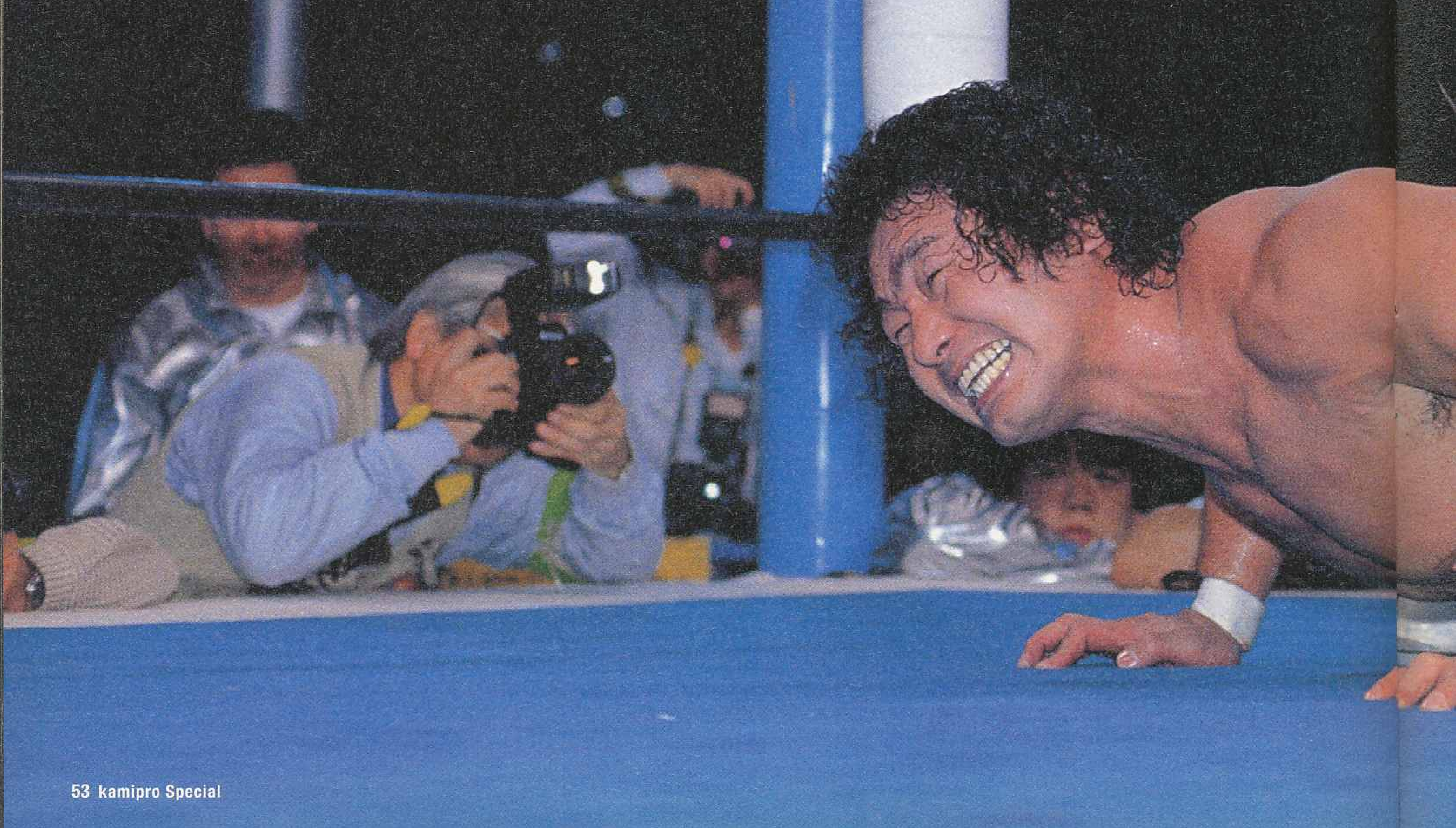
文／小佐野景浩　撮影／平工幸雄　構成／堀江ガンツ

1990年は日本プロレス史を紐解くと本当に凄い年だった。年明け1月4日に全日本プロレスの馬場社長と新日本プロレスの坂口社長が記者会見を行なって「ベルリンの壁は崩れた！」と両団体の協調路線を発表。これを受けて新日本の2・10東京ドームに全日本勢が参戦するというプロレスファンの長年の夢が実現した。4月13日にはWWF（現WWE）、全日本、新日本の3団体共催による東京ドーム興行『日米レスリング・サミット』も実現している。

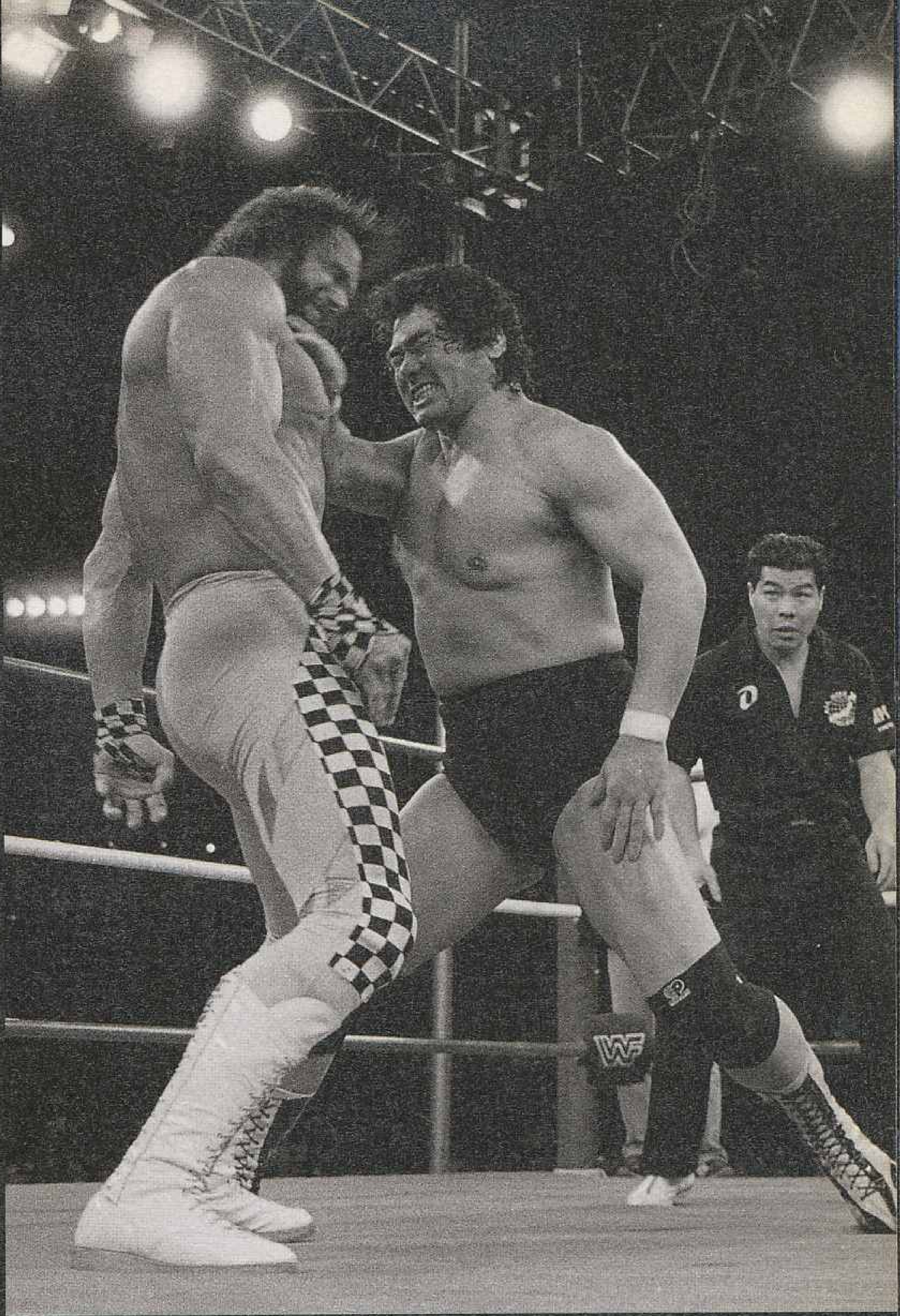
さらにはプロレス業界を震撼させる大事件も起こった。メガネスーパーという異業種のプロレス界参入がそれだ。メガネスーパーは豊富な資金力をバックに5月にSWSなる団体の設立を設立。選手を引き抜かれた全日本と新日本はスクラムを組んで企業防衛策に出た。

こうした90年の一連のドラマチックな流れのすべてに絡んでいたのが天龍源一郎だ。

1990年に突入した時点で、ハッキリ言って天龍は目標を見失っていた。全日本を活性化させるためのレボリューションも2年半をすぎ、当初は後楽園ホールを満員にすることが目標だったのが、日本武道館も満員になるほど盛況になったし、「本気にさせる」としていたジャンボ鶴田も覚醒して怪物ぶりを発揮、三冠王者に君臨していた。天龍自身は前年の89年11月29日に札幌中島体育センターで『最強タッグ』の公式戦ながら、ジャイアント馬場をフォールするという偉業を成し遂げ、

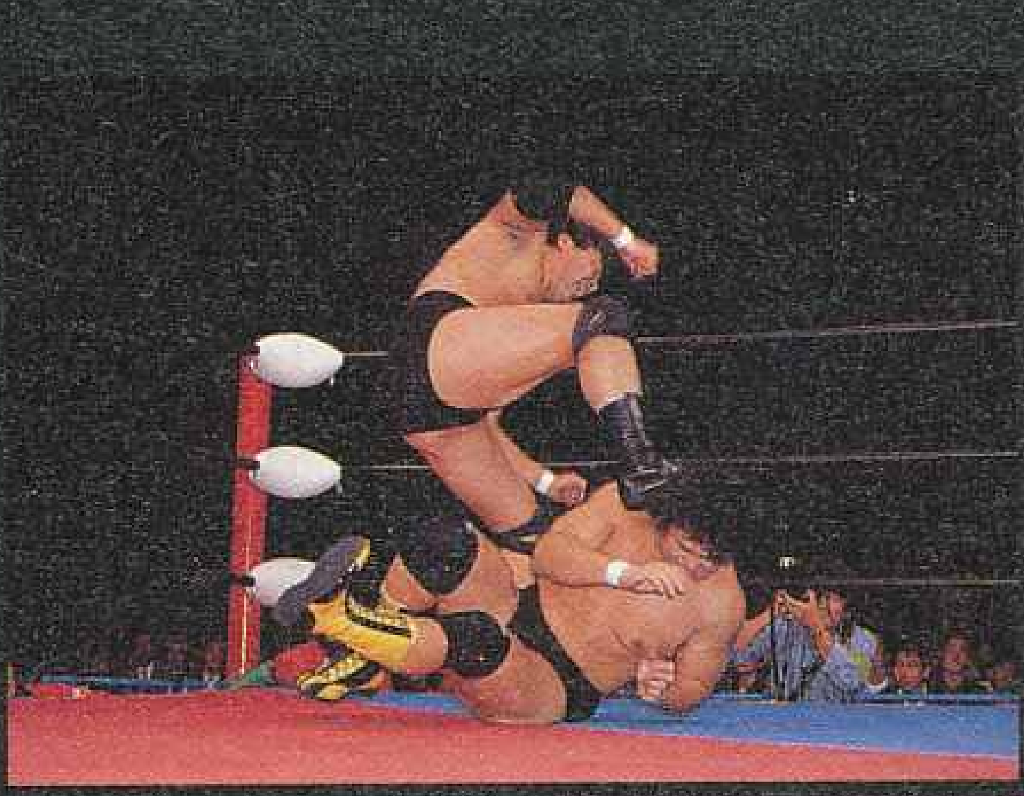


89年プロレス大賞のMVP、ベストバウト（6・5日本武道館で鶴田から三冠王座を奪取した試合）のダブル受賞で、まさに頂点を極めて、やることがなくなってしまったのだ。
反骨精神、不平不満をエネルギーに変えてファイトしてきた天龍にとって、一番苦痛なのは満たされてしまうこと。年が明けた天龍は、なりふりかまわず新しいターゲットを探した。それはナマクラと呼ばれていた〝未完の大器〟高木功（嵐）であり、左ヒザ手術から10ヵ月ぶりにカムバックしたタイガーマスク（三沢光晴）であり、ベテランのマイティ井上、ラッシャー木村だ。
全日本の将来を担う若手の底上げ、埋もれているベテランに光を当てるという役割りを買って出ると同時に「もう天龍同盟は必要ないでしょう。いまの人気は天龍同盟のおかげではないし、そろそろ正規軍に戻しては……」という全日本内部の空気への反発、天龍同盟と自分自身の存在価値を知らしめるために天龍は彼らとムキになって闘った。
「べつに天龍同盟がなくたって大丈夫なのはわかっているし、役目も終わったと思っているよ。でも、なし崩し的に取り込もうという会社の空気が嫌なんだよ。冬木と川田は正規軍に戻ったほうがのびのびやれると思うけど、俺はハンセンと組んだりとか、反体制でいたい。そうでないと、いままでやってきたことを埋没させられちゃうと思うんだよ」
という天龍のコメントが当時の取材メモに残っている。
そんな天龍にとっての一つの光明は、新日本の2・10東京ドームに出場して長州と3年ぶりにタッグで激突することだった。87年6月に阿修羅・原とレボリューションを宣言したときに掲げた「最終目標は新日本に上がって長州と闘うこと」が実現するのだ。このときばかりは天龍同盟の看板をあえて引っ込め、正規軍のタイガーマスクをパートナーに〝全日本代表の天龍〟として出陣した。
「おまえが〝夢がない〟と言って去った全日本を背負って闘ってやる。



90年4月13日、東京ドーム。WWF(現WWE)日本上陸に全日本と新日本が協力した『日米レスリング・サミット』。そこで天龍はド派手なランディ・サベージと対戦。無骨な天龍と典型的なアメリカンプロレスの激突は当初ミスマッチと思われたが、見事な融合をはたし、いまでも語り継がれる名勝負となった。

俺の3年間の生きざまをガッチリ見せつけてやるよ！」
という天龍の言葉は最高にカッコよかった。
だが、いざ闘ったあとに天龍に残ったのは失望だけだった。新日本主催の興行にもかかわらず自分たちの我ばかりを通す観客不在の長州とジョージ高野のファイトもそうだし、長州がオイルを塗ってきたことについても〝プロレスラーとしての俺をそんなに信用できないのか⁉〟とショックを受けたという。
この東京ドームの5日後、私は『週刊ゴング』で天龍にインタビューしたが、
「何もなかったね。やっぱり俺は全日本プロレスが好きだよ。これだったら全日本の次の世代が育ってくるまで向かい風になっているほうが性分に合っているよ」
と、怒りを通り越して冷めた表情だったのが記憶に残っている。「1回しゃべれば、もう充分だな。ほかにもインタビューの申し込みがあるみたいだけど、次にしゃべったら、もっと言葉がきつくなるかもしれないから」と言っていたから、2・10東京ドームについてインタビューに応じたのは、この一回きりだったと思う。
新日本のリングに次の夢が見られなかった天龍はジワジワと追い込まれていく。
3月6日の日本武道館ではスティーブ・ウイリアムス&テリー・ゴディに世界タッグ王座を奪われた挙句、パートナーのスタン・ハンセンと仲間割れ。ここでジャンボ鶴田が天龍の救出に駆けつけて〝天龍、正規軍入りか？〟というシチュエーションが生まれた。天龍はブルロープを振り回してハンセンと鶴田の二人を蹴散らして流れに反発したが、もはや〝大きな力〟が働いているのは明白だった。さらに3月末に行なわれた契約更改も天龍の心を重くした。私も含めた親しい記者に、
「俺は会社に評価されてないよ。まあ、俺はいいにしても、俺に毎日のように怒鳴られながら、必死についてきた冬木と川田のギャラも上げてやれないんだから情けないよ。もうあいつらを〝それでもメインの試合か⁉〟なんて引っぱったらかわいそうだ」
と漏らすなど、明らかに天龍は疲弊していた。そんな天龍の鬱屈した感情が爆発してしまったのは4月4日の小倉大会後の居酒屋でのこと。
この日は天龍同盟初期に『東スポ』で担当していた柴田惣一記者がひさしぶりに取材に来て、例によって試合後の宴会となった。



90年4月19日、横浜文化体育館。天龍同盟を解散した天龍は、ジャンボ鶴田の三冠ヘビー級王座に挑戦。しかし、バックドロップホールドで完敗。この一戦を最後に全日本プロレスを離脱した。



「天龍さん、ひさしぶりに天龍同盟の試合を見たけど、何かつまんないですねぇ」と、柴田記者。天龍が「冬木や川田も疲れていて……」などと説明するが、少し酔った柴田記者は聞く耳を持たずに「でも、おもしろくない！」と一歩も退かない。そうこうしているうちに遂に天龍が「これだけ言ってもわかんねぇのか、この野郎！」とテーブルを引っくり返し、柴田記者に蹴りを入れるや「帰る！」と財布を投げ出してホテルに帰ってしまったのだ。

天龍が関係者に手を上げたのは、私の記憶の中ではこのときだけだ。それだけ痛いところを突かれたのだろう。翌5日、天龍と柴田記者は和解、別府大会終了後に宿泊先の旅館で仲直りの宴会となったが、オフ日を置いた7日の高知・十和村大会の試合前に天龍は天龍同盟の解散を発表。巡業先に電話を入れると、


全日本プロレスを離脱した天龍は、メガネスーパーが親会社となった新団体SWSに移籍を発表。当時、『週プロ』でターザンがネガティブ・キャンペーンを張ったため、天龍は大バッシングを受けたが、一般企業がプロレス界・格闘技界に参入する先鞭をつけたことで再評価もされている。

「昔から知ってる人間にああいうふうに言われたらね。シリーズ終了までやろうと思えばやれたけど、気持ちが決まっているのに続けているのは嘘をついてることになるから……」

と、天龍。これはのちにわかったことだが、小倉でキレた前日、桜田一男（ケンドー・ナガサキ）が天龍に接触、メガネスーパー新団体への参加を打診していたのである。

メガネスーパーに行くかどうかはのちの問題だとしても……天龍は誰にも迷惑をかけず、どうにでも動けるように身軽な立場を取ったのだろう。その天龍の背中を押したのは、4月13日の東京ドームにおける『日米レスリング・サミット』でのランディ・サベージ戦だったと思う。

エンターテインメント・プロレスの代表のようなサベージと天龍が噛み合うのかが焦点だったが、これが見事にスイングした。女性マネージャーのシェリー・マーテルとの絡みも含めて、日本人対決とは違う天龍の魅力が発揮された。後日、SWS設立会見に出席した際に天龍は「これからはカラッと激しいプロレスを目指します」と発言したが、このサベージ戦によって、それまでの約3年間のレボリューションとは違う自分の可能性を見出したのではないだろうか。

このサベージ戦の3日後の4月16日、大阪府立体育会館で私は天龍からとんでもないことを打ち明けられた。天龍同盟解散後だから控室は天龍一人きり。そこで「ジャンボに負けたら……辞めるよ」と独り言のようにポツリと言ったのだ。少し間を置いて「これは内緒だぞ」と含み笑い。本気とも冗談ともつかない口調だったが、私はそれまでの経験から、天龍が大事なことに限ってサラリと言うことを知っていた。

はたして、天龍は4月19日、横浜文化体育館での鶴田との三冠戦で敗れた。私は天龍発言を誰にも言わないで内緒にしていたが、こうなると報道しないわけにはいかない。4月25日発売の『週刊ゴング』306号には『横浜決戦3日前、天龍が本誌記者に独白――「ジャンボに負けたら俺は辞める！」そして天龍は敗れた……』という見出しが躍った。

当時、私は天龍とメガネスーパーが接触していたことはまったく知らなかった。だが、この号の発売翌日の4月26日に天龍は全日本を退団。結果的に〝一日早いスクープ〟となり、この記事によって『週刊プロレス』には「小佐野は天龍のメガネスーパー移籍を知っていた」と誤解され、当時編集長だったターザン山本!氏のヒステリックとも思えるバッシングにつながるのだ。

私は、天龍がもがき苦しんで起こした行動によって90年の日本プロレス界には数々の話題が生まれ、SWSという最終的な決断は、いまとなってみれば日本プロレス界を前進させたと思っている。レボリューションによってレスラーの意識改革をし、SWSによって企業という意識をプロレス業界に持ち込んだ天龍源一郎は紛れもなく革命児であった。

ジャイアント馬場の側近が語る

2.10 新日本vs全日本 水面下の攻防



全日本プロレス レフェリー

和田京平

全日本プロレスのトップ勢が大挙参戦! 奇跡的な盛り上がりを見せた2.10東京ドーム大会。だが"祭り"の水面下では両団体の心理戦と言ってもいい激しいつばぜり合いが展開していた。当時、ジャイアント馬場の側近だった和田京平レフェリーが至近距離で見た対抗戦の真相とは?

聞き手/堀江ガンツ 撮影/平工幸雄

——今日はですね、90年2月10日の新日本プロレスの東京ドーム大会に全日本プロレスがトップレスラーを派遣したという、当時としては奇跡的な出来事の舞台裏をうかがいたいと思います!

和田 ずいぶん昔の話だねえ(笑)。もう18年も前か……。だいぶ忘れちゃったけど、思い出しながらしゃべりますよ。

——よろしくお願いします(笑)。

和田 まずね、当時の感覚からすると、東京ドームでやること自体がとんでもないことですよ。日本武道館でやるだけで大変なことだったんだから。

——当時はそうですよね。全日本だったら年4回の武道館が頂点だったのに、ドームは武道館の4倍のキャパですからね。

和田 全日本ものちにドームでやりましたけど、いくらチケットを売ったって埋まらないんだよ。営業やって座席表のマスを埋めていくんだけど、「100枚売れた!」って喜んでも、ほんの一角ぐらい。(馬場)元子さんも「京平、私、200枚売ったのに、これだけしか埋まらないよ」って言ってたもんね。

——それぐらいドームでやるのは大変だ、と。

和田 だから東京ドームでやること自体が恐ろしかったよね。それをいち早くやった新日本さんは勇気があるというか、やっぱり凄い団体ですよ。で、たしか一回目はけっこう入ったんだよね?

——主催者発表で5万3800人。予想以上の客入りでしたよね。

和田 そして翌年もドームをやることになったあと、記者の人たちが「今回の東京ドーム、まったくといっていいぐらい売れてないみたいですよ」って話をしてたんですよ。それを聞いた馬場さんが「ふう〜ん、それじゃあもう終わりだな」って。

——これがポシャッたら新日本はおしまいだ、と。つまり「潰れるだろう」ってことですよね。

和田 だって東京ドームを借りるだけで億ですよ。それでお客さんが入らなかったら、億単位のお金がなくなるわけだから、その時点で貯えでもない限り絶対にアウト。だから「あ、潰れちゃうね」っていう。

——当時は「プロレス冬の時代」とか言われてましたしね。そのときにドームのチケットが売れてないというのは、団体存亡の危機でもある、と。

和田 だから全日本プロレスとしては、正直に言えば「入らないでくれ」って思いますよね。

——業界ナンバーワンになる千載一遇のチャンスですもんね。

和田 やっぱり、観客動員、会社の規模なんかも含めて当時は新日本のほうが上だったからね。だから、そんな新日本がコケそうになってたら「よし!」って思うのが本音じゃないかな。

——チケットが売れてなくて、しかもメインカードのリック・フレアーvsグレート・ムタが中止になるという大ピンチに陥りましたよね。それなのに、なぜ馬場さんは新日本を助けたんですか?

和田 これはあとから聞いたんだけど、やっぱり新日本が潰れたら、プロレス界自体がダメになっちゃうんですよ。全日本と新日本が競い合って成り立ってたのがプロレス界だったからね。

——なるほど、なるほど。

和田 でも、猪木さんが社長だったら、馬場さんは手を出してないと思う。信用がある坂口さんが社長だったから助けたんですよ。

——坂口さんはいいけど、猪木さんは信用ならない、と(笑)。

和田 いろいろあったからね(笑)。あと馬場さんと坂口さんは日本プロレス時代から仲が良かったんだよね。だから、坂口さんがキャピトル東急ホテルまで来て、「選手を貸してください」ってお願いに来たとき「おまえの社長就任祝いとして応援してやるか」って、OKしたんだよね。

——二人の絆が生んだ大英断だった、と。あの頃、全日本と新日本の対抗戦なんて夢のまた夢みたいな感じだったのに、それが突然実現したっていう、そのインパクトたるやなかったですよね。

和田 ホント凄いよね。いまは武藤社長が新日本のドームに出たりとか、トップが他団体に出るのもあたりまえになっちゃったけど、当時のプロレスを知ってる人だったら、全日本と新日本のトップがやり合うなんて、ありえないことだよね。中堅レスラーを貸すぐらいならわかるけど。ジャンボ鶴田、天龍源一郎にスタン・ハンセンだからね。

——二枚看板とガイジンエースです

馬場さんは直前になって頼みごとをされないように、アメリカに行った

もんね。そして対戦カードは天龍&タイガーマスクvs長州&ジョージ高野、鶴田&谷津vs木村&木戸、そしてベイダーvsハンセン。

和田　凄いカードだよ。あのときベイダー、顔をボコボコにされたんじゃない？

――ハンセンのナックルで片目が見えなくなるほど腫れ上がったんですよね。

和田　両団体のガイジンのトップ同士だからね。意地の張り合いをしてたけど、そこまでやるハンセンはすげえなと思ったよ。

――もちろん日本人同士にも意地の張り合いはあったんですよね？

和田　やっぱり、この対抗戦が決まったとき「新日本と全日本がやってうまくいくの？　レスリングになるの？　ガッチガチの試合になるんじゃないの？」って思ったよね。でも、そういう考えは新日本サイドが持ってたんじゃないかな。全日本のレスラーは、普通にアメリカに行ってレスリングをするぐらいの闘いをしたかったと思うんだけど。

――ちゃんと「いい試合」をしようとしていた、と。

和田　だからドーム大会当日、馬場さんはアメリカに行ってて会場には来てなかったんだけど、俺は「ちゃんと観ておけよ」って言われて、控室に待機してたんだよね。

――向こうがへんなことを仕掛けてこないかどうか、ちゃんとお目付役として行ったわけですか。

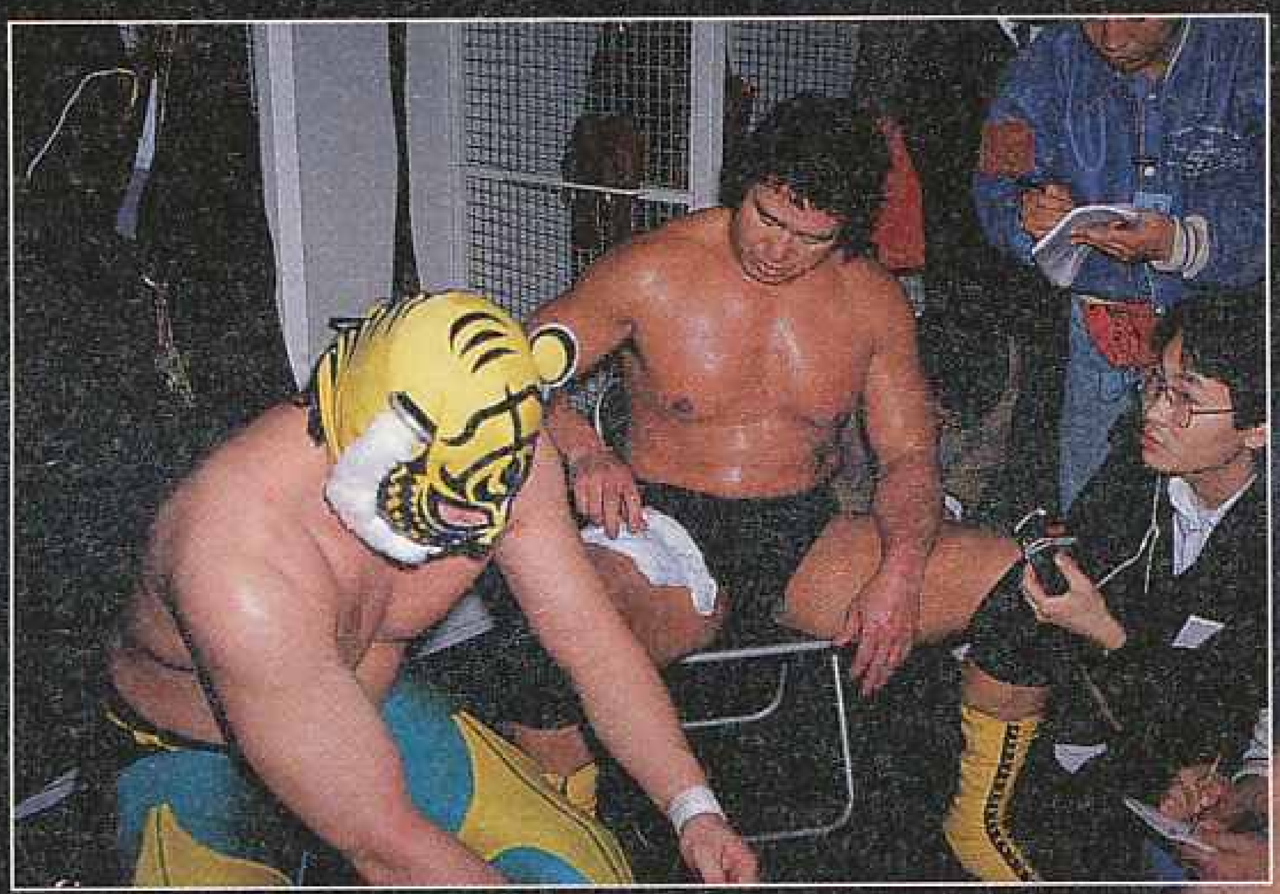
和田　うん。万が一、何かあったらすぐにアメリカに連絡できるような態勢をとってね。要は馬場さんは坂口さんの頼みはご祝儀としてOKしたけど、こと試合に関しては信用してなかったからね。だから、わざとアメリカに行く用事を作って、会場には来なかったんだよ。「俺が（会場に）いたら、また頼みごとが絶対にくるから」ということでね。

――直前のドタバタの中でムチャなことを言ってくるだろう、と。

和田　うん。直前になって対戦相手を変えてきたり、いろんなことを引っくり返そうとする。「それが向こうの手なんだ」「俺はいつもそれで騙されるんだよ」って言ってましたね。それで嫌な思いはしたくないからアメリカに行ったんですよ。ただ、「おまえはみんなのそばにいてくれや」って、ボクを控室に行かせて。それで「まあ観ててみ」って、ニヤッとして旅立ったよね。

――実際、馬場さんの予想どおり、天龍&タイガーvs長州&ジョージは、かなりメチャクチャな試合になりましたよね（笑）。

和田　それが向こうのプライドなんじゃないの？　全日本ならありえないような試合になったよね。



大注目の中、行なわれた天龍源一郎&タイガーマスクvs長州力&ジョージ高野の一戦は、新日本側の手数が目立つギクシャクした展開に。試合後の天龍組は思うような試合ができなかったことに憮然とした表情でコメントを残した。

――とにかく技を出していいとこ取りして、逆に相手の技は受けないという（笑）。

和田　ホントいまだから言えるけど、新日本のレスラーは身体にオイル塗ってきたもんね。

――オイルまで塗ってきましたか！

和田　俺は実際にレフェリーやったわけじゃないけど、控室に帰ってきたレスラーが「汚ねえなあ」って言っててね。「どうしたんですか？」って聞いたら「オイル塗ってんだよ！　そんなに怖いのかなあ」って。

――長州力もすっごいすべってたわけですね（笑）。

和田　もしかしたら、最近のレスラーがやるみたいに、自分の筋肉をよく見せようと思ってオイルを塗ったのかもしれないけど、当時の全日本で塗ってる選手は一人もいなかったから。やっぱりオイルなんか塗られたら、ロープはすべるし、技だってすっぽ抜けちゃうから、やりづらいと思うんだ。だから、身体をよく見せるために使うこともあるだろうけど、当時はホントに企業を挙げての闘いだったから、どうしても向こうは塗らざるをえなかったんじゃないかな。

――たとえ試合では負けても、観客には自分たちが強かったように見せる。当時はホントの意味で対抗戦であり、潰し合いだったわけですね。

和田　うん。それに全日本のスタイルは受けのレスリングだから。それに対して新日本は休む間もなく攻めるレスリングだから、それが強く見えたんだろうな。だからよく「全日本は弱いな」って言われたけどね。その「弱いな」と言った人に控室でどっちが息が上がってるか見せたかったね。でも、当時はわかってもらえなかったよ。

――どうしても全日本がやられっぱなしというふうに見えちゃいましたよね。

和田　だから、ドームの試合にしても、向こうが攻めるばかりの試合になって、ドームに来た全日本ファンは歯がゆかったんじゃないかな。ホントは受けが大事なんだよって言っても、当時の新日本のファンにはわかってもらえなかったよ。全日本のスタイルというものを認めてくれなかったから。

――当時の新日本は「新日本こそナンバーワン。全日本なんてちんたらしてる」って考えのファンが多かったですよね。

和田　だから試合スタイルとお客さんの層がまったく同じなんだよ。全日本のファンは優しいお客さんばっかりでさ。新日本のファンにそういうことを言われても、じっと耐えてる人が多かったよね。

――確かに（笑）。

和田　でも、俺はそういう新日本のファンがいて、反対に全日本のファンがいる、そういう状況がよかったと思うんだよ。結局、新日本だ、全日本だといっても、どっちもプロレスファンなんだから。でも、ここ数年は、プロレスから離れてPRIDEやK−1に行ってしまうファンが多いでしょ。それが一番イヤだったよ。そっちに流れたのは、全日本ファンより新日本ファンだったと思うけど、それでもプロレスファンが減ったことには変わりないからね。

――いい意味で二極対立が崩れてしまったわけですね。

和田　あのドーム大会っていうのは、いい意味での対立ができたいい時代だったんじゃないかな。やっぱりちゃんとした対立ができるには、各団体がしっかりしてなきゃいけないから。昔話もいいけど、これからの全日本にも期待してくださいよ（笑）。

――わかりました（笑）。どうもありがとうございました！

【08年1月20日／都内・シェラトン都ホテル東京にて収録】

“大連立”
1990.2.10 東京ドーム
発掘検証特集

“ゴッチの息子”がついに語った五輪コンビの本当の実力

「ジャンボ鶴田が『最強』っていうのはまったく違うよな」



インタビュー
木戸修

2.10東京ドームで当時の全日本の最強タッグ、ジャンボ鶴田&谷津嘉章を迎え撃ったのが木村健吾、そして木戸修だった。とくに木戸は鶴田と谷津相手に何度も脇固めを成功させ、ドームを熱狂させるなどMVP級の大活躍。“ゴッチの息子”が肌で感じた五輪コンビの実力をいまこそ直撃！

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

——木戸さんは、90年2月10日に東京ドームでやった、全日本との対抗戦は覚えてますか？

木戸　やったのは覚えてるけどね。いい試合だったなっていうことでね。

——全日本プロレスの選手とやるっていうことについて、当時どういうふうに思ってました？

木戸　べつにどうということもなく試合が組まれれば、やるしかないって感じかな。ただ、緊張感はあったよね。

——試合の結果はともかく、主導権の奪い合いみたいなものは、試合の中からも漂ってきましたよ。

木戸　あの試合、観た？

——観ました、会場で。

木戸　あのドーム大会では俺たちの試合が一番盛り上がったんじゃないの？


——そうですね、木戸さんが鶴田さんに脇固めを極めるたびにもの凄い盛り上がって。

木戸　なんか凄かったよね。だから自分では、試合は負けたけど、「いい試合だった」ってたくさんの人に言われたし、いいアピールができたという思いはあるよ。

——初めて鶴田選手と闘ってみて、どんな感想を持ちましたか？

木戸　やっぱり全日本プロレスのトップだからね、素晴らしい選手だとは思ったよね。あれだけ身体が大きいのに動けるし、身体も柔らかい。まあ、あたりまえの感想になっちゃうけども。

——当時、ジャンボ鶴田最強説というのがあったじゃないですか。



自分のペースで試合をすることが大事 ドームでは、それができたと思う

木戸 あ、そう言われてたの？

――はい。同じプロレスラーから見て、どう思いますか？

木戸 素晴らしい選手だとは思うけど、最強だとは思わないよな。それは違うだろ。

――では、木戸さんが一番強いと思った選手は誰ですか？

木戸 それはもちろんゴッチさんだよね。まあ、強さの基準が違うかもしれないけど。だから鶴田選手に関して俺が対戦してみて感じたことは、素晴らしいレスラーだということ。ただ、最強とかそういうのとは、まったく違うよね。

――つまり求めてる〝強さ〟の質が違う、と。

木戸 うん。だから自分が憧れたり、目標とするような選手とはちょっと違うよな。

――木戸さんにとって、憧れたり目標にしてたレスラーといえば、やっぱりゴッチさんなわけですか。

木戸 そうだよね。ゴッチさんにはなれないけどね。やっぱり普段からの練習に対する姿勢もそうだし、実際、ホントに「強いな」と感じる人だったからな。ただ、少し頭が固いから、プロの世界の世渡りという面で損してたけど、ただ強いだけじゃなくて、プロとしての試合もカッコよかったし、素晴らしい試合をしてたからね。「強い」というのは、ゴッチさんみたいなレスラーをいうんだと俺は思ってるから。

――懐に技術というナイフを忍ばせているというか、日々の鍛錬に裏打ちされた強さですよね。

試合で〝へんなこと〟を仕掛けられたとき実力がないヤツは惨めだよな



木戸　やっぱり本当の実力がないと、いい試合はできないんだよ。いまはどうかわからないけどさ、昔はそうだったから。やっぱり、いい試合をしてて、この人目立つなっていうのは、実力がある人だからな。

—それは、どんなことをされても大丈夫という自信があるから、なんですかね。

木戸　そうだよ。自信があるから、自分で好きなような試合ができるんだよな。だから、余裕のない人っていうのは、ただ焦ってさ、かき回されて終わっちゃう。まあ、俺なんかはそういうのは見ていればよくわかるから。

—鶴田さんはよく「余裕がある」って言われてましたけど、あれはかなり自信があったってことなんでしょうかね。

木戸　うん、そうだね。プロレスの試合っていうのは、いかに自分のペースでできるかってことだから。ドームの試合では、俺はそれができたと思ってるけどね。

—対抗戦の中で、自分の思いどおりの試合ができたわけですね。

木戸　そうだね。

—当時、「ジャンボ鶴田と前田日明はどっちが強い?」みたいな感じでよく比較されてましたけど、木戸さんから見ていかがですか？

木戸　それはやってみないとわかんないよね。ジャンボ鶴田とはあまり面識もないし、強さっていっても、さっきも言ったように強さの質も違うだろうしさ。



ジャンボ、谷津に次々と脇固めを仕掛けまくって、場内の新日本ファンから大喝采を浴びた木戸。夢の対抗戦という大舞台で、その秘めたる実力を存分に大爆発させた。

—前田さんの強さっていうのは、本職のレスラーから見て、どんなところですか？

木戸　前田もゴッチさんみたいな選手になりたいって思いが強かったから、若い頃はよく練習してたよね。それであの頃は上り調子だったからさ、ちょうど自信があった頃なんじゃないかな。

—誰とやっても怖いもの知らずな強さ。

木戸　うん。ちゃんと練習をやってるヤツはさ、若い頃、そういう時期がくるんだよ。誰が来ても何をされても大丈夫だっていう精神状態だから、試合でも強気に出れるし、そうすると客からも強く見えるしね。

—自信があるからこそ、リング上で強く見えるっていうのは、なるほどと思いますね。

木戸　前田なんかは、その自信があるから、いろんなエピソードもあるんだけどさ（笑）。

—ガハハハハ！　なるほど。自信がなかったら長州力にケンカを売らないでしょうからね（笑）。

木戸　そりゃそうだよな。だから、やっぱり道場の練習っちゅうのは大事だよ。べつに道場で練習した関節技を全部が全部、試合で出すわけじゃないけど、そういうものを持っているだけで自信になるし、自分の思うような試合ができるんだよな。だから普段練習をやってる人の強さっていうのは、試合にちゃんと出てくるよ。

—のちに第一次UWFに参加する選手は、新日本時代からとにかく練習量は凄かったらしいですね。

木戸　そうだね。みんなやってたよね。ゴッチさんみたいに強くなりたいってね。

—ただ、谷津さんなんかは、アマレスから新日本に入ったあと、「新日本の極めっことかバカらしくて、やってられない」とか言ってるんですよね。

木戸　あ、そう？　まあ、だからそれだけの選手にしかならなかったんじゃない？

—なるほど（笑）。

木戸　やっぱりほら、アマレスラーっちゅうのは関節技とかさ、〝悪い技〟を知らないからさ、いくらアマレスで強くても、そういうガチンコの強い人にはビビッちゃってダメだろうね。

—逆に知らないからこそ、やりたくないというのはあるかもしれないですね。

木戸　怖いんだろうな。だから、セメントの練習が嫌いな人は、ゴッチさんのことあんまりよく言わないよな。道場に来るヤツと来ないヤツって分かれるんだよ。プロレスの社会っていうのは、練習しないヤツでも試合ができちゃうしな。

—不思議なことに（笑）。でも、当時の新日本なんかは、やっぱり練習してる人は身体も違うし、試合にもそれが出てましたよね。

木戸　そうそう。やっぱり自信があるヤツは好きなような試合ができるけど、能書きばっかりのヤツは試合にもついていけないし、自分のいいところも見せられないしさ。ただやってるだけになるんだよ。しょうがないよ。

—木戸さんも試合の中で、試合というよりケンカみたいになったことはありますか？

木戸　やっぱ、そういうのはあるよ。外国人もへんなのいっぱいいるしな。だから、そういうの仕掛けられたとき、（シュートの）実力がないヤツは惨めだよな。

—されるがままになってしまう。

木戸　そこでガチーンとできないと、それからずっと好き放題やられちゃうんだよ。そうなるとカッコいいとこ全部持っていかれるし、上にもいけなくなるしね。

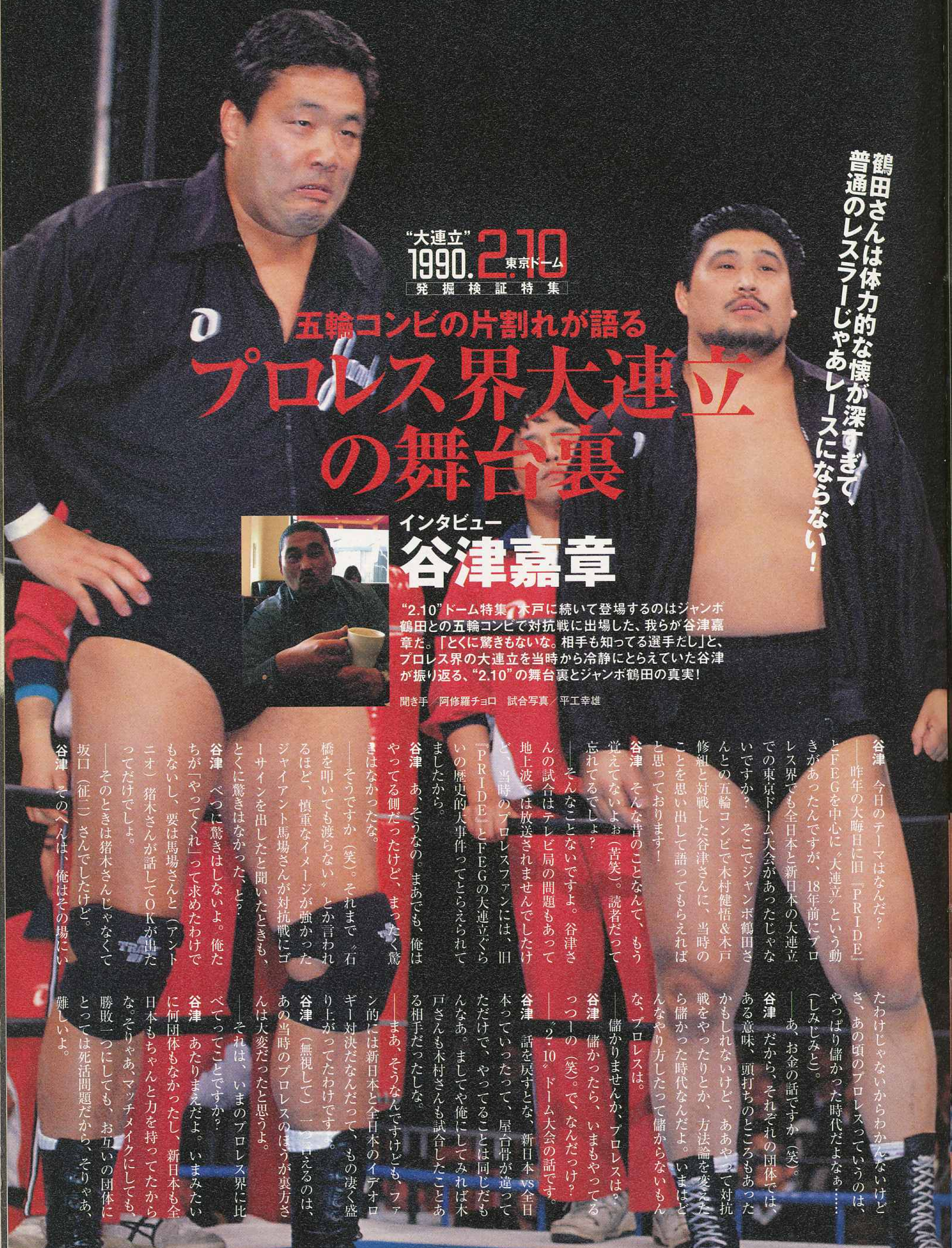
—そう考えると、プロレスラーにとって練習は大事だし、強さというのも必要なんですね。

木戸　そうだよな。少なくとも俺たちの時代はそうだったよ。やっぱりプロレスってそういうもんだよな。

【08年1月28日　神奈川県・木戸修自宅にて収録】



きど・おさむ■1950年2月20日、神奈川県出身。68年に日本プロレス入門。72年に新日本プロレス旗揚げに参加。75年にフロリダのゴッチ道場に入門し、ゴッチ式のテクニックをマスター。いぶし銀のファイトで人気となる。01年11月に現役引退以降もトレーニングを欠かさず日々鍛錬に励む。180センチ・105キロ。



鶴田さんは体力的な懐が深すぎて、普通のレスラーじゃあレースにならない！

“大連立”1990.2.10 東京ドーム
発掘検証特集

五輪コンビの片割れが語る

プロレス界大連立の舞台裏

インタビュー
谷津嘉章

“2.10”ドーム特集、木戸に続いて登場するのはジャンボ鶴田との五輪コンビで対抗戦に出場した、我らが谷津嘉章だ。「とくに驚きもないな。相手も知ってる選手だし」と、プロレス界の大連立を当時から冷静にとらえていた谷津が振り返る、“2.10”の舞台裏とジャンボ鶴田の真実！

聞き手／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

谷津 今日のテーマはなんだ？

——昨年の大晦日に旧『PRIDE』とFEGを中心に〝大連立〟という動きがあったんですが、18年前にプロレス界でも全日本と新日本の大連立での東京ドーム大会があったじゃないですか？ そこでジャンボ鶴田さんとの五輪コンビで木村健悟＆木戸修組と対戦した谷津さんに、当時のことを思い出して語ってもらえればと思っております！

谷津 そんな昔のことなんて、もう覚えてないよぉ（苦笑）。読者だって忘れてるでしょ？

——そんなことないですよ。谷津さんの試合はテレビ局の問題もあって地上波では放送されませんでしたけど、当時のプロレスファンには、旧『PRIDE』とFEGの大連立ぐらいの歴史的大事件ってとらえられてましたから。

谷津 あ、そうなの。まあでも、俺はやってる側だったけど、まったく驚きはなかったな。

——そうですか（笑）。それまで〝石橋を叩いても渡らない〟とか言われるほど、慎重なイメージが強かったジャイアント馬場さんが対抗戦にゴーサインを出したと聞いたときも、とくに驚きはなかった、と。

谷津 べつに驚きはしないよ。俺たちが「やってくれ」って求めたわけでもないし、要は馬場さんと（アントニオ）猪木さんが話してOKが出たってだけでしょ。

——そのときは猪木さんじゃなくて坂口（征二）さんでしたけど。

谷津 そのへんは、俺はその場にいたわけじゃないからわかんないけどさ、あの頃のプロレスっていうのは、やっぱり儲かった時代だよなぁ……（しみじみと）。

——あ、お金の話ですか（笑）。

谷津 だから、それぞれの団体では、ある意味、頭打ちのところもあったかもしれないけど、ああやって対抗戦をやったりとか、方法論を変えたら儲かった時代なんだよ。いまはどんなやり方したって儲からないもんな、プロレスは。

——儲かりませんか、プロレスは。

谷津 儲かったら、いまもやってるっつーの（笑）。で、なんだっけ？

——〝2・10〟ドーム大会の話です。

谷津 話を戻すとな、新日本vs全日本っていったって、屋台骨が違ってただけで、やってることは同じだもんなあ。ましてや俺にしてみれば木戸さんも木村さんも試合したことある相手だったしな。

——まあ、そうなんですけども、ファン的には新日本と全日本のイデオロギー対決だなんだって、もの凄く盛り上がってたわけです。

谷津 （無視して）一つ言えるのは、あの当時のプロレスのほうが裏方さんは大変だったと思うよ。

——それは、いまのプロレス界に比べてってことですか？

谷津 あたりまえだよ。いまみたいに何団体もなかったし、新日本も全日本もちゃんと力を持ってたからな。そりゃあ、マッチメイクにしても、勝敗一つにしても、お互いの団体にとっては死活問題だから、そりゃあ、難しいよ。

当時のプロレス界は、ある部分では成熟してなかったとも言えるよな

――最近のファンは、勝敗はもちろん、その裏側の部分まで楽しむ人も多くなってると思うんですけど、当時は単純に「新日本と全日本、どっちが強いんだ？」って熱いファンが多かったですからね。

谷津　そうだよな。会社も団体もお互いの思惑があるし、○○の貸し借りって言ったら言葉が悪いかもしれないけど、そういう部分もあるわけだよ。それに比べたら総合格闘技なんか楽なもんだよ。

――総合は楽なもんですか？（笑）。

谷津　だってよぉ、総合だったら、マッチメイクをするまでは大変だろうけど、いざ決まってしまえば、あとは、ただやりゃあいいんだからさ。

――まあ、確かに（笑）。

谷津　当時のファンには、そういう大会が観たいっていうニーズがあったわけだけど、俺から見れば、それに応えたプロモーター側の勝利だよな。ただ、あのときは、それで盛り上がれたけど、いまのプロレス界じゃ、どこどこが一緒にやったってダメだろ？

――当時のような緊張感を生むのはなかなか難しいですよね。

谷津　いまのプロレス界は、もう初顔合わせみたいな感覚がないもんな。あと、総合もそういうところがあるけど、いまはみんな契約が切れたら、ほかのところに移っちゃったりするだろ。だから、ある意味ではボーダレスになってるから新鮮味もないし、難しいんじゃない？

――それはありますよね。そういえば、当時の『週プロ』を見たら谷津さんと（サルマン・）ハシミコフが握手してる写真が載ってましたけど。たしかレスリング時代に一緒に合宿したことがあるんですよね？

谷津　そうそう。ハシミコフって、たしか福田（富昭・日本総合格闘技協会会長）さんが連れてきたんじゃなかったっけ？

――あ～、前に谷津さんから聞いたことがありますね。

谷津　福田さんの役割っていうのは、新日本に（ウイリエム・）ルスカを連れてきたあたりから始まってるんだよな。ルスカも福田さんを通してたから。

――プロレスから格闘技まで福田さんは一人大連立ですね（笑）。でも、ハシミコフをはじめロシア人がプロレスを覚えるのは大変だったんじゃないでしょうか？

谷津　いまみたいに総合があるんだったら、入っていきやすいだろうけど、プロレスなんてロシア人はまったくわかんないわけだもんな。俺なんかは、だいぶ前からレスリングとプロレスはまったくの別モノって言い続けてきたんだけど、当時はそうは見られなかったからな。

――まだ、レスリングのプロがプロレスって見方をする人も多かった時代ですよね。

谷津　いまと違って、まだファンも成熟してなかったし、プロレスはアマチュアレスリングの延長みたいな感じでとらえられてたからな。俺なんかもプロレス界に入った当時は、ある意味、言いたくても言えない部分もあったし。そんなこと言っちゃうと俺も自分で自分の首絞めることになるから（笑）。

――さすがの谷津さんでも当時は言えなかった、と（笑）。

谷津　本当は声を大にして言いたかったんだよ。「プロレスなんて○○○○だッ！」ってな！（笑）。

――ガハハハ！　当時そんなことを言ったら、首絞めるどころの話じゃないでしょうね（笑）。

谷津　そうだよな（笑）。でも、それから長いことプロレスをやってわかったのが、ある意味、プロレスのほうが難しいんだよ。

――経験を積んで、いろいろと気づいた部分もあるわけですね。

谷津　そうそう。そういう意味では、表面上の盛り上がりとは別の部分で、当時のプロレス界っていうのは、ある部分では観る側もやる側も成熟してなかったとも言えるだろうな。

――作る側もそうなのかもしれないですけどね。

谷津　まあでも、いまはだいぶ成熟してきたと思うんだけども、その一つの要素を作ったのは、やっぱり『kamipro』さんのおかげというか、影響も大きいんじゃない？（笑）。

――とりあえず、ありがとうございます（笑）。

谷津　だって、ここ何年かの時代の流れは『kamipro』のようにプロレスから総合のほうに変わってきてるのは事実でしょ。それの反動が来て、いま、ようやくプロレスのこれからの在り方を模索しようという地点にきてるんじゃない？　そういう意味では、これからまたプロレスもおもしろくなるのかもしれないな。



対抗戦ということで、五輪コンビのセコンドには渕、小橋、田上、仲野、菊地ら、当時の正規軍メンバーがズラリ。試合は木戸のテクニックに翻弄される場面もあったが、最後はジャンボが木村にバックドロップ、木戸にはフライング・ボディシザースをズバリと決め勝利！

プロレス業界ってのはレスラーも裏方もやっぱりバカじゃやできない！

――“2・10”のあの興奮は再び味わえますかね？

谷津　同じような興奮は無理だろうけど、要は見方というか、角度を変えて観るってことだよな。逆に言うと、一昔前のように「プロレスラーこそが最強」とかいう見方をしてる人なんていないでしょ。

――いまは少なくなってるでしょうね。でも、プロレスラーの最強伝説っていう意味では、谷津さんも長いことタッグを組んでいた鶴田さんの名前はよく挙がってましたよね。同じレスリング出身の谷津さんから見て鶴田さんの実力はいかがでした？

谷津　やっぱり、あの人はね、懐が深いんだよ。体力的な懐がね。

――体力的な懐ですか？

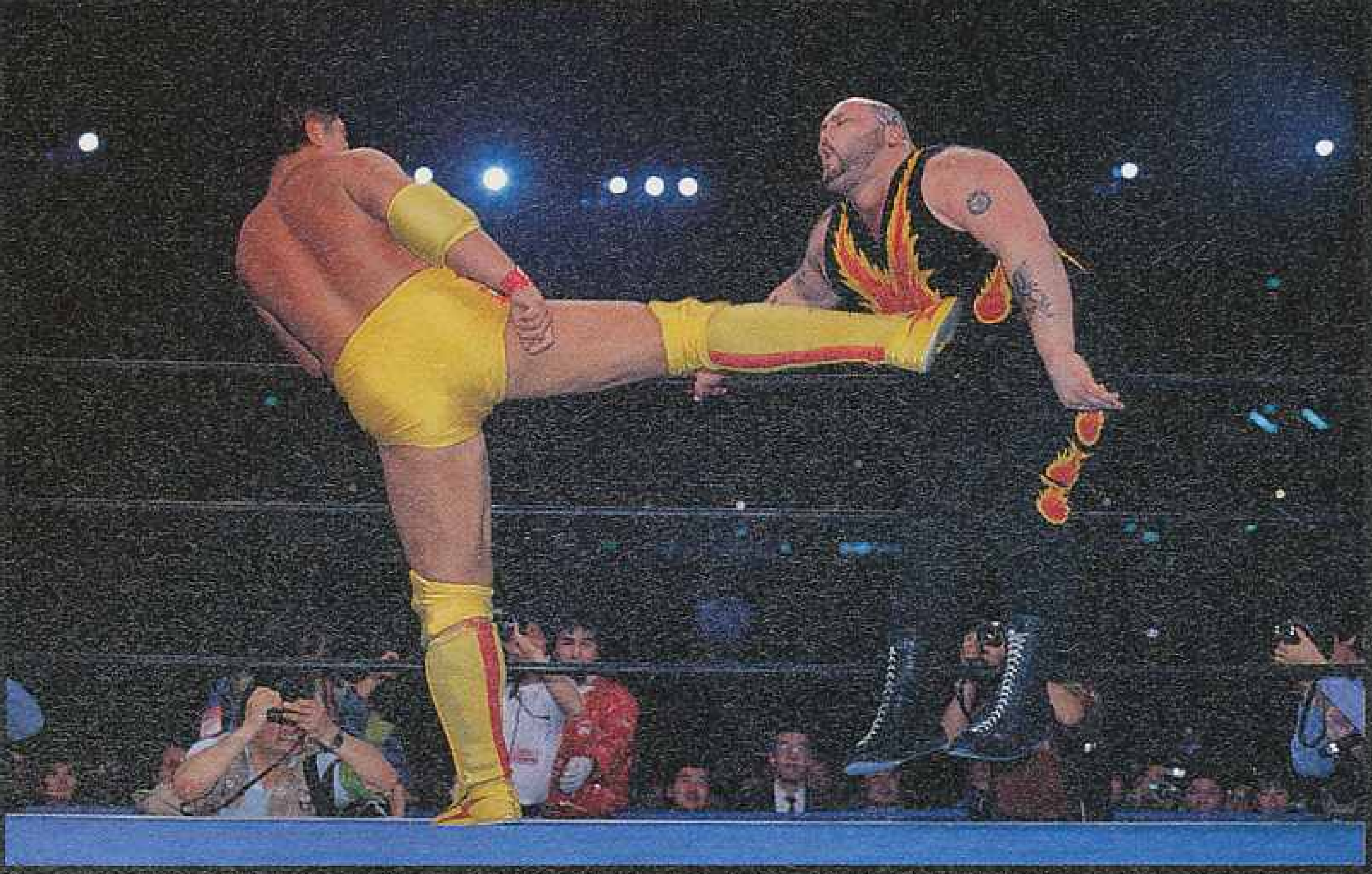
谷津　ポテンシャルが凄いんだよな。だから、やれ対抗戦だ、対新日本だとか関係なしに、体力的に懐が深すぎて、普通のレスラーじゃあレースにならない！（キッパリ）。

――ほぉ～、辛口の谷津さんがそこまで評価してましたか！

谷津　逆に言うと、彼は自分でそういうのを知ってるから、ああいう余裕のあるプロレスをしちゃってたんだろうな。本人的には真剣にやってるんだけど、そうやって映らないところに彼の不幸なところがあったんだと思うけどな。

――まあでも、2・10のドーム大会から数年は、鶴田さんの評価はかなり高くなったと思うんですけどね。

谷津　だって、彼なんかが真剣にやったらみんなついていけないんだもん、体力ありすぎて。それに彼は頭もスマートだったしね。逆に彼とは



“2・10”で大きな話題を呼んだのが元横綱・北尾光司のデビュー戦だ。職人ビガロ相手に勝つには勝った北尾だったが、ホーガンを意識したパフォーマンス、そして試合内容に場内からはブーイングも。その後、谷津と同様PRIDE参戦をはたした北尾。現在は角界に戻り、立浪部屋のアドバイザーを務めている。

違って天龍（源一郎）さんなんかは、ちょっと背伸びするぐらいのプロレスがおもしろいって言うんだよ。あまりにも地に足がつきすぎてるプロレスっていうのは、観ている人間には一生懸命に映らないんだって。

――それはあるでしょうね。

谷津　だから馬場さんも鶴田さんに近いところがあるかもしれないけど、猪木さんとか天龍さんとか長州力は、ちょっと背伸びしてやるような感じでしょ。また、当時はそういうスタイルが共感されちゃうんだよな。

――そういうスタイルのほうが観客にもストレートに伝わるでしょうし。

谷津　まあ、また猪木さんの場合はちょっと別だけどな。猪木さんはどこかに余裕があって、自分でファンをうまくリードしてたところがあったから。だけど、体力的には背伸びしたところがあったし、まあ、ジャンボにはかなわないよ。

――谷津さん的には、猪木さんよりも鶴田さんのほうが上だ、と？

谷津　猪木さんの場合は「プロレスをどう見せるか」っていう部分で、ファンに負けてなかったんだよな。ファンにプロレスを悟られたくないっていうか。

――ファンの心を先読みして、あえて裏をかくというか。

谷津　そうそう。そういうサイコロジーも備えてないと一流のプロレスラーにはなれないってことだよ。まあ、一流のプロレスラーが一流のビジネスマンになれるかっていったら、また別だけどな（笑）。

――別じゃなかったら、猪木さんは他業種でも大成功を収めてるはずですからね（笑）。あと、当時の雑誌を読み返したら、大会前のコメントで、ビガロ相手にデビュー戦が組まれた北尾（光司）さんに期待してるって言ってましたけど。

谷津　まあ、知名度もあったわけだし、期待はしてたよ、そりゃあ。……でも北尾はスマートになりきれなかったよな。

――確かに。心身ともにというか。

谷津　やっぱり“横綱”っていうプライドがプロレスをさせなかったんだと思うよ。その頃は「おめえは、いまなんなんだ？」って言うのかもしれないけど、俺からしたら「元横綱で食ってんだろ」ってことになっちゃうわな。

――それが真実なんですけどね。

谷津　それに比べたら輪島（大士）さんのほうが必死にプロレスやってたと思うよ。取り組む姿勢もマジメだったし、ハートもあったし、性格も輪島さんのほうがよかったっていうしな。

――へぇ～。相撲界でのキャリアや実績でいったら輪島さんのほうが全然上ですけどね。

谷津　北尾ってのは、あまりにも四六時中「横綱、横綱」ってチヤホヤされすぎちゃった部分もあったんだろうし、あとはやっぱり大きいのは性格の問題だろうな。まあ、プロレス業界っていうのはレスラーも裏方もそうだと思うけど、バカじゃやできないって言うだろ。

――猪木さんは「馬鹿になれ！」ってよく言ってますけど（笑）。

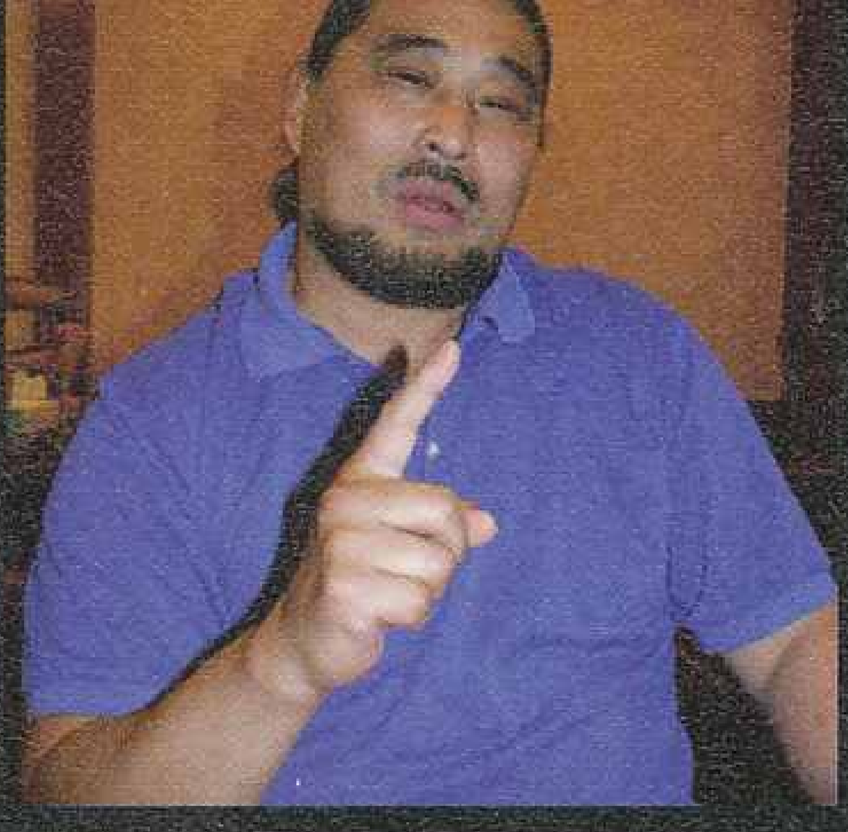
谷津　馬鹿を演じるというかな。アメリカなんかではプロレスは“モンキー・ビジネス”って言われてるんだけど、モンキーになりきれないと難しいんだわ。やっぱりプロレスは難しいわな！……で、今日はなんの取材だったたっけ？

――格闘技界が大連立したので、プロレス界の大連立の……。

谷津　（さえぎって）あ～、そういう回想モノか！　ようやく趣旨がわかったよ（笑）。

――最後の最後で（笑）。今日はありがとうございました！

【08年1月29日／電話取材にて収録】



やつ・よしあき■1956年7月19日、群馬県出身。学生時代からレスリングで活躍しオリンピックにも出場。その後は新日本、ジャパン、全日本、SWS、SPWF、WJなどで活躍。PRIDEにも2度参戦するがゲグッドリッジに連敗。186センチ、115キロ。

“大連立” 1990.2.10 東京ドーム
発掘検証特集

2.10ドームデビューに背を向けた男

ジャパニーズ・ルチャを生んだ浅井嘉浩の決断

文／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

1990年2月10日、東京ドーム。まだ、ドームでプロレスをやることが特別だった時代。

そのドームで日本デビューを飾るというこれ以上ないビッグチャンスに背を向けた男がいた。のちのウルティモ・ドラゴンこと、浅井嘉浩その人である。

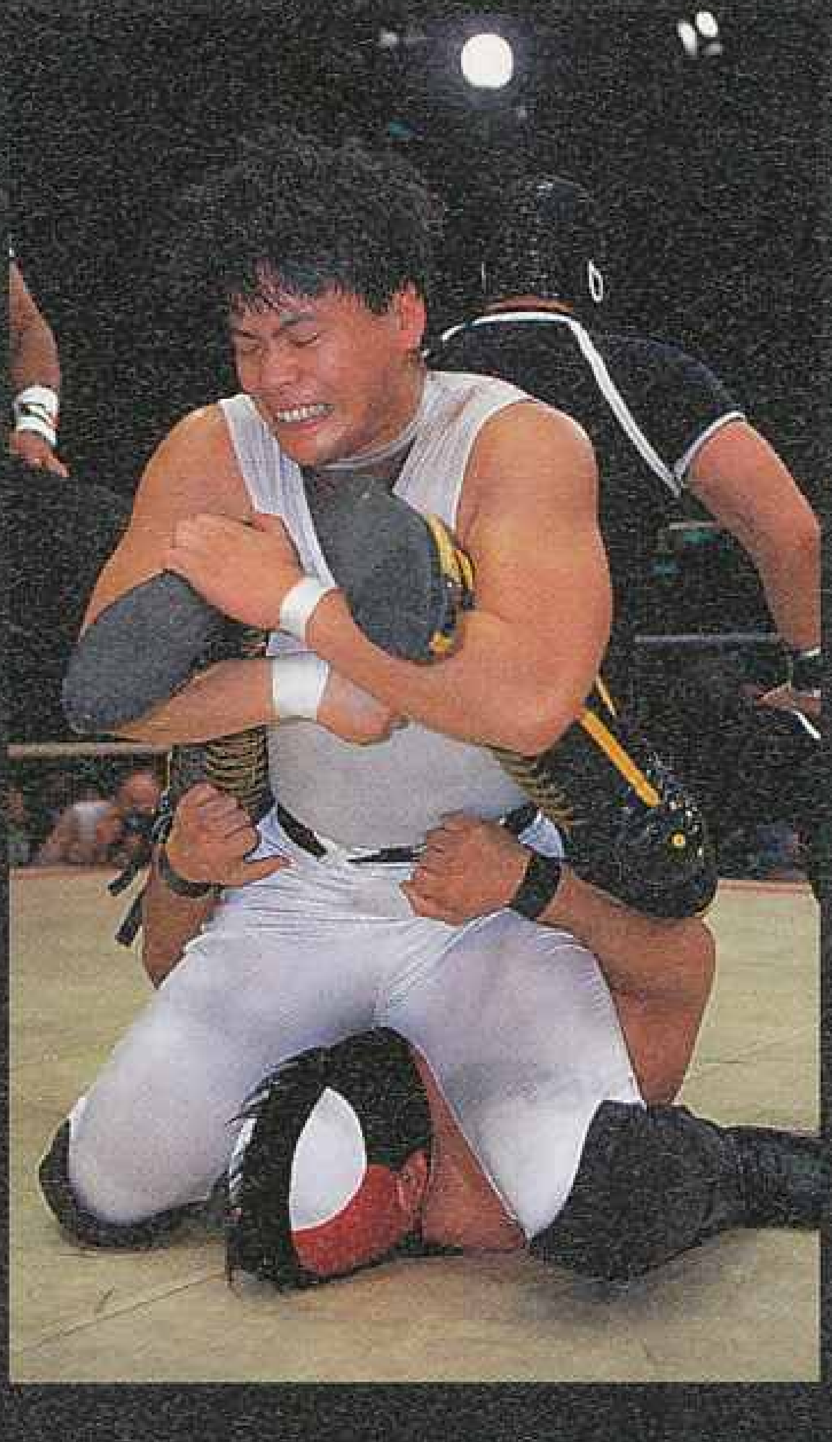
浅井はもともと身体が小さいという理由で、新日本プロレスへの正式入門が許されず、単身メキシコに渡り、メキシコでプロレスラーとしてデビューした選手だ。

しかし、身体は小さいものの抜群の運動神経とセンスを持っていた浅井の才能は、メキシコですぐさま開花する。外国人ながらベビーフェイス人気が爆発し、史上最年少19歳で現地のメジャータイトル、UWA世界ウェルター級王座を奪取。その活躍は日本のプロレス雑誌でも紹介されるようになった。

そこに目をつけたのが当時ニュースターを待望していた新日本プロレスだ。新日本はこのスター性を持った原石に、2・10東京ドームで日本デビュー。対戦相手は獣神サンダー・ライガーという破格の条件を浅井が所属していたメキシコの団体UWAを通じ提示。それをUWAも浅井自身も了承し、浅井は入門すら許されなかった新日本プロレスの最高の舞台で日本デビューを飾ることが決定したのだ。

しかし結局、浅井はドーム出場をキャンセル。その一カ月後、日本初のルチャリブレ専門のインディー団体、ユニバーサル・レスリング連盟の若きエースとして日本逆上陸をはたした。

業界最大手団体である新日本の、しかも東京ドームでデビューという破格の待遇を蹴って、なぜ浅井は弱小団体の旗揚げに参加したのか？　浅井本人がその意外な経緯を克明に語ってくれた。



「じつはボクは新日本でもユニバーサルでもなく、ジャパン女子プロレスで日本デビューをするはずだったんですよ。当時、ジャパン女子のリングで浜田さんと大仁田さんが抗争を始めたじゃないですか。あれを仕掛けたのは新間（寿）さんで、上がるリングがなかった浜田さんと大仁田さんに『おまえらの上がるリングを作ってやる』ということで、ジャパン女子の〝男子部〟みたいなものができるはずだった。最初はボクもそこに誘われたんです」

いまでは信じられない話だが、当時、日本にあったプロレス団体は新日本、全日本、UWFのわずか3団体。小さな単発興行を行なっていた剛竜馬率いるパイオニア戦志という〝インディーの走り〟はあったが、基本的に前記の3団体以外にレスラーが上がるリングがなかった。

そんな状況下で、〝過激な仕掛人〟新間寿が、〝子飼い〟であった浜田と大仁田の上がるリングを作るべく、経営難に陥っていたジャパン女子に話を持ちかけ、同団体を男女混合団体にしようとしたのだ。

「それで最初は浜田さんと大仁田さんがメキシコに来られて、『おまえを使いたい』という話だったんですね。それでボクは当時UWAに所属していたので、『（UWA代表である）カルロス・マイネスさんがOKなら、ボクはOKです』という返事をしたんです。ところがその後、大仁田さんが『今回、浜田さんが出られなくなった』って言ってきたんですよ。どうもおかしいな、と思ってたんですけど。どうやらいつの間にか、なんらかの理由で大仁田さんと浜田さんが分裂してしまって、大仁田さん一人で独立団体を旗揚げしようとした。それがFMWだったんです」

浅井の知らぬところで、いつの間にか頓挫していた「ジャパン女子・男子部」構想。それでも大仁田は自分の独立団体を旗揚げすべく動き出し、浅井を取り込もうとしたのだ。

その一方で新間・浜田派も新団体ユニバーサルの旗揚げに向けて動き出し、当然、浅井獲得に乗り出す。そこに新日本まで加わり、三つ巴の浅井争奪戦が展開されたのだ。

「ボクはあくまでUWA所属だったんで、マイネスさんに『おまえにとって、新日本に上がるのが一番いいだろう』と言われたんで、ボクもそのつもりだったんです。ところが、その後、浜田さんがわざわざメキシコまで来て、熱心に誘ってくれたんですよ。『俺のプロレス人生を新団体に懸けたい。なんとか力を貸してくれないか』って。やっぱり浜田さんは、ボクがメキシコでレスラーになれるきっかけを作ってくれた人だし、ユニバーサルという団体自体、UWAが全面協力するということだったんで、ボクはユニバーサルに行くことを決めたんです」

こうして浅井のドームデビューは幻に終わった。しかし、あのときの決断に後悔は一切なかったという。

「新日本に行くか、ユニバーサルに行くか、当然悩みましたよ。でも、自分はメキシコでデビューし、ルチャリブレで認められた、ルチャドール。自分のルチャに自信もあったし、ルチャへの誇りもあった。それなら新日本に行ってルチャを捨てるより、自分がルチャの伝道師になろうと思ったんですよ。あのときの自分の選択は間違ってなかったと思いますね」

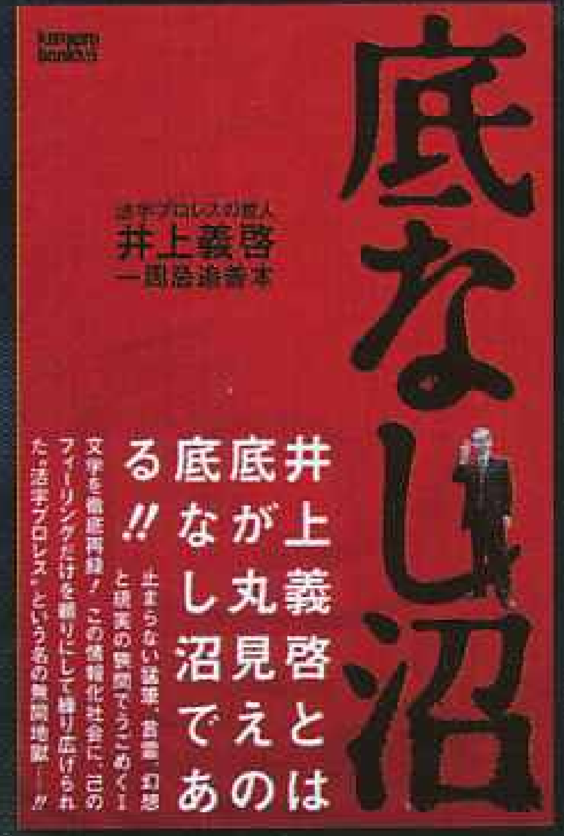
ユニバーサルのリングで日本逆上陸をはたした浅井は、メキシカンたちとルチャのおもしろさを存分に見せつけ、いきなり人気爆発。オリジナルの空中殺法、ラ・ケブラーダはプロレスファンの度肝を抜いた。

長らく日本では軽んじられてきたルチャリブレは、浅井の活躍とユニバーサルの力で、日本でも定着したのだ。そして、その芽は、みちのくプロレス、大阪プロレス、闘龍門、ドラゴンゲートなどを生み、ルチャは日本のジュニアヘビー級のスタンダードとなった。

「FMWとユニバーサルが生まれたことで、日本のプロレスが変わったじゃないですか。それが、結果的に良かったのか悪かったのかはわかりませんけど、いまのプロレス界を作ったのは、大仁田厚とボクだったと思いますよ」

2・10東京ドームデビューを蹴った一人の若者の決断は、その後のプロレス界を大きく変える潮流となったのである。

kamipro books



"活字プロレスの哲人"
編集長本・第二弾!
井上義啓・一周忌追善本

『底なし沼』

言うちゃ悪いけど、全国書店にて
絶賛発売中ですよ、アンタ!!

B6 変型判　定価＝1,680 円（本体 1,600 円＋税）

プロレスとは——
底が丸見えの
底なし沼である
井上義啓

★『週刊ファイト』時代の激筆原稿再録
★『猪木は死ぬか!』
『不在証明 あるいは猪木へのレクイエム——』など、
ワールド満載の"井上小説"再録
★新間寿 ★夢枕獏 ★元『週刊プロレス』編集長・佐藤正行
★井上義啓・姪 ★『kamipro』ラスト「喫茶店トーク」
ほか"底なし沼"な内容でお送りします。

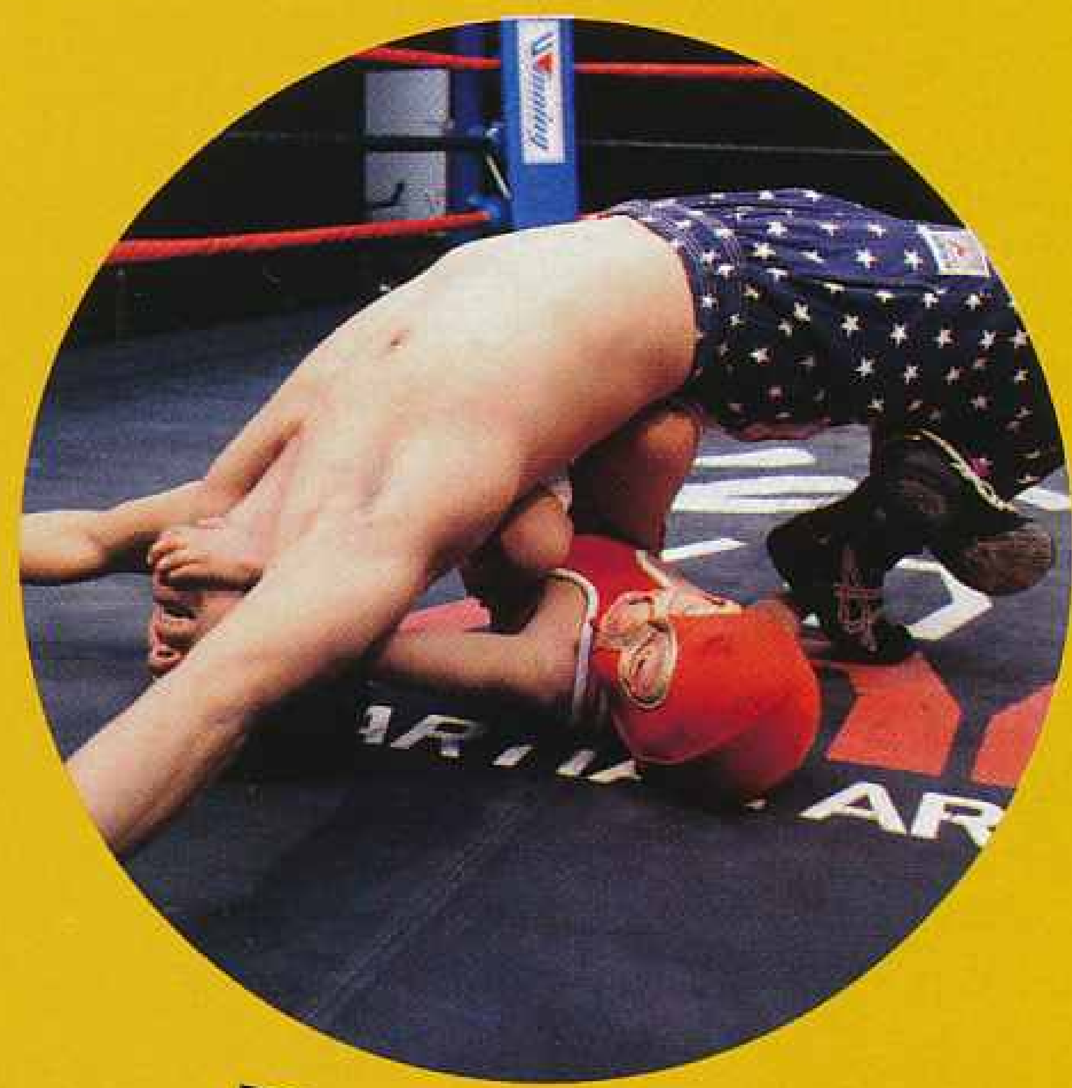


"殺し"文句がプロレス心を熱く打つ!!
井上義啓・追悼本『殺し』絶賛発売中!

★喫茶店トーク傑作選★井上小説傑作選★殺しの 語録★アントニオ猪木
★水道橋博士★金沢克彦★井上義啓・姪★モンターニャ・シウバ ほか

B6 変型判　304 ページ　定価＝1,680 円（本体 1,600 円＋税）

eb! enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1 TEL.0570-060-555（代表）［通信販売のお問い合わせ先］http://www.enterbrain.co.jp/


話題沸騰!! 明日の日本プロレス界を支えるのは、この6歳児だ!?



このページを開いて驚いた人もいるかもしれない。覆面こそ被っているが、そのへんにいるようなチビッコが一丁前にポーズを決めて「ドラゴン・キッドみたいになりたい!」なんて言ってるんだから。しか〜し、このチビッコはただ者ではないのだ。知る人ぞ知る、このマスクマンの名前はミスター6号。名古屋のへなちょこプロレスなる、どインディー団体で活躍する天才レスラーである。今回は謎に包まれた、その知られざる素顔を、なんと7ページにわたって「これでもか〜、これでもか〜!」（髙田総統調）と大特集! 特集最後の72ページでは、へなちょこな(?)衝撃事実も明らかに……!!

構成／阿修羅チョロ　撮影／丸山剛史　撮影協力／公武道



「ドラゴン・キッドみたいになりたい！」

日本最年少
天才レスラーを直撃！

ミスター6号

（へなちょこプロレス……のはずが!?）

このページの写真でミスター6号がキメているのが取材日に完成した"ミスター6号ポーズ"だ。見てのとおり、身体全体を使って数字の"6"を表わしているだけなのだが、それだけでも充分かわいい！　超プリティ！　超キュート！　でしょ？

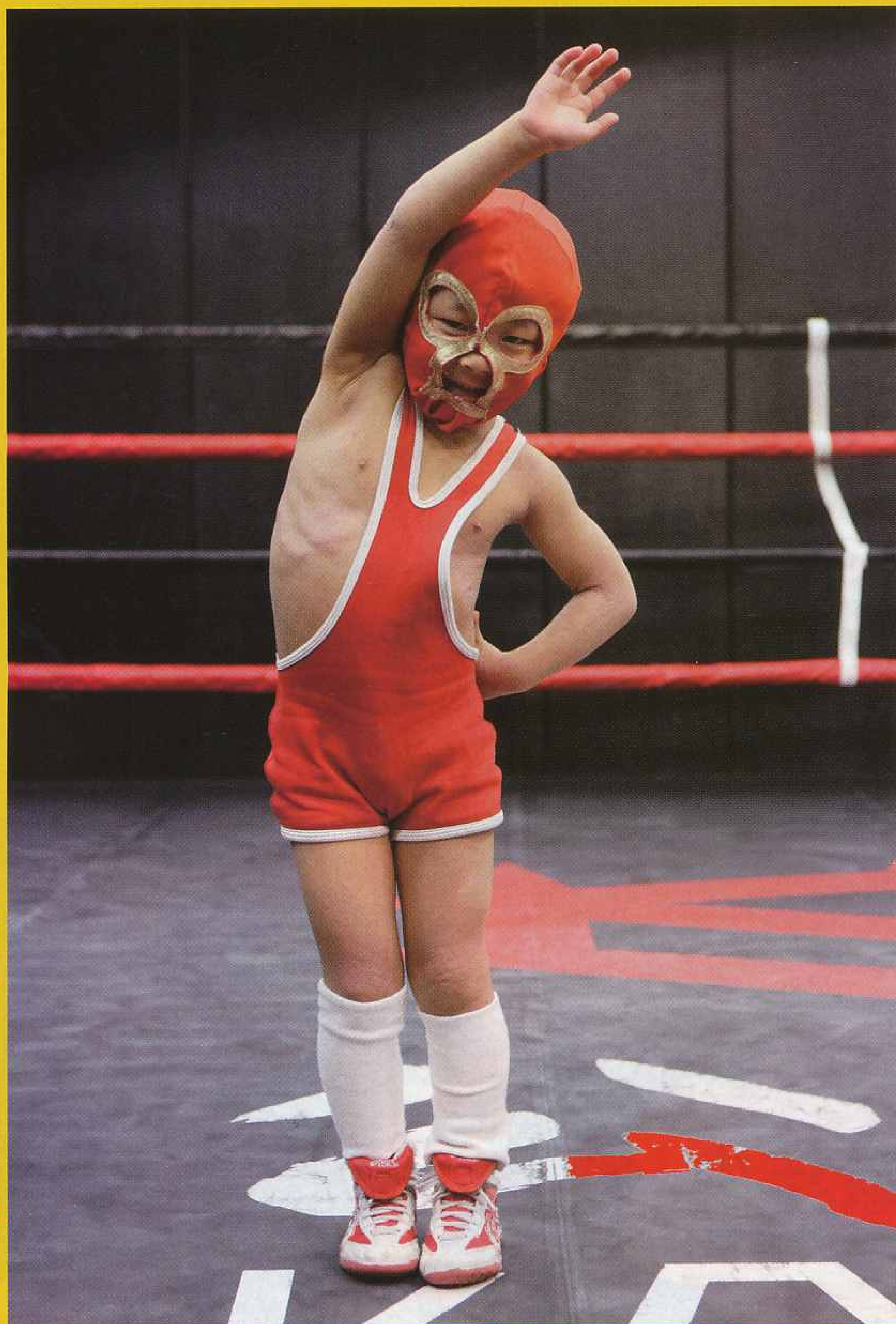
このミスター6号というプロレスラーは、現在の日本マット界で一番強いわけでも、一番うまいわけでもないが、一番かわいいプロレスラーだということは間違いないだろう。

プロレス界に限らず、芸能界や映画界でもよく言われることに、「子どもと動物にはかなわない」というのがある。演技力抜群の俳優さんでも、それこそ1000の技を持つ名プロレスラーでも、子どもや動物が持つ、素材そのもののかわいさには到底かなわない部分があるのだ。

数年前なら「身体もできていない子どもがプロレスをやるなんてもってのほか！」とか「プロレスをナメんなよ、タココラッ！」などと頭の固いプロレスファンから非難を浴びたりもしたのかもしれない。

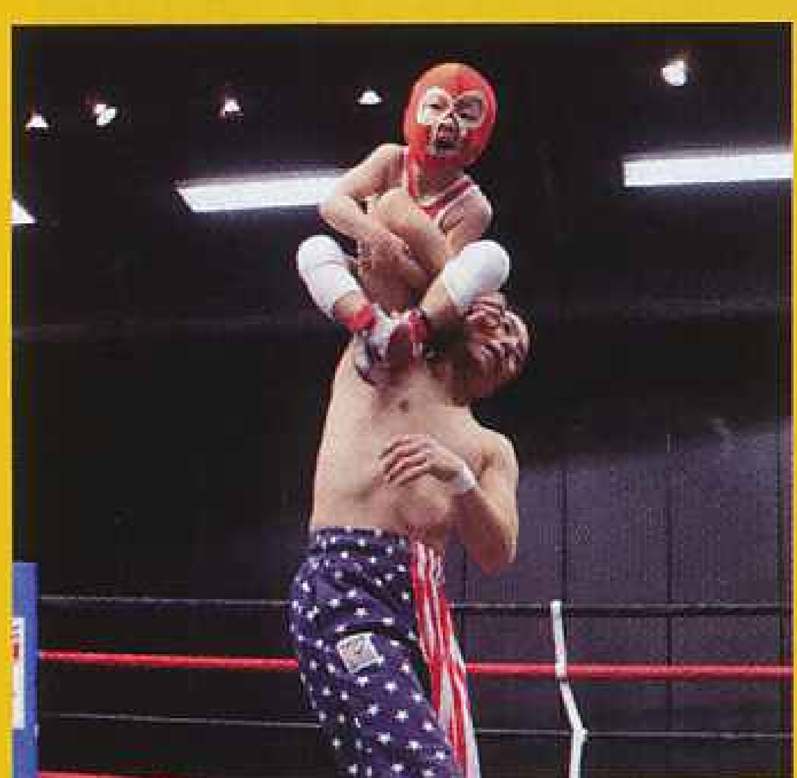
しかし、ここ最近はエンターテインメント系のプロレスイベントが増えてきたこともあり、同時にアイスリボンや666のラム会長など、小学生や中学生のプロレスラーの登場も珍しくなくなってきたため、ちょっとやそっとのプロレスラーの登場では驚きや批判の声も聞かれなくなってきているのが現状だ。

そこで今回登場するのが、名古屋発のどインディー団体「へなちょこプロレス」で活躍する弱冠4歳（！）でプロレスデビューをはたした謎のマスクマン・ミスター6号である。



ちょっとしたインディー通なら、すでにその名前はインプットされていると思うが、まだまだ知らない人のほうが多いであろうミスター6号の存在。数年前までは船木誠勝（当時・優治）、現在は中嶋勝彦の15歳9カ月でのデビューが日本プロレス界における最年少デビューとプロレスファンのあいだでは認識されていたと思うが、このミスター6号は、一気に10歳以上もその記録を塗り替えてしまったのだ。よっ、日本一！

とはいっても、ここ最近では猿や脚立（！）なども試合をするなど、バーリ・トゥード以上に"なんでもあり"化が進んでいるプロレス界だけに、「どうせ、そのミスター6号っていうのも、お父さんとかがプロレス好きで、ネタの一つとして試合をさせてるだけじゃないの？」なんて声も挙がると思う。そう言われると「そのとおり！」とも言える部分もある。確かにお父さんはバリバリのプロレスファンだし、アマチュアプロレスラーとして活躍もしていたりする。



得意技のキーロックを極める6号。当然のように軽々と持ち上げられてしまうのだが、この後、体重をかけて前方回転、再びグラウンド地獄に!

が、しかし！　試合を観たことがある人には説明不要だと思うが、このミスター6号はかわいいだけじゃない！　ホント、プロレスラーとして凄いんです！　しかも、やらされているわけではなく、自らの意志で日々トレーニングを積み、プロレスのリングに上がっているのだ。

身長110センチほどのチビッコが2倍以上もある大人相手に試合をするというだけでも凄い話なのだが、6歳になったばかりのこのミスター6号はデビューから2年経った現在も連勝街道をひた走っているばかりか、弓矢固めやキーロックなどクラシックな技を使いこなし、プロレス通を唸らせるほどの試合内容を見せてくれるのです。これホント！

そんなミスター6号だけに、ここ最近は地元・名古屋のテレビ番組で何度か特集も組まれ、インターネットの動画系サイトではその試合映像がバンバンと流出（？）し、今年1月13日には、どインディー団体にも理解のあるDDT社長の高木三四郎が自らの誕生日プレゼントとして招聘し、東京初見参もはたしているほどの注目ファイターなのだ。

そんなわけで、『kamipro』では、ミスター6号の地元・名古屋まで飛び、デビュー数戦のプロレスラーとしては破格のカラー7ページを取り、日本プロレス界の未来を支えるであろうミスター6号に直撃取材を敢行しました！

……とはいっても、さすがに6歳児だけに通常のインタビューは多少無理があるため、お父さんと、6号同様へなちょこプロレスで活躍する、こちらも天才レスラーとの呼び声の高いお兄ちゃんの「ジンギス・カ(ちから)ーン」選手（14歳）同席のもと、究極の青田買い取材スタート‼（※なお、お父さんは仕事の関係上、顔出しNGとなっております）。

——ミスター6号選手、そしてお父さんと、ジンギス・カーン選手、今日はよろしくお願いします！

6号&パパ&カーン　よろしくお願いします。

——インターネットなどで「名古屋に凄いチビッコレスラーがいる」っていうのは以前から噂にはなってましたが、最近はテレビの取材もかなり受けてるみたいですね。

パパ　そうですね。名古屋の番組がほとんどなんですけど。

——今年に入って、DDTに呼ばれて東京で試合をしたっていうのもあって注目度は一気に上がったと思うんですが、6号選手がプロレスデビューしたのは、だいぶ前になるんですよね？

6号　うん。デビューしたのは4歳とのときで、いまは6歳。

——よ、4歳！　それは間違いなく日本最年少デビューですね。そもそも、プロレスを始めたきっかけはなんだったんですか？

パパ　お兄ちゃんのほうが3歳の頃からレスリングをやってるんですよ。僕は一応、レスリング教室のヘッドコーチをやってまして、教えたりもしてるんで。

——あ、6号選手とお兄ちゃんのジンギス・カーン選手はプロレスだけではなく、レスリングもやられてるわけですか。

パパ　そうなんです。で、お兄ちゃんと一緒に練習に来てた6号がマットの上で何かやるようになったのは2歳ぐらいですね。



(上)じんぎす・ちからーん■14歳ながらに難易度Eのデジャ・ヴも楽々こなす天才肌。153cm、46kg。
(下)みすたー・ろくごう■本名は某パンクラスファイターと同姓同名の6歳児。108cm、19.7kg。

——2歳の頃からマットがお友だちだった、と。

パパ　その頃は体操やったりとか、タックルマシーンにぶつかったりとか、その程度ですけど。で、僕のレスリング仲間でへなちょこプロレスの代表の湯川さんっていうのがいまして、その何年か前からへなちょこプロレスっていうのをやってたんですよ。

——へなちょこプロレスっていうと、どインディー団体では、最近6号選手の活躍もあって注目度急上昇中ですけど、歴史はけっこう古いわけですね。

パパ　そうです。ローカルインディーとかそういう言葉が全然ないときからやってますから。まあ、〝お父さんのプロレスごっこ〟っていうテーマで始めて。それに僕が加わるようになって、試合を観に来てるうちに、だんだん自分でもやりたくなったみたいです。

6号　そう。やりたくなった。

——ジンギス・カーン選手のデビューは何歳になるんですか？

カーン　僕は小学5年のときにデビューしたので10歳のときです。

——10歳でデビューっていうのも充分凄いですけどね。ちなみに、影響を受けたプロレスラーとか団体ってどこになるんですか？

カーン　ちっちゃい頃は新日本とかよく観てました。会場とかも連れて行ってもらったりして。でも、いま一番好きなのは、やっぱりドラゴンゲート。ドラゴンゲート以外はほとんど観てないんで。

6号　僕もドラゴンゲートが一番好き。

——へぇ～、そうなんですか。ドラゴンゲートっていうと、若い女の子に人気があるっていうイメージが強いですけど、やっぱり子どもにも人気があるんですね。

パパ　それもあると思うし、あとウチで契約してるケーブルテレビがGAORAっていうのも大きいんでしょうね。

——ドラゲーはGAORAの人気番組ですからね。子ども的には、いろんなキャラクターがいて、凄い技をやる選手がたくさんいるドラゲーが新日本とかノアよりもピンとくるって感じなんですかね？

カーン　そうですね。やっぱり、カッコいい選手が多いし、この技やってみたいなって思う技もドラゲーには多いんで。

——永田さんの白目での腕折りを観て、「やってみたい」って思う子どもはなかなかいないでしょうから（笑）。ちなみにミスター6号っていうのは、誰が考えたリングネームなんですか？

6号　自分でつけた。

——あ、そうなんですか（笑）。

パパ　被ってるマスクは百均で売ってたマスクなんですけどね（笑）。へなちょこプロレスっていうのは、お父さんのプロレスごっこの延長で始まったものなんで、そのへんに口もととか破れて使わなくなったマスクが放ってあったんですね。それを被って自分で名乗ったのがミスター6号だったんです。

——どういう意味があるんですか、ミスター6号って？

6号　う～ん、なんだったっけ？

パパ　へなちょこプロレスにシュガー軍団っていうのがいて、1号から3号までいたんですよ。たぶん、その流れで考えたんだと思うんだけど、〝ミスター〟って言葉はプロレスからきたのか……。

6号　（さえぎって）違う違う！

——思い出しました？

6号　あのね、音楽のところの名前を見て決めたの。

——お、音楽の名前？　ミスターなんとかって音楽家がいたとか？

6号　〝6号〟ってついてたから、ミスター6号にしたの。

いろんな団体を観たけど、いま一番好きなのはドラゴンゲート！

——う〜ん、ちょっと、おじさんには難しいですねぇ（笑）。

パパ　マスクをもらったのが2〜3歳ぐらいのときで、数字も1から順番に言えなかったと思うんですよ。それで、知ってた数字がたぶん6だったんでしょうね（笑）。

——まあリングネームの由来はともかく（笑）、名前を決めたのも、マスクマンになったのもすべて自分の意思なんですね。

6号　そう、自分で決めた。

パパ　落ちてるマスクを拾ったときから、そのマスクがもの凄く気に入ったみたいで本人的にはマスクマンになりきってて。だからデビューするかなり前からミスター6号を名乗って、家とかでもプロレスごっこをしてましたからね。

——4歳でのデビュー前からミスター6号は誕生してた、と。よく覆面レスラーはマスクを被ってるときと脱いだときは人格が変わるって言いますけど、ミスター6号選手は変わります？

6号　（首をかしげて）う〜ん……、わかんない。

パパ　いや、試合のときは普段と全然違いますよ。練習でも遊びでやるときと真剣にやるときって本人は区別つけてやってるんですよ。「いまから真剣にやるぞ」って言うと、かなり本気モードになりますね。

——へぇ〜、それは凄いですね。6号選手はレスリングの練習もしっかりやってるみたいですが、将来の夢としてレスリングでオリンピックに行きたいっていうのもあるんですか？

6号　ううん、やっぱプロレス。

——メダルよりもプロレスのチャンピオンのほうがいい？

6号　うん。やっぱね、チャンピオンになりたい！

パパ　おまえ、こないだ「ケーキ屋になりたい」って言ってたじゃん！

——ガハハハハ！　ケーキ屋も捨てがたい？（笑）。

6号　ううん、ケーキ屋はもういい。ケーキ屋よりチャンピオン！

——そうですか。じゃあ、レスリングとプロレスは、どっちがやってて楽しい？

6号　やっぱね、プロレスのほうが好き。

パパ　昨日、レスリングの練習で怒られたからだろ！（笑）。

6号　ち、違うよ〜。

——じゃあ、レスリングとプロレスではどっちが難しい？

6号　う〜ん、レスリング……かな？　でもプロレスも難しい。

——憧れのプロレスラーは誰なんですか？

6号　（即座に）ドラゴン・キッド！

——ドラゴン・キッドは凄い技いっぱい持ってるからね。

6号　そう。凄くカッコいい。

——ドラゴン・キッドに憧れながらも、6号選手はクラシックな技を取り入れたり、理にかなった攻めを見せたりとか、いわゆる昭和のプロレスファンにも評価が高いんですが、それはお父さんの影響なんですかね？



メダルよりもケーキ屋よりもチャンピオンになりたい！

6号　ん？　全然わかんない。

パパ　まあ、僕がいわゆる昭和のプロレスファンなんで多少影響はあると思います。もし大技ができるんだったら、そういう技も入れると思うんですけど、いまは無理があるじゃないですか。

——いまの体格でラリアットとかエメラルドフロウジョンとか出されても説得力に欠けますからね。

パパ　だから、いまできる範囲で、どういうプロレスがやれるかっていうのを考えて技とかを選んで練習してますから。レスリングはもう4年近くやってるんで基本はそこそこできるんですよ。一本背負いも普通に投げられますし。

——6歳でレスリングキャリア4年っていうのも凄いですけどね（笑）。ちなみに一本背負いとかは何キロぐらいまで投げられるものなんですか？

パパ　え〜と……それはプロレス的にですか？（笑）。

——じゃあ、まずレスリングのほうから教えてください（笑）。

パパ　レスリング的には自分の体重ぐらいですかね。

——6号選手は、いま体重は何キロぐらいあるんですか？

6号　20キロはない。

パパ　いま19キロぐらいですけど、それぐらいだったら投げられますね。で、プロレスだったら、65キロぐらいは投げられると思います。

——プロレスなら3倍はいける、と（笑）。

パパ　でも、見る人によっては「投げられてやってるだろ」って言う人もいるんですけど、実際は腕をちゃんと巻き込んで投げてますから。じゃないとあそこまでキレイには投げられないです。一人で飛んじゃうと、投げたほうがそのまんま棒立ちになっちゃうんで。

——普通はそうなりますよね。

パパ　見る人が見るとわかってもらえると思うんですけど、腕をしっかり巻き込んで投げてますから。

——ちなみに、いまプロレスで一番得意な技はなんですか？

6号　う〜ん……、腕しぎり？

パパ　腕ひしぎね。そこからキーロックいくのが得意なんだよな。



対戦相手のダイナマイト・多分にマスクをいじられ視界をふさがれた6号。手の鳴るほうへ、おそるおそる近づく姿もとってもキューティ。「6号、うしろ！」

得意な技は……腕しぎり? そこからキーロックにいく!

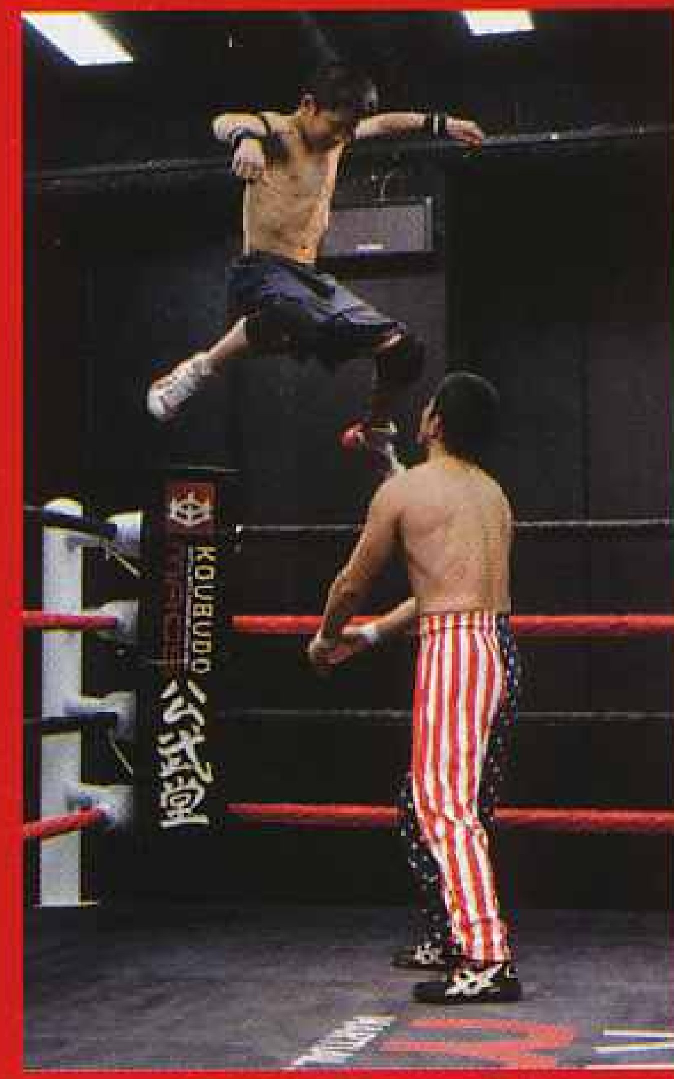
6号　そう。それが得意。
―カーン選手の得意技は?
カーン　自分はデジャ・ヴです。
―えっ、デジャ・ヴって、たしかドラゴン・キッドがやるもの凄く複雑な技ですよね。
カーン　2回転のコルバタです。
―じゃあ、お兄さんも憧れのレスラーは6号選手と一緒でドラゴン・キッドなんですか?
カーン　ドラゴン・キッド選手も好きですけど、ドラゲーで一番憧れてるのは吉野正人選手です。
6号　やっぱね（なぜか得意気）。
―女子格闘家の渡辺久江選手も好きって言ってたし、吉野選手は女の子や子どもにホントに人気があるんだなぁ。
カーン　あの速さはホント凄いですからね。僕もリング上をあれだけ速く走り回りたいです。
―兄弟ともにレスリングもやってるみたいですが、総合格闘技はそれほど興味はないんですか?
パパ　お兄ちゃんのほうは総合もかなり観てて、一回「総合の選手になりたい」って言ってたこともあるんですよ。本人は覚えてるかどうかわかんないけど。
カーン　でも最近はほとんど観てないし、大晦日とかテレビでやってれば観るぐらいなんで。やっぱ、プロレスのほうがいいです。
―レスリング経験者とかは、プロレスの仕組みがわかっちゃうとプロレスから距離を置く人って多いですよね。
パパ　それはありますよね。
―お子さんたちはプロレスとレスリングは別物と思ってやってるんですかね?
パパ　僕の時代とは、またちょっと違うと思うんで、わりと別のものとして見てると思いますね。ただ、別のものなんだけど、似てる部分はあるなとか思ってるだろうし、いまのところなんにも悩んではいないと思います（笑）。
―それはよかったです（笑）。6号選手、1月13日には、初めて東京（DDT新木場大会）で試合をしたわけですけど、楽しかったですか?
6号　うん、楽しかった。
―6号選手目当てで来たお客さんもいっぱいいたみたいですよ。
6号　観に来てくれたら嬉しい。
―6号選手は、あまり緊張とかはしないほうですか?
パパ　見てる限りではしてないんだけど、本人は「した」って言うんですよ。たぶん〝緊張〟って言葉を知らないんだと思う（笑）。
6号　知ってるよ（マスク越しに口を尖らせて）。
―あ、知ってましたか（笑）。あんまり緊張しなかった?
6号　そんなに緊張はしなかった。
―プロに向いてるかもしれないですね。お父さん的には、このまま二人が普通にプロレスを続けていって、「プロレスラーになる」って言ったら賛成します?
パパ　どうですかねぇ。最近、お兄ちゃんのほうが真剣に「なりたい」って言いだして。
―いま何歳でしたっけ?
パパ　いま中2で14歳なんですけど、レスリングでもそこそこ結果を残してるんで、高校も誘われてるんですよ。
―スポーツ推薦の話がきてるわけですね。
パパ　そうです。中1ぐらいから「プロレスラーになりたい」っていうことは言ってたんですけど、どこどこの学校に行きたいっていうことも言ってたんですよ。それが東海テレビの取材でCIMA選手に会って、「将来プロレスラーになるのか?」って直接言われて、そこから頭がポーッとハシカみたいになっちゃって（笑）。
―CIMAに直接言われたら、その気になっちゃいますよね。やっぱり、入るんだったらドラゲー?
カーン　そうですね。ドラゲーでプロレスラーになりたいと思ってます。いや、必ずなります!
―お兄ちゃんはドラゲーに入りたいみたいだけど、6号選手はどうですか?
6号　僕もプロレスラーになる。あと、やっぱチャンピオン!
―おっ、素晴らしい! 兄弟ともども、今後の活躍を期待してます! あと、へなちょこプロレスの発展も祈ってます!!

【08年2月1日／名古屋・スポーツバー『スポルティーバ』にて収録】

近い将来ドラゲーのスターに!? ミスター6号のお兄ちゃん、チンギス・カーンも凄いんです!!



超高度なドラゴン・キッドのデジャ・ヴも難なくこなすカーン。下の6号の技紹介のように連続写真で見せようとしたが、最低でも20枚は使わないと説明できないので諦めましたYO！



『kamipro』取材班の目の前で複雑かつ高度な技を連発するカーン。写真はコーナー最上段から高々とジャンプ！ 両脚で相手の首をはさみ、後方にホイップする華麗な技だ！（技の名前は各自調査）。

これがミスター6号のコルバタだ!





ミスター6号を生んだ
へなちょこプロレスとは何か？

こ こまで、天才6歳児レスラーのミスター6号を大々的に取り上げてきたが、そもそも6号が所属する「へなちょこプロレス」（以下・へなプロ）とはどんな団体なのか？　ここでは、謎だらけのへなプロについて簡単に説明しておこう。

そもそも、このへなちょこプロレスという団体名が、ちょっとしたプロレスファンの耳に入るようになったのは、現役レスラーの中でも1～2を争うインディーマニアのDDT飯伏幸太が約1年ほど前、注目しているどインディー団体として、このへなプロと〝丸久プロレス〟（※こちらは各自調査でお願いします）の名前を挙げたのがきっかけと思われる。

そこから火がついたかたちで（もちろん弱火）、注目度が増したへなプロ。「へなプロには天才チビッコレスラーがいるらしい」との評判がネット上を中心に広がり、のちに動画系サイトでミスター6号の試合映像がアップされると、マニアのみならず多くの人々のハートをキャッチ。

それから、へなプロはテレビでも何度か取り上げられ、いまや名古屋のみならず、全国のどインディー団体でも屈指の知名度を誇る団体と言ってもいいだろう。

そもそも、このへなプロは6号のパパらレスリング出身者の仲間たちが〝お父さんのプロレスごっこ〟というテーマで始めたもの。歴史はそこそこ古く、6号のパパも「まだローカルインディーとかそういう言葉がないときからやってました」と語っている。

いま現在、所属選手は10名程度のへなプロ。主な練習場所は、関係者の経営するサウナ2階の空きスペースというのも、なんだか、へなプロらしくて、いい感じだ。

興行数は年に3回程度という、へなプロ。自主興行のほかには夏祭りなどのイベントで提供試合を行なうことも多いとか。

先月23日には名古屋・公武道タイガーホールで、6号のプチブレイク後、初の大会を開催したへなプロ。やはり、6号効果もかなりあったようで、当日は70名以上のファンが詰めかけ、へなプロとしては、これまでにない盛り上がりを見せたという。

お兄ちゃんのジンギス・カーンは第2試合に登場、前のページでも紹介した〝デジャ・ヴ〟など高度なテクニックをバンバン披露し、謎の覆面レスラー・ブラックデビルに快勝！

注目のミスター6号が対戦したのは学級委員・青山君という怪しい覆面レスラー（身長＆体重は2倍以上！）。当日は風邪をこじらせ、おまけに持病のアトピーの調子も良くなく、6号は試合直前までボリボリと身体を掻きまくっていたらしい。本調子にはほど遠い体調ながらも、なんとか試合は勝利を収め、連勝記録を伸ばした6号だったが、大会後はお父さんから試合内容についてダメ出しを食らったのか、泣きじゃくる6号の姿（もちろんマスク着用）が多くの人に目撃されている。

10年経っても16歳！　20年経っても26歳！　30年経ってようやく俺と同い年!!　何が言いたいかっていうと、6号のレスラー人生はまだ始まったばかりってこと。チャンピオン目指し、頑張れ6号！　あ、へなちょこプロレスの発展も祈ってま～す!!

……なんて書いていたら、なんとなんと、23日の大会を最後に6号、カーン、そしてお父さんの3人が、へなプロ離脱との驚ガク情報をゲッツ！　今後、親子3人は新たにユニットを立ち上げ活動していくらしいが、いったい、へなプロはどうなっちまうんだぁ!?

プロレス団体密度、全国一!?
どインディー団体の宝庫　名古屋プロレス事情

先 頃、新総合イベント・DREAMのイベントプロデューサーに就任した笹原圭一氏や谷川貞治FEG代表、佐伯繁DEEP代表（出身は富山だが）、さらには元DSE代表の榊原信行氏など、『kamipro』読者的には、名古屋（というか愛知県）といえば格闘技関係者が以上に多い都市としてインプットされていることだろう。

しか～し、名古屋が熱いのは格闘技だけではない。じつは名古屋は日本一のプロレス団体密度を誇る都市でもあるんですよぉ！

いま、名古屋を中心とした東海地区には、上のコラムでも紹介した、へなちょこプロレスをはじめ約10団体がひしめき合うというプロレス戦国時代の真っただ中なのだ。

まあ、中には開店休業中の団体もあったり、旗揚げや解散（＆自然消滅）を繰り返しているため、正確な数を把握している人なんてほとんどいないだろうが、ここ数年は約10団体をキープし、100人近い自称プロレスラーが存在するというから驚き（その中には〝ビッグ・シゲ〟のリングネームで活躍する佐伯繁氏も含まれているはず）。

主だったところを列記すると、東海プロレス、SGP、DEP、へなちょこプロレス、柴田道場、NWD、GUYZ、中日本プロレス……。ほかにも『愛プロレス博』などをプロデュースするスポルティーバエンターテイメントや、地域対抗戦をコンセプトに6月に旗揚げ戦が決まっている高木三四郎プロデュースのでら名古屋プロレスなど、書いていても、どんな団体で、どんな選手がいるのか皆目見当がつかないが、とにかく、どえりゃあ状況になってるんだわ！（佐伯さん調）。

そんな中で、一番精力的に活動しているのが、現在、名古屋在住の後藤達俊が強化アドバイザーを務めるDEP（ダイワ・エンターテインメント・プロレスリングの略）。これまで、自主興行には鈴木みのるやディック東郷（かつてコーチも務めていた）、長井満也、メカマミーなど、有名どころのレスラーも数多く参戦し、所属選手も10名を軽く超えるしっかりした団体だ。最近ではZERO1・MAX、ドラディション、DDTなど他団体とも積極的に交流をはかり、選手＆団体のレベルも急上昇中なのだ。

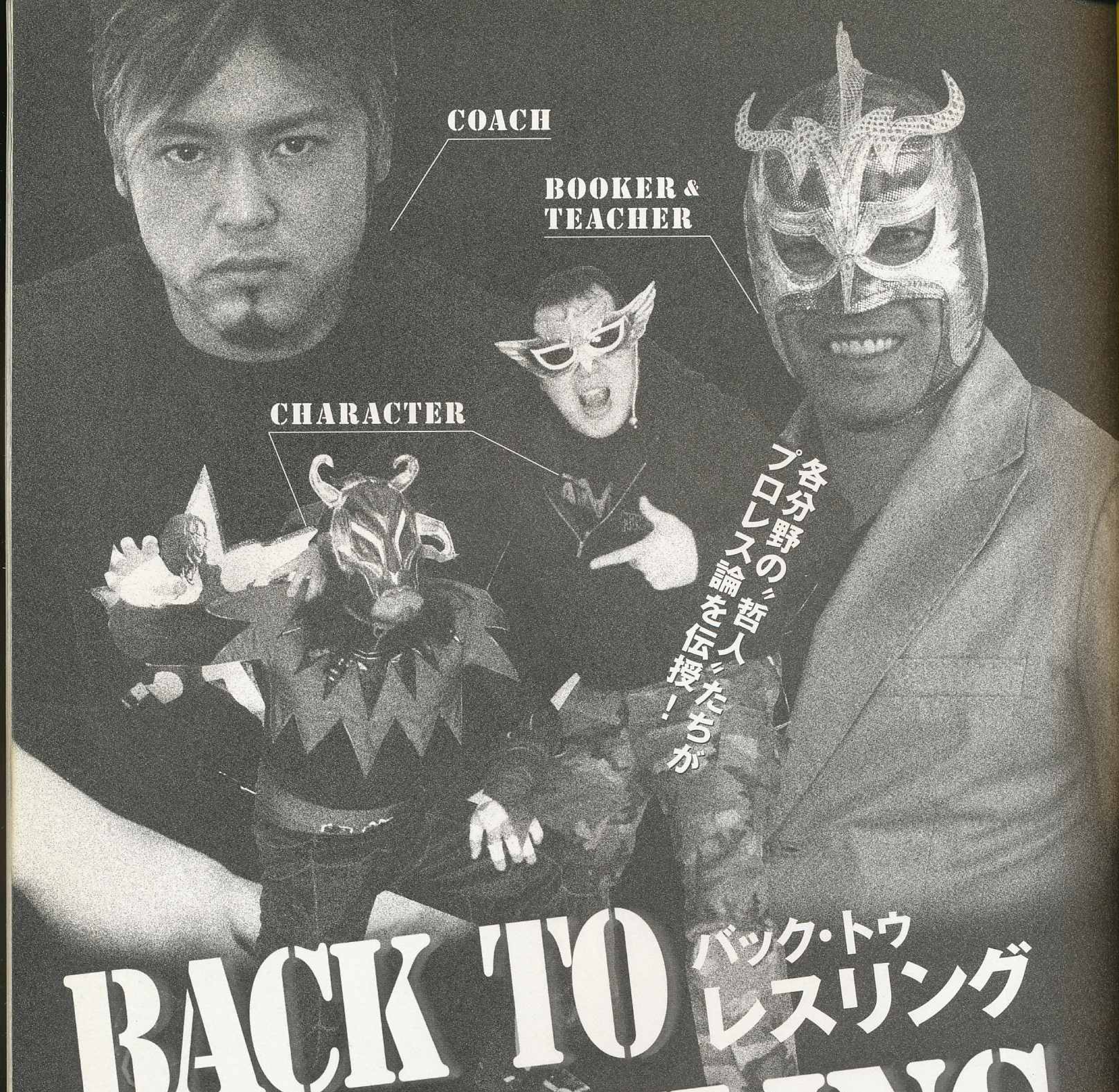
ほかには、円谷プロ公認のウルトラマンロビン率いるSGP（スペシャリスト・グローバル・プロレスリング）も、ちょっとしたプロレスファンなら聞き覚えがあるはず。昨年の9月には女子プロ部門を正式な団体として運営していくことを発表し、東海地区では初の女子プロ団体の誕生ということで、地元ではかなり話題になったんだとか。

それ以外にも、07年5月の『マッスルハウス』後楽園大会で主役的な扱いで登場した〝天然系レスラー〟マンモス半田や、エルドラドのバラモン兄弟に続くリアル双子レスラー、ヤス久保田＆ヒデ久保田のクボタブラザーズなど、都内の有名団体から声がかかる選手も続々と輩出している名古屋プロレス界。今後の動向に注目だがや！

（チョロ）



昨年、名古屋初の女子団体として誕生したSGP女子プロレス。写真は所属の魁羅朱里とSGPの名物レスラー、ロビンだ。

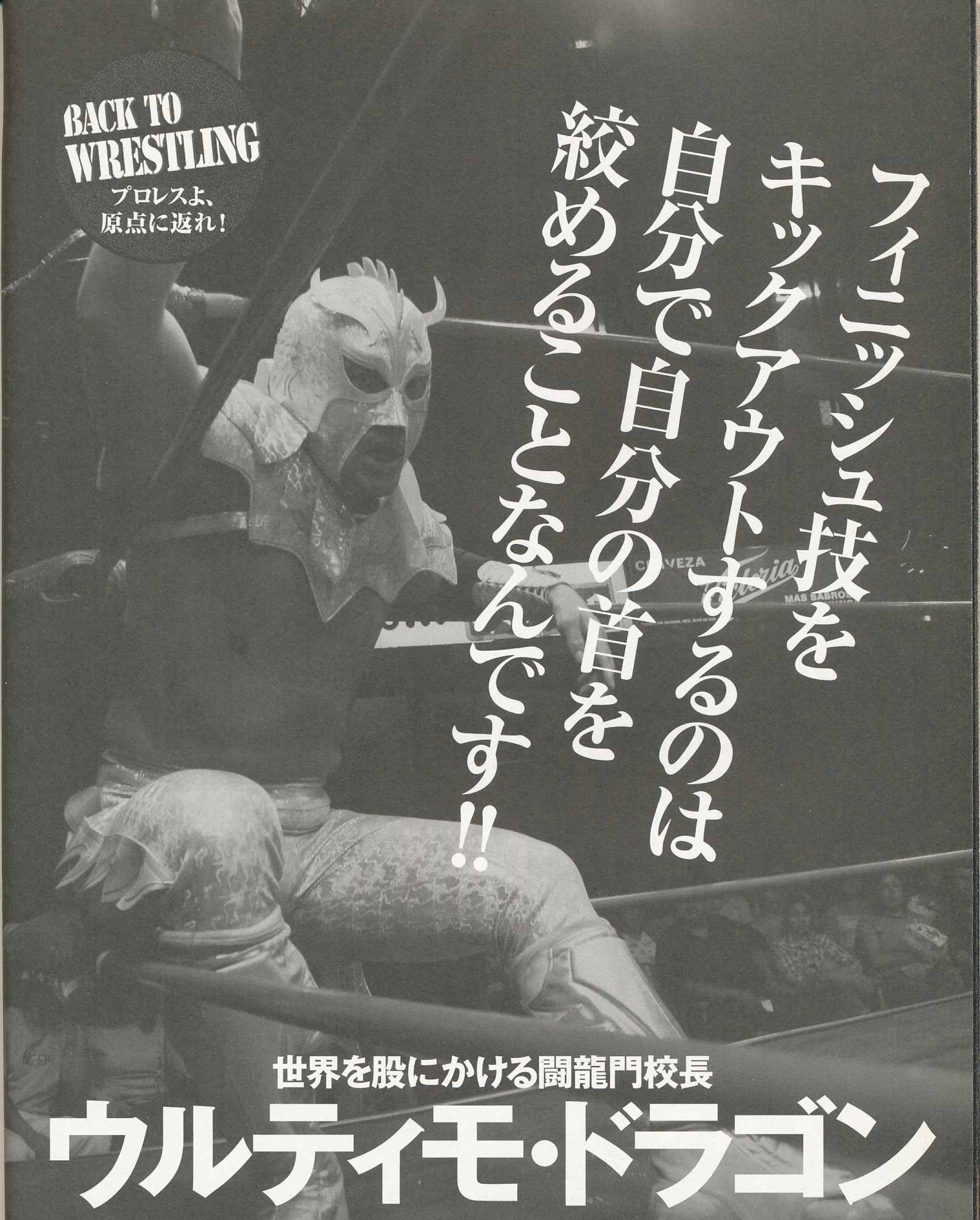


各分野の"哲人"たちが
プロレス論を伝授！

BACK TO WRESTLING
バック・トゥ・レスリング

プロレスよ、原点に返れ！

"忠実なるプロレスの姿"を求めて、TAJIRI、アン・ジョー司令長官、島田二等兵、大谷晋二郎と続いてきた本誌『バック・トゥ・レスリング』特集。今回は『ハッスル』の枠を飛び越えて、プロレス界各分野の"哲人"たちに、プロレス論をたっぷりと伝授してもらった。本来のおもしろさに立ち返るため、プロレスよ、原点に返れ！



BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ！

フィニッシュ技をキックアウトするのは自分で自分の首を絞めることなんです!!

世界を股にかける闘龍門校長

ウルティモ・ドラゴン

そのプロレス論では、武藤敬司と双璧に評価されるウルティモ・ドラゴン。世界中のリングで闘ったプロレスラーとしての経験だけでなく、プロレス学校『闘龍門』校長として、これまで多くの人材を輩出。さらに『闘龍門JAPAN』ではブッカーとしてプロデュース能力もおおいに発揮。そんなあらゆるプロレス頭を持った男が考える、本当のプロレスとは？

聞き手&撮影／堀江ガンツ

新日本ジュニアは天龍さんの下で学んだプロレスのセオリーとまったく違った

――今日は『バック・トゥ・レスリング』という企画で、本来、プロレスはどうあるべきなのか？　ということをうかがわせていただたいんですよ。

ウルティモ　前にTAJIRIがいろいろしゃべってた企画ですよね？

――あ、ご覧になっていただけましたか（笑）。ご存知でしたら話は早いんですけど、あのときTAJIRI選手が「90年代の新日本ジュニアから、日本のプロレスは〝奇形〟な進化を遂げてしまった」と発言して、かなり反響があったんですよ。

ウルティモ　なるほど。確かにTAJIRIが言わんとすることも、わかりますね。ボクも初めて新日本に上がって、ジュニアの闘いに出たとき「なんじゃこりゃあ」って思いましたから（笑）。

――「なんじゃこりゃあ」ですか（笑）。

ウルティモ　要はカルチャーショックですよね。

――どんなところにカルチャーショックを感じたんですか？

ウルティモ　簡単に言うと、プロレスのセオリーがないんですよね。ボクはメキシコでデビューして、ユニバーサルを経て、SWS、WARでプロレスを学んだんですよ。天龍さん、カブキさん、冬木（弘道）さんといった、本当にプロレスがうまい人たちと試合をさせていただいて、カブキさんには言葉でもいろいろアドバイスをもらって、素晴らしい環境だったと思うんですよね。

――プロレスを学ぶにはもってこいですね。

ウルティモ　ところが新日本vsWARの対抗戦で、新日本に上がったら、そこで学んだプロレスのセオリーとまったく違うプロレスだったんですよ。それで「なんだこれ？」と思って、戸惑ってしまって、最初の1年ぐらいは新日本でしょっぱい試合をしてたと思うんです。自分本来のプロレスがまったくできませんでしたから。

――メキシコとSWSで、ジュニアのトップだった浅井さんが、まったく自分の持ち味を出せなかった、と。

ウルティモ　そこでちょっと悩みましたよね。自分はダメなんじゃないかって。そのあとボクはメキシコに帰って、それからWCWに出られることになって、WARとメキシコで学んだことと新日本で悩んだことを爆発させたんですよ。そこから新たなものが見えてきて、自分のプロレス観というのが固まって、闘龍門を作ったんですけどね。そうやって、自分なりにプロレスがわかってきて、あらためて考えると、新日本のジュニアは明らかにおかしかったんですよね。

――あらためて「おかしい」と気づきましたか（笑）。

ウルティモ　何がおかしいかというと、当時の新日本ジュニアには「受け」がなかったんですよ。プロレスって「受け」て初めて成立するものなんですよ。そしてボクは天龍さんの下にいたんで、天龍プロレスの基本である「受け」を学びますよね。そういう「受け」を学んだレスラーが、そのセオリーのまま新日本のジュニアに入るとどうなると思います？

――受けて、受けて、やられっぱなしになっちゃう感じですか？

ウルティモ　そうなんですよ。こっちが受けてるから、プロレスの試合が成立しているのに、向こうは攻めてばかり。そうなると、僕らは弱く見えちゃいますよね。それで向こうは「なんだよ、あいつら弱いじゃねえか」って言うけど、そういうことじゃないじゃないですか。

――まったく違いますよね。

ウルティモ　天龍さんも「あんなのプロレスじゃねえよ」って言ってましたよね。なぜ「受け」が大切かというと、プロレスって技を受けて、その痛みをアピールして、受けた痛みやダメージが観客に伝わって、初めて成立するものなんですよ。

――なるほど、なるほど。痛いか痛くないかより、痛みが観客に伝わるかどうかが大事なんですね。

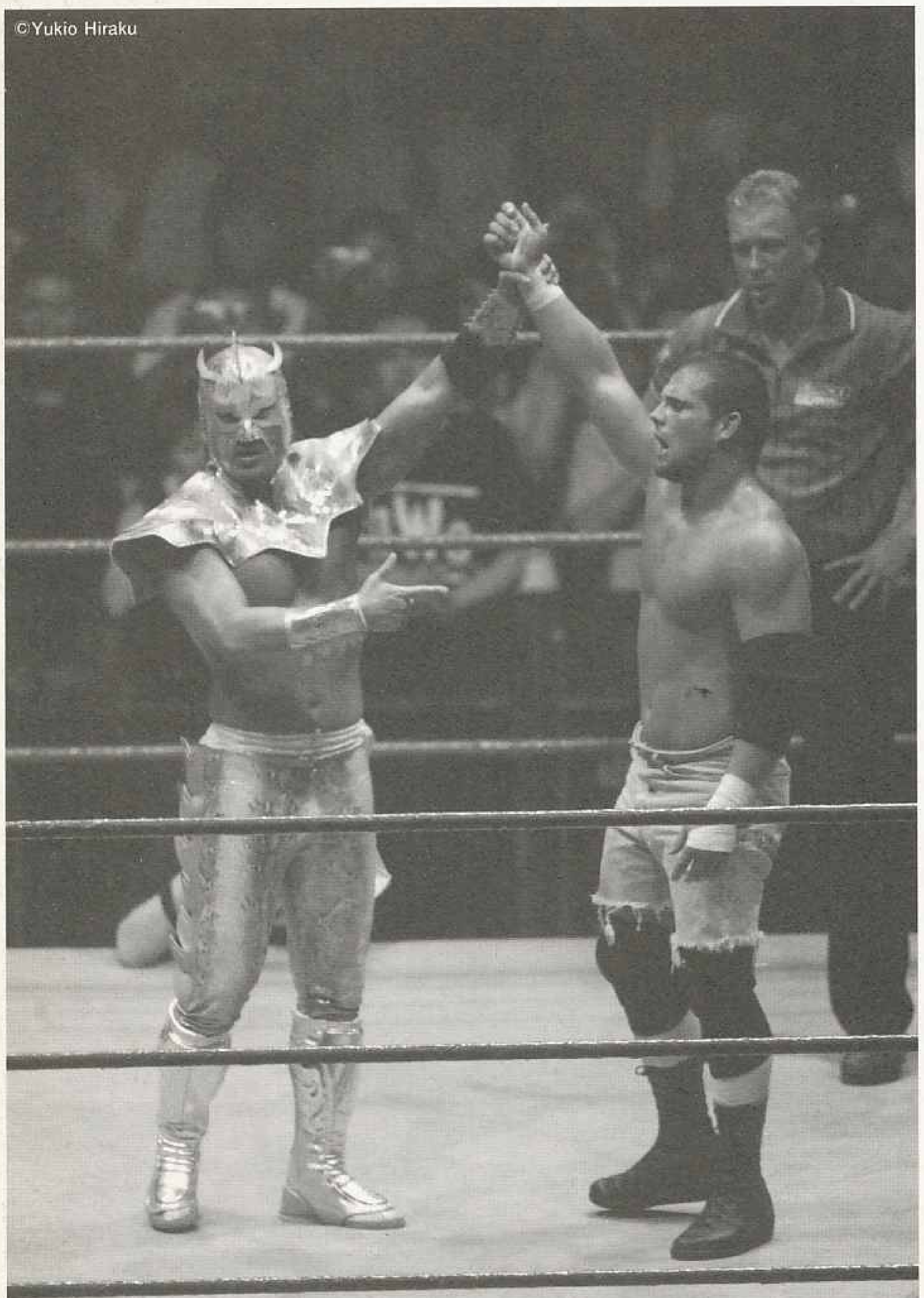
ウルティモ　大事というか、それがすべてです。凄く痛くてもお客さんに伝わってなかったら、まったく意味がないんですよ。だから、天龍さんと試合をやると、みんないい試合になるじゃないですか。

――なりますね。

ウルティモ　それはなぜかというと、天龍さんは技を受けるだけでなく、受けたダメージを観客に伝えるのが、もの凄くうまいんです。たとえば顔を殴られたら、普通のレスラーはバタンとうしろに倒れるだけですよね。でも、天龍さんはアゴを押さえながら、しかめっ面でうずくまるんですよ。

――ああ、確かにそうですね！

ウルティモ　ああすると、「アゴに入れたパンチがもの凄く効いた」ということが



WWE、WCW全米2大メジャー所属経験があるウルティモ。日本、アメリカ、メキシコだけでなく、世界中のプロレスを体験している彼のプロレス論はシンプルながら、じつに納得させられるものを持っている。

観客に伝わるんです。そこで初めてパンチにも意味が出てくるんですよ。

――なるほど、なるほど。だから天龍さんと試合すると、相手が光るわけですね。

ウルティモ そう。天龍さんが受けることで、相手を光らせてるんですよ。そして、それがプロレスの基本じゃないですか？ だから俺は闘龍門でも、まずやられることから教えてるんです。受け身が取れて、セールができて、ちゃんといい仕事ができれば、世界中どこに行っても仕事があるから。

――だからこそ、闘龍門出身の選手は、どこのリングでも重宝される、と。

ウルティモ それをわかってるのと、わかってないのとでは、大きな違いですよ。格闘技は負けたら終わりだけど、プロレスはそうじゃないから。負けても、プロモーターがいいと言えば、仕事は永久に続くんです。日本だと負けることを嫌がる選手っているでしょ？ でも、誰かが負けなきゃプロレスは成り立たないし、負けたからって仕事がなくなるわけじゃないじゃないですか。物語の一員でいれば、仕事はずっと続くのに、それがわかってない人がいる。メチャクチャ簡単なことなのに。

――そういった意味で、「俺が、俺が」の弱肉強食だった新日本ジュニアは、プロレスのセオリーには反していた、と。

ウルティモ そうですね。ただ、お互いに攻め合ってあれだけの試合ができるのは、凄いことだとは思いますけどね。闘いがどんどん高度になっていった結果だったと思いますから。でも、それが良かったのかどうかはわかりませんけどね。ああいう攻防が行くところまで行って、やることがなくなっちゃったのが、いまのプロレス界だと思いますから。

――確かに次はもっと危険な技、もっと危険な技というふうにやってるうちに、ああなっていったわけですもんね。

ウルティモ でもね、ああやって攻防を高度にしていくと、凄いことをやってるんだけど、徐々に観客が減っていっちゃうんですよ。

――高度にすればするほど減っていくんですか？

ウルティモ だって、それは試合内容がマニア向けになっていくってことじゃないですか。複雑なことを次から次へとやっても、普段そんなにプロレスを観ないお客さんはわからないですよ。

――ああ、確かに。試合がマニアックになって、マーケットを狭めていってる、と。

ウルティモ だから、観客を増やしたかったら、逆のことをしたらいいんですよ。複雑にするからマニアにしかわからなくなるんだから、みんなに観てもらうためには、シンプルにすべきなんです。簡単なことなんです。子どもや女性にもわかりやすいプロレスにすればいいんですよ。

――ほう、それはちょっと目からウロコですね。

ウルティモ だからたとえばね、地方に行ったときは、ウチの選手にも言うんですよ。「これは手を抜けと言ってるわけじゃないけど、あんまり難しいことはやるなよ」って。だってウラカン・ラナをもう一回切り返してジャックナイフを決めるとか、それは高度な難しい技ですけど、普通のウラカン・ラナすら観たことない人の前でそれをやったら、何がどうなっているのか、わからないまま終わりじゃないですか。

――どっちが攻めてる技なのかもわからないかもしれないですね（笑）。

ウルティモ ウラカン・ラナを3回観た人がそれを観たら「オッ！」と思うかもしれないけど、知らない人に〝応用編〟をやったって意味がないんですよ。だから「難しいことはやるな」と。

――大事なことですね。

ウルティモ 大事ですよ。いま、日本のプロレス界で一番の問題は、観客動員が減ったことじゃないんです。ただ減っただけじゃなくて、子どものファンがいなくなったことが問題なんですよ。

――ホントに会場で子どもを見かけませんよね。『ハッスル』ではけっこう見かけますけど。

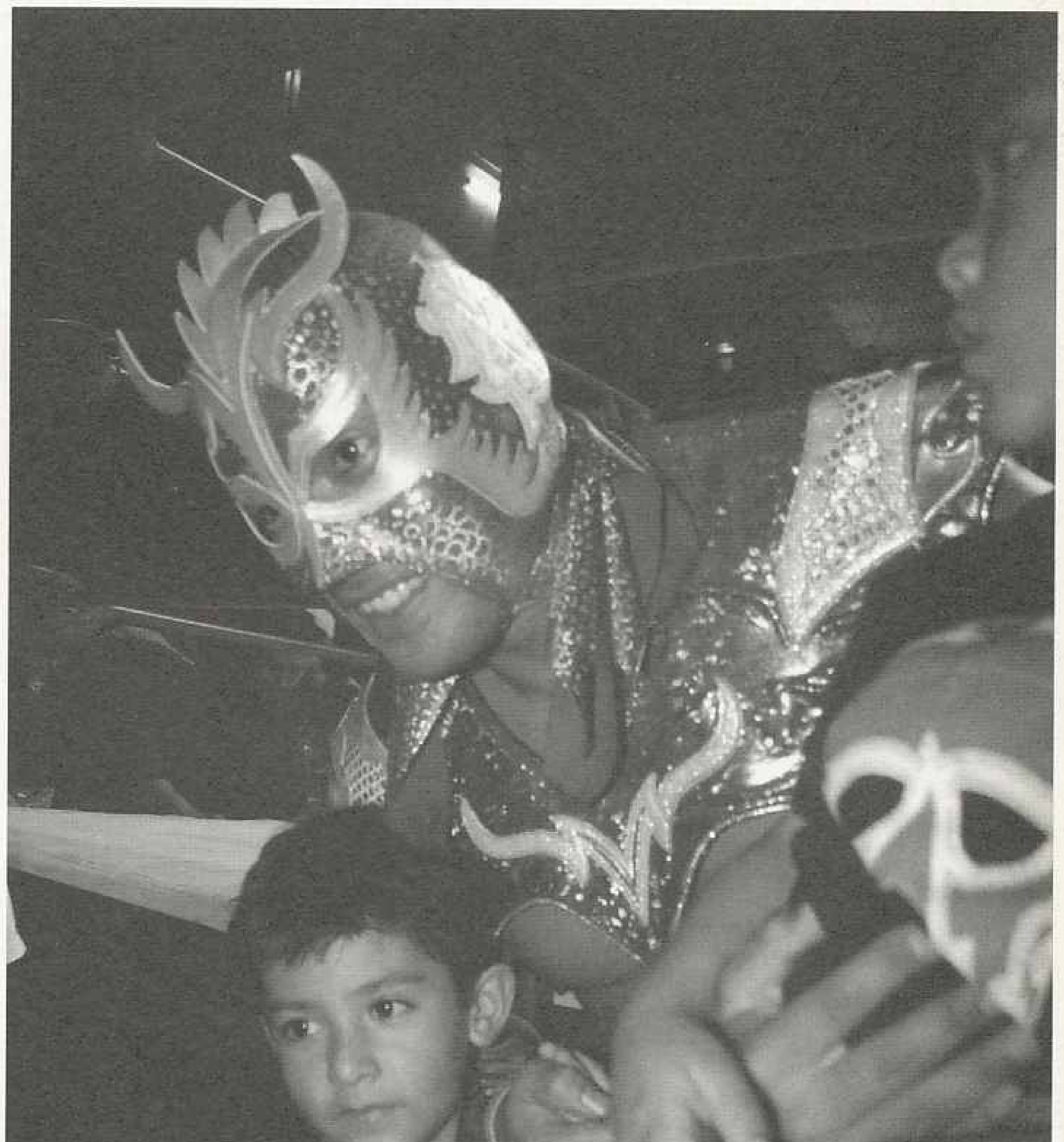
ウルティモ これは凄く大事なことですよ。こないだプエルトリコに行ったんですけど、やっぱりプエルトリコのプロレスも衰退してて、お客さんが入ってなかったんです。でも、日本と何が違うかというと、少ないながらお客さんの半分が子どもなんですよ。だから、プロモーターのカルロス・コロンさんに言ったんです。「プエルトリコは子どものファンがいていいね。日本は子どもなんかいないよ」って。そしたら「それじゃ将来がないじゃないか」って言われたんです。

――確かに子どものファンがいなければ、

日本のプロレス界で一番の問題は観客動員が減ったことより子どもが減ったことですよ

BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ！





メキシコのプロレス会場には多くの子どもたちが、いまも駆けつけている。こういった子どもたちが大人になってから、また自分の子どもを連れてプロレス会場にやってくる。こうしてプロレスは続いていくのだが、日本マットは……。



選手、そして闘龍門校長としてだけでなく、メキシコで毎年2万人規模のビッグイベントを行なうなど、プロモーターとしての顔も持つウルティモ。さまざまな立場から、彼の柔軟な発想は生まれてくる。

高齢化して先細りする一方ですよね。

ウルティモ　だからいまから手を打たなきゃダメなんですよ。ボクらが子どもの頃って、好きか嫌いかは別として、プロレスを知らない子どもっていなかったじゃないですか。でも、いまの子どもはプロレスという存在自体を知らない子がたくさんいるんです。このままいったら、プロレスという文化がなくなってしまう可能性すらありますよ。

――そういうことになりますね。

ウルティモ　だからプロレスって、子どもがわかることをやるって大切なことなんです。ボクが闘龍門JAPANのときにやってたように正義と悪をハッキリ分けて、キャラクターをつけて、わかりやすく、そしてわくわくするものを作らないと。

――じゃあ、高田モンスター軍とハッスル軍の闘いという、極めてシンプルな図式の『ハッスル』は正しいんですね。

ウルティモ　正しいと思いますよ。だから、一般の人にも受けてるんじゃないですか。簡単なことですよ。あのね、ボクが外国人を日本のメジャー団体に連れていって「どうだ、日本のプロレスは凄いだろ」って言ったら、なんて言われたと思います？「みんな同じ格好をして、みんな同じ技を使うから、誰が誰だかわからない」って言うんですよ（笑）。

――確かに外国人が観たら、そうかもしれないですね。みんなチョップやって、ラリアットやって、パワーボムやって、みたいな（笑）。

ウルティモ　WWEがなんで世界中でウケてるかっていったら、ちゃんとキャラクターが確立されてるからですよ。そこには難しい攻防なんていらないんです。だって、クリス・ジェリコのフィニッシュホールドなんて、ボストンクラブですよ。

――古典的にもほどがありますよね（笑）。

ウルティモ　ハッキリ言って、フィニッシュなんてなんだっていいんですよ。スリーパーホールドでも、コブラツイストでも、なんでもいいんです。ただ一つ、かぶっちゃダメというだけでね。

――でも、いまの日本のプロレスは、フィニッシュがフィニッシュじゃなくなってる現状がありますよね。

ウルティモ　それは使い方がヘタなんですよ。ジャーマンは使い方によってはフィニッシュにもなるし、つなぎ技にもなるんです。フィニッシュにできるかどうかは、本人次第。

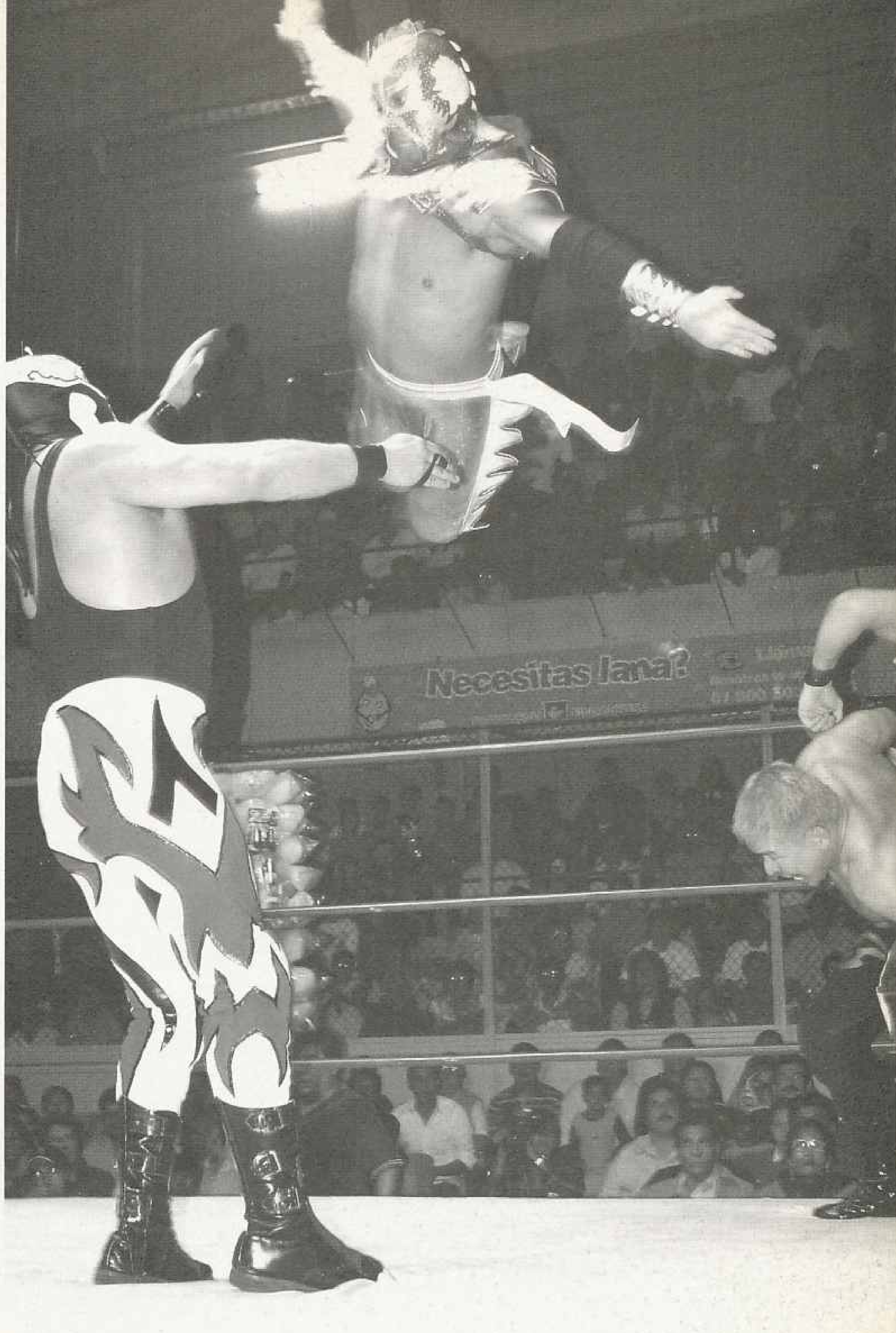
――ただ、いまのファンはジャーマン一発じゃ納得しないんじゃないですか？　だからこそ、何連発もやったり、もっと危ない技をやったりするんでしょうけど。

ウルティモ　それはね、さっきも言ったように、もう試合がマニアに向けた試合になっちゃってるんですよ。そのマニアの想像を超えなきゃいけないってことで、危険な技を出してるんだろうけど、ファンの想像を超えるのは、それまでの過程で超えればいいんですよ。だから、フィニッシュで想像を超えようとするのは、やり方が間違ってるんです。

――あくまでフィニッシュに行くまで内容で惹きつける、と。

ウルティモ　日本の選手はすぐ相手のフィニッシュ技をキックアウトしちゃうけど、それをやった時点でその技は死んでしまうんです。お互いがお互いのフィニッシュをキックアウトしてたら、首を絞め合ってるのと同じですよ。だって、ストーンコールドがスタナーやって、ワン、ツーで返しちゃうヤツいないでしょ？





――いませんね（笑）。

ウルティモ　いたとしても、それはスターやったあと、お互いにダメージがあって、なかなかフォールに行けなくて返されるというエクスキューズがちゃんとあって、普通では絶対に返さない。でも、日本だとフィニッシュを返しちゃうんですよ。確かに大技をキックアウトしたら、その瞬間は盛り上がりますよ。でも、返された時点で、そのフィニッシュ技は死んでしまうんです。

――次からそのフィニッシュで負けたら「そんな技で負けるの？」って思われちゃうわけですね。

ウルティモ　そうそう。だから次からは2連発にするとか、そうやって数を重ねるしかなくなっちゃうんです。そうじゃなくて、フィニッシュ技を食らったら、まずは場外に転がり落ちて、そこで大の字になったりね。

――それだと物理的にフォール負けにはなりませんね（笑）。

ウルティモ　あとはフィニッシュをキックアウトするぐらいだったら、誰かが乱入して試合をぶち壊したほうがいいんですよ。そうすれば、そこでまたアングルができるじゃないですか。アメリカでは、いまだにこの方法でやってますから、日本でもできると思うんですよ。ただ、お客さんの反応が怖いからやらないだけで。

――不透明決着で「ふざけんな！」ってなるのがイヤなんでしょうね。

ウルティモ　でも、ホントはそんなふうにはならないんですよ。確かに昔の新日本プロレスとかで、乱入がきっかけで暴動が起きたりしたことはありますけど、

フィニッシュ技を返すぐらいなら、乱入して試合をぶち壊したほうがいいんです

あれはなぜ暴動になったかといえば、一番大切なところで、不透明決着をやっちゃったからですよ。『レッスルマニア』のメインイベントで、そんなことやりませんからね。

――なるほど。普段は乱入でもいいから、そこは完全決着つけてくれよってところで、乱入しちゃってた、と（笑）。

ウルティモ　だからWWEと逆なんですよね。WWEは普段は乱入で「次週へ続く」だけど、『レッスルマニア』ではしっかりとしたものを見せるんです。だから、乱入も使いようですよ。

――いやぁ、勉強になりますねえ。

ウルティモ　ホントは簡単なことなんですけどね。世の中、いろんなものが変わりますから、プロレスも時代の流れで変わっていって当然だし、仕方がないことだと思うんですよ。でも、プロレス本来の魅力や、プロレスにとって大事なことって、じつは変わらないと思うんですよね。

――根本は変わらない、と。

ウルティモ　自分はけっこう服とか好きで、いろいろ勉強したりしてるんですけど、ファッションの世界では「クラシック」って言葉を使うんですよ。要は基本的なものは普遍性があり、変わらないってことですよ。たとえばスーツにしたって、一つの変わらないフォルムがあって、それが時代によって襟が大きかったり、ボタンの数が違ったりするけど、スーツの基本的なかたちは変わらないじゃないですか。

――確かに、へんにいじると「省エネルック」みたいな、おかしなことになりますよね（笑）。

ウルティモ　プロレスだって同じだと思うんですよ。だから、いまプロレスが低迷していて迷ったらクラシックに戻ればいいんです。ファッションだって、急に60年代のファッションが流行ったりしますよね。まったく別のものって作れないんですよ。いまのプロレスはファッションでいったら、装飾をつけすぎて、センスが悪くなってるようなところがあると思うんですよね。

――オシャレが行きすぎて、逆におかしなことになってる、と（笑）。


ウルティモ　やっぱりオシャレはワンポイントでいいんです。行くところまで行ったんなら、クラシックに戻ればいい。ボクはそう思いますね。

――大事なのはバック・トゥ・クラシックということですね。今日は非常にためになりました。ありがとうございました！

【08年2月23日／羽田空港内コーヒーショップにて収録】



うるてぃも・どらごん■66年12月12日名古屋市出身。新日本プロレスの門を叩くが正式入門は許されず、単身メキシコに渡りデビュー。90年にユニバーサル・プロレス連盟のエースとして凱旋帰国。その後、EMLL、SWS、WAR、WCW等で活躍し数々のタイトルを獲得。97年にはプロレス学校「闘龍門」を設立。これまで数多くの人材を育てた名伯楽でもある。現在は後進の育成をしながら、世界中のリングで活躍中。172センチ、85キロ。



BACK TO WRESTLING
プロレスよ、
原点に返れ！

高度な技を見せるよりもファンの心を燃やすようなパッションが一番大事ですよ

全日本プロレス ジュニアヘビー級のエース兼コーチ

カズ・ハヤシ

日本、メキシコ、アメリカとインディーからメジャーまで世界を股にかけて活躍し、豊富なレスリング経験を持つカズ・ハヤシ。そのバックグラウンドをベースに現在は全日本プロレスでコーチを務めていることもあり、普遍的な"プロレスの基本"について語ってもらうべくインタビューに臨んだのだが、そこでカズが話したことは……。そのプロレスに懸けるパッションを感じろ！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

カズ　今日は突然、なんの話を聞きにきたんですか？

―最近「いまのプロレスはわかりにくい」というファンが多くなっているので、あらためてプロレスのベーシックなことが大事になってきているのかな、と思ってお話をうかがいにきたんです。

カズ　それって「ハイスパート・レスリングってどうなの？」みたいな話じゃないんですか？（笑）。

―ガハハハハ。たしかに日本のプロレスは、いわゆるハイスパート・レスリングというものが出てきてから、プロレスの型が崩れちゃったんじゃないかという仮説を立てたんです。だから、いまプロレスをちゃんと立て直すにはベースが大切なんじゃないかなと思うんですけど。

カズ　はい、そのとおりです（笑）。でも、一言でベーシックをちゃんとするというと簡単なようなんですが、それは難しいことで、うまく説明できるかどうかわかりませんけど。

―では、じっくりと聞かせていただきます。カズ選手がコーチを務めてる全日本プロレスは、そういったベーシックな部分を大事している印象が強いんですが、いったいどういった指導をされてるんでしょうか。

カズ　最初に言いますけど、こればっかりは、「こういうふうにやればＯＫ！」っていう答えはないんですよ。

―ああ、人それぞれ特性も違うでしょうしね。

カズ　そうですね。それに教えたことを理解するセンスも人によって違うから、試合を通じてわからせたり。プロレスの技術って単純に教えてもらうという話じゃないですよね。ボクもいろいろと経験して、いまのスタイルになったわけで。

―そのカズ選手のプロレスのルーツから聞きたいんですけど、最初に入ったのはユニバーサル・プロレスなんですよね。

カズ　そうです。ボクに最初にプロレスを教えてくれたのは、先輩の（ザ・グレート・）サスケさんと邪道さん、外道さん、（スペル・）デルフィンさん、ディック東郷さん。その中で、一番長く接していたのがディック東郷さんで。二人きりで練習してましたね。

―東郷さんって、デビュー当初の頃から新人離れしているというか、いきなり職人チックな動きでしたよね。当時のルチャともまた違うような感じで。

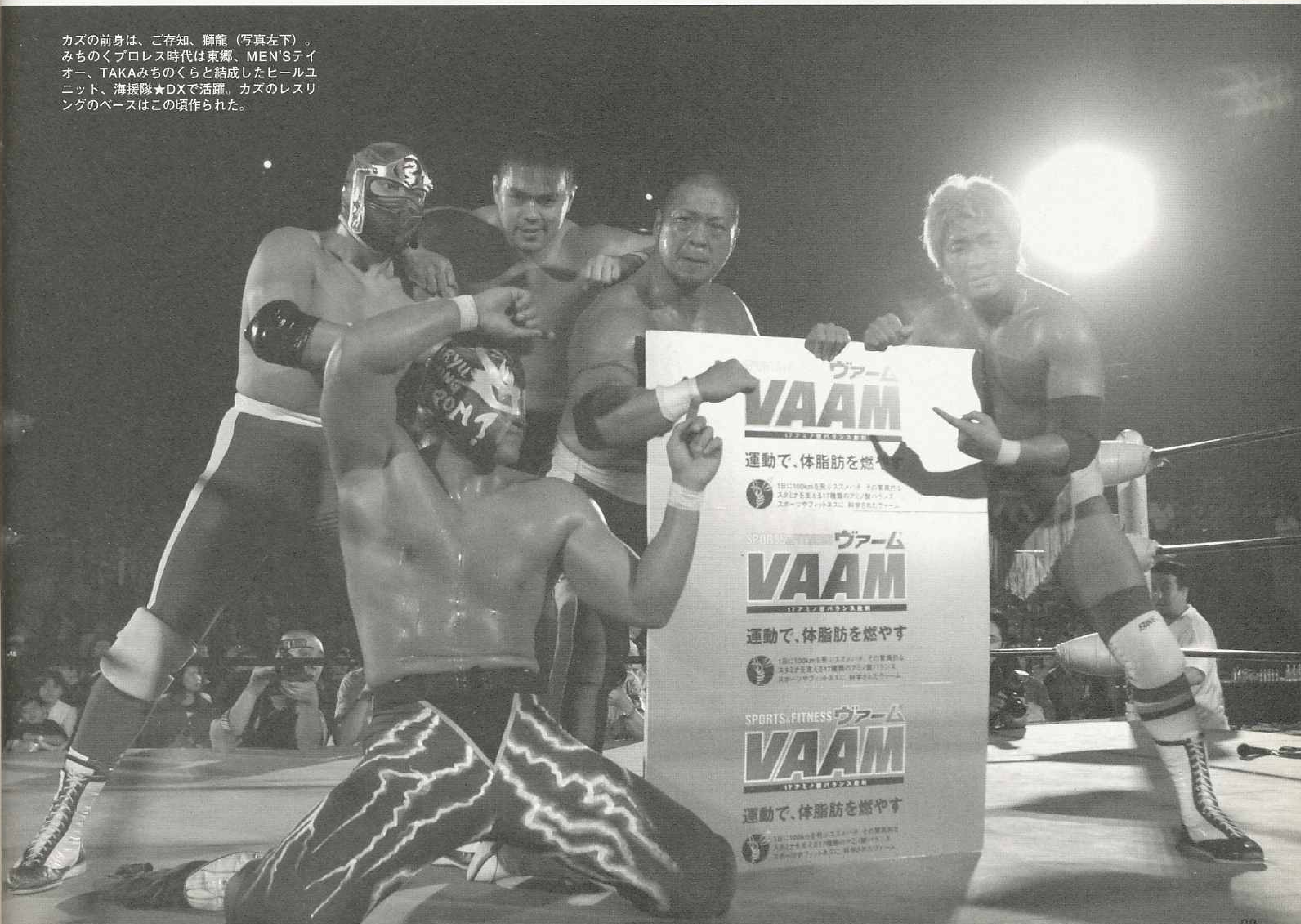
カズ　そうですね。日本とメキシコの両方の色を兼ね備えている感じでしたよね。試合の組み立て方の話はよくしましたよ。ディスカッションというか、頭の中で閃いたことを「こういう動きはどうですかね？」って提案したり。

―じゃあ、カズ選手のプロレスの一番根っこの部分は、兄貴分の東郷さんと一緒に作りあげたという感じなんですね。で、その後、メキシコに行かれるわけですよね。

カズ　はい。メキシコのルチャ学校の道場に住み込みで、朝も夜も一日中練習してました。

―初めてプロレスの学校というか、教育システムに入ったわけですけど、カルチャーショックみたいなものってありました？

カズ　ありましたね。やっぱ、日本の道場での練習って、スクワットとか腹筋とかで、やっても技の練習ぐらいだったんですけど、メキシコに行ったら、〝飛び〟の練習もするんですよ。



カズの前身は、ご存知、獅龍（写真左下）。みちのくプロレス時代は東郷、MEN'Sテイオー、TAKAみちのくらと結成したヒールユニット、海援隊★DXで活躍。カズのレスリングのベースはこの頃作られた。

——あ、練習でも実際に飛び技を繰り出すんですか。

カズ　平気でそういう練習をするし、メキシコ独特の〝飛びの受け〟の練習もやらされて。「こういうのって試合の中から生まれるんじゃなくて、練習からも作っていくんだ」って思いましたね。メキシコのほかの道場のことはわかりませんけど、自分の行っていた道場ではそうでしたね。

——選手はみんなその道場で練習するんですか?

カズ　いや、そうでもなくて、やりたい人だけって感じでしたけど。ボクは、ほかにやることがなかったんで練習ばっかりしてたんです。金がないと外に出れないし。1ヵ月1万円で暮らしてましたから。

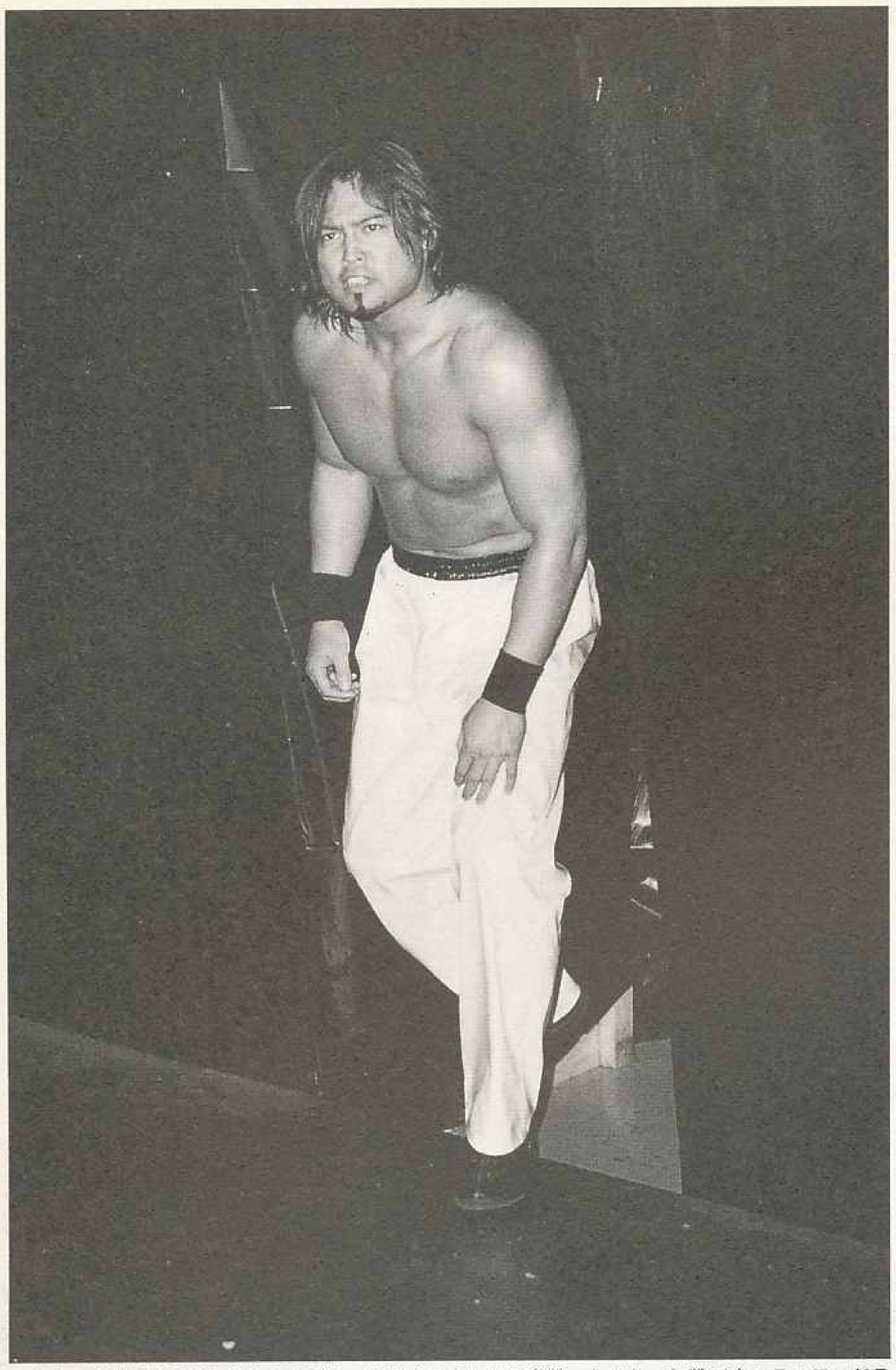
——練習するしかないですね（笑）。本場のメキシコは、試合の組み立て方も日本と違ってました?

カズ　日本とは、ルールからして違ってますよね。3本勝負だし。試合の流れっていうのも、日本とは全然違います。1本負けても、まだなんとかなるっていうのがあるんで。

——3本あると試合の中でストーリーができやすいようなイメージもあるんですけど。

カズ　そうですね。メキシコのお客さんたちって、その目の前の攻防がどれだけ凄いかってあんまりわかってないと思うんですよ。だから、3本にしたほうが、試合展開がわかりやすいってことなのかもしれないですね。日本人は格闘技が好きじゃないですか。だから、「もうダメだな」とか「ここがピンチだ」とかわかるから、じっくり観てるというか。

——メキシコだと、フィニッシュホールドを大事にしてる部分もありますよね。



メキシコを経てWCW入りしたカズは、トライアウトから参戦。しかし、初戦でウルティモ・ドラゴンと好勝負を展開。翌日には正式契約、看板番組『マンデー・ナイトロ』に出演してみせた。

BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ!

やっぱり、みんな〝プロレスごっこ〟から始まるわけじゃないですか

カズ　そうですけど、そこはアメリカのほうが大事にしますよね。フィニッシュに行き着くまでに、〝どうしてここを攻めているのか〟という意味づけをちゃんとやってますしね。

——アメリカンプロレスの試合が理に適っているのは、そういった意味づけをしっかりしているからなんですね。

カズ　でも、アメプロの中でも、インディーの中にはそうじゃないバタバタした試合はいっぱいありますよ。619とか、カッコいい技をやりたがる選手がいたり。道場でも、グルグルと何回転コルバタの練習ばっかりする選手とか。プロレス界の底辺にはそういう人がたくさんいると思うんですよ。やっぱり、みんな〝プロレスごっこ〟から始まるわけじゃないですか。

——まずは格好からというか。

カズ　ボクも小学校の頃はプロレスごっこをやってたし、好きな技はジャーマンスープレックスだったし。なんでかっていったら、カッコいいからで。「さっきまで腕を攻めてたのに、なんでジャーマンなんだ?」って考える小学生とかいないですから（笑）。

——そんな小学生はイヤですよね（笑）。

カズ　だから「これをやれば、もっと沸くだろう」って大技をやるのは、しょうがない気はしますけどね。でも、そういうプロレスをやってる人たちって、べつにそれで食っていこうって思ってないですし。家族を呼んで遊びでイベントを開くような感じですからね。プロレスで食っていこうって思ったら、そういう攻め方とかしないですもんね。

——一流の選手との違いはそこですか。

カズ　トップを目指すなら、〝なんでこの技なのか〟っていう意味を考えていかないと。へんな攻めをしたら、対戦相手に嫌われるわけですよ。「なんだよ、こいつは?」って。で、相手に嫌われるレスラーというのは、ブッキングされないですから。これは海外で生きていくうえで感じたことなんですけど、お客さんやテレビ番組も大事ですけど、何を一番大事にしないといけないかというと、相手のレスラーに「もう一度やりたいな」と思わせるレスラーになることなんじゃないかな、と。「カズ・ハヤシと試合をしたら、こういうふうにやっても大丈夫だし、あいつの技ならこういうふうに受けることもできる」って思われることが、プロレス界で生きていく一番重要なところなんじゃないかなって思うんですね。「ホウキとでも試合ができる」って言葉がありますけど、やっぱり、お互いに技術を持ってなくちゃダメなんで。

——一発芸ばかりやられても困っちゃいますもんね（笑）。序盤の〝フリ〟が利いているからこそ、フィニッシュ、つまりお笑いでいったら〝オチ〟が意味を持ってくるわけですからね。そういう試合の組み立て方についてはアメリカに行ってから、強く感じ始めました?

カズ　（しばらく考えて）……いや、そういうことはみちのく時代から意識してやってましたね。むしろ、アメリカでは〝生

きていく術〝として、もっと気持ちよく相手に試合をさせて、「カズとやって負けたけど、よかったぜ」って思わせるレスラーになることが大事だなって。

——そう思わせるためには、やっぱり技術が必要になりますよね。アメリカでは手本になる選手っていました？

カズ　クリス・ベノワがボクの先生みたいなもんでしたね。相手にやり返すことが重要だというのを教えられたというか。レスラーっていうのは、なんで鍛えてるかっていったら、やられてもやり返すために鍛えているわけで。そのやり返しの部分を教わったかなっていう気がしますね。

——ベノワは、目いっぱいやられて、目いっぱいやり返す選手でしたよね。

カズ　だから、クリスは〝アメリカン〟じゃないんですよね。たぶん、アメリカ人たちはクリスをほかのスーパースターたちと違って、スーパーマンとかバットマンとかヒーローっぽくは見ていないと思うんですよ。アメリカのファンも彼らのプロレス観と違うところでクリスを応援していたと思うし。

——表情やしぐさの一つで沸かせるっていうタイプじゃないですよね。ジャパニーズ・スタイルがベースになってたというか。

カズ　クリスは、日本の昔のベーシックなプロレスを取り戻したいというようなことを言ってましたよね。だから、チャンピオンになったときも、彼の試合は異質に見えましたし。大げさなパフォーマンスではなくて、リアルに闘う人間のスピリッツというのが見えるっていうか。エルボーの一つ、ストンピング一つでもスゲえなって思わせてたし。だから、昔のプロレスを取り戻すというか、それが通用したレスラーだったかな。で、ボクがいまコーチとして教えているプロレスのベースには、それをもっていきたいんです。

——つまり、いま全日本道場で教えているプロレスは、ある種、クリス・ベノワ流なんですね。

カズ　最初に言いましたが、その指導方法が全員にとって正解かどうかはわかりません。でも技だけで、観客を沸かしたいとは思ってなくて、技の一つ一つに意味を持たせたいんですよ。それから、クリスからは身体作りについても学びましたね。ボクが肉体改造をしたのが、98、99年ぐらいだったかな。そのときはまだ、デカけりゃいいみたいな感じだったんですよ。で、カレーを食ってたら、クリスに「なんでそんなもん食べてんの？」って言われて。「こういうの食べるんだよ」って見せられたのがノー・ファットで、高タンパク質で、あとは昼間だったから炭水化物。それからボクも食事を変えて、トレーニングもそれまではスクワットとか腕立て伏せとか腹筋中心だったのを、ベンチプレスとかウェート中心にして。ボディビルのメソッドですよね。

——見た目が良くなるトレーニングですね。

カズ　アメリカではいつも、選手は団体から「痩せろ！」って言われてました。

ほかのスーパースターと違い、クリスは ヒーローっぽくは見られてなかった



ボクはクリスに言われて早めに肉体改造に取り組んでたから言われませんでしたけど。おかげで、ずーっと契約をもらってましたしね。「痩せないと契約を切るぞ」って脅されていた選手もいましたからね。

――そういうところをクリアしないと、商品として、ある種、不良品みたいな扱いをされるわけですか。

カズ　というか、契約を切られちゃいますね。契約を3年間もらっていても、満了する人ってほとんどいないですから。ボンと切られちゃいますね。

――それだけインディーに予備軍がいるからこそなんでしょうけど、アメリカ独特の厳しい世界ですよね。あと、アメリカではマイクの練習もあったそうですね。

カズ　ボクもマイクの練習をさせられましたよ。みんなの前で恥ずかしかったですけど、最初は。道場の練習を終わったあとに、「はい、今日はこういうシーンをやるから、この選手に向かって怒鳴り散らして、去ってくれ」みたいな（笑）。

――ガハハハハ！　そうやってシチュエーションが決まっているんですか。

カズ　もうちょっと細かく決まってますけどね。それを撮影して、資料にしてたみたいで。ボクはあんまりうまくなかったけど（笑）。でも、いまは日本でも試合前にマイクをしますよね。だからそのうち俳優学校に行かなくちゃいけないかもしれない。

――ああ、それはありえますねぇ。

カズ　それから『ハッスル』に池谷銀牙が出たじゃないですか。ああいう体操の技術も必要かもしれない。これからは、もっといろんなプロフェッショナルな能力が求められる可能性はありますよ。

――プロレスラーにはいろんな要素があって、試合の技術だけでなくて、あらゆる面で伸ばすところがあるわけですね。

カズ　そうですね。俳優として「芝居やれ！」って言われても俳優には勝てないですし。ボディビルの要素をかじったからって、ボディビルの大会に出て勝てない。総合の試合に出ても勝てないです。でも、もしかしたら、あらゆる要素を取り入れて、できたものがプロレスラーなのかなぁ、と思いますね。

――じゃあ、プロレスの伸びしろがどこにあるかわかんないというか、逆にそれはいろんなところにあるというところですかね。そういった伸びしろを探しながら、道場で選手を育成している、と。

カズ　そうですね。でも、いろんな技術が大事ですけど、プロレスの核心は、絶対に技術だけじゃないんですよね。日本のファンっていうのは、空中回転とかの高度な技よりも、自分の心の中を「ウォー!!」って燃やしてくれる試合を観たいと思っているんですよ。

――心が何かに突き動かされるような試合ですね。

カズ　凄い技とか、ハプニングで驚かされたいんじゃなくて、昔のプロレスにあったようなジワジワと心が燃やされていくような試合というか。

――ハイスパートの派手な試合がいい試合ってことじゃないですもんね。心に残る試合って、なんかハートをぐっとつかまれるような。

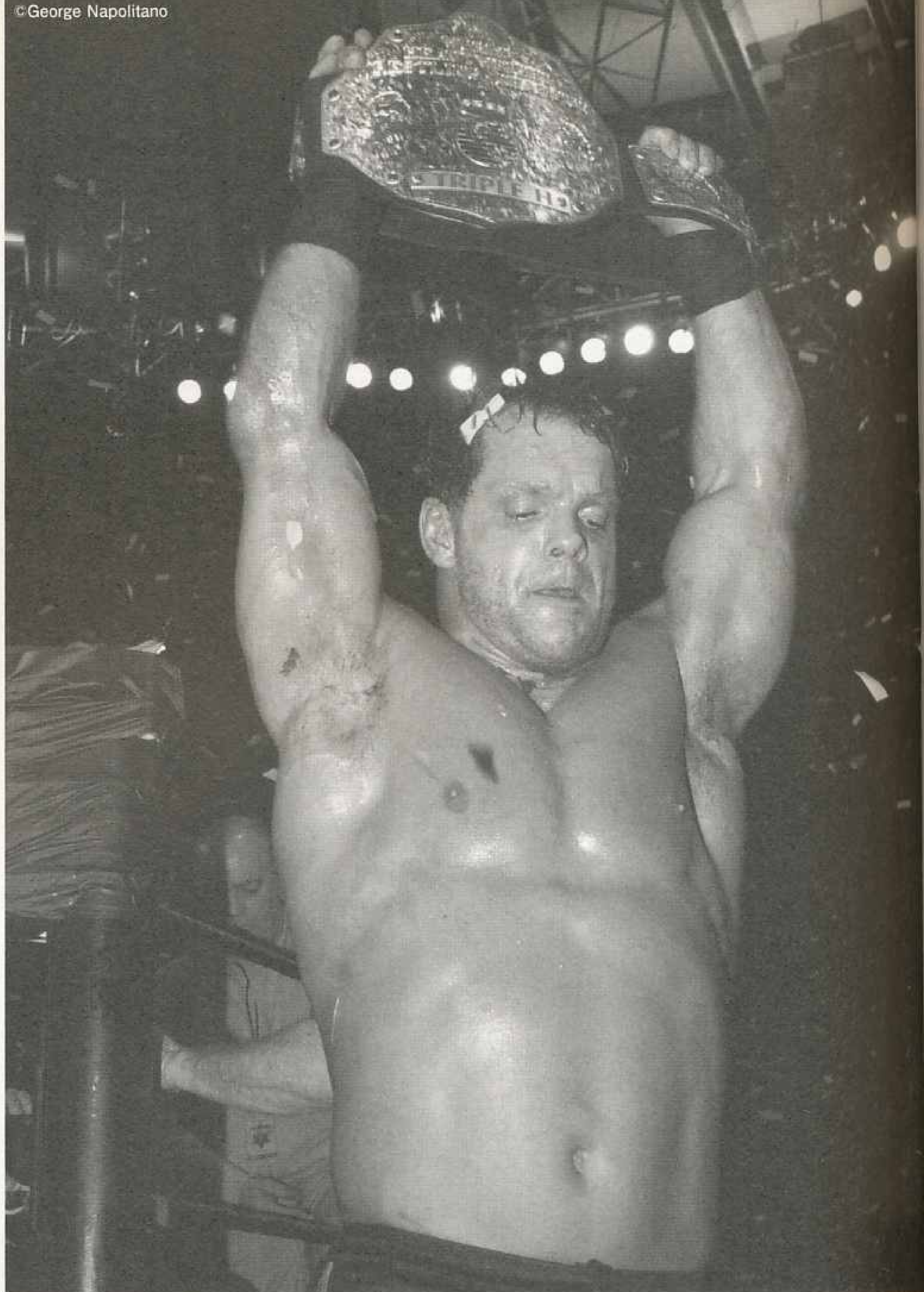
カズ　そうそう。自分がファンのときもそうでしたけど、プロレスを観て熱くなったりとか、胸がキュンとするんですよね。それは音楽を聴いていても思うし、総合を観ていてもあるんですけど。いまは、そういう試合が少ないッスよ。だから、本来別のものであるプロレスと総合が同じような競技として比べられたりすることになるんです。プロレスって、ビデオとかで観るものじゃなくて、そのとき、そのときの生の試合で、時代にマッチした凄い試合って昔、たくさんあったんですよ。言葉で説明するのは難しいんですけど。

――自分の思いや情念が爆発してるっていう試合ですよね。音楽でいったら、同じ曲でも、ライブだと歴史に残るような演奏ってありますよね。

カズ　そういうパッションのある闘いを見せられるようにしていきたいんです。それが僕の理念ですね。もちろん、技術があった上でそういった感動を与えられる試合ができるわけで、口ではうまく伝えられないですけど、僕の中ではわかってるんです。自信もあるんですよ。だから、これをどんどん伝えていくのが、僕の役目かな、と。そこまで武藤さんが考えているのかどうか知らないですけど（笑）。

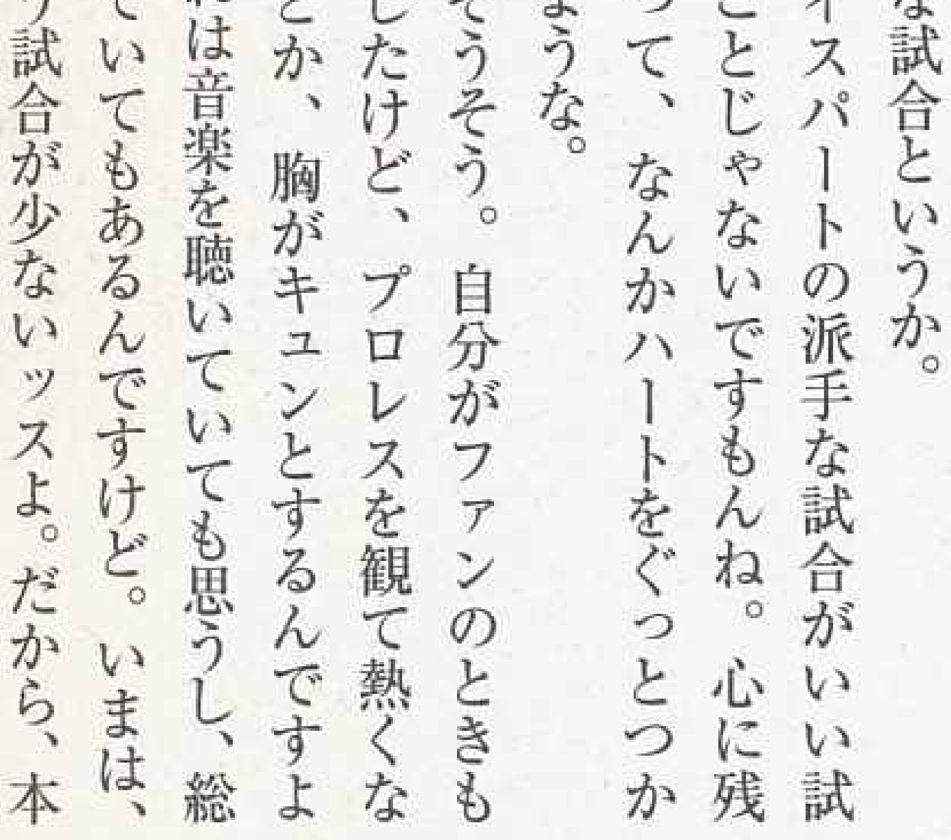
――ガハハハハ。でも、それがコーチとして教えていかないといけない、プロレスの魂の部分だと。今日は、どうもありがとうございました！

【2月19日／都内・全日本プロレス事務所にて収録】

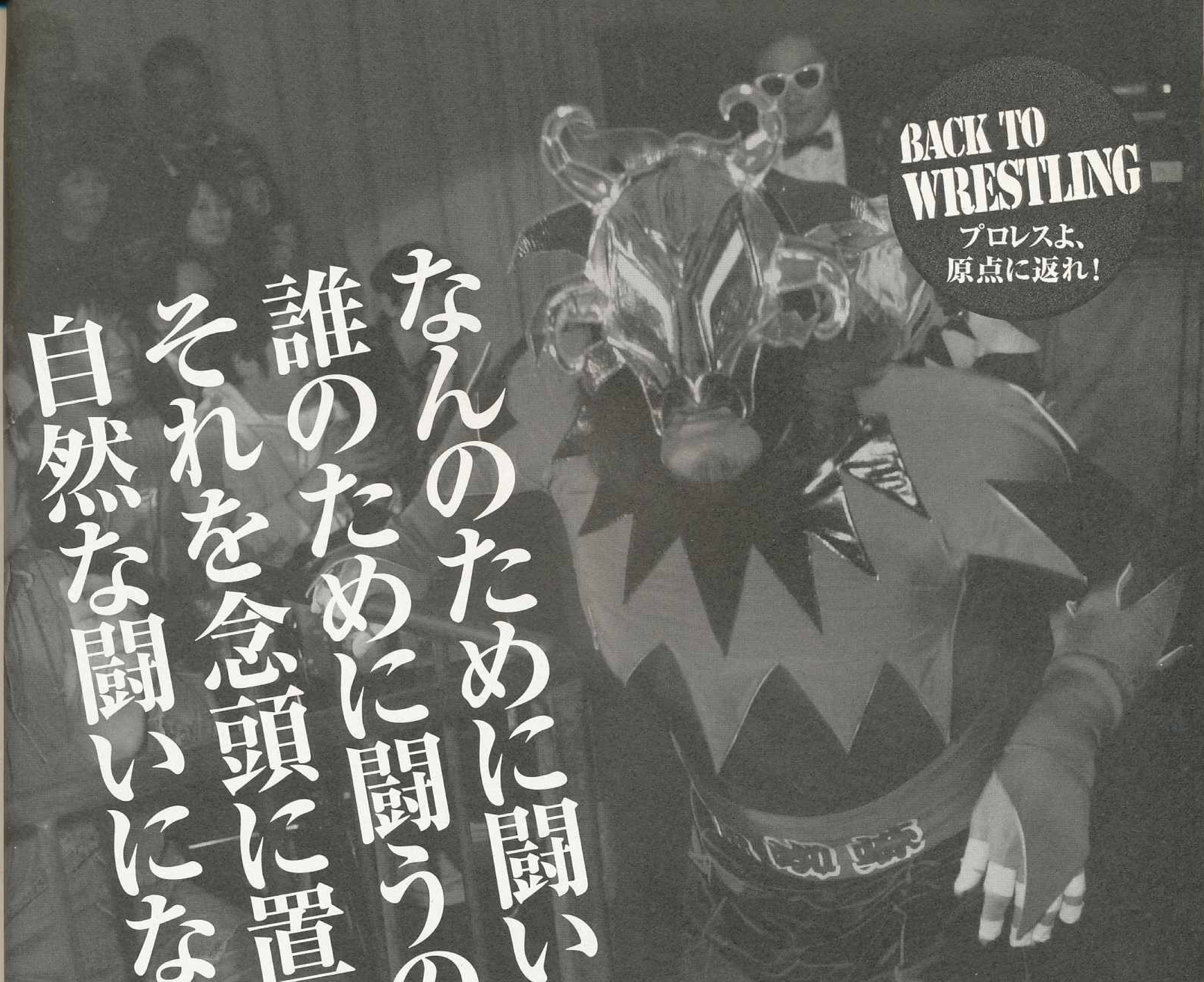

©George Napolitano

カズに最も大きな影響を与えたという"凶獣"クリス・ベノワ。新日本ジュニア戦線で培ったストロングスタイルのまま、アメリカでトップにまで登りつめた。

BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ！



かず・はやし■1973年1月2日、東京都世田谷区出身。92年、ユニバーサルでデビュー。海援隊★DXを結成し、みちのくで活躍。97年、単身メキシコに渡った後、WCWに転戦。過酷な競争を勝ち抜き、レギュラーポジションを獲得する。02年、武藤敬司に誘われ全日本に参戦。現在はコーチとして、全日本の屋台骨を支える。第49代世界タッグ王者、第21代世界ジュニアヘビー級王者。173cm、83kg。



BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ！

なんのために闘い
誰のために闘うのか
それを念頭に置けば
自然な闘いになる!!

ハッスルで最も息の長いモンスター
青鬼蜘蛛

今回の「BACK TO WRESTLING」のトリを務めるのは、『ハッスル』のリングで活躍する青鬼蜘蛛！ リング上で一言もしゃべったことがない謎のモンスターに世界初の単独インタビューを敢行した。髙田モンスター軍のメンバーの中では第一試合に登場する機会が多く決して目立ちはしないが、不思議な存在感を発揮している。短命に終わるモンスターが多い中、決してすたれることなく試合に出続ける秘訣とは何か？ アン・ジョー司令長官の通訳を通してたっぷりと語ってもらった。

聞き手／坂井ノブ　通訳／アン・ジョー司令長官　撮影／山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント

観客はフィクションとしての闘いではなく リングの自然な闘いに入り込みたいんだよ

――そもそも青鬼蜘蛛さんは、人間なんですか？

アン・ジョー司令長官　YOUはどこをLOOKしてるんデスカ⁉　人間じゃありませ～ン！　モンスターに決まってるデショウガ⁉　一目瞭然デ～ス！

――そ、そうですよね。

青鬼蜘蛛　シャーッ！（と威嚇する）。

――うわっ！　危ない！

司令長官　へたな質問をすると命はないですヨ。心してインタビューしなサ～イ！　今回は特別にミーが通訳をやりマ～ス。

――命懸けだなぁ。では、よろしくお願いします。『ハッスル』にはいろんなモンスターがいますけど、鬼蜘蛛は凄く息の長いキャラクターですよねぇ。

青鬼蜘蛛　そうでしょ？

――あっ、おどろおどろしい外見に反して、意外としゃべりは軽快ですね（笑）。

青鬼蜘蛛　本来、私は知的な生物なんだ。

――ピラニアンモンスターあたりのすぐ消えてしまったモンスターでは醸し出せない独特の雰囲気がありますよね。

青鬼蜘蛛　日本人にとって蜘蛛は身近な存在なんだよ。ピラニアが出てきても「で？　ピラニアって何？」みたいな反応だからね。

――まるでピラニアンモンスターとして闘ったことがあるかのような生々しい体験談ですね。

青鬼蜘蛛　蜘蛛的な動きは観客も入り込みやすいんだよ。赤鬼蜘蛛が登場した当時はピラニアンモンスターも「うらやましい！　俺も一回ぐらい鬼蜘蛛になってみたい」って、ずっと思ってたらしいよ（遠い目）。

――それは初耳だ。じゃあ高田モンスター軍のモンスターたちには鬼蜘蛛への憧れがあったわけですか。

青鬼蜘蛛　まあね（笑）。

――高田総統は世界中のプロレスラーなどに「ビターン！」をして、ほかの生物のDNAを注入することでモンスターを生み出しますよね。これって、じつは凄く難しい部分があるんじゃないかと思うんです。高田総統のビターンで洗脳されてモンスターになったら、本来の自分は出ないんですか？

青鬼蜘蛛　プロレスっていうのはリング上で闘いを見せるものだろ。確かに観客を喜ばせなきゃいけないけど、観客が何を求めてるかが重要なんだ。

――は、はあ。モンスターなのにそんなことを考えて試合をしてたんですね？

青鬼蜘蛛　試合中に考えてるわけじゃないよ。高田モンスター軍は常にサイコロジーを研究しているんだ。いいか？　観客はレスラーに対して「俺たちを沸かせろ」って思ってるわけじゃない。リング上で行なってる〝闘い〟を観たいんだよ。いい機会だから、いまのプロレス界に提言しておきたいことがある。

――ど、どうぞ！

青鬼蜘蛛　お客さんを沸かせなければということばかりを念頭に置いて試合をしてるから、無理な攻防とか、「こんなのねえだろ！」っていう不自然な動きとか、過剰な大技ばっかりになってしまうんだ。そういうのをバンバン並べるから、プロレスの凄味や自然な闘いを見せるということがどんどんおろそかになっている。一つ例を挙げるとすれば映画を観るとき、観客はその映画に金がかかってる、かかってないにかかわらず、ノンフィクションを観るぐらいの視線でスクリーンを見つめるだろ。

――集中しますよね。

青鬼蜘蛛　誰しも物語に入り込みたいんだよ。プロレスを観てる観客も同じで、フィクションとしての闘いじゃなくて、リングの上で行なわれてる自然な闘いに入り込みたいんだよ。

――野次を飛ばしながら、すかした態度で観てるすれっからしのマニア以外は、みんなそう思ってるはずですよね。

青鬼蜘蛛　試合が自然であればあるほどのめり込める。格闘技がブームになったのは、作り込まないでホントに闘ってるからだ。リング上で自然な闘いが行なわれているからこそ、ちゃんとみんな観るんだよ。

――大晦日の『ハッスル祭り』でミルコ・クロコップのハイキックが当たったとき、観客が一斉に沸きましたけど、「あれが当たったらヤバい」っていう必殺技の説得力がありますよね。

青鬼蜘蛛　そうなんだよ。緊迫感や説得力という部分は、プロレスも同じだ。さらに格闘技より凄味があるのは、自然な闘いもしつつ、さらにありえないことさえもやってしまう。それがプロレスの強みなのに、それを忘れてプロレスに自信がないから、どんどん過剰な技に走ってありえないことばっかりを追求しようとする。それをプロレスの進化と思ってる人もいるかもしれないけど、これは退化だ（キッパリ）。

――裏を返せば、プロレスから自然な部分がどんどんなくなってるわけですね。

青鬼蜘蛛　そうだ。そして、もう一つ重要なことがある。私が高田総統の「ビターン！」で洗脳されて青鬼蜘蛛になったときのことだ。

――モンスターとして生まれ変わったときは、どんな心境でしたか？

青鬼蜘蛛　身も心も蜘蛛になりきって自然な闘いをすることだけを頭の中で考えていたな。

――身も心も蜘蛛になりきる！

青鬼蜘蛛　もちろん「蜘蛛だから、私はこういう闘いをするんだ。この技は省いてもいいな」とか、そういうことも念頭には置く。だが、私はそれ以上に「リングに蜘蛛が紛れ込んで闘ってる」という意識のほうが強い。

――ほう。技じゃないわけですか？



インタビュー中も危険がいっぱい！蜘蛛だけに予測不能なタイミングで襲いかかってくる。アン・ジョー司令長官が制止してくれなければ命が危なかった。



鬼蜘蛛は赤・青・黄・エンジの四色が存在している。試合終盤、相手を捕食するときに繰り出す"蜘蛛の糸"は観客の目にしっかりと焼き付く『ハッスル』のハイライトシーンの一つである。

青鬼蜘蛛　「青鬼蜘蛛だからこれをやらなきゃいけない」と自分に負荷をかけるのではなく、「青鬼蜘蛛はこういう闘い方をして当然」ということをやる。これも映画にたとえると、わかりやすいだろう。不良少女役をやる、もしくはお嬢様役をやるってなったら、その女優は役になりきる。そのとき「不良はこういうことをしなきゃいけない」という姿勢じゃなくて、「不良だったらこういうことはしない」という姿勢で臨むということだ。

——なるほど！　もともと不良ではない人が無理して不良っぽいことをすると不自然に見えてしまいますよね。自分に足し算をして不良を演じるんじゃなくて、引き算で不良という答えに近づけていくわけですね。

青鬼蜘蛛　プロレスも考え方のベースは同じなんだよ。蜘蛛がリングに上がって相手を叩きのめすという目的をはたすために闘う。最終的に蜘蛛の糸に相手を絡めて、そこを仕留めるために動いてるわけだ。

——引き算で青鬼蜘蛛の目的に近づいていく、と。そうすると、試合はきわめてシンプルになっていきますよね。

青鬼蜘蛛　そうだ。シンプルになるからこそ、たまに色をつけるとそれが強く印象に残る。試合の終盤で蜘蛛の糸を出すと、それがもの凄く映えるだろう。蜘蛛であることを意識しすぎて、あれをやらなきゃ、これもやらなきゃといろんな動きを詰め込みすぎると、結局、観客の印象に残らないんだよ。自然にユラユラと蜘蛛的な動きをして、たまに糸を出したり、蜘蛛的な動きをしたら、「ああ、なるほど！　蜘蛛ってこういう動きだよね！」という強烈なインパクトにつながるんだ。

——そうか！　だから、蜘蛛がいままでのモンスターの中で一番息が長いんですね。

青鬼蜘蛛　そうだよ。さっきも言ったがキャラとしてわかりやすいし、入り込みやすい。リング上には自然なものだけが残ると思うんだ。デスマッチでガチャンガチャンって凶器でやり合えば派手に見えるから、観客はその場では絶対に沸くよ。でも、観客は「ガシャンガシャンやり合ってたね」ぐらいできっと試合の内容までは覚えてない。そうすると絶対に長くはもたないよ。いいかげん、シンプルに帰るべきだと思うぞ。

——最近のプロレス事情に詳しいんですね。では、『ハッスル』以外のリングで、これは凄いなと思う選手はいますか?

青鬼蜘蛛　やっぱりショーン・マイケルズだな。髙田総統に「ビターン！」で洗脳される前、私はHBKのおかげでプロレスにおけるサイコロジーに目覚めたんだ。シンプルなんだけど、自分のやるムーブや技は最大限に磨いたものしか出さないし、お客さんに喜怒哀楽をとことん伝える。プロレスとはそういうものだと、その頃に気づき始めたんだ。

——これぞプロレスだと思ったわけですか。

青鬼蜘蛛　ホントに理解できるようになったのはここ2、3年だな。プロレスラーは一人一人が自分が正義だと思いながらやってるけど、絶対に最大公約数的な真実はある。で、当時の私はアメリカンプロレスこそが最大公約数的なプロレスの真実だと思っていた。

——それを日本なりに解釈して、新たに発展させていこうとしているのが『ハッスル』であり、髙田モンスター軍である、と?

青鬼蜘蛛　そうだ。WWEを観てみろ、みんなシンプルな技ばかりだ。ところが日本のプロレスラーは過剰なことに慣れきっ

てるから、大技を連発しないと試合が組み立てられない。無駄なことをいっぱいやろうとする。みんな怖いんだ。「もしも、俺んところで観客がシーンとしてしまったらどうしよう?」ってな。

――へえ、観客が沸かないことを怖がってるんですか?

青鬼蜘蛛　ああ。怖がってる。私に言わせれば大間違いだ。技の強さ弱さじゃない、それまでどういうプロセスを踏んでるかが一番大事なのに、その場の一場面としてしかとらえられないんだよ。

――試合をやってるプロレスラー側がそういう考え方だと、お客さんもそういう見方になってきますよね、自然と。

青鬼蜘蛛　だからどんどん観客のパイが小さくなっていくんだ。それに、そういう過剰な闘い方をしてると絶対にボロが出てくる。たとえハイスパートが素晴らしくうまくいった場面があったとしても、その反面、あきらかに当たってないとか、どう見てもタイミングが合ってないとか、そういうのが目立ってしまうんだ。過剰なことをいっぱいやれば、全部がうまくいくはずがないから不自然なことも生まれてくる。それに対して目をつぶってくれと言ってるようなものなんだ、そういう闘いを肯定してるプロレスラーっていうのは。観客は「それ、ちょっと不自然だよ」と言う前に消えていくよ。あとに残ってるのは、そういうのをニヤニヤしながら観て、「まあ、見て見ぬフリしてやろうよ」っていうようなファンしか残らない。全部わかったうえで「はいはい」っていうような。

観客がシーンとするのが怖いから大技を連発してるレスラーは、私に言わせれば大間違い



――不健康ですね。

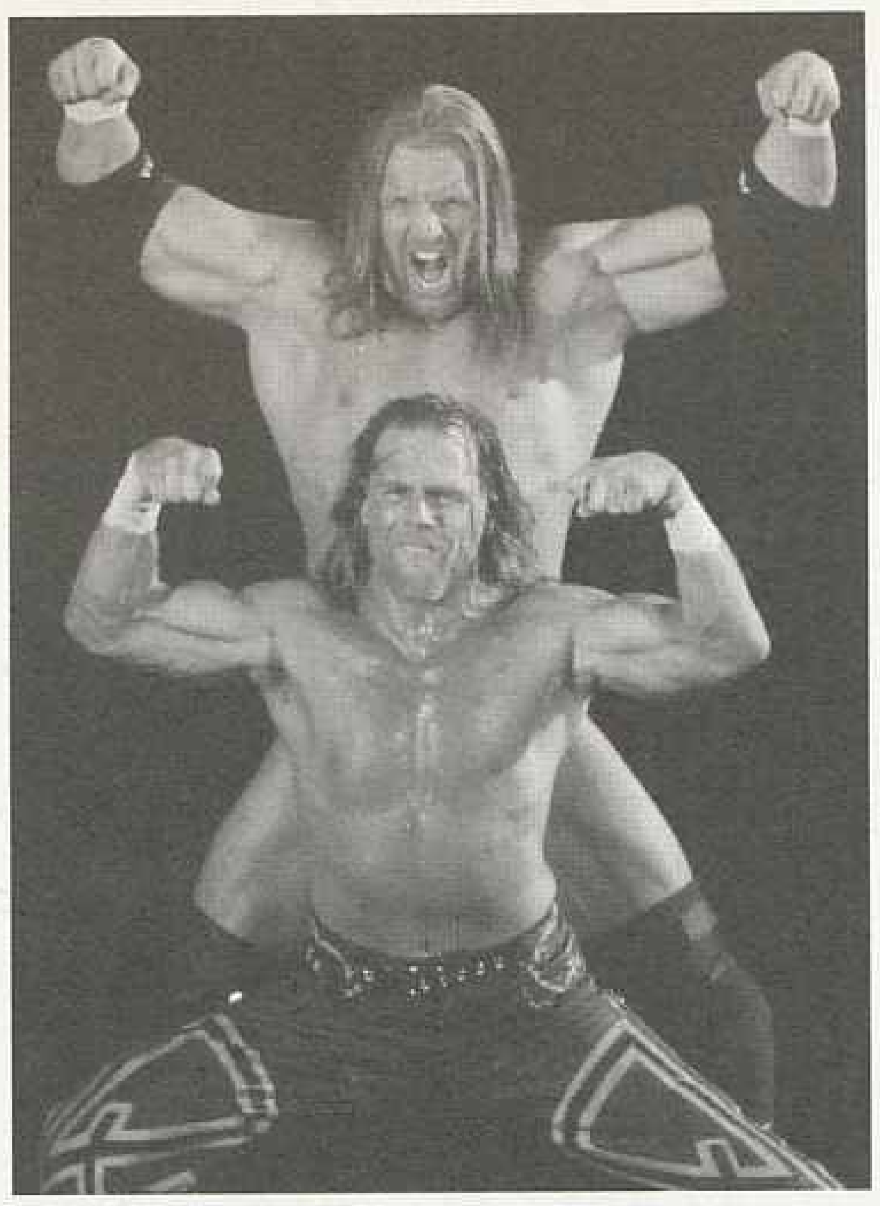
青鬼蜘蛛　だからレスラーもナメられる。

――誰も得しないですね。『ハッスル』は「プロレスじゃない」という打ち出し方をしてますけど、プロレス本来の自然な闘いは常に意識してますよね。

青鬼蜘蛛　そうだ。ハッスル軍のＴＡＪＩＲＩも『ハッスル』が日本中のプロレスの中で一番トラディショナルなことをしてる」と言っていたな?

――ええ、非常に大きな反響を呼んでますよ。

青鬼蜘蛛　敵ながら、ＴＡＪＩＲＩの言うとおりだと思うぞ。我々モンスター軍もアン・ジョー司令長官から「それはいらない、そこは省いてこうしたほうがいい」というアドバイスは常に受けている。もともとの素材に「もっと、もっと」とプラスしていくのが現在のプロレス業界だけど、逆に「これを削ろう」と発想するのが『ハッスル』だ。要するにダイヤモンドが原石からカットされていくようなものだな。


青鬼蜘蛛が高田総統に洗脳される前に衝撃を受けたという“HBK”ショーン・マイケルズ(写真前)。試合運びのうまさ、表現力の豊かさ、そして観客からの人気の高さは間違いなく当代随一のプロレスラーだ。

BACK TO WRESTLING
プロレスよ、原点に返れ!

――磨かれて、どこから観ても輝いている試合を作り上げていくわけですか。

青鬼蜘蛛　そうだ。どんどんシンプルに磨いていくんだよ。いまのプロレス界がハイリスク、ローリターンになってるから、その逆をやってるんだ。これこそ昔からあるトラディショナルなスタイルのはずだ。

――よく『ハッスル』がプロレスなのかどうかっていう議論がされてますけど、そういう声に関してはいかがですか?

青鬼蜘蛛　『ハッスル』がプロレスではないと考える人たちは、おそらくプロレスの本質が見えてない人たち、それから過剰に慣れきっちゃった人たちだよ。インリン様とかボノちゃんとか高田総統の「ビターン!」とか、そういう部分だけで判断するだろ。試合の中身を磨きまくってシンプルにやってるからこそ、そういう部分がさらに光る。これで仮に試合でもの凄い大技を連発したら、逆にボノちゃんとかインリン様は「何やってんの?」ということになってしまう。

――なるほど。

青鬼蜘蛛　リング上の闘いとエンタメの部分が全然リンクしなくなっちゃうぞ。

――いまは絶妙にリンクしてますよね。

青鬼蜘蛛　試合自体がシンプルで磨かれてるものだからこそ、リング外の仕掛けがより映える。これは、昔からそうなんだ。アントニオ猪木だっていろいろスキャンダラスなことを仕掛けたけど、それはリングの中でシンプルなものをやってたからこそ、逆にリング外のものがよりデカく見えていたんだ。『ハッスル』以外のプロレスはリング外での仕掛けができないから、逆にリング内でグワーッとやらなきゃいけないんだろうけど。

――いつの頃からか、リング外での仕掛けがよしとされないような風潮になってますよね。なぜかわからないですけど。

青鬼蜘蛛　ＵＷＦが現われた頃は真剣さが求められたけど、あれも結局は一過性のものだった。プロレスはプロレスのおもしろさがあるのに。プロレスには昔から世間に対するコンプレックスの歴史があるだろう。コンプレックスにさいなまれてしまったら「俺たちは間違ってるんだろうか?」って引いちゃう部分が業界全体にあるんだよ。それをいまだに引きずってる。もっと自信持てばいいだけなのに。コンプレックスがあると、どこかで負い目が出てしまうんだ。

――「プロレスは格闘技だ!」「俺たちは真剣なんだ!」という主張が象徴的ですよね。

青鬼蜘蛛　「真剣、真剣」って声高に叫べば叫ぶほど、世間の目は逆に厳しくなっていくんだ。『ハッスル』には、世間に対するへんなコンプレックスはない。堂々と自信をもって打ち出せばいいんだよ。

――凄くいろんなことを掘り下げて考えてるんですね、蜘蛛なのに(笑)。

青鬼蜘蛛　だから言っただろう。こう見えても私は知的な生物なんだよ。

【08年2月24日/さいたまスーパーアリーナにて収録】


あおおにぐも■生年月日不明。日本出身の純和風モンスター。2005年9月8日、『ハッスル・ハウスvol.9』でデビュー。赤鬼蜘蛛とタッグを組んで登場することが多い。とあるプロレスラーに蜘蛛のDNAが高田総統によって注入されて誕生したこと以外は謎に包まれている。身長、体重、ともに不明。

マット界に激震!!

金村キンタロー、セクハラ問題に思うこと

ここでは、いまだプロレス界で波紋を呼んでいる金村キンタローのセクハラ問題について書こうと思う。

個人的には、某ライターから被害者の女性が2月17日に配信したメルマガの話と、その内容を聞き、「え～、そんなことになってんだ！」と慌てて2ちゃんねるや関係者のブログをチェックしたのが、この騒動を知るきっかけだった。

翌18日には大日本プロレス事務所で今回の騒動に関して状況説明の会見が行なわれたのだが、日頃、大日本の取材はコラムの「ハードコアドージョー」ぐらいしかしていない『kamipro』編集部には会見のリリースが届かず、会見の様子を伝える他媒体の記事を見て、「えっ、会見やったの⁉」と慌てて取材を始めたのだった。

2月19日には騒動の張本人、金村キンタローと連絡を取り、翌20日に行なうという謝罪会見の場所と時間を確認。同時に昨年大晦日の〝ミルコハイキック事件〟の一部始終を金村&黒田哲広に語ってもらっていた『kamipro Hand』の連載コーナーの休載について説明もしなければならなかったので、会見後に時間を取ってもらう約束をして電話を切った。



しかし、会見当日になり、外せない用事が入ってしまい15時開始の会見はほかの人に任せることに。それでも、その用事を片づけたボクは急いで会見場所のアパッチ事務所に向かい、会見が終わった頃に、なんとか到着。すでに報道陣の姿はなく、そこには金村と黒田、そしてアパッチの関係者が一人いるだけ。

そこで、金村から今回の騒動の詳細についてあらためて話を聞き、ようやく全貌が見えてきた（この時点で金村自身が、まだ被害者の女性に会えていないこと。セクハラ事件当日の朝まで酒を飲んでいて酔っていたこと。アパッチプロレス軍のプロデューサーを務めていた伊藤豪氏が昨年暮れにアパッチを離れていたことなど）。

この日の金村はいつもの元気はなく、今後のことに関しては「いまは相手に会ってお詫びをしないことには、その先のことは何も考えられない」と言葉少な。金村のことを知りつくしている相方の黒田も、「これまでもオヤジ（金村）にはいろいろ振り回されてきましたけど、さすがに今回ばかりは本気で反省してもらわないと。万が一、また同じようなことを起こしたら、そのときはホント、マジで縁を切りますから！」と、黒田にしては珍しく強い口調で言いきっていたのが印象に残っている。

この際に、できたてホヤホヤの本誌2月発売号を金村に手渡した。ご存知の方も多いかと思うが、表紙にはミルコとともに表紙のロゴ上のワンポイントとして金村が登場しているのだ。あの表紙に関しては、締め切り後に騒動があかるみになったため、今回の件の意図を含んだものではないということを金村本人にも説明した。

この会見後の22日に行なわれた新木場1st RING大会で、アパッチプロレス軍の活動休止と、金村のアパッチ解雇が発表となった。金村自身は、すでに発表されていた団体の出場を見合わせ、被害者の女性に直接謝罪し、和解するまでは一切のプロレス活動は自粛することを宣言。刑事告訴となった場合も、それを素直に受け止めると語っている。

アパッチの活動休止や、アパッチ軍解雇といった報道がなされ、すでに社会的制裁を受けている金村に対し「二度と復帰するな！」、「プロレス界の恥だ」などといった非難の声もいまだに続いてるのは確かだが、なかには秋山成勲のヌルヌル問題のときと同じような人種差別的なバッシングも多々見受けられる。そういった声に対しては、正直不快感を覚える。

ある程度のバッシングはしょうがない部分もあるとは思うが、今回の騒動により、これまで〝インディー界のジャイアン〟としてリング内外問わず、傍若無人に大暴れしてきた金村のレスラー人生そのものまでバッサリと斬って捨てる、ここ最近の風潮は寂しくも思う（もちろん、セクハラ行為自体は許されるものではないが）。

そういう意味では今後、金村はちょっとした隙や些細なことでさえも、揶揄されたり批判されたりする可能性も充分あるわけで、これからの謹慎生活の内容自体が問われることだろう。

いつの日か金村が被害者の女性と和解し、リングに上がれるような状況になったとしても、ハッスルや新日本など、テレビや大きなスポンサーがついているイベントには出場できない可能性も高いと思われる。今後の金村のレスラー人生はイバラの道が待ち受けているはずだ。

個人的には、金村キンタローが輝く場はプロレスのリングしかないと思うし、金村自身もそれを自覚しているに違いない。

今回の騒動は、金村問題から飛び火したかたち（？）で大日本（登坂栄児氏）と、大日本から出入り無期限禁止を言い渡された村上健リングアナのあいだでも一悶着が起こっていたが、村上氏は2月27日付の自身のブログにて大日本側に謝罪し、ひとまず、こちらの騒動は落ちつきそうな気配だ。

しかしながら、騒動の発端でもある金村と被害者の女性のあいだの問題は、この原稿を書いている時点では進展は見られていない。ことがことだけに、すぐに解決するのは難しいだろうが、いまは、お互いが納得した上で解決する日が来るのを静かに待ちたいと思う。

（阿修羅チョロ）



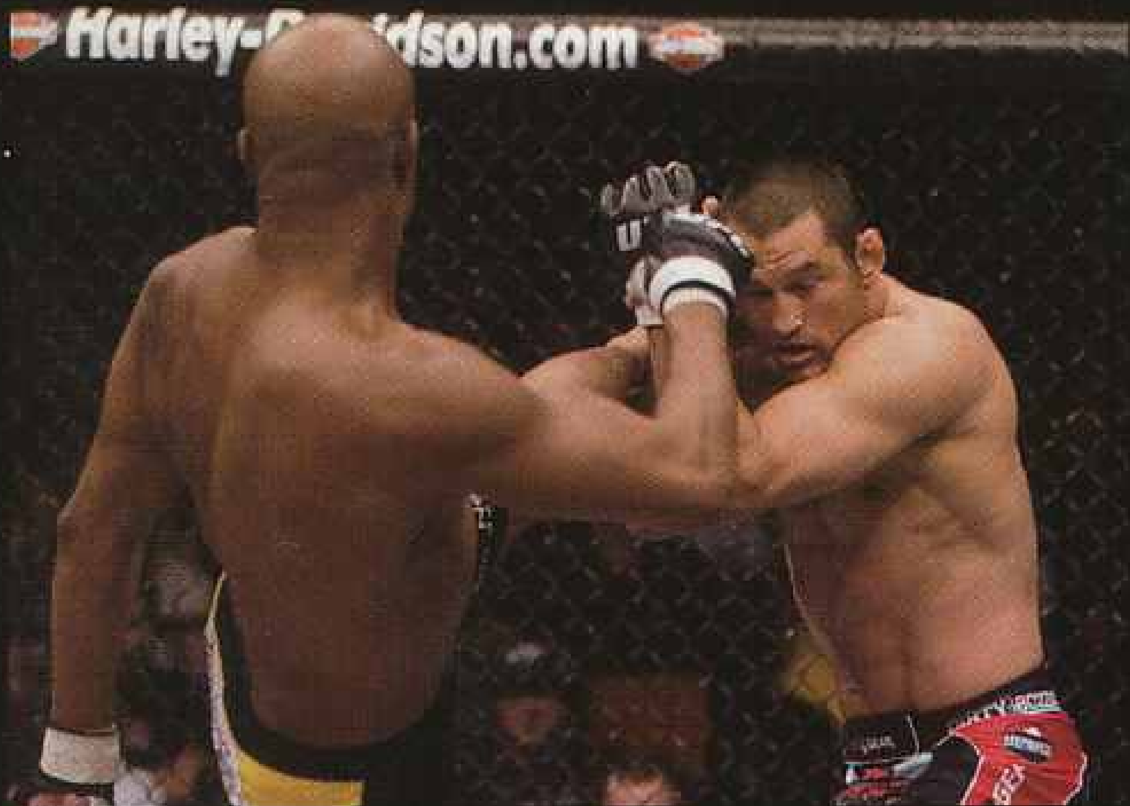
2.22新木場1st RINGにて、金村問題を受け無期限活動自粛を決定したアパッチ軍の最終興行が行なわれた。メイン後、欠場選手を除くアパッチ所属全選手がファンに向け涙の謝罪。このメンバーと金村が再び同じリングに上がる日はいつになるのか……!?

UFC vs PRIDE王者対決、ダン・ヘンダーソン完敗!

UFC 格闘新次元

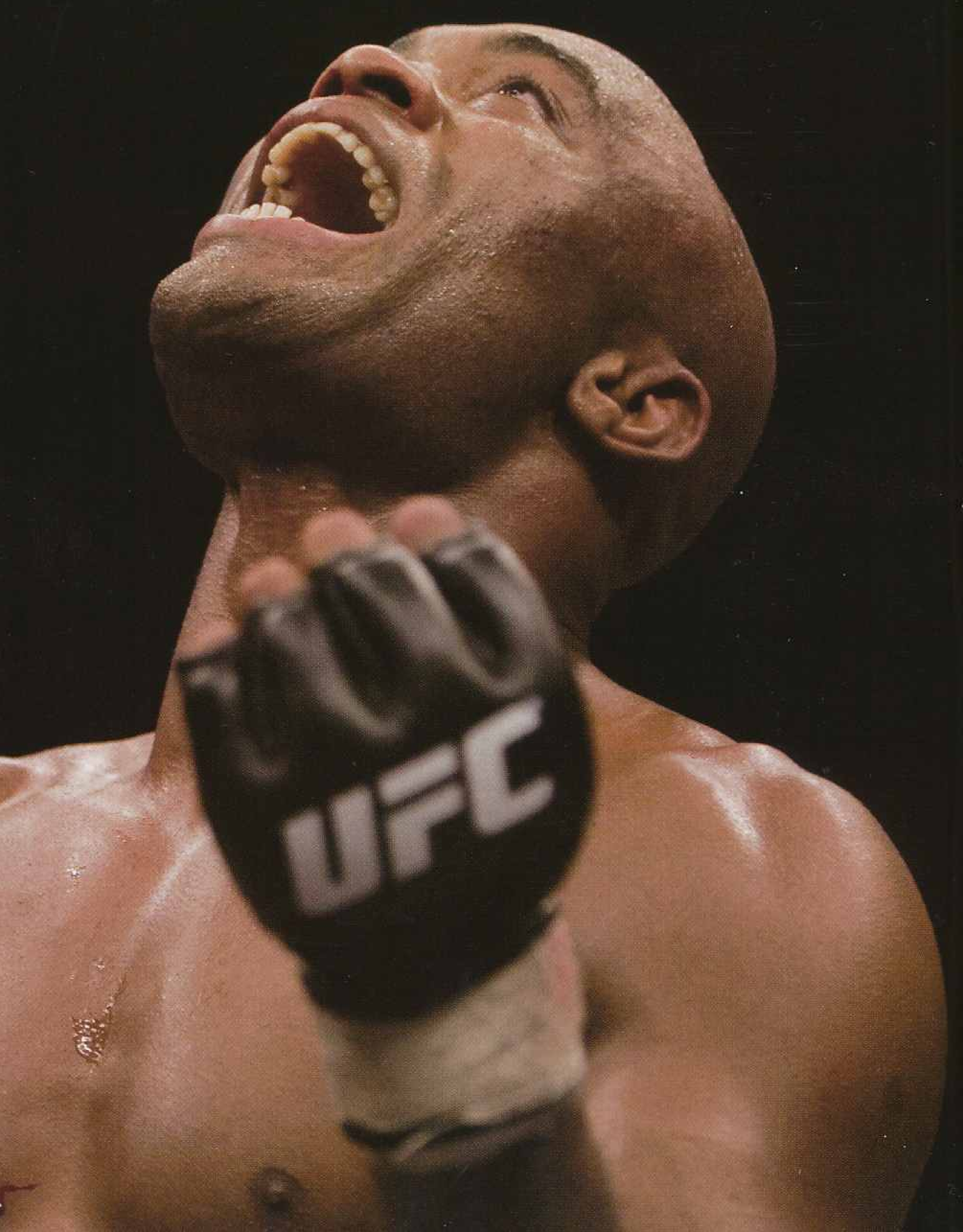
2008.3.1 OHIO
UFC82 PRIDE OF A CHAMPION
ANDERSON SILVA vs DAN HENDERSON
YUSHIN OKAMI vs EVAN TANNER

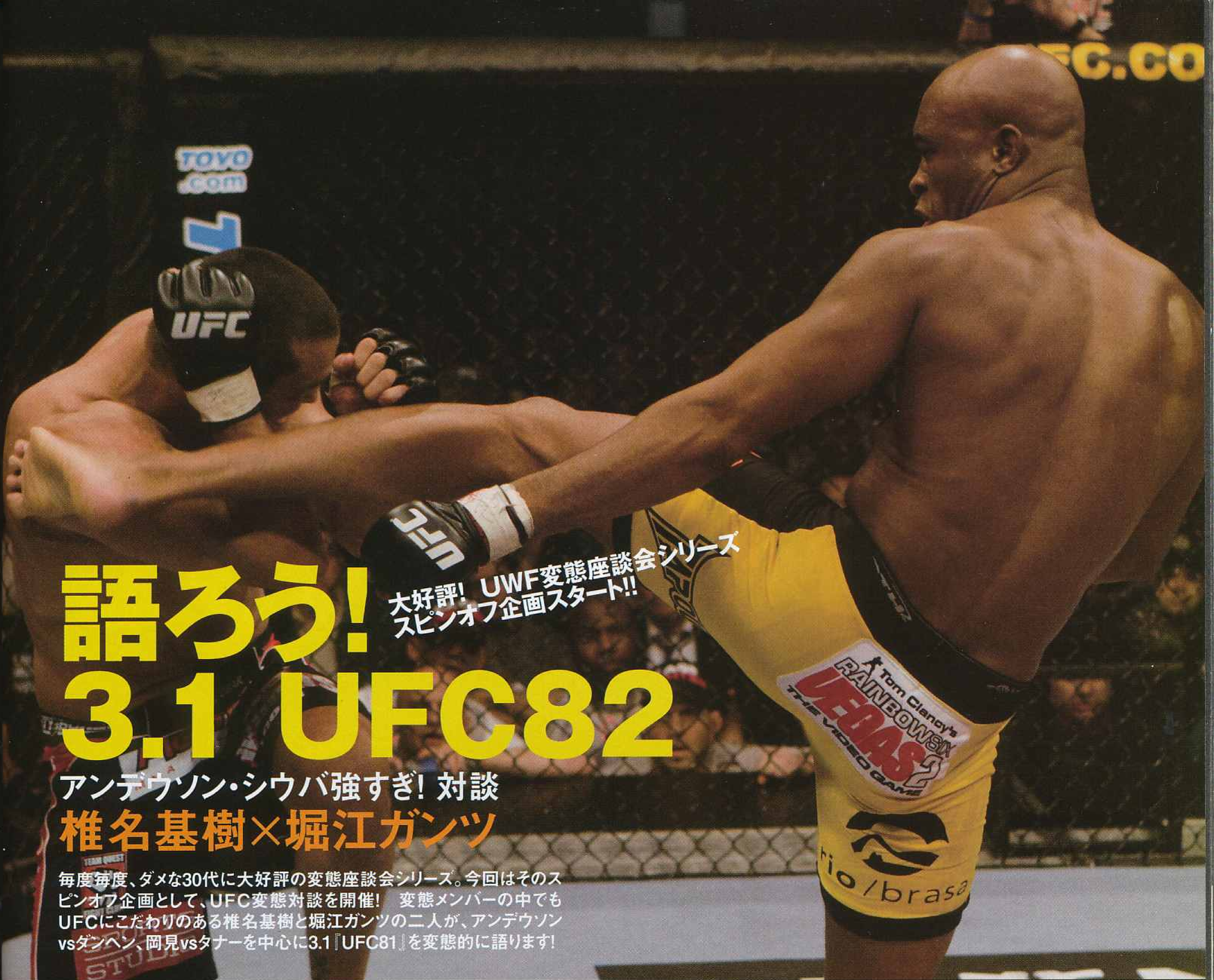
“絶対王者シウバ”とはアンデウソンのことだ!



UFCとPRIDEの185ポンド（約83キロ）級王者同士の“頂上対決”となった3.1『UFC82』のアンデウソン・シウバvsダン・ヘンダーソンのUFCミドル級タイトル戦は、アンデウソンが完勝! またしても「UFC」に軍配が上がったかたちだが、これは「UFC」というより、アンデウソンが強すぎるといったほうがいいだろう。あのダンヘンを完封するその実力は、もはやMMAの次の次元へと突入している。このアンデウソンやGSPの闘いこそ、MMAの未来なのだ。

構成／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）





大好評! UWF変態座談会シリーズ
スピンオフ企画スタート!!

語ろう! 3.1 UFC82

アンデウソン・シウバ強すぎ! 対談
椎名基樹×堀江ガンツ

毎度毎度、ダメな30代に大好評の変態座談会シリーズ。今回はそのスピンオフ企画として、UFC変態対談を開催! 変態メンバーの中でもUFCにこだわりのある椎名基樹と堀江ガンツの二人が、アンデウソンvsダンヘン、岡見vsタナーを中心に3.1『UFC81』を変態的に語ります!

アンデウソン・シウバは『スト2』のダルシムだ!

ガンツ　椎名さん、大好評〝変態座談会〟シリーズもついにスピンオフ企画がスタートですよ!

椎名　切り売りし始めたんだ(笑)。

ガンツ　ええ。ですから今回は、変態メンバーの中でUFC好きのボクと椎名さんで、3・1『UFC82』を語っていきたいと思います。UFCといっても、現地で観たわけじゃなく、オンデマンドPPV放送を編集部のテレビにつなげて観ただけですけど(笑)。

椎名　でも俺はいつも『YouTube』観戦だったからさ。ちっちゃい画面に向かって声援送りながら観てたから、大きいテレビでみんなと一緒に観れて嬉しかったよ。

ガンツ　アメリカ方式ですよね。みんなでPPVを観ようという。

椎名　で、今回は大きなテレビ画面に向かって声援送ったけど、願いはかなわなかった。

ガンツ　ダンヘン負けちゃいましたね。

椎名　あんなに差があると思わなかったね。アンデウソン・シウバっていったら、PRIDE時代に高瀬(大樹)に三角絞めを極められたイメージが強いからさ、寝かせたら相当弱いぞと思ってたんだけどね。

ガンツ　長南亮にも鮮やかにカニばさみからのヒザ十字固めを極められたりしてるし。

椎名　だから、そんなヤツにヘンゾ(・グレイシー)をパンチで秒殺KOしたヘンダーソンが負けるわけねぇ……と思いきや、とんでもなく強くなってんじゃん!

ガンツ　もはやまったく別人ですよね。いまやUFCのパウンド・フォー・パウンド。全階級の王者の中でナンバーワンと言われていて、その噂にたがわぬ強さというか。

椎名　あれ、強すぎるよ!

ガンツ　アンデウソンは同じミドル級(83キロ以下)じゃ相手がいないから、一階級上のダン・ヘンダーソンが挑戦者になったのに、問題にしませんでしたからね。

椎名　ヘンダーソンが体重下げてもダメなんじゃ、どうしたらいいんだって感じだよね。

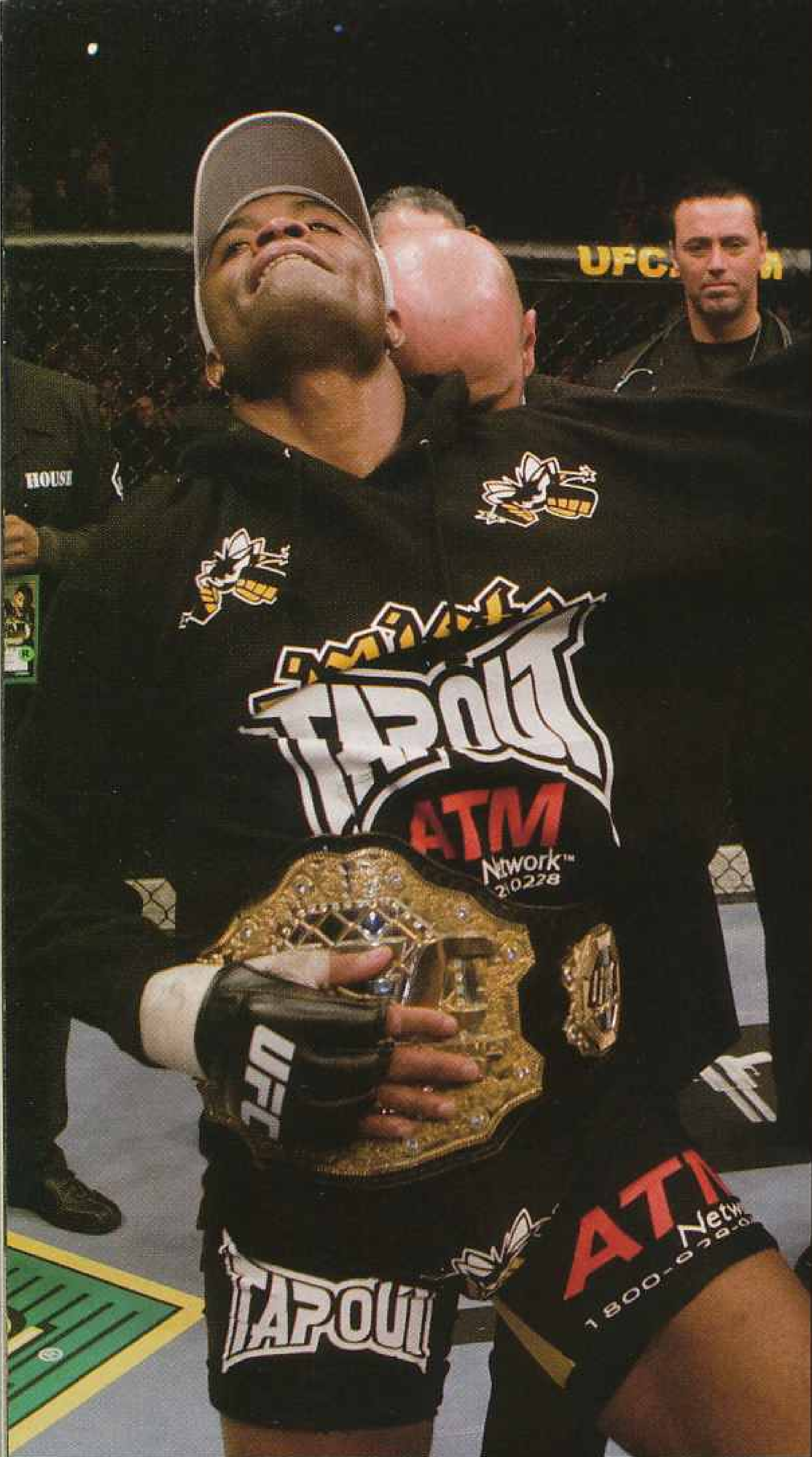
ガンツ　しかも、単に一階級上というだけじゃなく、UFCライトヘビー級王者のランペイジと互角に闘ってた、上の階級のトップ選手ですからね。

椎名　もともと打撃系の選手だったけど、その打撃がもの凄くよくなってるよね。昔はもっと腰が落ちてスタンスが広くて、蹴りがあんまり

[変態プロフィール]

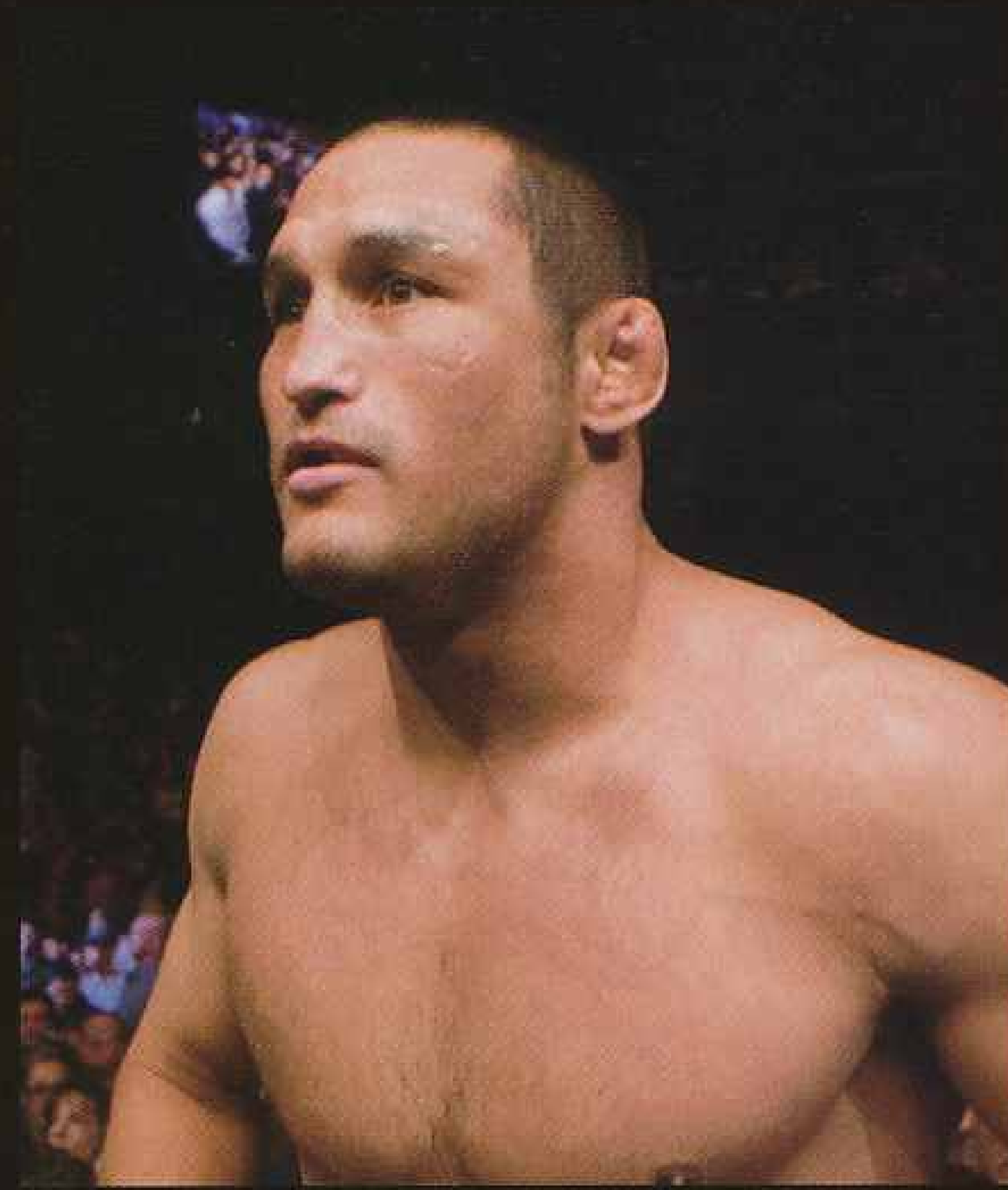
椎名基樹
本誌の好評長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみのフリーライター。放送作家。UWF、真剣勝負にあくなきこだわりを持ち、『UFC18』で髙阪剛vsバス・ルッテンが実現した際は、ニューオーリンズまで行って生観戦をした変態メンバーの一員。

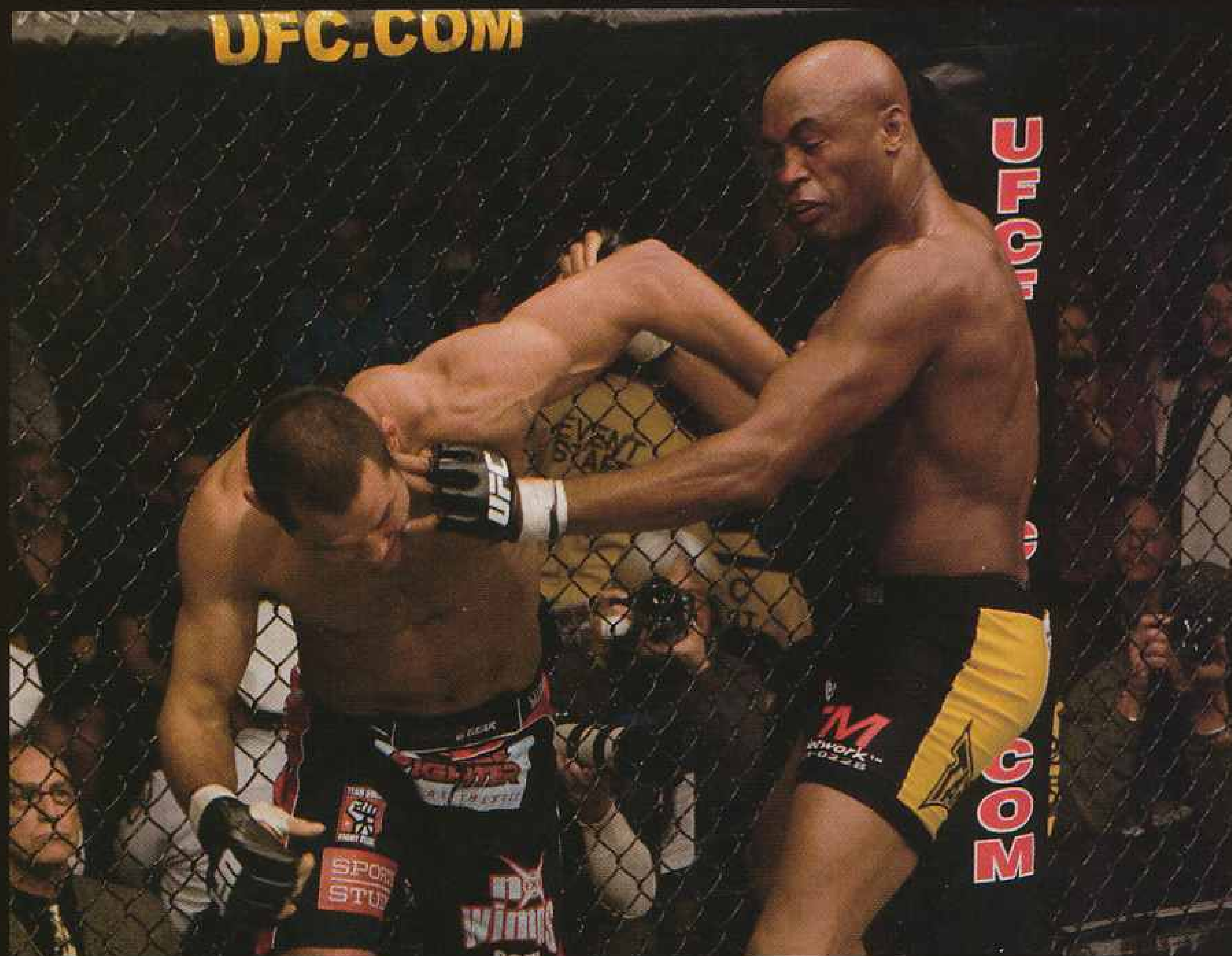
堀江ガンツ
本誌変態座談会主宰者。子どもの頃から変態的プロレスファン&UWF信者として鳴らし、『kamipro』入社後もUWF研究家を自称。最近のUFCへのハマりっぷりは、熱狂的PRIDEファンから抗議のメールが届くほど。











［3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION］
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ
【UFCミドル級タイトルマッチ】

○アンデウソン・シウバ vs ダン・ヘンダーソン×

（2R 4分50秒、チョークスリーパー）

UFCとPRIDEの185ポンド級王者同士の対戦は、1ラウンドこそダンヘンがテイクダウンを奪い優位に試合を進めたものの、2ラウンドはアンデウソンがスタンド、グラウンド両方でダンヘンを圧倒。あのダンヘンからチョークスリーパーで一本勝ちを奪い、見事に王者対決を制した。

UFC 格闘新次元

出ない、カウンターだけ狙ってるイメージだったんだけど、いまは蹴りが変幻自在ででしょ。どっから脚が出てくるんだ、みたいな。

ガンツ　『ストリート・ファイター2』に出てくるダルシムみたいですよね（笑）。

椎名　そう。蹴り脚がビューンと伸びちゃうみたいなね（笑）。

ガンツ　アンデウソンが強いのは、リーチが長くて懐に入り込ませない強さっていうのもありますよね。

椎名　だから、やっぱりダルシムだよ。実際、『スト2』でもダルシム最強説ってあったんだけど。

ガンツ　そうなんですか（笑）。距離をとって前蹴りだけやってりゃ勝てる、みたいな。

椎名　そうそう。『スト2』でも、ダルシムが「中キック」打ってるだけで、相手が入り込めなくなってたからね。だけど、最終的に最強はザンギエフだったんだけど。

ガンツ　ロシアのレスラーキャラ（笑）。でも、その『スト2』の論理でいえば、レスラーであるダン・ヘンダーソン有利でもおかしくないんですけどね。

椎名　でも、ザンギエフ最強っていうのは、一発の投げ技の評価が高かっただけだから（笑）。

ガンツ　じゃあ、UFCもUインターばりにスープレックス・ポイントがなくちゃいけない（笑）。

椎名　シュートボクシングのシュート・ポイントとかね（笑）。だけど、アンデウソンは、あきらかに1ラウンドは抑えて2ラウンドから行くぞっていう感じだったよね。

ガンツ　1ラウンドで距離をとって様子を見て、2ラウンドに勝負かけたときの強さといったら、あきれるほどですよ。

椎名　だけど……ホントに何が強いんだろう？　やっぱ触らせないって感じなんだよね。

ガンツ　ダンヘンが得意のフックを打ちながらのクリンチとかに、いけませんでしたからね。

椎名　いままでUFCってさ、どっちかというと身体が強くて、体力があるほうが勝つ、みたいなところがあったじゃん。

ガンツ　フィジカルの強さですよね。

椎名　アンデウソンはノゲイラもそうだけど、そのまったく逆で、レスリングをカットしたスタイルじゃん。打撃と柔術っていう。それ凄い好きなんだけど、UFCだと不利だったわけじゃん。それなのにアンデウソンやノゲイラが勝てるところに、UFCの奥深さがあるよ。

ガンツ　UFCの理想型はボクシングとレスリング。ランディ・クートゥアーやダン・ヘンダーソンのスタイルが有利なイメージありますけどね。

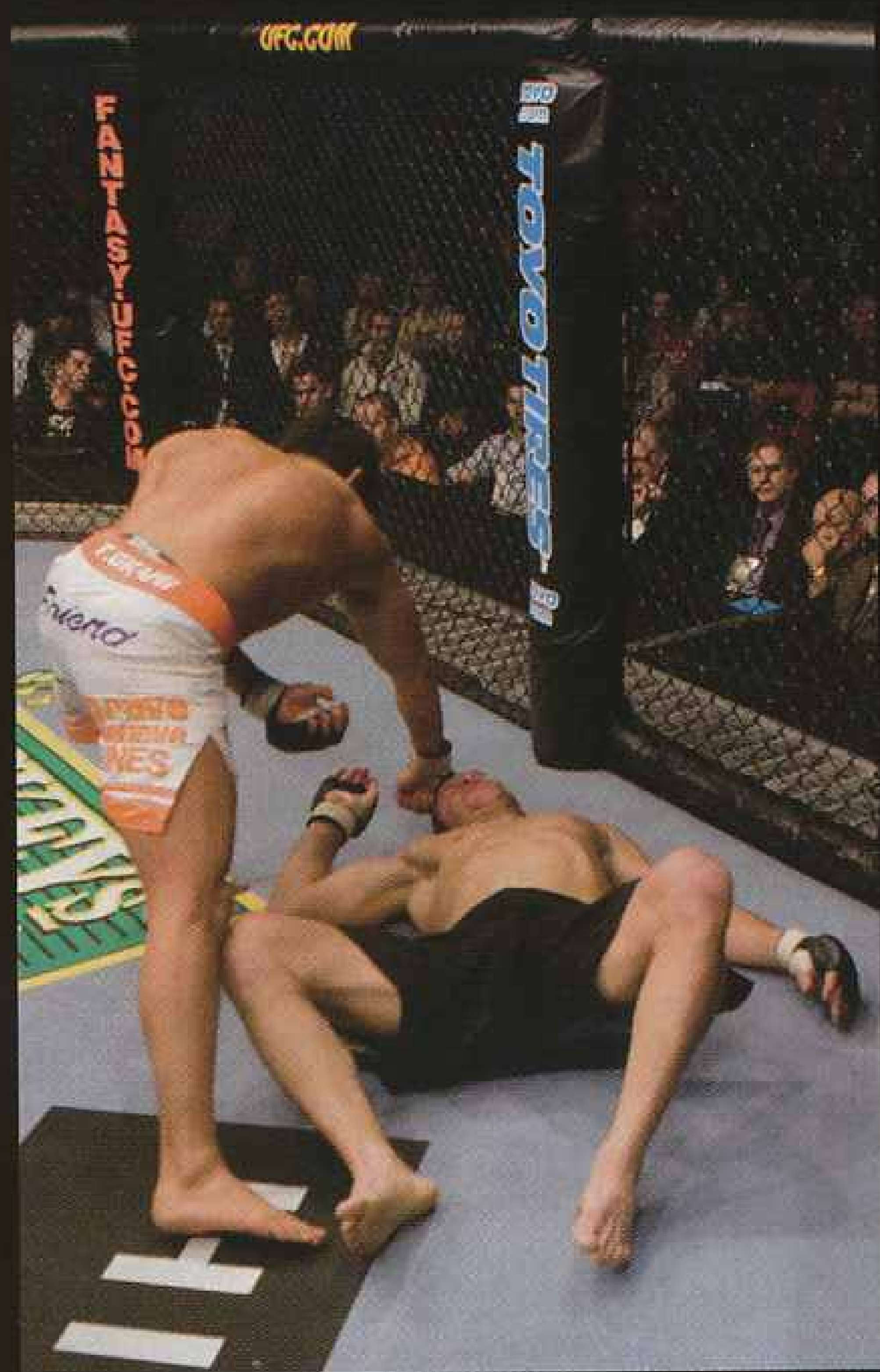
椎名　絶対に上のポジションになるスタイルね。

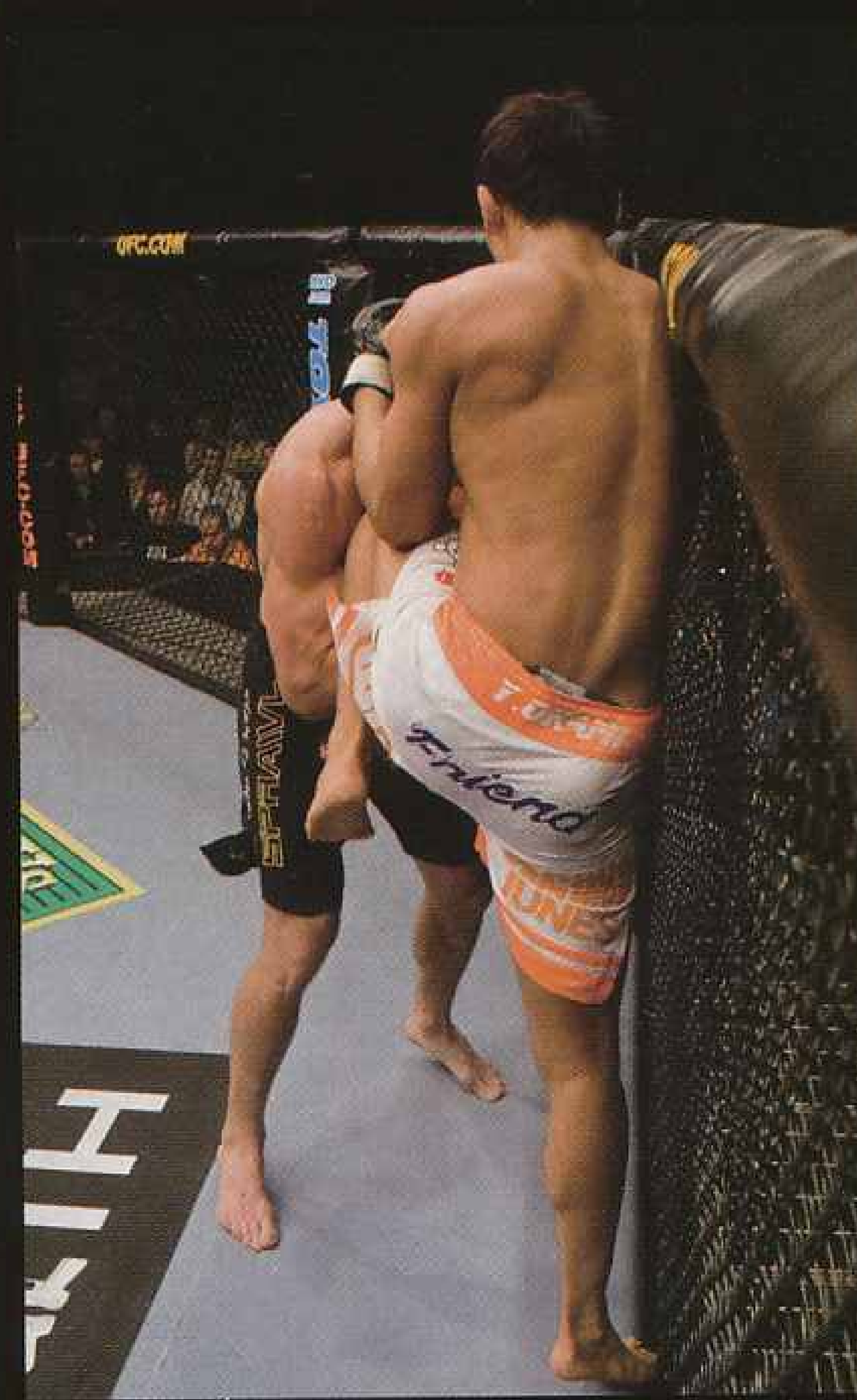
ガンツ　その完成型に近いと思われていたあのスタイルが、まったく通用しなかったところにアンデウソンの凄さがありますよ。

椎名　ホントに理想的だな、アンデウソン・シウバ。俺が格闘家だった









【3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION】
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ

○岡見勇信 vs エヴァン・タナー×

（1R 3分0秒、KO）

UFCと契約更新した岡見が、元UFCミドル級王者と対戦。岡見は1ラウンド早々から左ストレートでダウンを奪い主導権を握ると、金網に押しつけテイクダウンを狙うタナーの動きを読み、首相撲からの左ヒザ蹴りでKO勝ちを奪った。

ら、ああなりたいよ。

ガンツ　アンデウソン・シウバになりたい（笑）。

椎名　理論的には遠い距離から闘えるほうが強いに決まってるように。日本刀とナイフで闘ったら、日本刀が勝つに決まってるんだから。ただ、それをあれだけ具体的にできる人もいないよね。

椎名　うん、あと黒いパーカーも白い帽子もカッコいい！

ガンツ　見た目もいいですか（笑）。

椎名　不気味な入場曲もカッコいい！　キャラ立ちが凄いよ。

ガンツ　アンデウソン、じつは声がかわいいんですけどね。

椎名　そこもちょっと天才っぽくていいじゃん。なんか天才って、そういうとこない？　天才、声へんじゃんみたいな（笑）。

ガンツ　天才は声がへん（笑）。

椎名　あとコスチュームが黄色と黒っていう、『キル・ビル』的なセンス。あれも凄くいいよね。

ガンツ　『キル・ビル』というか天龍というか（笑）。

椎名　レボリューションだよね（笑）。だから、最初はダンヘン応援してたんだけど、だんだんアンデウソンがカッコよく見えてきて、感情移入してきちゃったもんね。ダンヘンは最後、サブミッションで極められたけど、立ち技で凄い効いちゃってたって言ってたよね。そういう感じだったもんね、最後まったく集中できないっていうか。

ガンツ　それこそスパイダーの網にはまった感じでしたよね。

椎名　ダンヘンがバック取られたとき、プロレスでジャーマン逃れるために出すような、うしろへのエルボーやってたじゃん。

ガンツ　昔、前田日明がよくやってた、うしろにエルボー入れて、脇固めみたいな（笑）。

椎名　そう、ストーンって脇固め入るやつね（笑）。ああいうエルボーをダンヘンが苦し紛れに出したら、上半身が伸びちゃって、バランス崩してチョーク取られちゃったよね。

ガンツ　それにしても、たとえがＵＦＣの話をしても、たとえがＵＷＦになっちゃいますね（笑）。

椎名　たとえがすべて古い（笑）。エルボーといえば、アンデウソンがやるマードック式のエルボーって怖いよね。

ガンツ　マードック式（笑）。また、たとえが古いですね。要は上からヒジを振り下ろす、〝毒針エルボー〟ですよね。

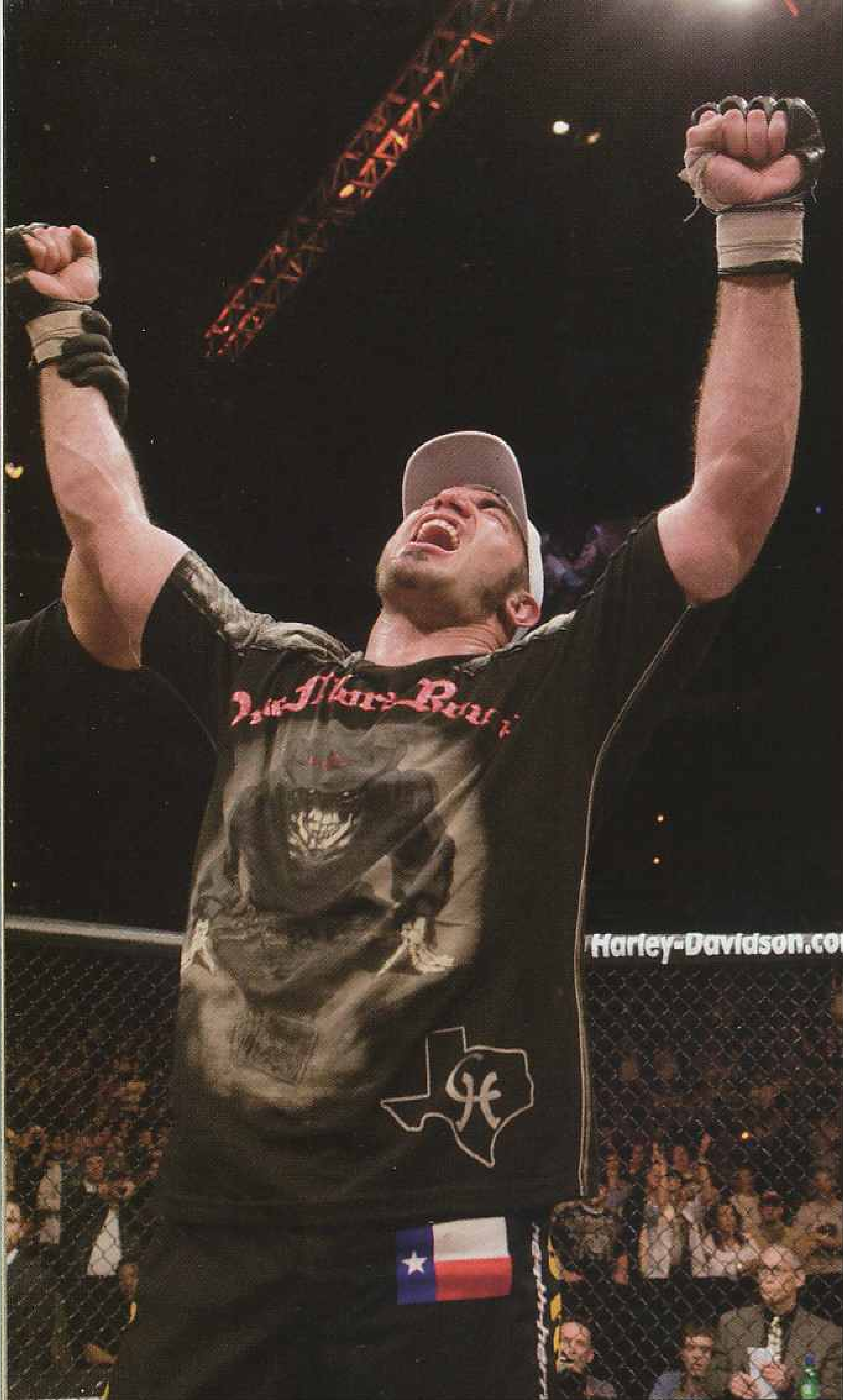
椎名　そうそう。あれは4点ポジションのヒザなんかより、よっぽど残酷だと思うけどな。「やめてくれ」みたいな。

ガンツ　同じヒジでも横からだったらいいですけどね。ムエタイ式というか、三沢式というか（笑）。

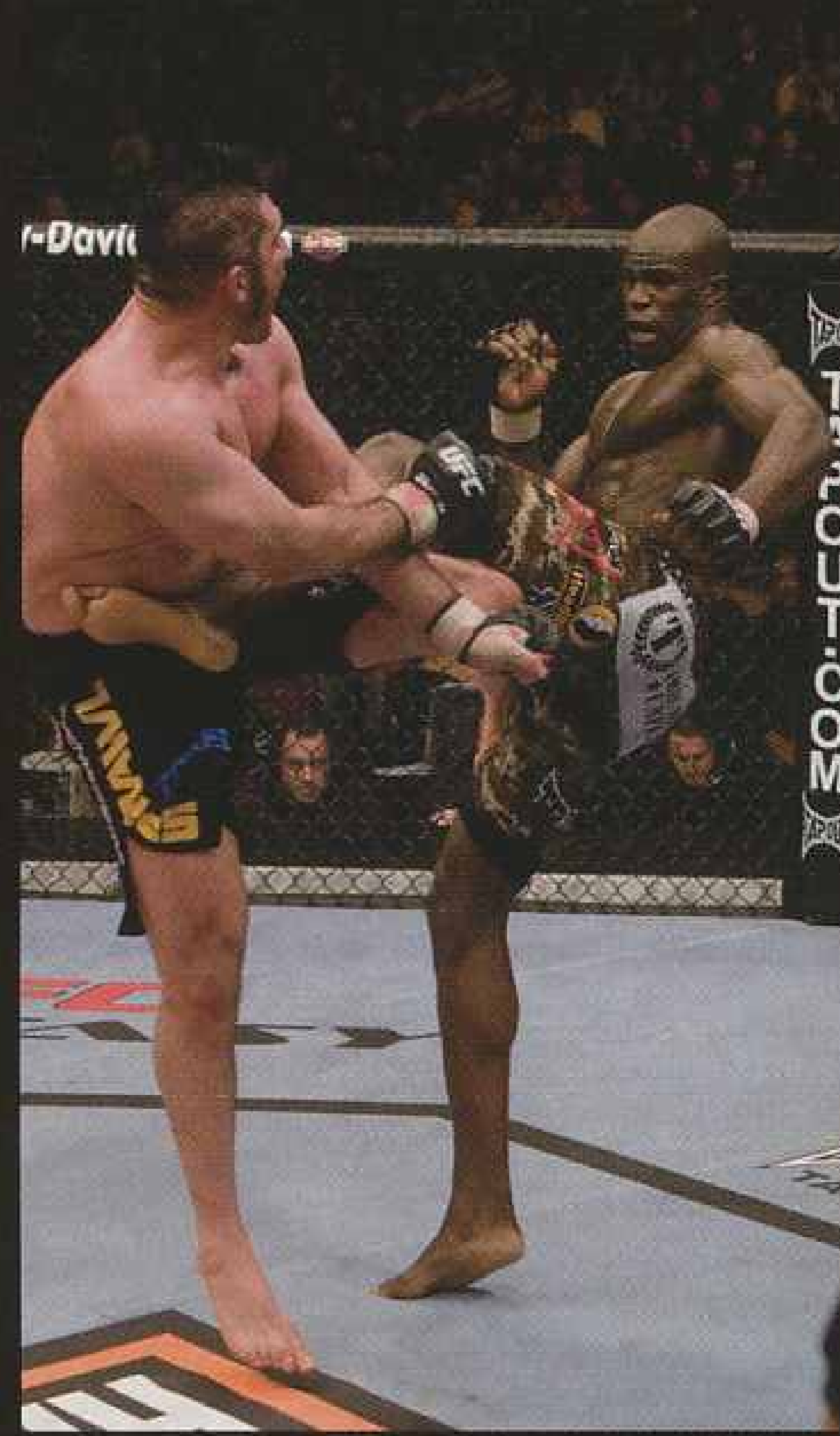
椎名　そうだね。ＵＦＣも三沢式はいいけどマードック式はなしにしてほしい。

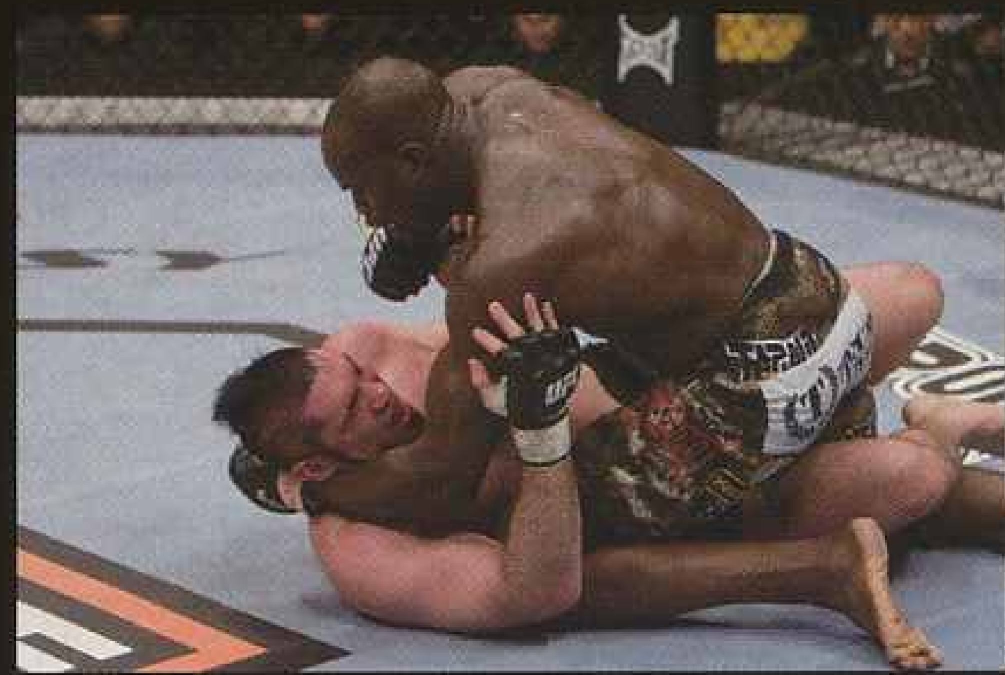
ガンツ　だけどエルボーのバリエーションって、だいたいプロレスでたとえられますね。

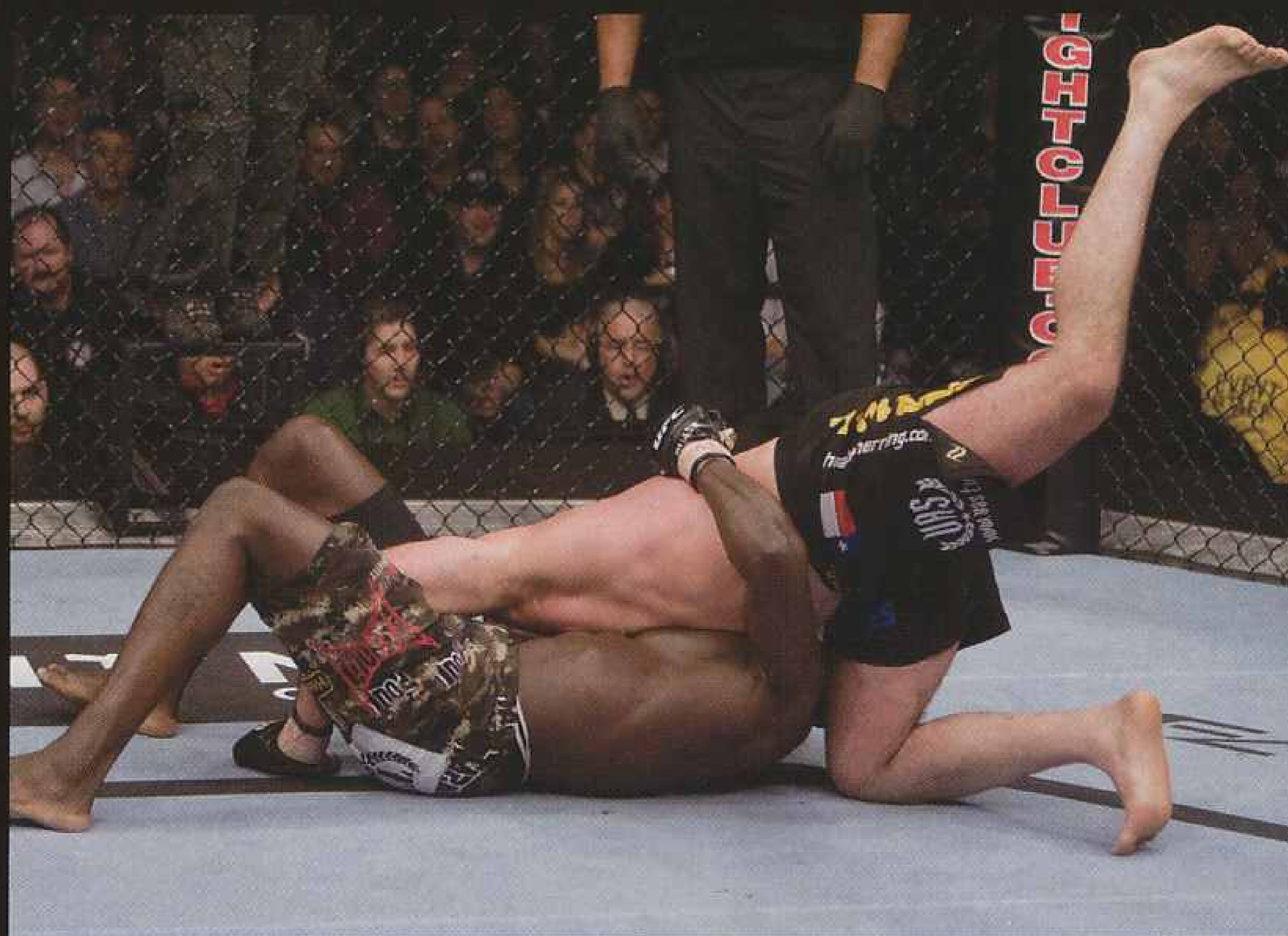
椎名　あとＵＦＣで出てないエルボーは、ドリー式だけだよ（笑）。











[3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION]
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ

○ヒース・ヒーリング vs チーク・コンゴ×

（3R終了 判定 2-1）

ノゲイラをダウンさせた男vsミルコに勝った男の闘い。パワーに任せて突進してくるヒースに対して、コンゴは冷静にテイクダウンを奪うが、逆に上のポジションを取られてしまう。結局、上になった時間が長かったヒースが僅差の判定勝ち。

ガンツ　エルボースマッシュ（笑）。
椎名　そもそもあれ、当たってるところヒジじゃないけどね（笑）。

いまの岡見の肉体は全盛期の前田日明だ！

ガンツ　ま、ドリーの話はそれぐらいにして（笑）、今回は岡見（勇信）も良かったですよね。
椎名　良かった！　俺、単純にアメリカコンプレックスとかそういうのがあると思うんだけど、向こうに行ってやってるってだけで、もう尊敬しちゃうっていうかさ。
ガンツ　憧れちゃう、みたいな。
椎名　野茂状態っていうかね。それはボクシングでも、いっつも思うんだけど。結局、ボクシングの世界チャンピオンといいながら、日本だけでやってるヤツっていまいちおもしろくないんだよ。そこを長谷川穂積が「アメリカ行くぞ」って言うと、「行ってくれ！　そうでなきゃ、ホントのチャンピオンじゃない！」みたいな感じになるんだよね。
ガンツ　やっぱり野球でもサッカーでも、本場でプレーしないと、本当の一流じゃない、みたいな感じになってますからね。
椎名　だから、花くま（ゆうさく）さんが、「五味はUFCに行ってほしかった」って書いてたけど、それは俺も同感。日本で五味の試合が観れるのは嬉しいけど、やっぱりUFCで勝負してほしかったな。
ガンツ　それでこそ、DREAMライト級GPに出場しているメンバーに対して、「格が違う」ってものが見せられるんですけどね。
椎名　そうなんだよね。五味に限らず、向こうで試合をするって大変なんだろうけどさ、逆にいえばPRIDEに参戦してた外国人選手は全員そうしてたわけだからね。だからやってほしいし、向こうで結果出してる岡見とかは偉いな、と思う。
ガンツ　「試合がつまらない」とか言われながら、結果を出して黙らせましたからね（笑）。
椎名　ダナ・ホワイトも「以前のオカミは好きじゃなかった」とか言ってたよね（笑）。
ガンツ　「最近はリョウト・マチダに似てきた」って、ほめてるんだか、けなしてるんだかわからない評価をしてましたけど（笑）。
椎名　岡見は身体が強いよね。
ガンツ　大きくなったというか、いい身体ですよね。強そうな身体。
椎名　そう！　あれは理想的な体型だと思う。
ガンツ　なんか第一次UWFの頃、肉体が一番充実してた時代の前田日明の身体に似てませんでした？
椎名　そうそう、俺もそう思ったよ。ガンツもそう思ったんだ（笑）。
ガンツ　やっぱり変態同士、考えることは同じというか（笑）。
椎名　肩幅が広くて、柔らかそうで、大きすぎない感じ。
ガンツ　体幹がしっかりしているように見えますよね。
椎名　ノゲイラなんかも、そのタイプだよね。
ガンツ　骨格からして、強くなる骨

格ですよね。

椎名　あれは強い人間の身体だよ。日本人が強くなるのは、あの身体しかないんじゃないかな。

ガンツ　岡見は身長も高いし、エヴァン・タナーより全然リーチも長かったんですよね。

椎名　俺、途中からこれは倒せるなと思ったよ。相手の闘い方がちょっと古かった。

ガンツ　そうですね。やっぱり元UFCチャンピオンとはいえ、2年ぶりのUFC復帰ですからね。

椎名　途中からテイクダウンにいきたいのが見え見えだったもん。こいつ、いつかやられるぞと思ったら、やっぱりKO負けだった。

ガンツ　完全に組みつこうとしてたのが、バレてましたもんね。だから、岡見はカウンターでストレート入れてやろうって感じで、気持ち的に余裕があったんでしょう。

椎名　今回、KOで勝ったことで、岡見はそろそろタイトルマッチできるぐらいになったのかな？

ガンツ　いや、戦績的にはタイトルに挑戦できてもおかしくないんですけど、チャンピオンのアンデウソンが強すぎて、あれと岡見をやらせてみたいっていう機運が全然高まらないんですよね。

椎名　なるほど。どうせアンデウソンが勝つから。

ガンツ　岡見に勝ったリッチ・フランクリンが、もうメッタメタにやられてるわけですから。あと、英語がしゃべれないブラジル人のアンデウソンと日本人の岡見じゃ、PPVがちっとも売れないというのも理由の一つみたいです（笑）。

椎名　ああ、やっぱりそういうのもあるんだ。

ガンツ　プロの興行だから仕方がないですけどね。

いまのUFCは全盛期のPRIDE並みの充実度

椎名　それにしても、なぜアンデウソンはあんなに強いのか……。間合いっていえばそれまでなんだけど、距離を保ちながら、蹴り続けられた選手って、これまでいないじゃん。ミルコですら難しかったのに。

ガンツ　ミルコも一発狙いの打撃になってましたからね。

椎名　あと寝技で下になったときに自信がないから、手が出なくなっちゃってたのもあるんだろうな。

ガンツ　そう考えると、アンデウソンは倒されて下になっても自信がある感じでしたもんね。

椎名　そうそう。いつの間に、あんなに寝技がうまくなったの？

ガンツ　やっぱり、もう何年もノゲイラたちと一緒にスパーリングしてますから、その成果でしょうね。だから、アンデウソンの相手として、パウロ・フィリオを望む声もありますけど、ノゲイラ、アンデウソン、フィリオはみんな仲間だから、これは実現しないでしょう。

椎名　もともと一緒のチームだったっけ？

ガンツ　いや、もともとはアンデウソンはシュートボクセから、ムエタイ・ドリームチームというものを作って独立して。ノゲイラとフィリオはBTT。でも、チームを離れる前から、個人的な交流で練習は一緒にやってたんですよ。



[3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION]
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ
◯ジョシュ・コスチェック vs ダスティン・ヘイズレット×
（2R 1分24秒、TKO）
AKA所属のTUFファイター、コスチェックは1ラウンド、若いダスティンの勢いに押されるが、2ラウンドに軸足が浮く"ジャンピング・ハイキック"からパウンドでKO。



[3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION]
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ
◯アンドレィ・アルロフスキー vs ジェイク・オブライエン×
（2R 4分17秒、TKO）
長くUFCヘビー級のトップ戦線で活躍してきたアルロフスキーだが、UFC離脱の噂があるからか、ノーテレビの前座に登場。それでもMMA無敗のオブライエンをKOした。



[3.1 UFC82 PRIDE OF A CHAMPION]
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ
◯ジョン・フィッチ vs クリス・ウィルソン×
（3R終了 判定 3-0）
ウェルター級無冠の帝王と呼ばれるフィッチ。王座挑戦に向けて圧勝かと思いきや、ウィルソンをなかなかテイクダウンできずに大苦戦。チーム・クエストの秘密兵器か?

椎名　あ、そうなんだ。

ガンツ　昔、リングスがまだあった時代に、桜庭、金原、TK、藤田とかが、団体の枠を越えて一緒に練習してたじゃないですか。そんな感じですよね。

椎名　要するに強いヤツらで集まって練習してたんだ。

ガンツ　そうです。そしてBTTやシュートボクセを独立してからも協力関係は続いてるということでしょうね。しかも、お金でつながってた関係じゃないから、なかなか壊れない。

椎名　なるほど。ノゲイラがBTTを出ていくときも、アンデウソンみたいな練習相手がいるからこそ、出ていけたんだろうな。

ガンツ　だからまあ、練習環境もいいし、ミドル級のアンデウソン政権はこれからまだまだ続くんじゃないですかね。

椎名　岡見には頑張ってほしいけどね。郷野は階級違うんだっけ？

ガンツ　郷野は一つ下ですね。ジョルジュ・サンピエールがいる階級ですから、これまたとんでもなくレベルが高いんですけど（笑）。

椎名　郷野が減量してもキツいのか。じゃあ、やっぱり五味しかいないね。出てほしいな～。五味ならいけるでしょう。

ガンツ　ライト級もBJ・ペンとショーン・シャークがいますからね。BJの壁はなかなか厚いですよ。

椎名　BJっておもしろい顔してるけど、強いんだよね。荒井注みたいな顔してさ（笑）。

ガンツ　荒井注があんなに強くていいのか（笑）。

椎名　なんだバカヤロー！ってね（笑）。だけどさ、なんか今回のUFCを観て、PRIDEの栄光の日々はもう帰ってこないんだなって、あらためて実感したんだけど。

ガンツ　UFCを観ると、MMAの最先端がアメリカに行っちゃったことをイヤでも感じますよね。

椎名　向こうは盛り上がっててうらやましいよ！

ガンツ　せめて日本でもテレビで観られるようにしやがれって思いますけど。

椎名　そう！　もう俺は、それでいいんだ。日本でやろうがやるまいが、強い選手が揃って、それをテレビで放映してくれれば、それでいいよ。ガンツはどう？

ガンツ　まあ、プロ野球みたいに、日本でもリーグがしっかり盛り上がって、その上でメジャーリーグをテレビで観られるみたいな感じがいいですけどね。

椎名　うん。俺たち甘い夢を見たもんだと思うよね。世界中の強い選手がみんな日本に集まってね。PRIDEの全盛期は最高だった。あれが一瞬あっただけで充分だよ。だから、いまは一刻も早くUFCのテレビ放映を再開してほしいね（笑）。

【08年3月2日／『kami-pro』編集部にて収録】



恒例！“世界のTK”髙阪剛の技術講座［3.1 UFC82編］

アンデウソン・シウバ TK式攻略法



UFCミドル級戦線で、並みいる強豪を相手にKOの山を築いて、敵ナシとなった王者、アンデウソン。挑戦者選びに窮したUFCは一階級上のトップファイター、ダン・ヘンダーソンを挑ませたのだが、その結果は、またしてもアンデウソンの圧勝!!　なぜ誰もアンデウソンに勝てないのか?　技術解説に定評のある髙阪剛がその強さの秘密に迫る!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

――今回も他誌（紙）と企画がかぶることを一切気にせず、3・1『UFC82』を振り返っていただければと思います！（笑）。

髙阪　いや～、ジョン・フィッチがね～……、って『kamipro』でそんなマニアックな話をしてもしょうがないか（笑）。ま、個人的な意見を言えば、岡見（勇信）がよかったですね。エヴァン・タナーからKOで勝つなんて凄いし、これはデカいですよ。

――岡見選手はすっかり安定感が出てきましたね。

髙阪　そうそう！　これはよく言ってることなんですけど、オクタゴンに入った日本人が最初にぶつかる壁は、歓声が凄すぎて客にノセられすぎちゃうことなんですよ。それで、普段やらないような技とか動きを、ついついやっちゃって、自分のペースを守れなくなって、ガス欠になってやられたりとか。

――地方競馬から中央競馬に来て、興奮している馬みたいですね（笑）。

髙阪　そう。走りたくてしょうがないんですよ。周りが盛り上げてくれるのは、選手にとってはスムーズに試合に臨めていいんだけど、必要以上に力が入って、勇み足になることがありがちなんですよね。でも岡見は慣れたもんで、凄く落ち着いていたし、自分の距離を理解して試合してましたね。逆にエヴァン・タナーは岡見の距離の中で泳がされたって感じでしたから。

――ワンツーでダウンも奪いましたね。

髙阪　ストレートが凄く伸びてるように見えましたよね。でも、それは練習したからってすぐに伸びるようなものじゃなくて、気持ちの問題が大きいんですよね。迷いなく、しっかりと打ち込んでいるから、そういう打撃がしっかり出せるんです。岡見はこれまで、組みついて、脇を差してテイクダウンしてという展開が得意だったんですけど、あいうふうに、まっすぐ、しかも打ち抜く打撃ができるんであれば、大きな武器になりますよね。岡見はリーチが長いから、打撃に磨きをかけていったらいいと思いますね。

——岡見選手は身体も大きくなったように見えたんですけど。

髙阪　身体も実際に大きくなってきてるんだろうけど、これも、自信がついてきてるからそう見えたというか。オクタゴンに入っても、物怖じせずに堂々と胸を張ってましたから。自分もPPVを観ていて「今日は落ち着いているな、デカく見えるな」って思いました。

——では岡見選手はこれからさらに活躍できそうですね。

髙阪　そろそろタイトルマッチも見えてきたんじゃないかな。ただ、この階級のチャンピオンは……もう、ちょっとモノが違いすぎるね（笑）

——アンデウソン・シウバは今回も凄かったですよね。本来階級が一つ上の、ライトヘビー級のトップファイター、ダン・ヘンダーソンに完勝ですからね。

髙阪　ダンはスタミナの化け物みたいなヤツじゃないですか？　だけど、最後は息が上がってましたからね。1ラウンドの動きもよかったから、調整に失敗したとは思えないんですよ。でも、よっぽどアンデウソンの攻め方がきつかったんかなって。最後のスリーパーをタップしたときも、もう半分あきらめちゃってましたよね。

——「逃げられないから、もうダメだ」という感じでしたね。

髙阪　ダンは試合してて、つかみどころがないというか、水の中でもがいているような感じがしたんじゃないかな。

——完全にアンデウソンのペースでしたよね。攻略の糸口も見せないというか。

髙阪　ただ、ダンがテイクダウンを取った胴タックルは、アンデウソンを切り崩すヒントになるんじゃないかと思いますけどね。あれはダンが、蹴りを出したアンデウソンの脚をキャッチしようとしたところ、アンデウソンが脚を引いたんですね。ほかの選手はみんなアンデウソンからテイクダウンを取ろうとしても、そこで終わってるんですよ。蹴り脚を取ろうとするんだけど、その脚をパッと引かれて、もう一回、ダブル（両脚タックル）でいこうとして、切られてガブられるというパターンが多かったんですよ。でも、今回はダンがすぐに得意の胴タックルに変えたんですよ。

——臨機応変に切り替えた、と。

髙阪　アンデウソンもレスリングは凄く上達してるけど、そうやってバリエーションを変化させるタックルをやっていけば、対応はできないんじゃないか、と。

——アンデウソン攻略には、打撃にコンビネーションがあることと同様に、タックルのコンビネーションも必要になってくる、と。

髙阪　以前、アンデウソンは蹴り脚を取られてテイクダウンされることが多かったんですよね。それがUFCでチャンピオンになってからは、蹴り脚を引くスピードが変わったんですよ。蹴るのも速いんですけど、蹴ったあとに戻すのも速くなったんです。



元王者のエヴァン・タナーを下して2連勝を重ねた岡見。これでUFC戦績は6勝1敗。試合後には、ダナ・ホワイト代表も「積極的に試合できるようになった」と好評価。タイトル挑戦の可能性が高まった。

——ジャブみたいなキックですか。

髙阪　そうそう。テイクダウンを取られないようにしつつ、もし組んだとしても、組み勝てるように打撃を打つ、というやり方を独自に考えてきたんでしょうね。それが凄く完成されつつあるんです。おまけに引き脚を速くしたことで、蹴りの威力が増している。脚が長いからストロークも大きいですし、相当痛いはずですよ。だからジャブみたいな打ち方でKOが奪える蹴りですよ。

アンデウソンみたいに底がわからないヤツほど怖い相手はいないんですよ

——しかも、どこから打撃が出てくるかわからないからダンヘンも踏み込めなくて、得意のロングフックを打ちながらクリンチで組みつくことができませんでしたね。

髙阪　試合の後半に、それをやろうとしたら、逆に蹴りでカウンターをとられてましたからね。完全にアンデウソンの流れでしたね。

——やりにくい相手ですよね。しかも、テイクダウンしてもアンデウソンは柔術もできますから。

髙阪　ホント、嫌な相手だわ（笑）。ただアンデウソンはグラウンドで相手が攻めてきた場合に対応できるかというと、まだわからないんです。寝技の攻防になっても、相手が打撃を怖がって途中で止めちゃうんですよ。アンデウソンって、寝技の状態からでも下から蹴り上げたりとか、ヒジをドンドン打ってくるんで。攻め込まれたらどうなるのか観てみたいんだけど、まだ、そこまで誰もできてませんから。

——ホント、底が知れませんよね。

髙阪　自分の経験で言えることだと、底がわからないヤツほど怖い相手はいないんですよ。「あいつは強いよ！」って言って、「何が強いの？」と返されても「打撃が……」と言うしかない。そこで「だから何が？」と聞かれても「うーん、わからんけど、強いんだよ！」っていう。そういうのが一番怖い（笑）。

——対策の立てようもないですよね。しかもUFCでは短い時間で勝ってる試合が多いので、サンプルが少ないですし（笑）。

髙阪　そう考えると、1ラウンドのあのテイクダウンっていうのは、モノ凄いチャンスだったんですね。終わってから言えることですけど。

——めったにないシーンだったと。

髙阪　うん。だから、これからアンデウソンと試合しようとする選手は、あのテイクダウンを参考にしていくと思いますよ。

——ようやく見つかった突破口ということですか。

髙阪　アンデウソンにしてみれば不覚だったと思いますよ。これから挑戦する連中にとっては、一つの光が見えたっていう。ま、こんな話をしている時点で、アンデウソンどだけ強いねんっ！　ていう話なんですけど（笑）。いやホント、あれは強いわ。きれいにまとまってないぶん、よけい、怖さがあるんですよね。まだ何かを残した勝ち方をしてるから。

——何か、MMAの次のレベルに突入したっていう感じですね。

髙阪　よっぽど努力したんだと思いますよ。昔はレスリングの動きは



UFC 格闘新次元

ヴァンダレイがミドル級に落としてくるんなら、おもしろいことになります

できてませんでしたから。何回もテイクダウン取られたりとか、それにどう対処するかを意識してスパーリングを重ねたんだと思います。

——もうPRIDEに出てた頃とは別人ですよね（笑）。

高阪　高瀬（大樹）に三角（絞めを）取られてたのが懐かしくてしゃあないわ（笑）。あのときは、（当時所属していたシュートボクセの）フジマール会長にエラい怒られてたんですよね。試合後に、リング上で尋常じゃないダメ出しされてましたからね！

——アンデウソンにそんな時代もありましたか（笑）。

高阪　メチャクチャ悲しそうな顔してましたよ（笑）。でも、そういう試合を経験したから強くなれたんでしょうね。たいしたもんですよ。

——いまのアンデウソンを倒せる相手は、見当たりませんかね？

高阪　ちょっと見当たらんねぇ。こんだけ突出してると。

——ヴァンダレイ・シウバが階級を下げるとか、ジョルジュ・サンピエールが階級を上げるとか、そういう話はあるみたいですけど。

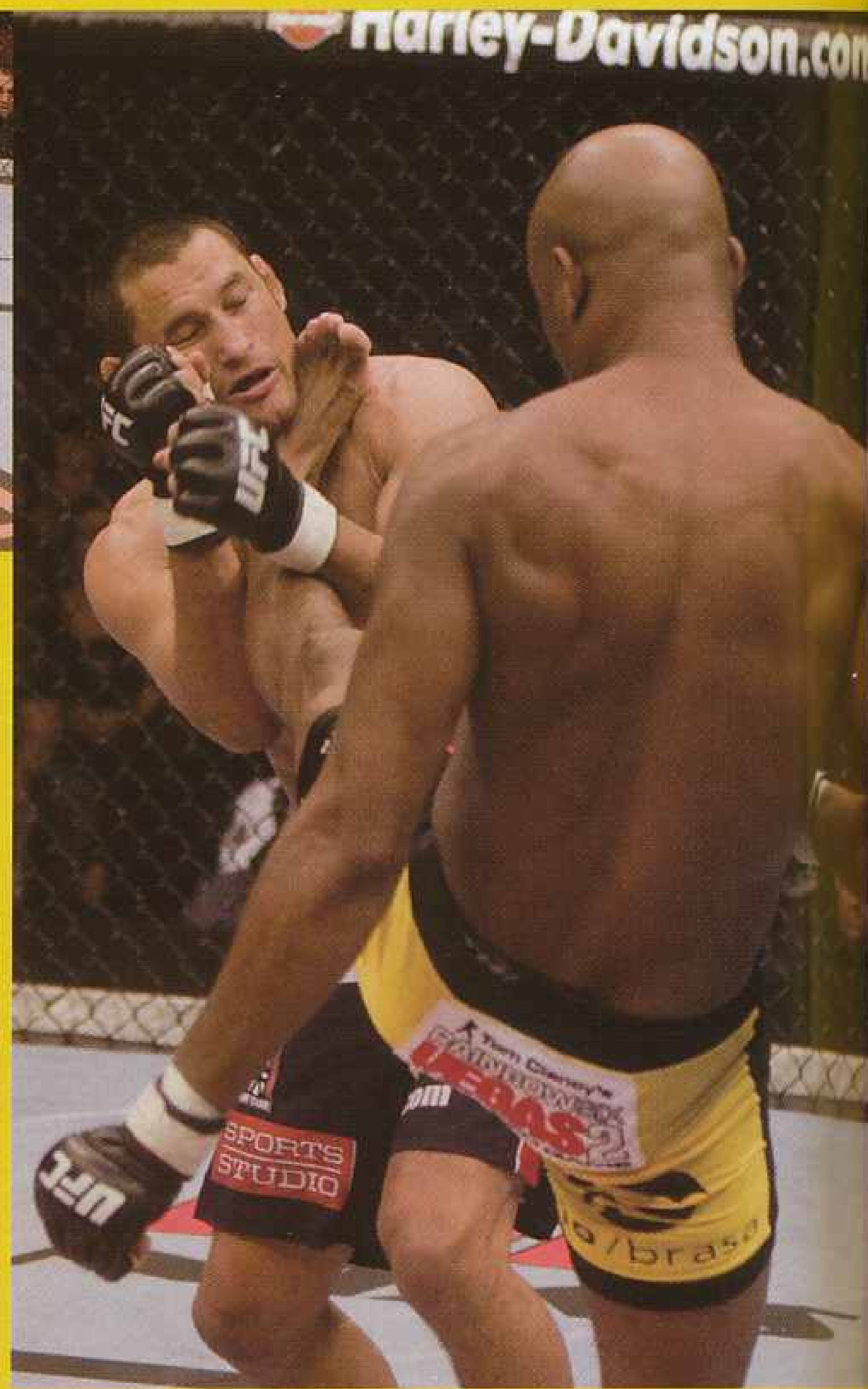
高阪　ヴァンダレイが体重を落としてきたらおもしろいですね。ヴァンダレイは距離とか関係ないから。手足が短いから、中に入らないと当たらないんですよ。

——イレギュラーな試合になるわけですね。

高阪　そう。相性は合わないと思いますよ。でも相性が合わないから、ヴァンダレイにも勝つ可能性があって。いまのアンデウソンの勢いだと、たぶん相性が合うヤツには全部勝つから。

——同じようなペースで闘ったら勝てない、と。





スタンドでは、変幻自在の脚サバきでダンヘンを苦しめたアンデウソン。グラウンドに持ち込まれても、長い脚を活かした巧みな柔術テクニックで対応。まったく穴がない！

高阪　言うたら、ヴァンダレイほど試合が噛み合わなそうな相手はいないんですよ。アンデウソンが打撃を打とうしたら、目の前でゴチャゴチャとフックを振り回されることになるし、捕まえてヒザを入れようとしたら、突き離されることになるだろうし……、たぶんそういう噛み合わない試合になるでしょうね。アンデウソンにはやりにくいだろうな、これは。だからヴァンダレイの攻撃力、突進力、前に出てくる圧力をそのままにして、ミドル級に落としてくるんであれば、おもしろいことになりますよ。

——あと、この階級だとUFC傘下のWECに、パウロ・フィリオがいますね。もっともアンデウソンと一緒に練習しているから、実際に闘うことはなさそうですけど。

高阪　あ～、おったね、パウロ。これもまるでアンデウソンとは違うタイプですけど。でもパウロからしたら、テイクダウンを取るしかないから、厳しいだろうな。中に入れないと思うんですよ。とくにオクタゴンは広くて丸いからアンデウソンは円運動で逃げられるし。

——〝PRIDE無敗〟のフィリオでもダメですか。そんな相手に岡見選手は挑戦できますかね？

高阪　う～ん、岡見がどうのこうのっていうのではなくて、いまのアンデウソンの強さは規格外というか、ありえないからね。フィジカルも凄いし。（資料を見て）リーチが77・5センチって書いてあるわ。ダンが74センチなのに。

——ダンヘンのほうが階級が上なのに（笑）。

高阪（ヘビー級のヒース・）ヒーリングは78センチって書いてます。

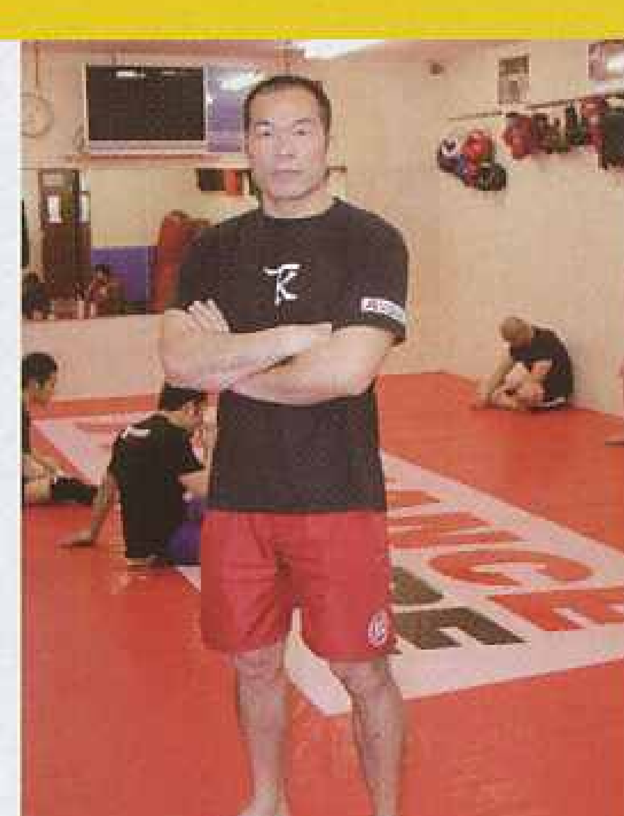
——アンデウソンは2階級上の骨格ですか（笑）。

高阪　そういう部分はハッキリ言ってもうしょうがないですわ！　でも、岡見がトップグループに入ったことは間違いないです。それにアンデウソンは以前、岡見に反則負けしている（06年『ランブル・オン・ザ・ロック』ハワイ大会）から、それをUFCがどう捉えるかというのもありますね。


——UFCは〝リベンジマッチ〟的なマッチメイクは好きですしね。

高阪　ただ、岡見は（前王者の）リッチ・フランクリンに負けているから、もう1、2試合は挟まなきゃいけないかもしれないですけどね。ま、とにかく自分は日本人がUFCで孤軍奮闘することがどれだけ大変かってことを味わってるから、「頑張れ、岡見！」って応援しますよ。

【08年3月3日／都内・A-SQUAREにて収録】



こうさか・つよし■1970年3月6日、滋賀県出身。94年、リングス入団。その後、日本人で初めてのUFCレギュラーとなり、〝世界のTK〟と呼ばれる。06年に現役引退。現在は自らが代表を務めるA-SQUAREにて、後進の育成に尽力している。


柔術

—サンピエール選手、はじめまして。日本のMMA&プロレスリングマガジン『kamipro』です。

GSP （『kamipro』をめくりながら）おお！ こんなに大きく扱ってくれているのか。

—12・29『UFC79』でのマット・ヒューズ戦は素晴らしい試合でしたからね。あまりのインパクトに、ウチでは「未来からやってきたMMAファイター」と紹介したんですよ。

GSP サンキュー！ ボクは本当にハードにトレーニングしているから、そう言ってくれると励みになるよ。

—『kamipro』はMMAと一緒にプロレスも扱っている雑誌なんですけど、サンピエール選手は子どもの頃、プロレスは観てましたか？

GSP もちろん！ カナダはプロレスが盛んだったからね。

—じゃあ、カナダのスーパースター、〝ヒットマン〟ブレット・ハートもご存知ですか？

GSP 知ってるどころか、大ファンだったよ！ いつもワクワクしながら、テレビを観ていたんだ。

—そうなんですか。サンピエール選手をプロレスファン向けには、「MMA界のブレット・ハート」だと紹介しようと思ってたんですよ。

GSP それは本当に嬉しいね！ ただ、もっと正直に言うと、ボクはヒットマンより、ハルク・ホーガンのほうが好きだったんだけどね（笑）。

—少年時代のGSPは〝ハルカマニア〟でしたか（笑）。

GSP そう。「神への祈り！ ビタミン！ トレーニング！」だよ（笑）。

—ハルカマニアの三原則（笑）。でも、いまのサンピエール選手の人気もホーガンとまでは言わずとも、かつてのヒットマン級じゃないですか？

GSP アハハハ。そうかい？

—前回もアメリカで試合をしながら、アメリカ人のヒューズより、はるかに人気があるので驚きましたよ。「USA」コールを打ち消す「GSP」コールでしたからね。

GSP 確かに、あの「GSP」コールは嬉しかったよ。ボクはオクタゴンの中でいいファイターであると同時に、オクタゴンを降りてからも誠実な人間であろうとしているから、そこが支持されているのかな。

—そのヒューズ戦はパーフェクトといってもいい試合でしたが、その中でもとくに大きな勝因はなんだと思いますか？

GSP じつはヒューズ戦が決まるまで、ボクは北京オリンピック出場を目指して、レスリングの特訓をしていたんだ。その成果だね。

—もともとアマチュアレスラーじゃないのに、オリンピックを目指すって凄いですね。

GSP ボクはずっとオリンピック候補選手たちと練習してきたからね。でも、年末にウェルター級暫定王座決定戦のオファーがあったから、そっちを選んだけどね。ボクはMMAファイター。やはりオリンピックに出ることより、この競技でトップに立ちたいんだ。

—それにしても、UFCを代表するレスラーであるヒューズをレスリングで圧倒したのは驚きましたよ。

GSP あの試合でレスリング勝負を選んだのは、彼が予想しない闘いをしよう

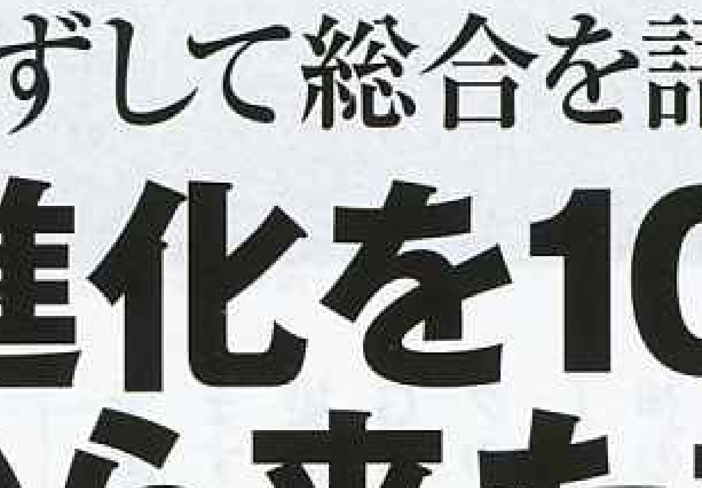
この男を知らずして総合を語ることなかれ

MMAの進化を10年早めた未来から来た格闘家

Georges St-Pierre

ジョルジュ・サンピエール







いまUFCで、いやMMA界全体で最も旬な格闘家といえば、文句なしにこの男、GSPことジョルジュ・サンピエールだ。UFCで最も層が厚いウェルター級のトップであるだけでなく、打撃、サブミッション、レスリングに秀で、それらを組み合わせたオリジナルのスタイルは、MMAの未来型を見るかのよう。この男の闘いこそ、MMAの最先端。GSPを見ずして総合格闘技は語れないのだ!

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　撮影／Josh Hedges（UFC）



“精神の故郷”である日本で試合をすることはボクの一つの夢だね

と思ったからなんだ。きっと彼は、ボクがスタンドにこだわって、打撃で勝負すると考えていた。そのための対策も練ってきていただろう。でも、ボクは彼の一番の得意分野で真っ向勝負を仕掛けた。だから、意表を突かれて、あっさりと負けてしまったんだよ。

――そういえばジョシュ・コスチェック戦もそうでしたよね。

GSP　そのとおりさ。いつも、そうやって油断を突いて相手の余裕を奪う戦略を立てることが大事なんだ。そういう作戦がとれるのは、ボクが打撃もレスリングもサブミッションもすべて自信があるからなんだけどね。

――毎回、対戦相手だけでなく、観客の予想も上回るパフォーマンスを見せていますよね。そういった意味で、GSP登場は桜庭和志以来の衝撃でしたよ。

GSP　それは嬉しいね。サクラバはボクのアイドルだった伝説的ファイターだし、ボクは極真空手がベースだから、精神の故郷である日本の人たちに評価してもらえるのは、本当に嬉しいよ。

――極真空手はどういったきっかけで始めたんですか？

GSP　ボクのお父さんが極真の師範なんだ。そういったこともあって、極真を始めて、もう10年も続けているよ。

――親子二代で極真空手家なんですね。

GSP　カナダでもっとも人気のあるスポーツはアイスホッケー。でも、ホッケーをやるには、お金がかかるんだ。だから空手を選んだということもあるね。空手なら、スティックもいらないし、空手着一枚あればできるからね（笑）。

――空手を始めたきっかけはイジメだったという記事を読んだことがあるんですが。

GSP　そうだね。ボクが子どもの頃、周りの環境もよくなかったんだ。田舎で、悪ガキがたくさんいて、ボクのお金を盗もうとしたりしてね。というのも、ボクは引っ越しが多かったから、一人でいることが多かった。それでどうしてもいじめられやすくて、5人の上級生に囲まれたりもしていたよ。でもボクは自分のプライドのために、絶対に負けたくなかったから、絶対的不利な状況でも闘ったんだ。だから、一度もお金を取られたことはないよ。

――そのためにも空手の鍛錬は必要だった、と。

GSP　空手がボクを守ってくれたんだ。だから、いまでもボクは空手家としてのプライドを持っている。

――プロ格闘家になる前は用心棒もしていたとか？

GSP　格闘家としてのキャリアを始めた頃に少しだけね。当時は大学生だったんだけど、週末はクラブでバウンサーをしていた。でも、その頃から絶対にプロになろうと思っていたよ。

――MMAを始めるきっかけはなんだったんですか？

GSP　93年のことなんだけど、ボクの空手の先生が残念ながらガンで亡くなってしまったんだ。そのあと、ホイス・グレイシーの試合を観たんだよ。それがきっかけかな。まあ、その後も空手は続けていたけどね。

――柔術家としてはヘンゾ・グレイシーのトレーニングも受けたらしいですね？

GSP　彼からは多くのことを学んだよ。道場には多くの友だちもいるしね。

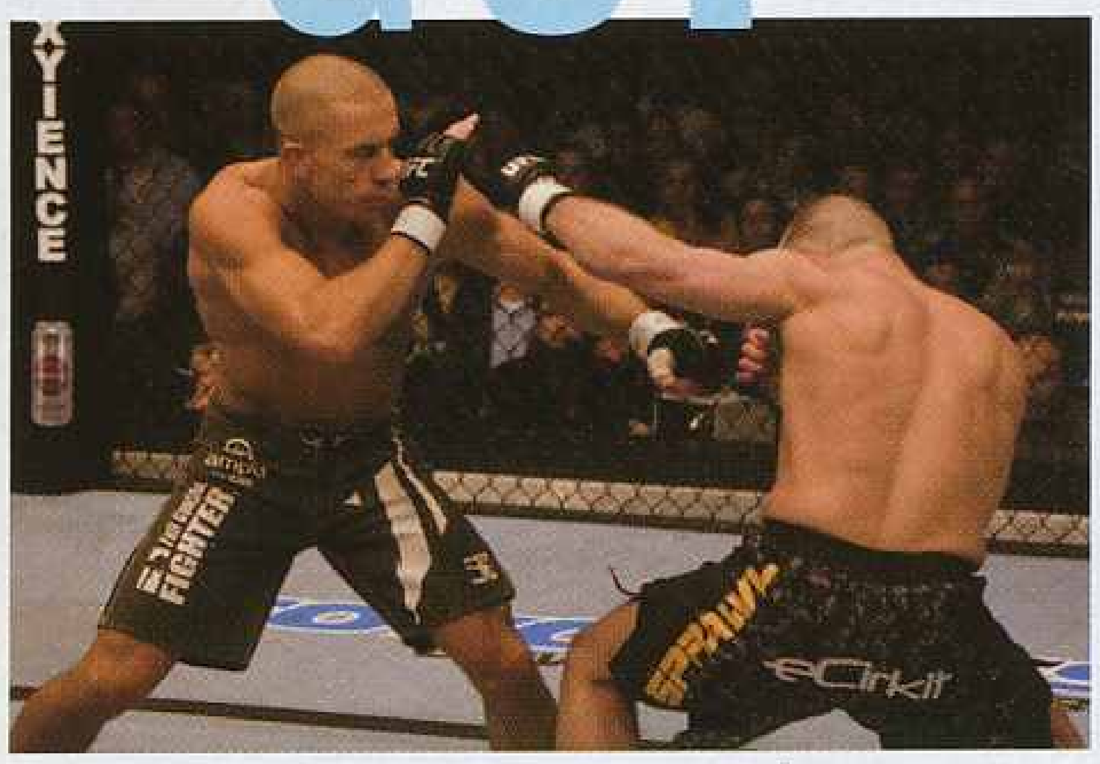
――同じくヘンゾの門下であるヒカルド・

アルメイダとは面識がありますか？
GSP　彼とは面識はないけど、いいヤツだってみんな言ってるね。明日（2月2日）試合があるけど、彼はいい試合をするんじゃないかな。
――サンピエール選手は、ほとんどのキャリアのUFCですごしていますが、PRIDEとかほかの団体に上がりたいと思ったことはありますか？
GSP　ボクはファイターだから、強い選手がいるところはもちろん気になるさ。だから、以前はPRIDEに上がりたいと思っていたけど、その頃のPRIDEはヘビー級やライトヘビー級が中心で、ウェルター級はあまり必要とされてなかった。だからUFCで闘い続けていたんだけど、いまのUFCは本当に世界の強豪が集まっているからね。しばらくここで闘い続けるつもりだよ。ただ、ボクは打撃だけの試合もやってみたいから、いつか日本のK-1に上がることがあるかもね。
――日本人で同階級の長南亮選手や郷野聡寛選手のことは、どう評価していますか？
GSP　チョーナンはこの前、カロ・パリジャンに負けてしまったよね。でも、彼にとってあの試合はUFCで初めての試合だったからね。オクタゴンに慣れて、勝ち星を重ねたら、ボクと闘うときも来るかもしれない。それぐらいになってから考えたいね。いまはマット・セラのことで頭がいっぱいなんだ。
――次はいよいよ地元カナダで、マット・セラとのウェルター級タイトル統一戦ですもんね。
GSP　楽しみでたまらないね。ボクのコンディションはいま100パーセント

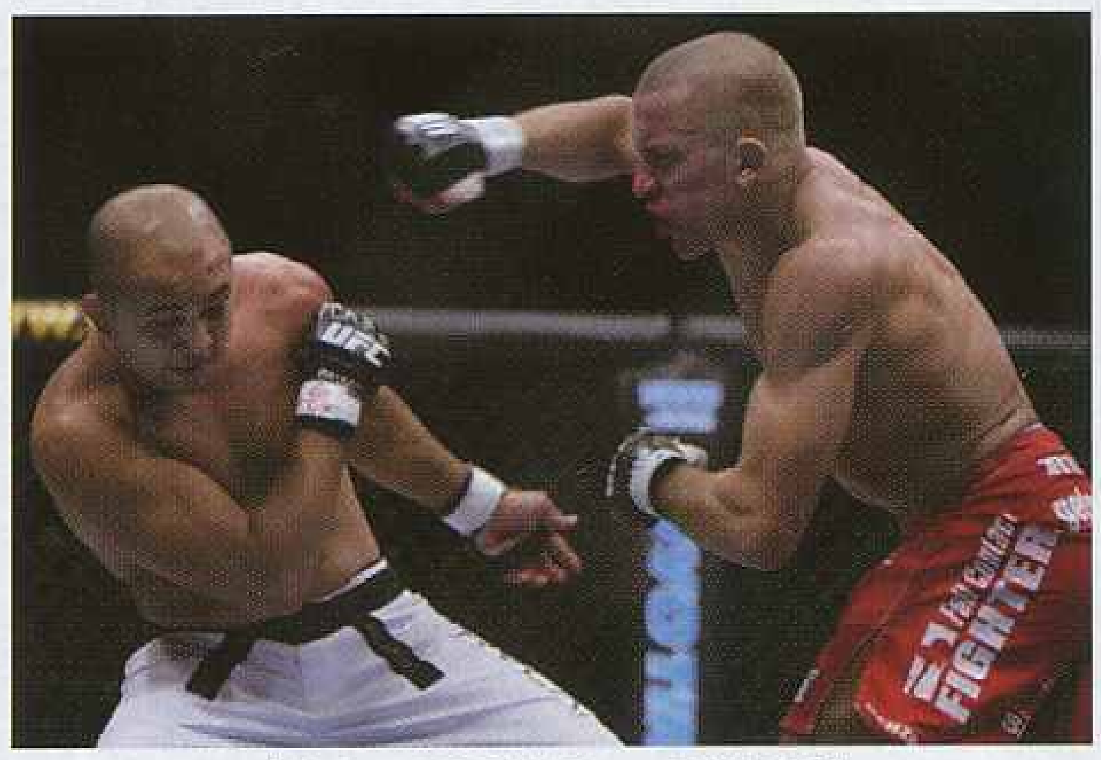
GSP Georges St-Pierre



[07.12.29 UFC79 NEMESHIS]
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
○ vs マット・ヒューズ×
（2R 4分54秒、腕ひしぎ十字固め）
当初はセラvsヒューズのタイトル戦だったが、王者セラ負傷欠場により、GSPが暫定王座決定戦に出場。GSPはUFCウェルター級の象徴であるヒューズを終始コントロール。最後はマウントからアームロック、アームバーにつないで完勝した。

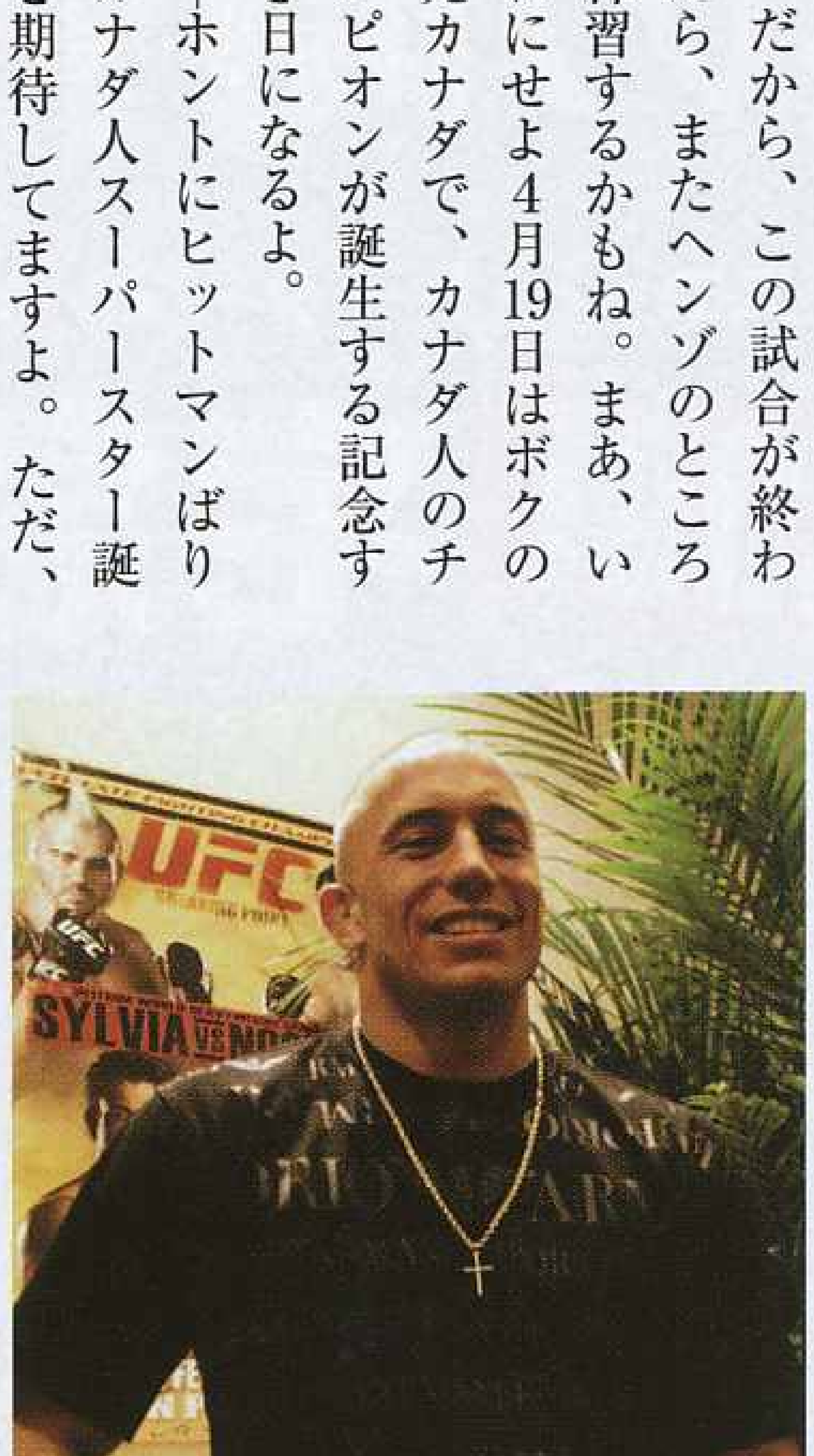


[07.4.7 UFC69 SHOOTOUT]
米国テキサス州ヒューストン／トヨタアリーナ
× vs マット・セラ○
（1R 3分25秒、TKO）
BJ・ペン、ヒューズを連破し、ウェルター級の頂点に立ったGSP。しかし、思わぬ伏兵に足をすくわれることとなった。TUF優勝のベテラン、セラに下馬評では絶対有利と思われながら、まさかのKO負け。ウェルター級王座初防衛に失敗してしまった。



[06.3.4 UFC58 USA vs. CANADA]
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
○ vs BJ・ペン×
（3R終了 判定 2-1）
当時のUFCウェルター級絶対王者、M・ヒューズに完勝した実績を持つペンに、一進一退の攻防の末、判定勝ち。ペンにテイクダウンを許さず、逆にテイクダウンしての競り勝ちは、GSPの評価を大きく上げ、この次の試合ではついにヒューズ超えもはたすことになる。

なんだ。必ず勝つと思っているよ。
――前回の敗因はなんだと思ってますか？
GSP　なんの言い訳もない。あの日はセラが上だったということさ。でも、次は違うよ。
――そういえば、セラもヘンゾのところでずっと練習していた愛弟子ですよね。
GSP　それが、いまボクがヘンゾのところで練習していない理由さ。だから、この試合が終わったら、またヘンゾのところで練習するかもね。まあ、いずれにせよ4月19日はボクの地元カナダで、カナダ人のチャンピオンが誕生する記念すべき日になるよ。
――ホントにヒットマンばりのカナダ人スーパースター誕生を期待してますよ。ただ、アメリカやカナダもいいですけど、いつか日本でも試合をしてください。
GSP（日本語で）アリガトウ。それはボクの夢でもあるからね。UFCの日本大会が決まれば、真っ先に参戦の立候補をするよ。
――その日を楽しみにしてます！
【08年2月1日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】



GEORGES ST-PIERRE■1981年5月19日、カナダ・ケベック州出身。立ち技、寝技、レスリングすべてに秀で、層の厚いウェルター級戦線を駆け上がり、06年11月にM・ヒューズを破り王座奪取。しかし07年4月、セラに敗れ王座転落。4.19『UFC83』でセラとリマッチに挑む。178cm、77kg。

“世界のTK”髙阪剛もGSPを絶賛！
「すべての動きが凄く、しかもそれが連動しているから強い」

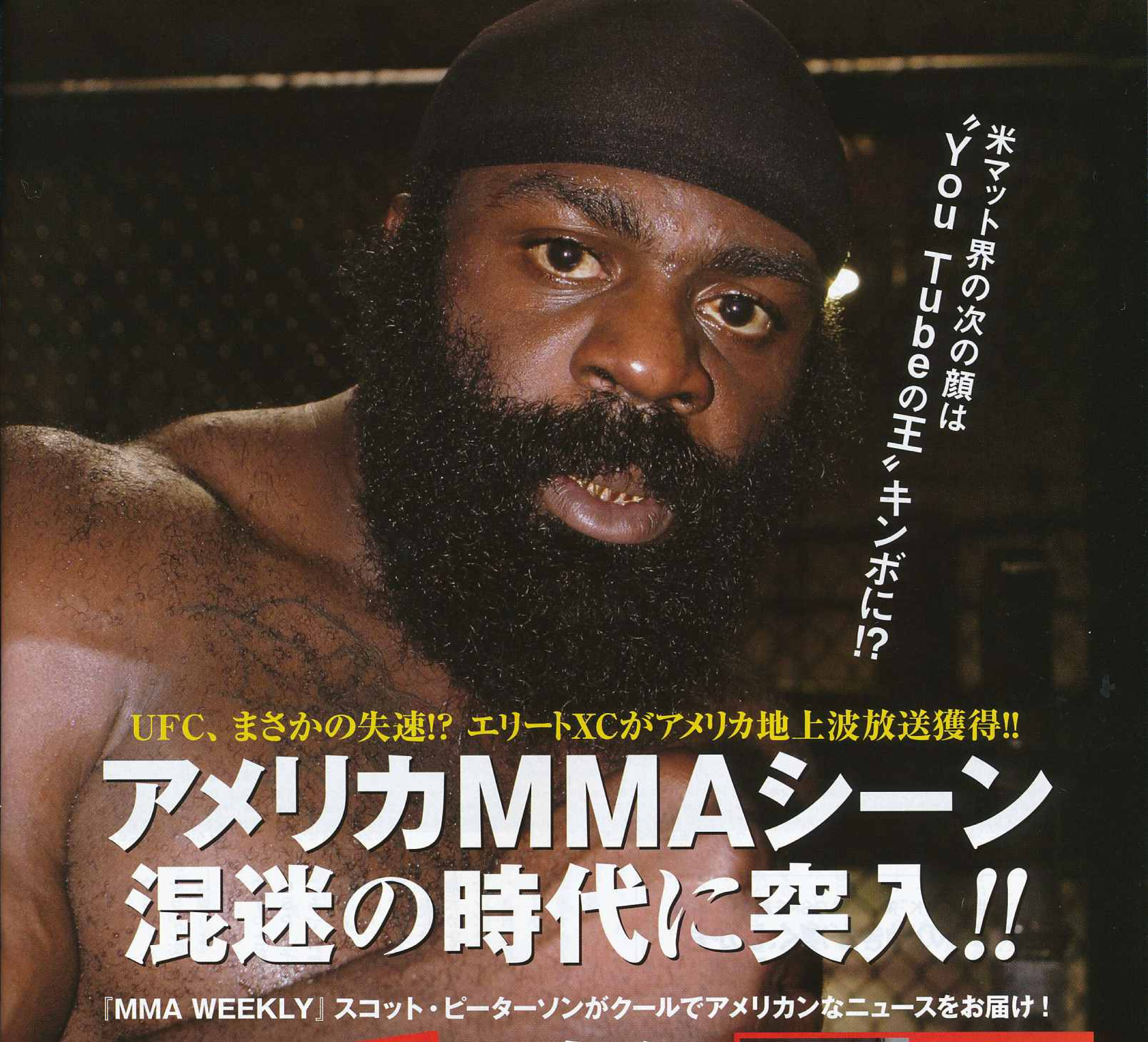
サンピエールのどこが凄いかというと、全部凄いんですよ（笑）。でも、マット（・ヒューズ）と最初にやった頃は、まだ試合がガチャガチャしてたというか、その技術や力をうまく試合で使えずに、バラバラだったんです。簡単に言うと、技術はあるけど、それを出しきれてなかった。それでも勝ってたから凄いんですけど、マットと闘ったとき、アームロックを引っくり返されて腕十字を取られて負けたんですけど、あそこから技術がまとまりだしたんですよね。

マットと闘って、自分に何が足りないのか、よくわかったんだと思うんですよ。あの試合以降、ただ前に出るだけじゃなくて、ちょっと間を作ったりとか、相手の動きや攻撃を利用して、そこに自分の攻撃をはめ込むとか、そういうやり方ができるようになっていったんです。

そしていまは、ただ単発で技を出すんじゃなく、技が連動してるんですよね。一個やろうとしてることに対して、オプションが3つぐらい乗っているというか。これがダメなら、こっち。それでもダメなら、この技というふうに、瞬間、瞬間の判断で動いて試合を作ってるんです。

で、じつはマット・ヒューズがそういう闘い方をする選手なんですよ。マットにはテイクダウンという“柱”があって、それがあるからこそパンチが活きたり、倒してからの関節技も活きてくる。サンピエールもそれが大事だってことを、マットと闘って気づかされたんだと思う。そして、それがだんだんできるようになってきて、マット・ヒューズを超えちゃったんですよね。

だから、サンピエールがあそこまで強くなったのは、ある意味、マット・ヒューズのおかげなんです。いまの充実したUFCウェルター級を作ったのはマット・ヒューズ。でも、そのマットを超えたサンピエールは、凄い選手になると思いますよ。（談）



米マット界の次の顔は“You Tubeの王”キンボに!?

UFC、まさかの失速!? エリートXCがアメリカ地上波放送獲得!!

アメリカMMAシーン 混迷の時代に突入!!

『MMA WEEKLY』スコット・ピーターソンがクールでアメリカンなニュースをお届け!

USA COOL 宅急便



PROFILE
Scott Petersen
【すこっと・ぴーたーそん】
格闘技情報WEBサイト『MMA WEEKLY』(http://www.mmaweekly.com/)を主宰。日米格闘技事情に精通。ビッグマッチのたびに来日していたが、PRIDEの活動停止に伴ない、来日頻度が激減。しかし、愛するガールフレンドのため、じつは八王子のアパートをキープしていたことが発覚。

昨年の勢いを維持して、さらなる拡大が予想されたUFC。しかし今年に入って、予期せぬ落とし穴が待っていた! UFCが獲得を期待していたアメリカ地上波テレビ放送の契約をなんと、2番手団体エリートXCが奪取!! アメリカMMAシーンの勢力図が激変する!?

聞き手/デューク東郷　撮影/Scott Petersen　試合写真/Gordon Conger

スコット　ん～、世の中うまくいかないもんだね～。

——どうしたの、スコット。アメリカのMMAブームの波に乗って、サイト運営も「これでもか～、これでもか～」って感じでウハウハなんじゃないの?

スコット　いや、そうでもない!!（キッパリ）。

——あ、そうなの?……って、あまり自信満々に言うなよ。

スコット　だってホントのことだもん。いまアメリカでのMMAファンの拡大は一段落した感じ。広告収入の伸びも止まっているんだ。

——あらま!　アメリカのMMAバブルも“頭打ち”って感じなんだ。

スコット　そんな状況にもかかわらず、団体は増えるし、ビッグマッチは連発される。先週はワシントン州で開かれたストライク・フォースでボブ・サップがアメリカで初めて総合の試合をしたよ。

——あ～、サップの試合はひどかったねぇ。ま、日本のファンからすれば見慣れた光景だけど(笑)。

スコット　ホント、ひどかった! ヤン・“ザ・ジャイアント”・ノルキア相手に何もできず秒殺KO負け。しかも、背中を見せて逃げたんだからさ。

——みなまで言うな。日本のファンには見慣れている姿なんだから(笑)。

スコット　ただ、アメリカでは日本ほどビッグネームじゃなかったサップがメインイベントを務めて、しかも、観客があんなに入っていることには驚いたね。西海岸でのストライク・フォースの評判が上がっていることに加えて、サップの地元という

こともあったのか、この大会には8000人もの観衆が集まった。

――「ヒマでモテない西海岸の諸君！」って感じだ。

スコット　ホントにビックリ。ゲート収入もワシントン州のこれまでのボクシングやキックの興行を含めて塗り替えたからね。

――その中でサップは醜態をさらしてしまった、と（笑）。

スコット　うん。サップのヘタレ具合を知らないライトなファンが集まっていた。ストライク・フォースの煽りどおりの"ビースト"っぷりを期待していたから、あっけない結果に会場は静まりかえっていたよ。

――しつこいようだけど、日本では見慣れた光景です（笑）。でも冷静に考えると、サップにメインを任せるなんてストライク・フォースもずいぶんとおもいきったことをしたねぇ。

スコット　相手のノルキアはMMAでは、2002年の『イノキ・ボンバイエ』でヤスダ（安田忠夫）に勝ったことしかなかったから、サップのストライク・フォースのデビュー戦としてのお膳立てはバッチリだと考えられていたんだけど。スコット・コーカー代表は「もう使わない！」って大激怒してるみたい（笑）。



米国MMAデビューとなったサップだが、攻撃らしい攻撃もなくノルキアにノソノソと組みついてクリンチを繰り返すだけ。パンチを浴びると、呆気なく心が折れたか、座り込んでTKO負け。あまりの無気力ファイトぶりにコーカー代表は激怒。

――サップ本人は、DREAM旗揚げイベントに出場するって言ってるみたいだけど。アンタのとこを含めて、それを出場確定ニュースとしてリリースする海外メディアはあいかわらずだね（嫌味たっぷりに）。

スコット　（無視して）それから、ビッグマッチといえばエリートXCも2月にマイアミで大会を開催。キンボ・スライスがタンク・アボットとの新旧喧嘩屋対決を制した大会は、かなりの高視聴率を獲得している。

――キンボ・スライスの名前は最近よく聞くけど、そんなに人気なの？

スコット　『YouTube』で最も観られたファイター。キンボのストリートファイトの映像はネット上に出回っていて、とにかく知名度はある。アボット戦の前には米三大ネットワーク、ABCの人気トーク番組『Jimmy Kimmel Live』にも出演していたし。でも、オレは嫌いだね！　あんなマッチメイクは、スポーツじゃないよっ！（ヒステリックに声を張り上げて）。

――ガチバカだなあ〜。UFCだって、ブロック・レスナーを投入して、プロレスとのクロスオーバーを図っているのに。

スコット　うるさい!!　でも、そのキンボを起用しているエリートXCが大躍進のチャンスをつかんだんだ。ダナ（・ホワイトUFC代表）が年末から「MMAを次のステージに押し上げることになる」と地上波最大手のCBSとの契約を示唆していたのは、この連載でも話してきたとおりだけど、結局、その交渉に失敗！　その間隙をぬったかたちで、エリートXCがCBSとの契約を結んだんだ!!

番組制作の主導権にこだわったUFCは アメリカ地上波放送契約を逃した

――ウッソ！　形勢大逆転じゃん!!　ってか、サップの話とかしないで、早く言えよ、こんな大事な話!!

スコット　CBSはエリートXCを4月から年4回、土曜夜のプライムタイムで2時間ライブ番組を放映すると発表。もちろん、地上波でMMAが放映されるのは、これが初めてで、歴史的な快挙となるよ。

――一般層に与える影響力は大きいよね。よかったじゃん、これでファンの数も再び爆発的に増えて、サイト運営も楽になるんじゃないの？

スコット　ホント、そう願うよ（笑）。

――で、UFCが契約を結べなかったのは、どうしてなのさ？

スコット　一つには、エリートXCを現時点で放映しているケーブルテレビ局のショータイムとCBSがグループ企業ということがあって、大会中継を地上波とケーブルテレビに振り分けていくうえで、協力しやすいという前提があった。でも、それ以上にUFCのCBSとの交渉で問題になったのは、番組制作でどっちが主導権を取るか、ということ。ダナはPPVで行なっている現在の体制を維持することにこだわった。それに加えて映像権利の分配などでも、交渉がまとまらなかったらしい。

――"俺はジャイアン"的なダナの態度がアダとなったのかな。

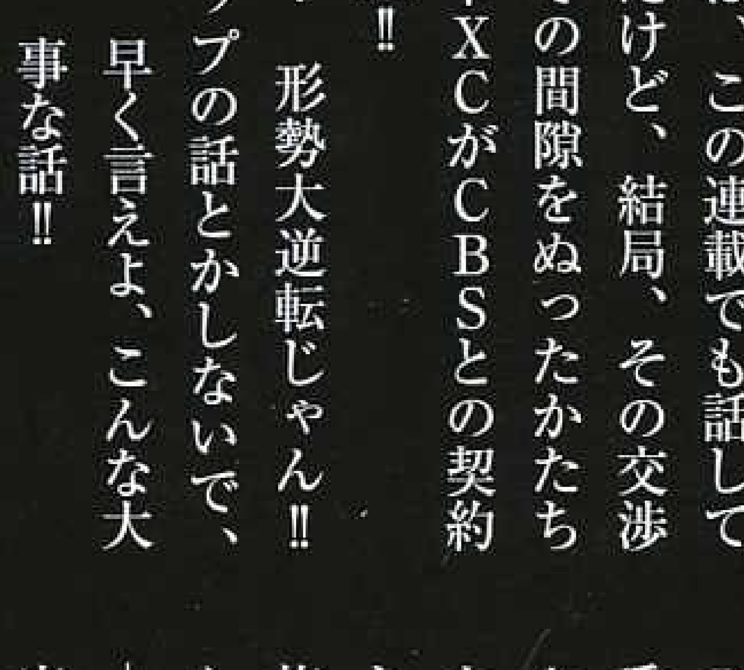
スコット　とはいえ、ダナは落ち込んだ素振りは見せていない。エリートXCの発表の同日、UFCは「バドワイザー」ブランドを持つ大手ビールメーカー、アンバイザー・ブッシュ社との長期スポンサー契約締結の記者会見を開催。その場で「去年はIFL、先週は（HDNetの）マーク・キューバン。そうやっていろんな人間が、勘違いしてこの業界に入ってくるが、UFCにとって脅威になったことはない」と強気の態度を示し、返す刀で、「エリートXCはショータイムでも数字が落ちている。地上波で流すのなら、もっと強いコンテンツにならないとマズいんじゃないか？」とまで言い放っている。

――ダナはどんなときでも、ダナだねぇ。で、UFCはどうすんのさ？

スコット　現実的には、UFCは、まずほかのテレビ局と交渉していくことになるね。すでにFOXテレビなどが候補に挙がっているようだけど、今後CBSでの放映が高視聴率を獲るようなら、逆に交渉はしやすくなるだろうね。

――二匹目のドジョウを狙ってくるテレビ局は出てくるだろうからね。

スコット　とはいえ、やはりUFCにとって、今回のCBSの件は痛い。国内ではPPVが伸びておらず、地上波契約が起爆剤として期待されてたから。ただ、そうした状況でいいニュースもある。UFCは『Yahoo!』とネット上でのPPV販売において業務提携を発表。巨大ポータルサイトと手を組んだことで、海外でのPPV販売の拡大が見込めるようになった。


もともとはアダルトビデオ製作会社の警備員をしていたというキンボ。3連続秒殺勝利中だが、その実力はいまだに未知数。とはいえ、そのわかりやすいキャラは地上波向き。エリートXCの牽引役としての活躍が期待される。

――アメリカ以外のマーケットを拡大できる、と。

スコット　それに世界的に認知を高めることで、今後、海外で興行を打つ際に有利になる。WWEはすでにアメリカ国外で収益を上げているけど、UFCもそういったそのビジネスモデルを構築していく必要があるだろうね。そうしないと、いつまでたっても、興行を自転車操業のように回し続けないといけなくなる。

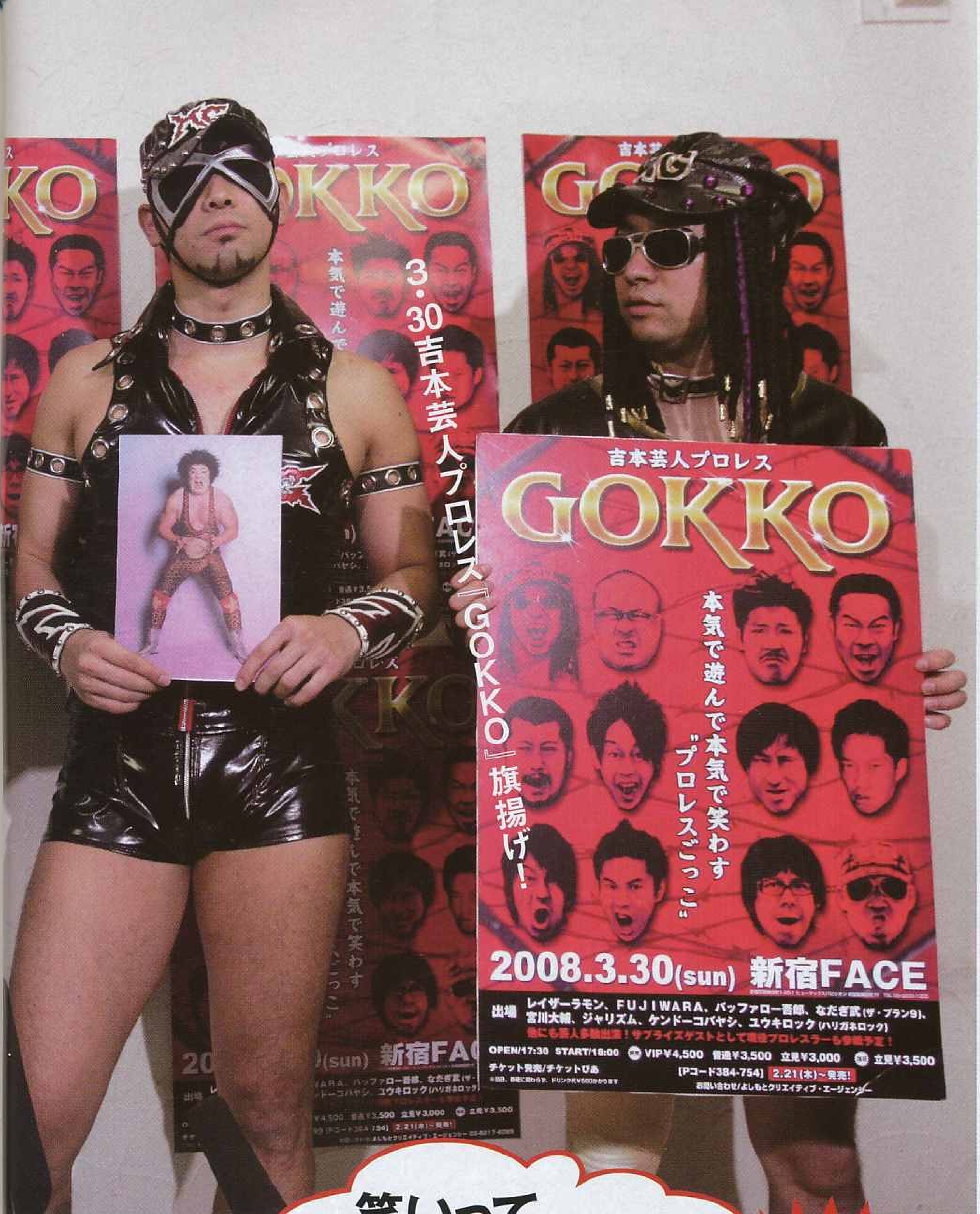
――じゃあ、アンタも英語だけじゃなくて、日本語とかフランス語とか外国語版を作って、海外の収益を高めなよ！

スコット　まずは『kamipro』がやればいいじゃん？

――海外はアンタみたいにガチバカばっかりだからなあ。やめとくわ（笑）。

【08年2月29日／国際電話にて収録】

禁断のHG戦が決定!!
マッスル坂井が独自の"一流芸人＝最強論"を展開





2008年上半期のプロレス界で、ある意味、注目度ナンバーワンとも言えるドリームマッチが決定した。そのカードとは3.30新宿FACEで行なわれるHGvsマッスル坂井の一戦だ。決戦の地は『ハッスル』でも『マッスル』でも、同日に旗揚げとなる『THE OUTSIDER』でもなく、吉本興業の新イベント・吉本芸人プロレス『GOKKO』となる。HG同様、お笑い方面でも活躍するマッスル坂井が、この一戦の意義を激白!!

聞き手／坂井ノブ　試合写真／平工幸雄　イラスト／中川画伯

—今回、吉本興業の『GOKKO』という新イベントで坂井さんとHGさんの一騎討ちが決定したということで、今日はいろいろと話を聞かせてください。

坂井 よろしくお願いします!

—まず驚いたのが、会見で吉本サイドから「ハッスルvsマッスルと煽らないように」とお達しがあったんですよ。

坂井 そうみたいですね。僕もそれを聞いてビックリしました。

—そう言われると、逆に、『ハッスル』とマッスルのあいだにきな臭いものがあるんじゃないかなって思って探りに来たんですけど。

坂井 見えない部分の圧力のかけ合いみたいのがあるんじゃないですかね。WCWとWWEみたいな関係というか。要は『ナイトロ』と『RAW』みたいにテレビ東京とテレビ埼玉で視聴率競争をしてたようなもんですからね。

『GOKKO』とは何か?



HG&RGを筆頭に、ケンドーコバヤシ、FUJIWARA、バッファロー吾郎、なだぎ武(ザ・プラン9)、宮川大輔、ジャリズム、ユウキロック(ハリガネロック)、鉄拳(元FMW練習生)など多数のプロレスマニア芸人が"本気で遊んで本気で笑わすプロレスごっこ"が3.30新宿FACEにて開催される吉本芸人プロレス『GOKKO』だ。残念ながら、すでにチケットは完売状態です!

芸人もプロレスラーも強いヤツが勝つ テレビの世界も強いから笑ってるんです！

——それは穏やかじゃないですね。

坂井　まあ、曜日は違いましたけどね（笑）。でもマジメな話、〝お笑いイベント〟と言ってるところが吉本興業も本気だなと思いましたよ。天下の吉本といえども慎重ですよ、今回に関しては。

——と、いいますと？

坂井　今回のイベントはどっから見ても完全にプロレス興行でしょう。新宿FACEでプロレスをやるってことは、プロレス業界にいよいよ殴り込みをかけてきたってことですから。日本最大の興行会社がプロレスをやるって言ってるってことですよ。

——吉本興業は会社の規模で言えば、新日本やノアより全然上ですからね。

坂井　失礼ですけど興行会社としては比較にならないですよ。抱えてる選手の数もそうだし、吉本はすでに常設会場も持ってますからね。

——常打ちの会場が東京でも3軒ぐらいありますからね。抱えてるのは選手じゃなくて芸人ですけど。

坂井　ホント、恐ろしい話ですよ。本気になってプロレス業界に参入してくる。しかも中堅以上の一番脂の乗ったプロレスラーたちをぶつけてくるわけですよ。

——HGやRG以外でもバッファロー吾郎さん、FUJIWARAさん、なだぎ武さん、宮川大輔さん、ケンドーコバヤシさんなど、錚々たるメンバーの参戦が発表されてますからね。

坂井　もう完全に全員プロレスラーじゃないですか。しかも、プロレスラー以上に腕っ節が強い人ばかりで。バッファロー吾郎の木村さんはプロレス技のかけすぎでヘルニアを患ってますけど（笑）、それ以外の人たちはみんな気力、体力ともに充実してますよ。

——そんな強者相手にプロレス界代表として立ち向かわなきゃいけないわけですけど、坂井さんと対戦するHGさんは「僕は芸人として闘います」と会見で言ってたんですよ。

坂井　あえて得意のプロレスを封印してくるってことですか。

——そうでしょうね。あと、坂井さんが『ダイナマイト関西RX』で笑い飯の西田さんに勝ったり、『めちゃイケ』（フジテレビ系）に出演したりっていう、ここ最近の活躍を見た上で、「私が本気でいって勝てるかどうかわからない。芸人として向こうのほうが上かもしれない」みたいなことも言ってたんですよ。



古くは力道山時代から関わりを持ち、96年には吉本女子プロレスJd'（現在は消滅）を立ち上げるなどプロレス界とは何かと縁が深い吉本興業。06年4月20日の『ハッスル16』では、よしもと軍団提供マッチを実現させている。はたして『GOKKO』としてプロレス界へ本格参入なるか？

坂井　そんなことないでしょ。それに、人間の優劣を表わす基準って、やっぱり強さだと思うんですよ。だから芸人としておもしろくある必要って、じつは全然なくて。結局、強い人間が勝つだけなんです。

——芸人もプロレスラーも関係なく？

坂井　芸人もプロレスラーも強いヤツが勝つ。そういうことなんです。強いから笑ってるだけなんですよ、テレビでも。

——つまり、お笑いイコール、強弱だと？

坂井　そう思います。スタッフとか共演者も怖いから笑ってるんですよ。やっぱり、ダウンタウンさんとか（明石家）さんまさんとか（島田）紳助さんとか怖いじゃないですか。

——確かに怖さは感じますね。

坂井　怖いっていうのは、やっぱり強いから怖いんであって。やっぱりその人たちの持ってる強さや力に対して、もうこっちは笑うしかない、と。媚びへつらいの笑いも含めて、そういうことだと思うんです。結局、強いから勝つ、強いから笑う、みたいな感じで。

——そういう意味ではHGさんは、どう評価されてます？

坂井　やっぱり、HGさんって棚橋（弘至）選手と学生プロレスで、ほぼ五分にやってますし。自分は学生時代とか関西方面の友人から関西のお笑い番組のVTRとか取り寄せて観てたんですけど、やっぱりそこでもレイザーラモンというタッグはプロレスしかしてなかったですよ。技のかけ合いみたいな。

——そんな時代からチェックされてましたか。

坂井　はい。それはさっき言ったことにもつながるんですけど、完全にプロレスの技の応酬をコントと称してやってたんですよ。それは完全にメタフィジカルな構造なんですよね。笑いイコール、強さの逆を、まさに強さの部分だけ見せて笑わせるっていうのは、つまりそういうことなんですよ。結局、最近売れてる芸人ってケンドーコバヤシさんもそうですけど、強さで笑わせてるんですよ。だから、よけいに難しい話なんですよ、今回の試合は。

——単純に芸人vsプロレスラーの勝負とは言いきれないわけですね。

坂井　そう思いますね。

——実際、HGさんの『ハッスル』での活躍っていうのは、ご覧になったりは？

坂井　それはもう、観たくなくても目に入ってきますよ、『ハッスル』の勢いは。

——去年は天龍さんからもフォールを奪ってますからね。

坂井　ありえないことですよ！　要は馬場さん、猪木さんに並んでるってことですもんね。

——まあ、馬場、猪木に勝った天龍さんに勝つということですよね。





3.30『GOKKO』で
“禁断の一戦”が実現！

坂井　それだけでも脅威なのに、当日はその先輩クラスも来るわけでしょ？
——坂井さんとも接点があるバッファロー吾郎さんや、ＨＧさんの先輩のケンコバさんなんかも来るわけですからね。
坂井　それこそバッファローファミリーって言われてる人たちも来ますけど、あれはもう完全に平成維震軍みたいなもんですからね。だから、怖いですよ、正直。自分がやってきたプロレスがどこまで通用するのかって話ですよ。
——ぶっちゃけ、自信はあります？
坂井　僕のレスリングキャリアのすべてをぶつけないといけないでしょうね。……たいしたキャリアはないですけど（笑）。
——ＨＧさんは「芸人としては不安もある」とも言ってたんですけど、逆に言うとプロレスだったら……。
坂井　勝てるってことでしょうね。
——逆に坂井さんは芸人として勝て……。
坂井　いや、違うんですよ！　〝プロレスで勝つイコール、芸人としても勝つ〟ってことですから。プロレスで勝てば芸人としての勝ち負けなんてことは関係ないんで。
——〝強さイコール、おもしろさ〟という方程式に当てはめればそうなりますね。
坂井　そういうことです。強い人はおもしろいですもん。強いプロレスラーをモノマネして芸人たちは笑いを取ったりしてるわけですから。強いレスラーほど、それを真似た芸人はいっぱいいますし。
——馬場さんや猪木さんのモノマネする芸人はたくさんいますからね。
坂井　ほかにも越中さんだったり三沢選手だったり蝶野選手だったり、強い選手ほど真似する芸人はいますからね。だから、言ってしまえばＨＧ選手を真似してる芸人っていうのはまだいないわけで……あっ、ＲＧ選手がいましたね！（笑）。
——身近なところにいましたね（笑）。

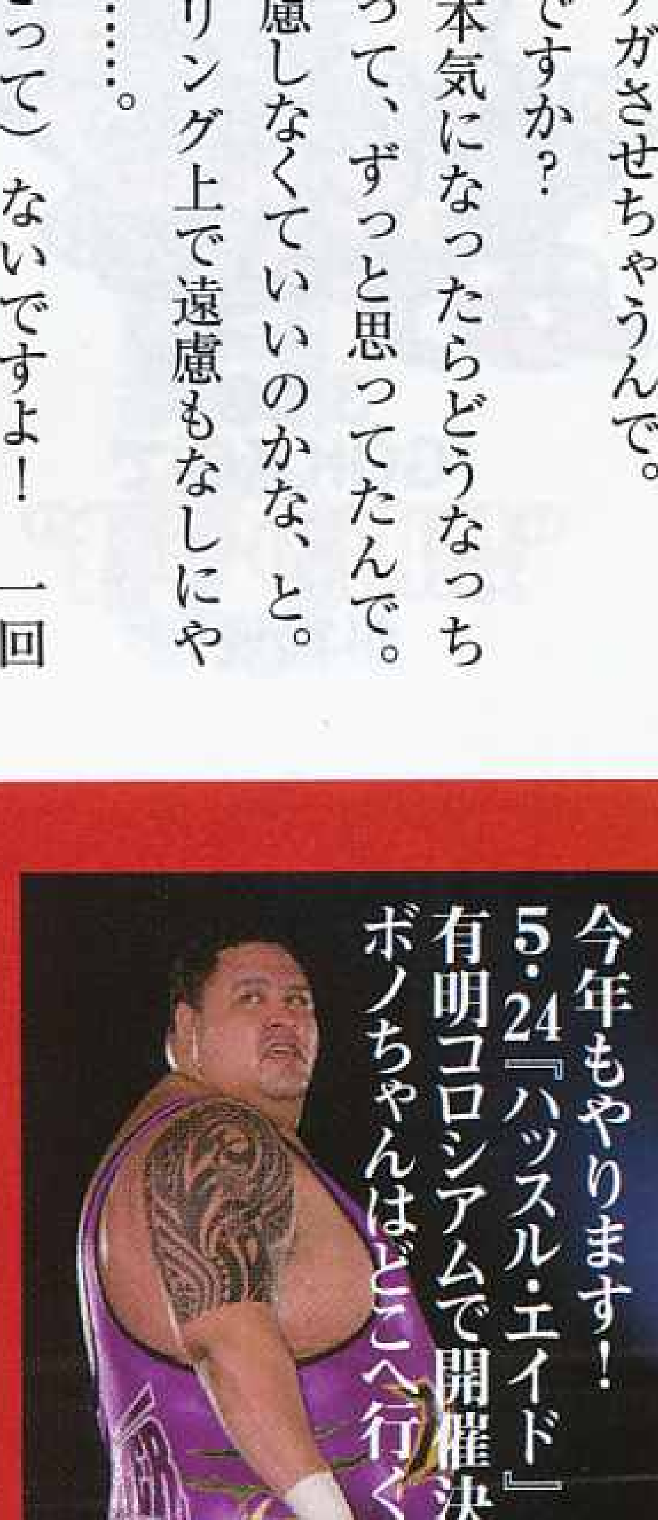
強大な敵・HG、吉本興業に立ち向かう僕の姿を見ててください！

坂井　ＨＧ選手を真似する芸人っていうのがすでにいるということは、あの人はレスラーとしても芸人としても成功してるわけですよ。すでにモノマネするフォロワーがいるわけですから。しかも、それは一番身近な人間ですからね。ある意味、もの凄い影響力なんじゃないですか？
——そうかもしれませんね（笑）。いままでの話を総合すると、今回のＨＧ戦はいかに〝強さ〟の部分を鍛え上げられるかが勝負の分かれ目になっていく、と？
坂井　だと思います。これまでプロレス界では人に迷惑かけないように、あんまり強さみたいなことは主張してこなかったんですよ。ケガさせちゃうんで。
——そうなんですか？
坂井　自分が本気になったらどうなっちゃうんだろうって、ずっと思ってたんで。逆に言えば遠慮しなくていいのかな、と。
——いままでリング上で遠慮もなしにやったことって……。
坂井　（さえぎって）ないですよ！　一回もないです！　やっぱり興行のバランスとか考えちゃいますからね。
——今回の試合は興行のバランスとかを考えず、純粋に一選手として強さをぶつけていこう、と？
坂井　そうですね。逆によけいな足かせを外してくれたんで感謝したいですね。そのへんが吉本の誤算というか、吉本の辞書にはなかった部分かな（ニヤリ）。
——なんか自信満々ですね（笑）。
坂井　吉本という会社はデータを取ったり、マーケティングとかも慎重にやってる会社ですけど、「マッスル坂井は強い」っていうデータはないと思うんですよ。
——まあ、そうでしょうね（笑）。
坂井　ここでようやく自分のホントの強さが見せられるのか、みたいなワクワク感はありますね。でもＨＧ選手にとって死に場所としては正しいんじゃないですか、リングの上で死ねる、みたいな。
——自主興行のメインみたいなもんですからね。
坂井　死に場所をリングに選んだところが彼のセンスだと思いますね。
——逆に言えば、相手のリング上で坂井さんがやられてしまう可能性も……。
坂井　まあ、見ててください。強大な敵、ＨＧ、そして吉本興業に立ち向かう僕の姿を（ニヤリ）。

【08年3月3日／都内・新宿の喫茶店にて収録】



まっする・さかい■本名・坂井良宏（よしひろ）。1977年11月5日、新潟県出身。早稲田大学在学中に映像班としてDDTに関わり、気がつけばプロレスラーに。現在はDDT、そして『マッスル』主宰者として活躍しつつ、ガチンコ大喜利トーナメント『ダイナマイト関西』や『めちゃイケ』、映画出演から雑誌コラムまで多方面で活躍するマルチプロレスラー。186cm、120kg。



今年もやります！ 5・24『ハッスル・エイド』有明コロシアムで開催決定！ ボノちゃんはどこへ行く——!?

初夏の恒例行事となった『ハッスル』のビッグイベント『ハッスル・エイド2008』が今年も開催！　いままでは6月開催だったが、5月開催と約1ヵ月繰り上がることとなった。ということは、11月開催の『ハッスル・マニア』も10月開催になり、大晦日までに時間的な余裕ができるはずで昨年のようなタイトなスケジュールにはならないかも……、という深読みもしたくなるが、一寸先はハプニング！（それはIGF）。『ハッスル』には今年も大晦日に大きな花火を打ち上げてもらいたい！
『エイド』には一昨年はカイヤ、昨年はクロマティが参戦、毎年のようにサプライズが発生しているが今年は誰が出てくるのか!?　現在、『ハッスル』の主役は完全にボノちゃん（モンスター・ボノより改名）である。親子の絆と葛藤、組織と個人の対立、ボノちゃんvs髙田モンスター軍には誰もが身につまされるテーマが凝縮されている。『ハッスル・マニア2007』を超える感動のクライマックスが、待ち構えているはずだ！　上半期の大一番を見逃すな！

そのほかの大会スケジュール

KYORAKU presents ハッスル・ハウス vol.34
3月17日（月）
後楽園ホール
開場18:00／開演19:00

KYORAKU presents ハッスル29
3月20日（木・祝）
グランキューブ大阪 メインホール
開場16:00／開演17:00

KYORAKU presents ハッスル30
4月13日（日）
国立代々木競技場 第二体育館
開場16:00／開演17:00

KYORAKU presents ハッスル・ハウス vol.35
4月16日（水）
後楽園ホール
開場18:00／開演19:00

［問い合わせ］ハッスルエンターテインメント
TEL.03-5464-1731 http://www.hustlehustle.com/

無理すんな、永田さん!!

海綿状血管腫の疑い!? ボクらの永田裕志がドクターストップ

文／金沢克彦



2・17両国大会の大一番（vs後藤洋央紀）を体調不良のためドタキャンせざるをえなかった永田裕志。そのニュースは米国にまで伝わり、ロスで特訓中の盟友・藤田和之も眠れぬ日が続いたという。永田裕志にいったい何が起こったのだろうか？

「じつは13日、道場で練習中にめまいに襲われて少しへんだなあ、と。でもロレツ、手も足もしっかりしていた。ただ、首が詰まっている感じがあったからトレーナー室で首に鍼を打ってもらって風呂に浸かったら回復したんですよ。その後、高酸素カプセルに入りに行って、もう翌日のひちなか大会には普通に出場してました」

異変の前兆は4日前に始まっていた。15、16日のオフも普段どおりの練習をして、決戦当日の昼前。永田は付き人である裕次郎の運転で合宿所に到着した。

「車に乗っているときから少し気持ちが悪くて、道場に着いてから少し吐いたんです。で、会場に入ってからまた少しもどした。でも、俺の場合たまにあるんですよ。朝飯ガッチリ食いすぎたのもあって、そのせいだろうなあって（笑）」

会場入りして着替えた永田はすぐにウォーミングアップに入った。「最初、リングサイドに行ったら何か寒いなあって。そこでまず走ろう、と。30分ぐらい走って身体も温まってきたからストレッチを始めたんです。それが2時50分ぐらいかな？　そこでまた症状が出てきて、めまいでグラグラする。これは4日前と同じだと感じたので、トレーナー室に行って首をマッサージしてもらい、シャワーを浴びて。でも、症状が治まらない。左足にも違和感があって歩くと少し引きずってしまう。それを見て三澤、新島の両トレーナーが『休んだほうがいい』と。俺としたら、このカードで休むわけにはいかないってね。でも最終的に林（督元リングドクター）先生が、『ダメです！』とドクターストップですよ」

永田が〝重症らしい〟という噂は瞬く間にマスコミ間を駆け巡った。蝶野がテレ朝の控室までやってきて、「永田は休ませますから、ご了承ください」と伝えにきた。

「4時半ぐらいにタクシーで会場を出たんだけど、途中で左足の痺れが消えたりもして、できるんじゃないかって。悔しい……そればっかりですよ。後藤に申し訳ないという気持ちと、両国駅まで並んでいる長蛇のファンの列を見たときに、この人たちにすまないなと無念の思いだけでしたね」

そのまま病院に向かい、CTスキャン、MRI検査、さらに首のレントゲンを撮った。そこでは、異常は見つからなかった。しかし、林ドクターからは「MRA（脳血管撮影）の検査をしてください」という指示が出ていたため、自宅近くの病院で検査を行ない、「過去の小さな出血痕が2ヵ所、最近できたと思われる小さな梗塞が所見される」と言われた。そこであらためて、23日にまた別の病院で精密検査を行なった。

その結果、脳梗塞は見つからず、頭部の過去の出血痕は高血圧に由来するもの、もしくは海綿状血管腫の疑いと診断された。それを受けて、27日の会見で「1ヵ月の安静、3月末の再検査の結果次第で復帰に向けて始動する」ことが明らかにされた。

「日常生活は問題なし、運動と酒は禁止。もともと高血圧と言われたこともないし、神様が試合前にストップをかけてくれたんだろう、と。次の検査をクリアすれば、身体を作り直して5月復帰を目標にしますよ」

もうすぐ節目の不惑（40歳）を迎える永田にとって、ある意味今回の〝事件〟は不幸中の幸いであったのかもしれない。

roのウェブサイトが誕生です!!

コラム

ポッドキャスト

pro.com
カミプロドットコム

雑誌『kamipro』、携帯サイト『kamipro Hand』に続く新たな媒体が、3月13日に誕生します。その名も『kamipro.com（カミプロドットコム）』。いままでないのが不思議なぐらいだったウェブサイトがようやく立ち上がります！　マット界の日々のニュースを濃厚に、たっぷりとお届けします！　大会レポートやコラム、元『紙のプロレス』編集部・原タコヤキ君によるポッドキャストも配信します。今後は、ショッピングサイトや会員専用の有料ページも続々とオープンするので、ますます目が離せません！　進化するプロレス&格闘技情報発信サイト『kamipro.com』、まずは下記のURLにアクセス!!

3月13日(木)より
堂々スタート!!

kamipro.com

お待たせしました!! kamipr

ニュース記事

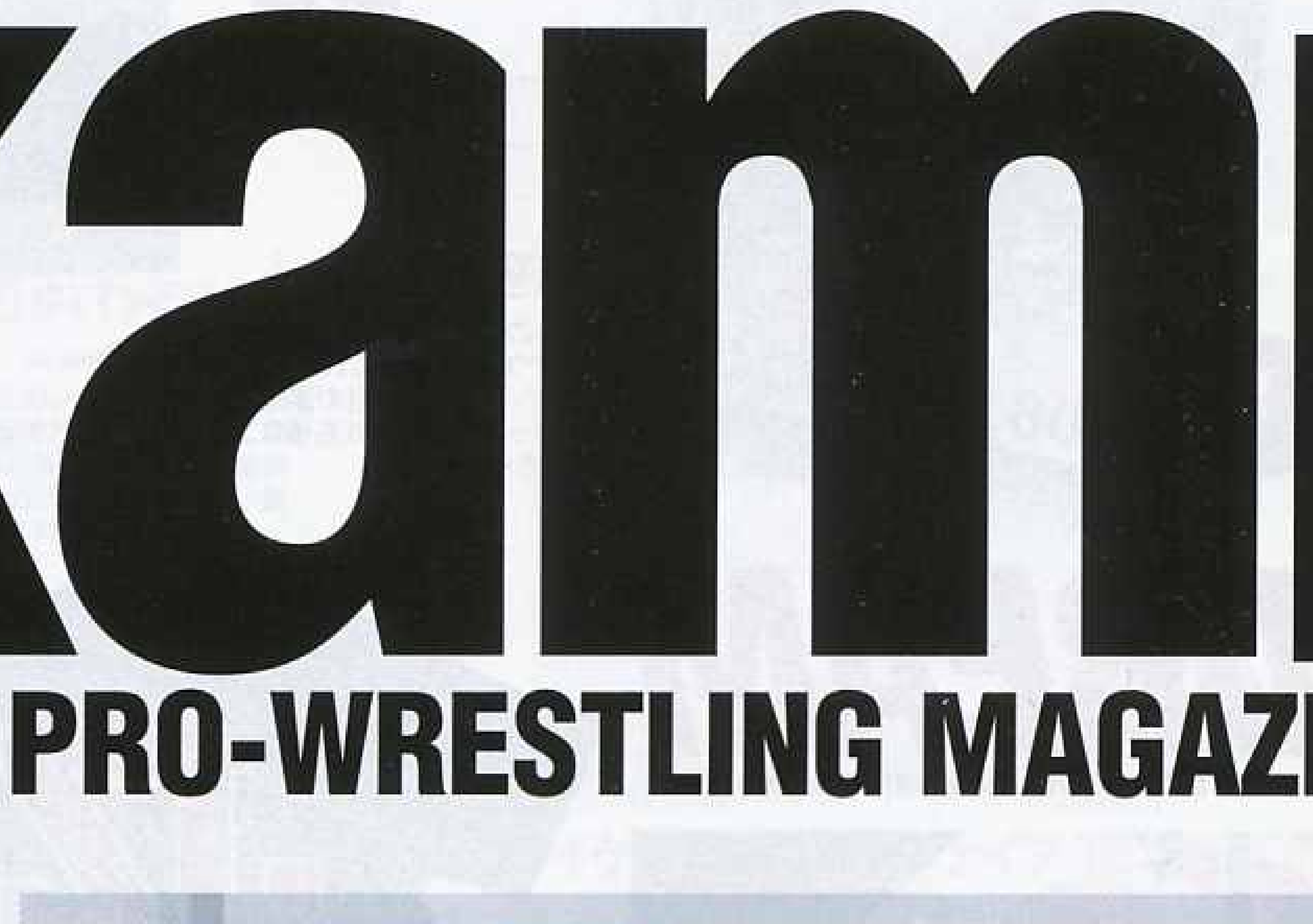
大会レポート

☞この紙マスクが目印です



kami

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE



はたしてどんなサイトなのか?
下記のURLまで見に来いや!!

わいせつ性はありませんが
充分なモザイク処理でお届けしています

※画像はイメージです

いますぐアクセス!!

http://www.k

Special PRESENTS

読プレでも『戦極』vs DREAMが実現!?

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます（商品は2008年4月16日以降発送予定です）。
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事＆その理由⑥つまらなかった記事＆その理由⑦今後期待できそうな団体＆その理由⑧あなたが注目している選手＆その理由
【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス『kamipro』編集部「わたしにはわかるの」係まで
※締切は2008年4月15日（火）当日消印有効

kamipro Special
応募券
読プレ百裂券

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

SENGOKU

戦極 ■ http://www.sengoku-official.com/pc/



1 名様

『戦極ロゴタオル』

［ブラック］

戦極ビタ～ン！　総合格闘技界を盛り上げるべく“公明正大”に設立されたワールドビクトリーロードの大注目の旗揚げ興行、3.5『戦極』のロゴ入りタオルを1名様にプレゼント。



5 名様

『戦極ポスター』

メインの吉田vsジョシュがドーンとレイアウトされた、これぞシンプル・イズ・ベストな『戦極』の旗揚げ大会ポスターを太っ腹に5名様にプレゼントしちゃいます！



各 2 名様

『戦極ストラップ』

［ホワイト＆ブラック］

3月5日、いよいよ船出した『戦極』の携帯ストラップが登場！『戦極』のロゴと兜のマークの入ったシンプルな逸品をブラック＆ホワイト2種類各1名様にプレゼント！



DREAM

DREAM ■ http://www.dreamofficial.com/





2 名様

『J.Z.カルバン"家族愛 55"Tシャツ』

［ブラック／¥5,040（税込）］

3.15『DREAM・1』ライト級グランプリの1回戦でついに青木真也との対戦が決定した『HERO'S』ミドル級“絶対王者”J.Z.カルバンの“家族愛55”Tシャツを提供！



2 名様

『山本"KID"徳郁 KID"bless"タオル』

［ホワイト／¥2,100（税込）］

「かなりイケてるイベントになっちゃう」とDREAMへの意気込みを語った山本KIDの“イケてる”タオルが到着！　このタオルを持って“神の子”の勇姿を応援セヨ！



1 名様

『ミノワマン"3-WA"Tシャツ』

［ブラック／¥4,410（税込）］

いつ何時も独自のスタイルを過剰なまでに貫く男。DREAMでの活躍も期待のミノワマンの第6章“新人類の巻”、『“零式輪愚場戦闘機”3-WA Tシャツ』を1名様に提供！



3 名様

『ミノワマン"3-WA"ステッカー』

［ホワイト／¥2,100（税込）］

体格差がある相手でも真っ向勝負、常にファンを喜ばせる試合をすることが身上の“リアルプロレスラー”ミノワマンのミノワなデザインのステッカーを3名様に大サービス！

YARENNOKA

やれんのか! ■ http://www.yarennoka.com/

『やれんのか!　タオルマフラー』

［ヒョウ柄＆トラ柄／¥2,100(税込)］

07年大晦日、PRIDEの"散会"興行として開催され、2万人あまりの人間を熱狂させた、ケジメイベント『やれんのか!』の貴重なマフラータオルを各1名様に大放出!

各1名様



HUSTLE

ハッスル ■ http://www.hustlehustle.com/



1名様



『ハッスル2008Tシャツ』

［グレー／¥3,990(税込)］

ハントの参戦にボノちゃんの家出など、風雲急な展開にこれからも目が離せない『ハッスル』からはオールスター勢揃いの『ハッスル2008Tシャツ』が新登場!

REVERSAL

REVERSAL ■ http://www.rvddw.com/



1名様

『rvddwTシャツ』

［グレー／¥5,040(税込)］

おなじみ格闘人気ブランドのreversalからはシンプルながらインパクトのあるデザインで売れ筋商品の『rvddw Tシャツ グレー』をプレゼントしちゃいます。



1名様

『TOKORO Tシャツ9 "REBIRTH"』

［ブラック／¥5,040(税込)］

昨年大晦日『Dynamite!!』で憧れの男、田村潔司との闘いも記憶に新しい"世界の所さん"こと、所英男のTシャツのニューバージョン。原点回帰の想いを込めた一枚だ!



2名様

『REVERSAL オリジナルポスター』

同じく人気格闘ブランドのreversalから非売品の「reversal オリジナルポスター」を3枚セットで2名様にプレゼント。アーティスティックかつレアな逸品だ!

PANCRASE

PANCRASE ■ http://www.pancrase.co.jp/



1名様

『アライケンジ スカーフェイスTシャツ』

［ホワイト／¥3,675(税込)］

『PRIDE武士道』や『MARS』にも出場した経験を持ち、3.26パンクラス後楽園大会ではKRAZY BEEの小路伸亮との対戦が決定したアライケンジの映画『スカーフェイス』風シャツが到着!

BOOK

AAAAAAAAAAA ■ http://www.magaz.jp/



3名様

『西口プロレス』

［橋本貴広(著)／マガジン・マガジン／¥1,300(税込)］

「プロレスやろうぜ!」という飲み会での一言から始まった、史上初のお笑い芸人たちによるプロレス興行『西口プロレス』を、実況兼レスラーの橋本貴広が驚異の小説化!

HARDCORE CHOCOLATE

HARDCORE CHOCOLATE ■ http://blog.core-choco.com/



3名様

『トマホークTシャツ』

［ホワイト／¥2,625(税込)］

下北沢に本拠地を構える"Tシャツ界の悪童"ブランドHARDCORE CHOCOLATEが読プレに登場! イチ押しの"狼酋長"『トマホークTシャツ』をドーンと3名様に!

ART JUNKIE

ART JUNKIE ■ http://www.artjunkie.jp/



1名様

『ジョシュゲノムTシャツ』

［インディゴブルー／¥4,200(税込)］

3.5『戦極』では吉田秀彦と対戦した"キャッチレスリングの伝道師"ジョシュ・バーネットの新作Tシャツ。CATCHの文字とメタルなジョシュのイラストがオシャレな逸品。



1名様

『バンプマン大図解ラグランTシャツ』

［ホワイト＆ブラック／¥4,200(税込)］

2.17のZERO1・MAX後楽園大会で大森隆男とタッグを組んで、中西学＆平澤光秀の新日本プロレス勢との対戦に挑むも、秒殺されてしまった富豪2夢路公認のTシャツ。



夢を見るのもいいが、
カレーを極めてみせろ!

橋本宗洋選手、食べるぞ!!

（おどろおどろしい『戦極』ナレーション調）



イラスト／北出裕貴（THE PEHLWANS）



3.15『DREAM.1』徹底大特集、するぞ!!
kamipro No.121は
3月28日（金）発売予定! 出るぞ!!

※地域によって発売日は多少遅れるぞ!!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2008 LATE SPRING
2008年3月27日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
鈴木 佑
八木賢太郎（不動産相談のため非番）

ラス前
上杉スイート

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子
能登くん

編集次長（2007年度POG大敗決定）
松林 貴

デザイン大将
出田さん（TwoThree）

デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
黒田史夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
梅木麗子
大甲邦喜

お勘定&衣料部
ニュー林様

一分咲き?
入江千鳥ヶ淵（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本“SSコミック用紙”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

編集チアマダ～ム
廣橋久美子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport



PR:結婚情報サービス

ケータイ恋人探し!



入会費・年会費
完全無料!

無料登録はこちらから!
すぐにご利用可能!

空メールで登録(携帯電話から空メールを送信)

axbq@pure-i.net

QRコードで
簡単アクセス

WEBにアクセス(携帯電話・パソコン両対応)

http://pure-i.net/axbq

今回紹介するサイト
ピュアアイ
Pure i

小倉優子ちゃんでお馴染みの国内最大級コミュニティー。杏さゆりちゃん、吉岡美穂ちゃんもイメージガールを歴任している老舗サイトなんだ!

「そろそろ素敵な恋がしたい!」
そんな皆さんに自信をもって
オススメしたいのが
人気コミュニティー「ピュアアイ」
今回は体験ドラマ仕立てで
「ピュアアイ」を徹底紹介!

10のキーワードでお相手を瞬時に検索

ピュアアイの人気の秘密は、充実した検索機能。10のキーワードで、ユーザーの条件にあったお相手を瞬時に探しちゃうぞ! お相手検索はエントリー後すぐに利用可能。いつでもどこでも素敵な出会いがすぐに始まるぞ!

ドラマ仕立て! ピュアアイ出会い体験物語



18歳未満の方(高校生を含む)、既婚の方のご利用は固くお断りいたします

株式会社エーディーアンドディー 東京都渋谷区渋谷2-11-8 第二種電気通信事業 A-15-5933
03-5469-0291
受付時間10:00~19:00(年中無休)

TRUSTe ピュアアイはTRUSTeプライバシープログラムのライセンスを取得し、個人情報の保護に務めております

■ご利用料金のご説明…ピュアアイは入会費・月会費等は一切かかりません。さらにお相手のご紹介も無料です。料金はお相手とご連絡をとる際に、500円発生いたします。またご利用いただかない時に料金は発生いたしません。※女性会員様はウェブサービスはすべて無料でご利用いただけます。 ■携帯電話からご利用の際は別途パケット通信費が発生いたします PR広告 結婚情報サービス

kamipro Special 2008 LATE SPRING
泣いて笑ってケンカして!! 五味が勝ってよかったねえ
2008年3月27日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一　発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555（代表）
印刷・製本／大日本印刷株式会社 ©2008 ENTERBRAIN,INC. ©2008 DOUBLECROSS
eb! enterbrain

9784757741478
定価：本体743円＋税
雑誌 61955-91 Ⓗ2009.4
ISBN978-4-7577-4147-8
C9476 ¥743E
1929476007438
Printed in Japan 大日本印刷